

---

# 音×恋 繋がる絆

丞乃麻 駿哉

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

音×恋 繋がる絆

### 【Nコード】

N6679E

### 【作者名】

丞乃麻 駿哉

### 【あらすじ】

日本人とアメリカ人のハーフである主人公、七瀬正義ななせまさよしとピアノを通して繋がった絆。鳴響学園を舞台にしたヒロイン+ の【過去を乗り越える、お嬢様系恋愛ADV】です。 少年少女に福音を

## 1 プロローグ【ハジマリノオト】（前書き）

構想2ヶ月で出来たへボ小説&初執筆なので見にくい・誤字・脱字等あると思いますが、完結を目標に頑張りますので宜しく願います。

## 1 プロローグ【ハジマリノオト】

アメリカ ワシントンのとあるマンションの一室

一人の女性がベッドの淵に腰掛けて慈しむ様にお腹を擦っていた。

「おめでたです」

先ほど産婦人科医に言われた言葉を思い出して、子供を授かった実感が漸く湧いてきて嬉しくなり、自然と口元が緩むのを感じた。

「正人さん、ビックリするだろうな。6年目でやっと1人目を宿すなんて。弟・正臣さんの子供、正己君ももう5歳だしね。奥さんの優姫さんも2人目が欲しいなんて言ってるし」

ベッドの脇に置いてある時計を見ると16:30と表示されていたので

「今日の夕飯は豪華にしましょう」

と言って立ち上がり寝室から出て、リビングを抜けキッチンに入った。壁に掛けてある白のヒラヒラが目立つエプロン（胸元に正人さんLOVEと黒糸で刺繍が施してある）を身に付けて、長いウエーブの美しい金髪を銀細工が特徴的な髪留めで一本に纏めシンクの前に立った

テーブルに綺麗に盛り付けたサラダ、切り分けて皿に並べたローストビーフに鍋に入っているコーンスープ用のスープ皿、フォークとナイフを並べた。何か足りない様な気がしてテーブルを見渡し、思いついたのかポンつと手を叩き

「そうだ、二十年物のワインも開けよう」

と言って食器棚からワイングラスを2つ取り出して、コースターの上に乗せた。正人さんの好きなシーフードピザの入ったオーブンを眺めつつ

「遅いな」

と呟き、壁に掛けてある時計を見ると6：15分を指していた。いつもなら6時前に帰ってくるのに今日は遅いなと思いつつも、お腹を擦りつつ、この子にピアノを聴かせてあげようと思いついて、オーブンを開き焼け具合の確認後にタイマーをセットしてピアノの置いてある防音部屋に向かった

最近弾いてなかったのでアルペジオの練習にショパンのエオリアン  
ハープを選び棚から譜面を取り出し、椅子を引いて腰掛け鍵盤の蓋  
を上げて譜面を立て掛けてから、軽く深呼吸してからゆっくりと思  
い出す様に弾き始めた

T r r r r r T r r r r r

曲の終盤に差し掛かった頃、  
備え付けの電話がけたたましい音を発てて鳴った。もうすぐ一曲終  
えるのに誰が邪魔してるのかな？と思いつつ立ち上がり、小走り  
で受話器を取った。

「（もしもし）」

英語で問いかけた

『リリス姉さん、落ち着いてね聴いてね』

優姫だったが声が震えていた。受話器を握り締め

「どづしたの？正己君が熱でもだした？」

優しく諭す様にいうと

『正人兄さんが会社から車で帰宅途中にトレーラーとぶつかって…  
…亡くなった』

力が抜けて受話器を落としそうになるが、唇を噛んで何とか飛びそうになる意識を繋ぎ止めた。

『警察が言うにはブレーキ跡が無かったから、よそ見か居眠りじゃないかっていったわ。』

そこまで聴いていたが力が抜けて膝から崩れ落ち、手から受話器が滑り落ちた。

受話器から何か聴こえたが意識が朦朧として聞き取れず、フラツとバランスを崩しフローリングの床に顔を打ち付けた瞬間意識が途切れた

頭を撫でられる感じがして目を開くと見慣れた寢室の天井が見えた。

【優姫】

「姉さん…起きてても大丈夫なの？」

声が聞こえて顔を向けると優姫がベッドの淵に腰掛け、心配そうな顔で此方を見下ろしていた。

【リリース】

「私…ittたい……」 尋ねつつ上半身を起こした

【優姫】

「電話の向こうでドンって鈍い音がしたから急いで来てみたら、ピアノのある部屋で倒れてたの…もう1日経ったわ」

そう言っって顔を伏せた

倒れる前の記憶を必死に思い出して、泣きそうになるのを堪えて恐る恐る尋ねた。

【リリース】

「正人さんはもう…もうっ……居ないのね」

優姫はビクツと肩を震わせて顔を上げると涙を流しながら、首を縦に振って此方に飛びついてきた。しっかりと胸に抱きしめて頭を撫でてやったら声を上げて泣き出した。



【優姫】

「イヤァーっ…兄さ…なんでっ…どうしてっ…どうして兄さんの」

優姫はシャツの胸元を強く握り締めてきたので、トントンと背中を叩いてやり。

【リリース】

「たればで話しても正人さんは帰って来ない。子供が出来たって直ぐに電話してたら、とか考えたけど正人さんならきっとお腹の子と幸せになれよって言うと思うしね」

泣きそうになりながらもできるだけ優しい声で諭す様に語りかけると、腕を解かれてゆっくりと泣き腫らした顔を上げ此方を見つめてきた。

【優姫】

「…本当なの？」

【リリース】

「こんな時に冗談が言える様な酷い人に見えるの？」

口を尖らせて、拗ねた様に言っ顔を逸らすと

【優姫】

「ちっ違っのアレだけ子供が出来ないって、言っただから…」

両手をブンブンと振り慌てて否定していた、それが可笑しくて堪えられずに

【リリース】

「フフフ…ごめんなさいね、あまりにも可愛くて。昨日診察していただいたばかりだから、初めて誰かに喋ったのよ。嬉しいでしょ？」

おどけて言うつと首を縦にコクコク振って笑顔になり、右手の人差し指を唇にあて当てて首を横に傾けて

【優姫】

「…名前は決めた？」

予想の斜め上に行く質問に驚いたが、何とか返した

【リリース】

「普通第一声はおめでとうじゃないの？それに、性別は確認して無いの。名前は男の子なら正義まさよし、女の子なら梨理華りりかよ。六年も考えてたから、直ぐに決まったわ」

【優姫】

「おめでとう。リリース姉さん。それで何週目なの？」

そう言って笑いかけてきた顔は泣いていたのが嘘の様な笑顔だった。私が泣くのは一人になってからと心に言い聞かせ、もう正人さんの話を聞いても大丈夫かな？と考えつつも返した。

【リリース】

「6週目だって

」

日本 天瀬川市立総合病院の産婦人科

一組の夫婦が硝子の向こう側で安らかな寝顔の男の子を見つめ、会話をしていた。

【???】

「アレでよかったのか？正義には全てを知る権利があるのに」

【???】

「まー君と私と貴方で幸せになるのが、一番の手向けじゃない？それにあの事以外は、ある程度大きくなったら話すつもりよ」

【???】

「そうだったな。すまない。強く自分に誠実に…か、正義には実家

の護身術でも教えるかな？」

【????】

「あまり、乱暴にしちゃ駄目よ？まー君には私達のピアノも教えるんだから、指を痛めない様にお願いな？」

【????】

「わかったよ、四人分の愛情で、正義を幸せにしないとな……なあ  
英理朱<sup>エリス</sup>」

【英理朱】

「ええ…そうね、あきこ明斗。頑張りましょう！」

【明斗】

「おう！」

## 2 プロローグ【ツナガルオト】（前書き）

補足ですが、 1は正義が産まれるまでを周囲の視点で描いています。

## 2プロローグ【ツナガルオト】

【英理朱】

「まー君、準備できた？幼稚園に遅れるよ？」

母さんが玄関で靴を履き終えて、リビングのソファアーに座り40インチのプラズマテレビでアニメ【Justice7・地球を侵略しに来たヘルボツクス星の機械生物マシンモンスターと変形してロボットになって闘う7機の乗り物と7人のパイロットである正義せいぎの使徒・ジャスティスセブンの戦いを描いた特撮ヒーローもの】を見ている僕に声をかけた。

【正義】

「わかった！行くよ！」

先ほど敵を倒していたシーンを思い出して、かなりハイになりながらもリモコンでテレビを消して、横に置いていた鞆を肩から斜めに掛けてソファアーから立ち上がり小走りで玄関に向かった。

玄関には母さんが居て呆れた様に

【英理朱】

「毎回録画するなら帰ってレッスンは終わってから見れば良いのに」靴を履き終えたので横を通り過ぎ玄関のドアを開け外に出してから

【正義】「母さんだってドラマは再放送見ないでしょ？そこにアニメがあるから見るんだよ！」

言ってから振り返り母さんの顔を見ると口を大きく開けて、ポカーンとした表情をしていた。

【正義】

「急がないと間に合わないよ！」

と声をかけると我に還ったのか急いで玄関のドアを閉めて施錠を確認し、僕の横を通り過ぎ門の前に移動させて置いた黒のフェアレディZに乗り込んだ。

僕は呆れながらも外に出てから門を閉めると、助手席のドアを開けて乗り込みドアを閉めシートベルトを装着すると同時に車は走り出した。

流れ行く景色を眺めていると

【英理朱】

「幼稚園は楽しい？」

と聞いてきたので

【正義】

「ピアノを弾いてるから楽しいよ」

と返して、母さんの方に顔を向けると何だか悲しそうな顔をしていった。

それからはお互い無言だった。10分程して僕の通っている双葉幼稚園に着いた。

車を門の前に停めてシートベルトを外していると

【英理朱】

「今日もいつも通りの時間に迎えに来るね」

と横から母さんが言ってきたので

【正義】

「3時だね、わかったよ」

と言つと頭を掴まれて【日課か…】と思いつつ母さんの方に向きを変えられ僕が前髪を上にあげると僕の額に唇を落としてきた。【日課】が終わりドアを開けて車から降りて振り返り

【正義】

「いつてきます」

と言つてドアを閉めると、此方に向いて手をヒラヒラと振ってから走り去った

車が見えなくなったのを確認してから、幼稚園の門を潜った。

玄関で靴を中履きに履替えていると

【???】

「おはよう。正義君、今日もやっぱりお遊戯室なの？晴れてるんだから、たまには外で遊ばない？」



いつもの様に一人の女の人が声をかけてきた。またか、と内心うっとうしく感じながらも

【正義】

「おはようございます椿先生。また園長先生に何か言われたんですか？一人で外に出て何をするんですか？ピアノを弾いていた方が有意義だと思えますが？」

と畳み掛ける様に言ってから鞆を渡して、お遊戯室に向かっている  
と後からパタパタと足音が聞こえてきて通り過ぎ様に

【椿先生】

「正義君のバカーー」

と叫びながら廊下の奥に姿を消した。

また泣かせたなとちよっぴり後悔しつつ、お遊戯室に入った。

昼寝の時間にすみれ組にお弁当を取りに行つて、お遊戯室に戻つて

から食べ終わりピアノで適当に遊んでいるとガラガラガラと音を発して扉が開いた。

反射的に開いた扉の方を向くと一人の女の子が、まだ眠いのか目元を袖口でグシグシと拭いながら、此方に歩いてきた。

何を言われるのか不安になり、奥歯をギュツと噛み締めた。

【???】

「君でしょ？いつもピアノ弾いてるの？お昼寝の時間に聞こえてくるんだけど、いつも確かめようと思っけど皆が寝た頃に聞こえてくるからつられて寝ちゃうの」

そう言っって女の子の片目を睨り口から舌をチロツと出した。

可愛い娘だなあと思いつつ、この娘も皆と同じなのかな？と思うと悲しくなった。

それでも言わなきゃなと思いつつ、恐る恐る話しかけた。

【正義】

「僕と一緒にいると皆から遊んでもらえなくなるよ？」

と言っつとその娘は怒鳴る様な声で

【???】

「どっして!？」

と返してきたので、この娘は違っつかなあと思いつつ説明した。

【正義】

「金髪だし、瞳の色も朱色で皆と違うから…怖いんだって。化け物とか言われてるんだ」

するとその娘は顔を横にブンブンと左右に振り

【????】

「こんなに綺麗なのに？」

と言って僕の顔をマジマジと見た後、瞳を輝かせて胸の前で祈る様に両手を組んだ。

後ろに下がりそうになるのを堪えてつつ

【正義】

「僕が怖くないの？」

と聞くと

【????】

「パパのお友達にもこんな髪の色した人いるよ。瞳も青い色した人いるけど優しい人達ばかりだから、全然怖くないよ」

と言ってくれた瞬間、泣きそうになった。何とか堪えていると。

【????】

「ピアノ凄く上手ね。私でもそれ位弾ける様になるかなあ」

【正義】

「練習すれば誰でも弾ける様になるよ」

と返すと、小さくガッツポーズをしていた。

【????】

「誰に教えてもらってるの？」

と聞かれたので鍵盤を指で弾きながら

【正義】

「お母さん！」

と自慢気に声を大にしていった。

【????】

「私も教えてもらえるかな？」

と不安そうな顔を向けてきたので、笑顔を向けて

【正義】

「大丈夫だよ。お母さんが迎えに来たら、一緒に僕の家に行こう！」

【????】

「家にピアノがあるの？」

【正義】

「うん。地下室にあるよ」

するとその娘は腕を組んでウーンと唸った後

【????】

「わかった。今からママに電話してピアノの事話してくる」

そう言っただけ歩いて行き、開かれたままの扉の前で僕の方に振り返り

【????】

「私の名前は美咲桜、桐原美咲桜君のお名前は？」

【正義】

「正義、七瀬正義」

ななせまさとよし

名前を告げると何か考えてるのか上を向いて唸っていた。すると此方を向いて

【美咲桜】

「まさよしって《せいぎ》の味方のせいぎって書くの？」

そつだよ。と言っただけだと、満足したのかウンウンと頷いてから

【美咲桜】

「じゃあ、せいぎのヒーローだからヒロ君ね！これからよろしくね、ヒロ君！」

何がじゃあなのがよく解らないが、とりあえず頷いてから

【正義】

「うん。此方こそ宜しくね、美咲桜ちゃん！」

美咲桜と出会った春から7年が経った。

アレから美咲桜は本格的にピアノを勉強し始めた。最初は週2回だったのが3回になり、5回（平日全部）になって気がつけば七瀬家に入り浸りになっていた。

レッスンは終わって毎日俺の家で夕飯を食べてから俺の部屋に来ては、音楽談義を繰り返した。音楽漬けの毎日を送っていたせいか、美咲桜は同年代の中では上位にまでできていた。

それでも俺に言わせれば、まだまだだ。【神の指先】と呼ばれ世間で騒がれている俺の演奏には程遠い。

美咲桜の家にも何度か泊まりに行ったが、これが家なのか？と尋ねたくなる位大きな洋館だった。

初めて泊まりに行ったときは家にリムジンが迎えに来て、乗り込んでから緊張して一言も喋れなかった。

思い返してみても、この小学校に入ってからいつも一緒だった気がする。6年間同じクラスに良くなれたなと思いつつ、机の横に掛かった鞆を持って人気の無くなった教室を出た。

廊下に出ると、先程まで卒業式が行われていたのが嘘の様な静けさだった。

窓から中庭の桜を眺めつつ、ゆっくりと階段に向かった。

階段を降り一階に着くと下駄箱を指して歩きはじめた。

七瀬と書かれたプレートを抜き取り、鞆に滑り込ませた。靴を取り出して履き替えてから、上履きも鞆に仕舞ってから生徒用出口から外に出た。

正面を見ると校門に向かって伸びる道の両脇には桜が咲き誇り、伸びた枝がトンネル状になっていて幻想的な雰囲気だった。

桜に見とれていると

【美咲桜】

「遅いよ。もう私達以外は帰っちゃったよ」

と横から聞こえたので、右に顔を向けると肩が当たる位近くに美咲桜が立っていた。

【正義】

「美咲桜との6年間を振り返ってたんだよ」

と言うと頬を赤く染めて微笑んだ。綺麗になったなと思いつつ

【正義】

「帰ろうか？」

と言うとモジモジしながら左手を差し出してきたので、鞆を左手に持ち替えてから開いた右手で指を絡める様に握って歩き出した。

【美咲桜】

「この間のコンクール凄かったね。取材とかされてたからビックリしちゃった」

【正義】

「そうか？取材は桜さんと初めてあった二年前からされてたよ。それよりも美咲桜の方が凄いよ。特別賞を受賞してたし。賞貰ったの初めてだろ？だったら美咲桜が凄い頑張ってたっていう証拠だよ」



そう言っただけだと、顔を覗き込んできて微笑んでから

【美咲桜】

「ありがとう。凄い嬉しいな。ヒロ君も金賞おめでとう」

【正義】

「ありがとな。でも、これからは頑張れよ？先生が変わったら、慣れるまで大変だからな。これからはコンクール位しか逢う機会も無いんだから」

美咲桜は上りの電車で2駅先にある、お嬢様学校の宮園女学院に通う為学院のある宮園町の祖母の家に引越した。ピアノも英理朱先生から宮園駅前にある大きなスクールに変えた。

気がつけば校門についていて繋いでいた手が後から引かれたので振り返ると

【美咲桜】

「高校はこっちを受けるから、3年間一緒に通いたいなあ」

と声を震わせながら言って顔を伏せたので、左手に持った鞆を地面に置いた。

空いた左手で頭を撫でてやると顔を上げたので額に手を移動して前髪を上げてから額に唇を落とした。

顔を真っ赤にして何か言いたそうだったが、無視してから

【正義】

「指切りしよう。また高校生になったら逢える様に」

と思いつつ差し出した左手の小指を出す

【美咲桜】

「約束だよ」

と返ってきて繋いでいた手を離すと、左手を差し出してきたので小指同士を絡めた。

暫くそのまましていると

【????】

「お嬢様」

と言う声が聞こえてきたので繋がった指を離して、声が聞こえた方を向くと美咲桜の運転手兼付き人である桜さんがいた。

【美咲桜】

「ヒロ君、またね」

と言って、桜さんが開いたドアからリムジンに乗り込んでドアを閉めてもらい此方からは見えなくなった。

桜さんが此方に歩いて来てから

【桜】

【正義様、お久しぶりです。これからもお嬢様を宜しく願います】

と言って頭を下げてきたので

【正義】

「此方こそ宜しく」

と言って俺も頭を下げた。

お互いに顔を上げると

【桜】

「それではまた」

と告げてから踵を返して、リムジンの運転席に乗り込んで直ぐに走り出した。

リムジンが見えなくなる迄見送って

【正義】

「また逢おうな…美咲桜」

と呟いた。

## 2 プロローグ【ツナガルオト】（後書き）

2は言わなくても解りますよね。幼稚園時5歳〜小学校卒業までを描いています。間が例によって物凄く空いてますが、あくまでも本編は高校入学からなので正義の人格を形作るファクターと《繋がる絆》だと思って下さい。3は言わなくても中学校編です。ページ数が微妙なので4もプロローグかも…とにかく頑張っ書きます。

### 3 プロローグ【コドクナオト】（前書き）

中学生編突入！（と言っても 5までの予定ですが…携帯は文字打ちにくいし。辛いけど頑張る！

### 3 プロローグ【コドクナオト】

双葉幼稚園のほぼ隣にある、藍ヶ丘あいがおか小学校を卒業して、鳴響めいきょう北地区にある春日かすが中学校に入学した。

藍ヶ丘中学校の方が家から近いのだが、有名な音楽教師が居るとい  
う事で春日を選んだ。

母さんは自転車に乗ってまで行く価値がないと言っていたのだが、  
入学してして一ヶ月でその通りだと思った。

因みに藍ヶ丘なら徒歩15分なのだが、春日は自転車で20分だ（  
徒歩なら30分かかる）

初めは期待していたがあこの自己中教師のせいで、全然楽しく無くな  
った。

井上とかいう四十代の男性教師なのだが、有名なT音大を卒業して  
から教員免許を取った変わり者だ。

俺のいう通りに弾けば間違いない が口癖で、普通に弾いてるだ  
けで注意され放題でフラストレーションも溜まりたい放題だ。

拳句の果てに地毛の金髪まで注意する始末。ズボンのポケットに入  
っている拳サポーターを着けて殴ろうか本気で悩んだ程だ。

母さんに聞いたら、昔は有名だったらしい。事故で右手の神経を切  
断して、今は生活に支障がないレベルというだけで弾けはしないだ  
ろうと言っていた。

要は自由に楽器が演奏できる俺達が眩しく映るんだろう。あの濁った瞳には…確かに知識はあるが、あの姿勢を改善しなければ近いうちに廃部になるな。という結論に達して あんたの教え子達が可哀想だ、まともに教える気が無いなら教師を辞めな と言って入部初日に軽音部を辞めた。

## 七瀬家 リビング

ゴールデンウィークも昨日で終わった。今日から学校の正義は登校の準備を全て済ませ、ソファアに座ってテレビのニュースを見た。

### 【英理朱】

「はい。いつもの」母さんがソファアの前に置いてあるガラステーブルにコーヒーの入ったカップを置いた。

### 【正義】

「ありがとう。母さん」

カップを取って口をつけゆっくりと飲んでいると、母さんが此方に

歩いて来て長くなった俺の髪に触れてきた。

【英理朱】

「まだ少しおかしいわね…ごめんね」

と言って母さんが悲しそうな表情をしたので、コンクールの事だと直ぐに気付いた。

コーヒークップをテーブルに置いて、髪に触れてきた手を両手で包む様に握ってから母さんの顔を見つめてゆっくりと口を開いた。

【正義】

「何度も言うけど、母さんは何も悪くない。あの時取材をされても、されなくても…ね」

そう言うってから微笑みかけると

【英理朱】

「そうね。ごめんなさい。今日帰ったら整えてあげるから、真っ直ぐ帰るのよ?」

そう言うて握っていた手を抜き取り笑いかけてきた。

【正義】

「姫カットとかもうしないですよ?アレは本当に恥ずかしかったから」と抗議するとニヤニヤしながら

【英理朱】

「もう8時よ。学校に行かなくてもいいのかなあ?余裕あるねえ」



言われてから壁に掛けてある時計を見ると、8時2分だった。

【正義】

「ヤバイ！」

横に置いてある鞆を掴み、ソファーから立ち上がりダッシュで玄関に向かった。

靴を履いていると、後から

【英理朱】

「コーヒー半分位残ってるよ！」

【正義】

「関節キスでも楽しんでなよ！」

と言いながら靴を履き終え靴箱の上に置いた鏡を見ながら右手につけた赤いゴムで、背中の中程まである髪を一本に纏めた。

鏡をもう一度チェックして家を出た。

正義が学校に向かった数分後のリビングでは、ちゃっかり関節キスを楽しんでから

【英理朱】

「やっぱりハグとか普通にしてるのかしら？」

息子の将来がちょっぴり心配になる英理朱であった。

学校についてそのまま駐輪場に向かい、空いてる所に自転車をねじこんで鍵を閉めてから昇降口に向かって走った。

靴を履き替えて時計を見ると8時28分だったので、まだ間に合う！ と気合いを入れて走り出した瞬間、前から来たクラスの女子から声をかけられた。

【女子】

「七瀬君。そんなに急がなくても今日の一時限目は自習だから大丈夫だよ」

【正義】

「でもホームルームは？出席取るだろ？」

と言うとクスクスと笑ってから

【女子】

「今日の一時限目は担任の石川でしょ。用事があったって今日は昼からしか来れないみたいだから、今職員室に自習のプリントを取りに行く途中なの。だから、出席は私が戻ってから取るから。安心して良いよ」

と言われてから安心して、この娘の名前を記憶の彼方から引きずり出した。

【正義】

「ありがとな。川上<sup>かわかみ</sup>さん。それじゃ」

と微笑みかけてから教室に向かった。

廊下を歩きながら、先程の出来事について考えていた。

女子はたまに話しかけてくるけど、男子は話しかけてこないよな。こんな外見してるから仕方がないけど。

とか考えているうちに教室の前に立っていた。

扉を開いて中に入ると違和感を感じたので、ぐるっと見渡すと窓際

に一人の男子が席に座り、他の男女は幾つかのグループに分かれてその男子を避ける様に陣取っていた。

幾つかのグループから 何様のつもりだよアイツ お坊っちゃん  
は良いよな あの子調子乗ってんじゃないの 等、あの男子の事  
を中傷する言葉が聞こえてきた。

やっぱりコイツ等は友達になる価値も無いなと思いつつ、自分の机  
に鞆を放り投げて窓際の男子の方に向かった。

前の席から椅子を引いて反対向きに座ると、女子みたいな顔をした  
奴だった。

1分程様子を見ていたが、何も声をかけて来ないので、埒があかな  
いと思いつつ声をかけた。

【正義】

「どつという状況なんだ？」

と声をかけると、顔を伏せてオドオドしながら

【???】

「昨日仲の良い友達3人とゲーセンに遊びに行つて、一人でトイレ  
に行つたんだ。それで元の所に戻つてる途中に3人が僕の事話して  
る声が聞こえたんだ。こつちに気付いてなかったから、そのまま聞  
いてたら3人が僕の事を アイツ良い金ヅルだよな って言つてた  
からカツとなつて お前等なんか友達じゃない！ って叫んで家に  
帰つたんだ。それで今日来てみたら…」

【正義】

「こっぴなつてた…」と

肯定してやると小さく首を縦に振った。

【正義】

「なるほどね」

と言って周囲を見渡して視線を戻した。

コイツ等が対等になるかねえと思いつつ、大きく溜め息を吐いて

【正義】

「お前、対等な関係の友達なら欲しいか？」

と言うと顔上げてから

【?????】

「……………欲しい」

とハッキリした声で言った。

【正義】

「お前、名前は？」

【?????】

なるみわたる  
「鳴海航」

【正義】

「わかった。とりあえず何とかするから。友達になるか、ならないかは自分の眼で見極めろ」

と言って椅子から立ち上がり

【正義】

「航、友達モドキA・B・Cはどいつだ」

と言うと航はオドオドしながら、一カ所に纏まった3人を指差した。その3人を眺めつつ、中途半端な不良だなあと思った。体格は3人共ちよつとゴツイ程度：これは区別がつかないな。髪はカラフル：これにしよう。ウンウンと頷きつつ考えた。黒髪のロン毛、黒髪の青メツシユに赤みの強い茶髪。決めた！黒・青・茶と名付けよう。と決まった所で3人を睨み付けた。

【正義】

「俺もこんな髪や瞳の色してるから、昔から影でコソコソしてる奴らから化け物とか言われてた。だから、今の航の気持ちは良く解る。でも航は坊っちゃんてだけだろ。俺にもお嬢様の幼馴染みがいるが、その子は皆が俺を無視してても俺と対等な付き合いをしてくれたぜ」  
そこまで大きな声で皆にゆっくりと語りかけると、一度皆の顔を見渡して再度口を開いて

【正義】

「お前等は自分が劣ってると思ってている筈だ。だから航を対等に視れないんだ。自分に自信を持って！他人に流されるな！！お前等は自分っていう個性を持っているだろ！！！」

と叫ぶ様に言い放った。すると黒青花のヤンキートリオが此方に歩いて来て、ヘラヘラしながら茶髪の奴が

【茶髪ヤンキー】

「お前、ウザイよ」

と言ってきたが無視して、女子グループの方を向いて

【正義】

「男子は脅されでもしたんだろが、女子は何故従う？自分の眼で見て航と友達付き合いつたんだろ？それに、航は坊っちゃんで自分の事を自慢する様な奴か？」

と語りかけると怒鳴る様に

【正義】

「違うなら今すぐ航に謝れよ！！」

言いながら近くの机を思いきり叩いた。

少し間を置いて1人の女子がビクビクしながら航の方に歩いて来て

【女子】

「ゴメンね。鳴海君」

と言うとゾロゾロと集まって来て航はあっという間にクラスメイトに囲まれてしまった。

【茶髪ヤンキー】

「ツラ貸してくれない？」

と言うと右手の親指を立てて廊下を差した。そして教室を出てから

廊下を歩いて行つた。

黒・青も続いて此方を睨み付けてから茶髪の後を追つた。

航の方を向くと皆心配そうな顔をしていた。

【正義】

「暴力は嫌いなんだけどなあ」

肩を竦めておどけた様に言ってからヤンキートリオの後を追つた。

教室を出た所で川上さんが居る事に気付いた。

【正義】

「ずっと廊下に居たの？」

【川上】

「あんな事話してたら、入れないよ」

【正義】

「そりゃそつだ」

と苦笑いしながら

【正義】

「教師にはこの事言つなよ？事を大きくしたくない」

と言ってヤンキートリオの後を追い掛けながらズボンのポケットから拳サポーターを取り出して、両拳に装着した。



体育館裏とかベタな展開だなあと思いつつ、表情を引き締めて3人と対峙した。

すると茶髪ヤンキーが一步前に出てきて

【茶髪ヤンキー】

「フクロは勘弁してやるよっ！」

と言いながら顔面狙いの右ストレートを繰り出してきたので、左に軽く避けながら右手で迫ってくる腕を掴んで足元に視線を落として冷静に残った左の軸足を右足で刈り取ると同時に右腕を後ろに強く引いた。

茶髪ヤンキーは予想通りの勢いで地面に顔面を打ち付けたので、側に寄って右足で横腹に爪先をめり込ませてやった。

残った2人の方に体を向けると、2人は耳打ちして頷き合うと同時に向かって来た。

軽く腰を落として右足を後ろに一步引いた。

左側の黒髪ロン毛が右足で左の脇腹を狙ってきて、同時に青メッシュが右側を通り過ぎたので左腕を軽く上げてから右手で左手首を掴み蹴りに併せて左肘を脛に突き出した。

交差法を極めてから黒髪ロン毛が呻き声をあげてフラフラと後ろに下がるのを確認した瞬間、残った青メッシュが後から左腕を首に絡めて締め上げ右腕で纏めた髪を思いきり引っ張ってきた。

両手で首に絡み付いた腕を掴んで、顎を引いて首の締め上げを止め

ようと試みるが思っていたより力が強く外せなかった。

段々と首が極つていき苦しくなってきた頃、耳にブチツという音が聴こえてきた。

髪を掴まれている事を思い出した瞬間、頭の中で何か切れた音がした。

右腕を折り曲げて後ろに思いきり振り抜き、肘が脇腹を捉えると首を極めていた腕から力が抜けたのが解った瞬間に体が勝手に動いて、右腕で首に巻かれた腕を掴んで前に延ばし、左腕を延びた腕に巻きつけて体を前に倒し膝のバネをつかい背負い投げた。

ドスつと鈍い音を立てて仰向けに倒れて呻いていた青メツシュに歩み寄り右足で思いきり鳩尾を踏みつけた。

何か音がしたが気にならなかった。

立ち上がり残りの2人を見ると茶髪は顔を抑え、黒髪ロン毛は右足の脛を擦っていた。

【正義】

「まだやるか？」

と睨み付けながら低い声で言うと2人とも無言だったので、教室に戻っていると一時限目が終わるチャイムが鳴った。

乱れた学ランを整えて教室に戻ってくると、航と川上さんが走り寄って来た。

【川上】

「大丈夫？」

と心配そうな顔をしていたので

【正義】

「大丈夫だよ」

と言って微笑みかけてやると顔を真っ赤にしてうつ向いた。

【航】

「あの3人この学校で強いって評判なんだけど…3人はどうしたの？」

【正義】

「今頃、保険室にでも居るんじゃないか」

と言うと何人かの男子が顔を青くしていた。

【正義】

「航、次の授業…何」

【航】

「英語だけど」

と言われてサボる事が脳内で決定したので、踵を返して廊下に出てから歩き出すと背後から

【航】

「何処に行くの？」

と言っついついてきたので、歩きながら

【正義】

「…屋上」

と言っつて歩く速度をあげた。

ガチャと言う音がして屋上のドアが開いた。

奥まで歩き座り込みフェンスに背中を寄り掛からせて、眼を閉じると、ギイと音を発して屋上のドアが開いた。

そのまま無視していると、足音が此方に近付いて来て直ぐ横で止ま

った。

【航】

「隣、いいかな？」

と言われたので瞼をあげて

【正義】

「勝手に座れば」

【航】

「ありがとう」

と言って隣に座ったのを確認してから思っていた事を言った。

【正義】

「お前って顔も声も本当に女みたいだよな」

【航】

「うん。自覚してる」

【正義】

「因みに言葉遣いもだ。僕じゃなくて俺って言えばよ。それと腹から声を出せ、それなりに男らしくなるだろ」

【航】

「わかった。これから気をつける」

いきなり言葉遣いが治ったので驚いたが

【正義】

「そういえば、お前なにサボってんの？」

【航】

「七瀬君だって、サボりの癖に」

【正義】

「正義だ。まよよし名前で呼べよ。俺だって航まよよしって航まよよしって呼んでるだろ」

【航】

「じゃあマサ君って叫んで良い？」

【正義】

「構わない。友達ならな…」

【航】

「…うん。」

と言って右手を差し出してきたので、右手でしっかりと握り返した。

手を離すと

【航】

「…あつい」

と呟いて空を見上げていた

【正義】

「そつだな…」

と言って見上げた空は雲一つ無く、何処までも青のグラデーションが続いていた。

因みに家に帰ってリビングのソファで寝てしまい、起きて鏡を見ると… なんじゃコリヤ  
という正義の声が住宅街に響き渡った。

### 3 プロローグ【コドクナオト】（後書き）

2、5を書くか悩みましたが、勘が鋭い人に伏線がバレない様に書けそうも無いため諦めました。では 4でお会いしましょう。



#### 4プロローグ【トドカナイオト】（前書き）

キャラの容姿など特徴を書いて無いのは仕様です。因みに正義君がマセてるのは明斗と英理朱夫妻のイチャイチャっぷりを見せつけられ、英理朱の行き過ぎたスキンシップが影響してます。（解る人には解るかな？）キャラの容姿は本編開始後に、本文・補足を後書きに書くつもりです。なかなかコメディが書けず期待して下さっている読者様、もう暫くお待ち下さい。それでは 4お楽しみ下さい。

#### 4 プロローグ【トドカナイオト】

あれから2年半、それなりに楽しかった。航や川上さんと体育祭や文化祭、修学旅行。あの2人といつもセットだったなあ。

特に3年になってからは充実していた気がする。

体育祭では借り物競争で引いたクジに 女装した男子 なんて書いてあって、応援団に居た アレは、男らしいからお前に向いてるな と言ってやったら入っていた。応援団コスプレの航を無理矢理引きずり出しゴールで紙を見せてやると、顔を真っ赤にしてギャーギャー叫んでいた。

修学旅行では航が迷子になり川上さんと同じ班の女子で広い京都を探し回った。と言っても今思えば、川上さん達と楽しく観光していた気がする 携帯のGPSで居場所を把握していたので 方向音痴なんてマイナスキル持ってたのか、とか考えつつも通話しながら誘導して1時間程で確保した 此処でもギャーギャー喚いていた

文化祭は演劇でロミオとジュリエットを演じたが 俺は音響・航はロミオ・川上さんはジュリエット クラスの投票ではロミオが俺になりそうだった為に 女子達の耳元に航がロミオになれば百合っぽくなると思わない?と囁いて回った 演劇も無事に終わって、やっとなの荷が降りたと思っていたが舞台にクラス全員があがり観客に

向かって頭を下げる時に悲劇は起きた。航が俺に抱き着いて来て、観客席から黄色い歓声が飛んできた。結果1週間程BL疑惑をかけられ、生暖かい眼で視られた

P M 6 : 2 0

大瀬中央駅前

今日は12月24日クリスマスだ。建物は綺麗に飾り付けられ道行くカップル達は手を繋いだり腕を組んだりしている。

俺は駅前広場にある噴水の脇にあるベンチに腰掛け、先程買った缶コーヒーをコートのポケットに入れ手を突っ込んで転がしていた。

温くなってきたので、ポケットから取り出してタブを開けてから一口だけ飲んだ。

【正義】

「……不味い」

冷えきってしまったコーヒーを一気に飲み干し、ベンチの横に置いてある屑籠に捨てた。

まだかな？と駅の方を見ると大時計の針は6時23分を指していた。

まだ時間があるなと思いつつ、先程の出来事を考えていた。

2年前から恒例になっている、かざなみ風波地区にある孤児院 おそらの庭でのクリスマス演奏会が終わり家のリビングでコーヒーを飲みながら母さんと話していた。

【英理朱】

「お疲れさま。今年も喜んでくれたみたいね。まー君が帰って来る前に園長先生からお礼の電話をもらったわ」

【正義】

「うん。でも今年1年で新しい子が何人か増えてるから、手放しでは喜べないよ…何かしてやれないかなあ」

【英理朱】

「まー君は優しいね。でもね、コレばかりは私達にはどうしようもないの…2週間に一回ピアノを聴かせに行つて、遊んであげてる…皆、感謝してると思つよ」

【正義】

「そうだよな。ゴメン、暗い話になっちゃったね。今度から暇をみて行く回数を増やすことにするよ。」

と言って母さんの方を見ると、ウンウンと頷いてから笑顔を向けてくれた。

【英理朱】

「コーヒー冷めちゃったから、煎れ直してくるね」

と言って、冷めたコーヒーをキッチンに持って行った。

テレビでも見るかと思い、ガラステーブルの上からリモコンを取った。適当にチャンネルを替えているとクリスマス特集でカップルに街頭インタビューをしているところで手を止めた。

【正義】

「鳴北の商店街だよなあ……」

買い物で良く利用する新・市街地の鳴響北地区めいきよきたの商店街が映されていた。

珍しいなあと思いつつ画面を眺めていると、インタビューをつけているカップルの後方に視線が釘付けになった。

その娘は黒髪のロングで白いロングコートにピンクのマフラーを巻いていた。

画面の中のその娘は携帯電話を取り出して耳に当てた…数秒後にポケットの中の携帯が鳴った。

取り出して、表示を確認するとやっぱりね…と思いつつ通話ボタンを押した。

【川上】

『七瀬君、メリークリスマス!』

【正義】

「メリークリスマス。今日はどうしたの?」

とテレビの内容には触れずに話した。

【川上】

『実は…今「鳴北の商店街に居てテレビに映ってる…か?」……………

……………なんで、なんで知ってるの?』

テレビで確認すると頭を抱えていた。

【正義】

「そんなにへこむなよ。テレビ視てるから、頭を抱えているのもバレだから」

と言って画面を視ていると、小さくガッツポーズをしていた。

【川上】

『恥ずかしいあ、でも良かったあ。視ていてくれて』

【正義】

「なんで?何かあるのか?」

画面の中では深呼吸していた。そして真剣な顔つきになり。

【川上】

『私、次にインタビュー受けるから。最後まで………聴いてください。』

と言って電話を切られた。まさか…と思いつつ携帯をテーブルに置いて画面を見つめた。

数分後カップルのインタビューが終わり、川上さんがカメラの前に立つと 次は地元の中学生、川上さんが好きな男性に告白するそうです。頑張ってるね。 と言う女性記者の声が聞こえて。画面に川上さんの顔がアップで映った。

【川上】

「…私には、とても大好きな人がいます。同級生の………優しくして面白くて……心が強くて……自分よりも相手の事を一番に考えられる素敵な人」

と言い下を向いて軽く深呼吸すると。顔をあげて頬を赤く染めながら

【川上】

「大人びて整った顔……腰まで延びた金髪……朱色の瞳がとても綺麗な背の高い男の子」

と言つて顔を耳まで真っ赤にして

【川上】

「好きです！……貴方の全てが大好きです！」

と言つて顔を伏せて

【川上】

「今日の6時30分……駅前広場の噴水の所に居るから……うっ……待ってるからっ」

最後は泣きながら言つてから走つて画面から消えた。



あんな奴俺しか居ないだろ…気が重いな。と思いながらも地面に視線を落とし考えていた。

やっぱり志望校が違うのが引き金になったのかな？2年生になって違うクラスになったのに、昼休みわざわざ会いに来るからいつかはこうなる様な気がしてた。

好きな娘がいる とでも言っておけば良かった………今更後悔しても遅いっつうの。いい加減な自分に嫌気がさした。

考え込んでいると不意に肩を叩かれた。ハツとなって視線を上げた。

【川上】

「ありがとう……来てくれただけでも嬉しいな」

そんな訳無いだろ、やっぱり…いや、中途半端な気持ちであの真摯な想いに応える訳にはいかない。

【正義】

「ああ…アレだけ勇気を出したんだ。メールや電話で逃げる訳にはいかないだろ？」

本当に優しい娘だな、不安な筈なのに気丈に振る舞って…俺なんかには、勿体無い。アイツと出会ってなければ…いや、無意味な考えはやめよう。

【川上】

「来年は3人共、違う高校なんだよね…寂しくなるね」

川上さんは美咲桜の通う宮園女学院の高等部、航は金持ちや文化系の特待生が通う鳴響学園。俺は宮園の線路を挟んで北側にある、進学高の緑台高校を受験する。（宮園町は線路を挟んで南側）

【正義】

「そうだな…でも、逢おうと思えばいつでも逢える距離だよ」

春日から宮園を受けるのは5人しか居ないって言ってたな。やっぱり寂しいだろうな。受かっても同じクラスになれるか解らないしな。

【川上】

「そう…だね…じゃあ愚痴とか…悩みとか…電話したら…相談に乗ってくれる？」

不安なんだろうな、でも…隣に立つのは俺じゃない。

【正義】

「当たり前だよ…『友達』…なんだから」

『友達』の部分を強調して言うと、彼女は顔を伏せた。

【川上】

「…友達かぁ」

これから言われる言葉が解ってるんだろ。表情は前髪に隠れて見えないが、声が震えていた。

それを見てから眼を瞑り、覚悟を決めた。ゆっくりと瞼を上げ、口を開いた。

【正義】

「さっきの告白…嬉しかった…でも…もう…気付いてる…よな…俺が…川上さんに抱いている感情は…LIKEだ」

そこまで言うと彼女は、両手で顔を覆って泣き出した。

【正義】

「LIKEから付き合つうちにLOVEになるかも知れない…」「じやあ」…でも、あの真摯な告白に中途半端な気持ちで応えるなんて…俺には出来ない…俺には昔から大好きな娘がいるから」

ハッキリと自分の想いを告げた。

【川上】

「うっ…胸っ…借して」

と言ったので立ち上がり両腕を広げると、胸に飛び込んできた。

【川上】

「うああーっああーっああーっ」

なにもしてやれないもどかさから、逃れる様に空を見上げて唇を噛んだ

暫くして泣き止んだ彼女は、胸からそつと離れた。

【正義】

「もう…大丈夫？」

優しく語りかけると、泣き腫らした顔を此方に向けて

【川上】

「大丈夫…最後に一つだけお願い…聞いてくれる？」

と言って微笑みかけてきた顔は、こんなに綺麗だったわけ？と思わせる位の破壊力があつた。

【正義】

「内容次第だけど…「キスして」…唇以外なら…どこに？」

するべきでは無いんだろうな、と思ったが釘を刺さなかった自分にも責任がある。と自分に言い聞かせた。

【川上】

「お任せしますっ！」

と敬礼しながら言ってきたので苦笑いしながら、彼女の目の前まで歩き顔を見つめた。

彼女は頬を赤く染めて、顔を上げ瞳を閉じた。

前髪を右手で掬い上げ左手を肩に置いて、綺麗な額に唇を落とした。

そっと離れると、彼女は眼を開けて

【川上】

「いいなあ…その娘…昔から七瀬君の傍に居たかったな…その娘といつか逢いに来てね？…私も素敵な人探しくから」

そう言って笑顔を作り、右手を差し出したので此方も右手を出してしっかりと握り返した。

【川上】

「また学校で」

【正義】

「ああ。じゃあな」

と言うと彼女は駅の方に歩いて行き、暫くその背中を見つめていた。やがて小さくなった背中では人混みに紛れて消えた。

【正義】

「逢いたいなあ…元気かな…:…:…:アイツ」

離れた場所に居るお嬢様を思い浮かべ、宮園の方向に体を向けて空を見上げると純白の雪が漆黒の空を舞った

#### 4 プロローグ【トドカナイオト】（後書き）

3で名前のある立ち絵無しキャラ。と思わせていた川上さんのお話。因みに名前は彌生<sup>やよい</sup>。今回は書くのが辛かった。一応設定画が可愛く書けていた為に、いつかヒロインにしてやりたいキャラです。（そんな事誰も聞いて無い）次回予告！新キャラが出ます。しかしながら例によってシリアスの為本来の性格ではありません。それでは 5でお会いしましょう。

## 5 プロローグ【ツヨクナルオト】（前書き）

5 できました。かなり疲れましたが予告通り、新キャラ出しました。ネタバレを防ぎつつ性格を出すのに苦勞：苦勞：苦勞：苦勞：それでは読者様、お納め下さい。『次回から本編又は補足用間幕の予定です。新キャラRUSHですよ。切りが良いのでここまでの感想とか戴けたら嬉しいです。』



## 5 プロローグ【ツヨクナルオト】

川上さんと別れてから、重い足取りでようやく家に辿り着いた。

【正義】

「ただいま」

玄関で靴を脱いでいると、父さんの靴がある事に気が付いた。

9時前に帰るなんて珍しいな。まだ8時過ぎなのに、なんて考えながらリビングに歩いて行きドアを開けようとノブに手を置いた時。

【明斗】

「もう…自分の『生い立ち』を話しても…良い頃なんじゃないか。正義も来年には高校生になるし、人の痛みが理解してやれる心の強さを持った」

『生い立ち』…どういう意味だ？それに父さん、あんなに声を震わせて。

不安になり『聴くな！』と主張する意識、『知りたい！』と主張する意識が混濁して、その場から動けなかった。

【英理朱】

「あの子は強くなんかないわっ！…家を出る時もあんなに思い詰めた顔をして…恐らく断るつもりでしょう。今頃自分を責めて…ボ

口ポ口になつてるんじゃないの？…私はあの子が幸せならそれで…  
…それだけで良いの！！…今話したら…あの子が…壊れそうで…  
…怖いによっ！！！！」

壊れる？怖い？俺が？何、何なんだ…でも母さんがあんなに取り乱  
した声…聞いた事無い…俺の知らない…2人が居る。

【明斗】

「それは俺だつて怖い。拒絶されたらっ…でもアイツがどんな状況  
だろうと、いつかは乗り越えなきゃいけないだっ…俺は…い  
い加減疲れたんだ…肩から荷を降ろしたいんだ」

【英理朱】

「明斗！…貴方っ！！「最後まで聴いてくれ」……解ったわ」

【明斗】

「勘違いするな。責任を終えたいだけじゃないんだ！前に進みたい  
んだ！！もつと近付きたいんだよっ！！…不安なんだよ。アイツ  
がどこかで知って、突然居なくなりそうでっ……もう限界な  
んだ…お前…夜遅く…リビングで泣いてるよな？…お前も限界な  
んだろ？…このままじゃ…3人共壊れてしまう。……何もかも  
……全部っ！」

【英理朱】

「ごめんなさい。明斗さんがそこまで思い詰めてたなんて…気付け  
なくて…解ったわ。話してあの子を…私達で支えましょう。そし  
て、3人で挨拶に行きましょう…遅くなって、ごめんなさいって」

【明斗】

「そうだな。正義の奴遅いな…探しに行くか」

肝心な事は解らないまま…か。でも2人は俺の事であんなに悩んでくれた。決意した。なら俺も全てを受け入れる！…何を言われても…最高の父さんと母さんに応えてあげたい。

覚悟を決めてリビングへのドアを開けた。

【正義】

「ただいま…父さん…母さん」

2人は俺を見た瞬間、苦虫を噛みつぶした様な顔をした。

【明斗】

「正義…聴いてたのか？」

恐る恐るといった感じで聞いてきた。

【正義】

「話してくれるよね…俺なら…大丈夫…何を言われても…受け入れるから…覚悟…決めたから」

【明斗】

「母さん、正義にコーヒーを煎れてくれ…正義…座りなさい」

母さんがキッチンに向かってから、父さんの座っている対面にあるソファに腰を下ろした。

数分後母さんが戻って来てコーヒーをガラステーブルの上に置いた。父さんの隣に腰を下ろすと2人は顔を見合わせ頷き合った。そして真剣な顔を向けてきたので、俺も軽く呼吸して身構えた。

【明斗】

「とりあえず、最後まで聴きなさい。後で全て答えるから」

肯定する様に大きく頷いた。

【明斗】

「正義…お前は俺達の本当の子供じゃない。」

「!!!…嘘だろ。いきなりキツいな、でも最後まで聴かないといけない。朦朧とする意識を唇を噛んだ痛みで堪えた。」

【明斗】

「本当の両親はもう、この世に居ない。アメリカのワシントンに住んで居て、2人共仲の良い…俺達が理想とする夫婦だった。父親の正人さんが交通事故で亡くなった時、母親のリリスさんのお腹には

まだ6週間だったお前が居た。リリスさんは正人さんを失って、精神的にかなり不安定になっていた。だから姉を心配した英理朱が、リリスさん呼び寄せたんだ。リリスさんは不妊症で6年かけて、お前をお腹に宿した。嬉しかったろうな…でも、妊娠が確認できた日に…正人さんが亡くなった。天国から地獄に叩き落とされたんだ。日本に来た時はいつ壊れてもおかしくない…酷い状態だった。何を話かけても上の空、食事は殆ど摂らない…夜は寝ていない…そんな状態だ。3日後に倒れたよ。病院で点滴を受けながら、睡眠薬で無理矢理眠らせていた。…5日程経って、睡眠は摂る様になったけど、食事は殆ど摂らないままだな。すっかり痩せ細ってしまったんだ。

このままじゃお腹の子供に影響がでちゃう と英理朱がリリスさんを叩いたんだ。

正人さんから授かった大切な命でしょ！…貴方1人の物じゃないのよっ！ 泣きながら怒鳴ってさ。その時初めて口を開いたんだ。お腹を擦りながら、波を流して

ゴメンね。辛かったよね。馬鹿なお母さんを許してね…それから元気になってお前を産む為に分娩室に入る直前、リリスさんが

私もエリスと同じで身体が弱い。頑張るけどもしもの時はこの子、男の子なら『正義』女の子なら『梨理華』の事、本当の子供として育ててあげて…って託されたんだ。

そしてリリスさんは命を懸けてお前を産んだ、その時に誓ったんだ。

『正人さん・リリスさん・俺・英理朱の4人分の愛情を注いで、お前と俺達3人で必ず幸せになる！』ってな

そうして正義、今のお前が居る」

衝撃的だった。父さんが『義父』母さんが『義母』しかも本当の母親の妹：どつりで英理朱さんと俺が同じ金髪朱瞳な訳だ。

でも既に他界していると聞いた時はショックだった。…でも余りピンと来なかった。他界してしまった両親にも感謝しているが。産まれてから実の子供でも無いのに今迄、何不自由無く育ててくれた目の前に居る両親の15年間の溢れんばかりの愛情に感謝した。

不意に目の前が霞んできて涙を流している事に気づき、コートの袖で拭おうとしたが、それよりも速く母さんに抱き締められた。

【英理朱】  
「ごめんなさいね……今まで黙ってた……どれだけ……怒っても……罵ってもいいからっ……母親で……居させてっ……」

俺の肩にポタポタと母さんの涙が落ちてきた。こんなにも愛されて、普通の家庭よりも幸せだと想うと涙が止まらなかった。

話を聴く前より両親のことが愛しくなり、抱き締めてくれている母の腰に手を廻して抱き返し、今一番言いたかった言葉を贈った。

【正義】

「ありがっ……とっ……」お母さん『……お父さん』……これから……もっ……『家族』で……居てもっ……いいの？」

言ってから直ぐに、横から父さんが抱き着いて来て。

【明斗】

「当たり前だ！……誰が何と言おうがっ……お前はっ……俺達の子供だっ……」

【英理朱】

「そっつ……いえば……まだっ……言っつて無かったわね……お帰りなさい……まー君っ」

抱き締められながら、この人達の子供で本当に良かったと想った。沢山の『ありがとっ』を言葉に乗せて。

【正義】

「ただいまっ！父さん！母さん！」

暫くそのまま抱き合い…その日は両親の部屋で2人に挟まれて眠りについた。



俺が七瀬家の『本当の家族』になれてから、受験先を緑台高校から鳴響学園に変えた。

1番の理由は亡くなった両親と今の両親の母校であり、出会った場所だから。同じ空気を肌で感じてみたかったからだ。

後は緑台と比べて近いからだ。電車で2駅先より自転車で20分の方が圧倒的に楽だ。(上り坂はキツイが…)

#### 七瀬家 正義の部屋

今日は12月30日。そんな訳で今、受験生らしく勉強している。(今の学力でも余裕があるんだけど…ピアノで推薦を受けると厄介な事になるしな)…休憩するか。

白いハイネックのセーターの上に黒のファーコートを羽織り、部屋を出た。階段を降りて、リビングを横切り玄関に向かった

#### 【英理朱】

「まー君、出掛けるの?」

#### 【正義】

「うん。ちょっと、息抜きに…外の空気吸って来るよ」

靴を履きながら返した

【英理朱】

「じゃあ、コンビニで単4の電池買って来てくれる？」

【正義】

「わかった。歩きで鳴北まで出てくるから、一時間半位で帰るよ。」  
と返して、家を出た。

家から1番近いコンビニは住宅街の中程にあるのだが（歩きで15分）、気分転換が目的なので鳴北まで歩いていた。

20分程経ち藍ヶ丘を抜けて、鳴北に入って直ぐの所にある春日東公園の前を通り過ぎようとした時だった。

【????】

「ひつく…ひつく…」

公園の中から女の子の泣き声が聞こえた。

踵を返して公園の中に入って声を辿ると、入口からは見えない奥のベンチに中学生？位の女の子が座って顔を両手で覆い泣いていた。

目の前まで歩いていき、優しく語りかけた。

【正義】

「どうしたの？」

すると女の子は顔を上げて、泣き腫らして真っ赤になった瞳で此方を睨んできた。

【????】

「貴方…誰？」

警戒しているのか、低い声で返してきた。

【正義】

「俺は正義だ。まよひ15歳。春日中に通ってる」

警戒を解いてもらう為に、肩に竦めてからおどけた様に言った。

【????】

「プツ…何ソレ。聞いてないんだけど」

ちよつとだけ、笑ってくれたので話せるかな?と思いつつ泣いていた理由を聞くことにした。

【正義】

「隣…いい？」

頷いたのを確認して1人分の間隔を空けて、ベンチに腰を下ろした。

【????】

「たちばなれんか橘恋華15歳まで後2日。宮女に通ってる…恋華って呼んで」

ワンテンポ遅れて、自己紹介をしてきた。とりあえず気になる事を

言っていた気がしたで、聞いてみる事にした。

【正義】

「恋華って元旦産まれなの？…それと、橘って鳴海の分家の？」

【恋華】

「うん。元旦産まれだよ。それにしても、鳴海の分家って良く知ってるね」

美咲桜の事を聞こうか悩んだが、変に思われる前に本題を切り出した。

【正義】

「ちよっと知り合いがね…それより、恋華は何で泣いてたの？」

航の事を話すと話が脱線しそうだったので、言葉を濁した。

【恋華】

「アタシのお母さん、まだアタシが5歳の時に病気で死んじゃったんだ。…今日、家に居たら昼間にお父さんが知らない女の人を連れて来たの。その人誰なのって聞いたら、お父さんがこの人と再婚したいって…何も聴かされて無かったから、家を飛びだしちゃったんだ」

再婚か…難しい問題だな、でも今の俺なら。

【正義】

「それで…お父さんの再婚には反対なのか？」

【恋華】

「…反対って訳じゃないんだけど、納得いかないというか…何かイヤじゃん」

自分でも良く解らないみたいだな。意識が低いから何とかなるかな。

【正義】

「とりあえず、お父さんと話して見れば？…それでその母親候補と話せばいいだろ？」

【恋華】

「でもその女の人の父さんにベツタリだったんだ。家に何回か来ればいいんだけど。いきなりだから、ムカついちゃって…この泥棒猫って感じ？」

【正義】

「何故に疑問系…まあいいや。反対って訳じゃないんだな？」

【恋華】

「うん。お母さんをもつ愛して無いんだって考えたら複雑だけど、そう言っただけ顔を伏せた。」

【正義】

「そのままが良いから聞いてくれ…家…家はさあ…本当の両親じゃ無いんだ。親父は交通事故、母さんは俺を産んで死んだ。だから本当の両親は写真でしか見て無いんだ。だから、本当の父親が居る恋華が少しだけ羨ましい」

そこまで話してから、恋華の方を向くと頬を一筋の涙が伝った。コートのポケットからハンカチを取り出して渡すと、目元を押さえて

いた。

【正義】

「お母さん…亡くなくてももう10年になるんだろ。お父さんは寂しいんじゃないかなあ…亡くなった人を想い続けるのって、相当キツイ事だと思うよ。それに今の恋華を見てれば、お父さんがどれだけ真剣に恋華と向き合ってたか…良く解るよ。…「解る訳無い！」…最後まで聴きなって言つたろ？それに俺、人を見る瞳は自信があるよ。…お父さんが真剣に向き合って育てたから、今の恋華は真っ直ぐなんだろうな。再婚も死んだお母さんを引き合いに出す位だしね。片親で育てる場合って一方的なんだよね…片親から子供への愛情。両親だったら、半々で済むしパートナーと受け渡しが出来るしね？」

言い終わってから頭をポンポンと撫でてやった。

【正義】

「此処まで聞いても、まだ納得いかないか？」

【恋華】

「解ったよ。アタシって恵まれてるよね…甘えてた。帰ってちゃんと話してみるよ！」

そう言ってハンカチを此方に返して、ベンチから立ち上がり。

【恋華】

「話を聴いてくれてありがとう。それじゃあね、マー君」

軽く手を振ってから公園から出ていった。

目的は果たせたかな？とりあえず、航に受験先を変えた事でも教えてやるか？

来た道を戻りながら、携帯を取り出して航に電話をかけた。

T r

【航】

『もしもし？』

【正義】

「出るの早すぎだろ？ずっと俺からの電話を待ってたのか？」

【航】

『うん。実はそ』

P i

最後まで言わずに電話を切った。

『  
〜  
〜  
〜』

間発いれずにかけ直してきた。

【航】

『何で切ったんだよ！』

ちよつと怒っていた。

【正義】

「…俺は男色じゃないぞ」

【航】

『文化祭の事、まだ根に持ってるの？…まあいいや。それで何の用なの？』

【正義】

「俺も鳴響行くから。宜しくな。」

【航】

『緑台受けるの辞めたんだ？でもどうして？受かるだけの学力あるのに…鳴響よりランク上なのに…良いの？』

【正義】

「それを言うなら、お前もだろうが…常にTOP3の癖に…嫌味？」

【航】

『俺は父さんの決めた事に従うよ、大学はある程度自由に選べるから別に問題無いよ？』

【正義】

「そうか…そういえば、さっき橋って娘が……やっぱりいいや」

【航】

『橋ってウチの分』

P i

えらく食付きが良くウザイので電話を電源ごと切った。



気が付くと家の近くまで来ていたが空から水滴が落ちてきた為、空を見上げると茜色に輝く太陽が灰色の雲に消えた。

本格的に降り出してくる前に、走って家まで帰った。

因みに家に帰ったら、玄関に母さんが仁王立ちしていて。

【英理朱】

「…電池は？」

【正義】

「……………行ってきます」

どうやらテレビのリモコン用らしく、ご機嫌斜めの為に傘を挿して  
近所のコンビニ迄走った。

## 5 プロローグ【ツヨクナルオト】（後書き）

プロローグENDです。今回は家族の絆についてのお話でした。この話は裏に重要な部分があるので、無くてはならないイベントでした。

本編の主成分

主人公×1

メインヒロイン×

1『バレバレ』

男友達×1『バレバレ』サブヒロイ

ン×4となっております。プロットの見直し&地名の確認等がある為に気持ち更新が遅れるかも知れませんが、それじゃ次回にお会いしましょう。

## 6 4月第1週【鳴響学園に行こう!】（前書き）

本編スタートです！ 6お待たせしました。本編から1話が長くて疲れました。毎日投稿は出来なくなりそうです。内容が薄い所以外は、週一のペースで投稿しようと考えてます。それでは 6お楽しみ下さい。

## 6 4月第1週【鳴響学園に行くころ!】

『 』

枕元に置いた携帯から自作のピアノ曲が流れ、目が覚めた。着信音に設定してたよな?と思いつながらモゾモゾと布団から手を出して携帯を探り当てて通話ボタンを押し耳に当てた。

【航】

『おはよう。マサ君。今日の入学式はどうやって行くの?』

そう言われてベッドの脇にある時計を見ると8時だった。

【正義】

「航か…確か9時30分迄に行けばいいんだよな?」

【航】

『うん。そうだよ。考えてないなら、この間みたいに家の車で拾って行くころか?』

あの上り坂を楽に攻略出来るなら、使わない手はないな。まあ母さん次第だが…一応キープしとこう。

【正義】

「悪い。母さんに聞いて来るよ、5分以内にメール送るから…それじゃ」

電話を切って、手に持ったまま部屋を出た。

階段を降りてリビングに入ると、気合いの入った格好をした母さんがソファに座り優雅にコーヒーを飲んでいた。

此処で俺の自慢の母さんを紹介しよう。

七瀬英理朱 アメリカ人 本名エリス・ブラッドフォード 37歳 A型 170cm Cカップ 長身のモデル体型。腰まであるウェーブの掛かった金髪に切れ長の眼&朱色の瞳。若干鼻が高い整った顔立ちで、良く駅前でモデルのスカウトに追い掛けられている。正義を溺愛しており、行き過ぎたスキンシップをしてくる。自宅でピアノ教室を開き、先生をしている。涙脆いが本当に優しい、自慢の母さんだ。

#### 【正義】

「おはよう。母さん。今日の入学式、車で行くの?」

格好も気になったが、航を待たせると煩いので送ってくれるかを聞いた。

#### 【英理朱】

「おはよう。まー君。車で行くつもりだから、乗せて行くわよ。因みにコレでばっちり撮ってあげるから」

今日の為に買ったといわんばかりの笑顔でビデオカメラをいじりながら、言われた。

流石にそれは恥ずかしい。何とかして阻止したいが、取り上げて泣かれると厄介だ…後でバッテリーでも抜くか。

そうだった。航にメール送ってやらないと、学園でギャーギャー喚

いて目立つからな…それは避けないと。

『お前の助けなど必要ない…じゃあな』とコレで良しっ送信！

【英理朱】

「まー君。ご飯食べないの？キッチンのテーブルにサンドイッチ置いてるよ」

そろそろ服装を誘導しとくか。

【正義】

「食べるけど…その前にその格好で行くの？」

母さんの服装はワインレッドに染め上げた、シルク製の光沢が美しいロングドレスだった。

【英理朱】

「そのつもりだけど…似合わない？明斗さんは興奮して、携帯で撮って待ち受けにしてたわよ？」

父さん…綺麗なのは認めるけど、行動が若すぎるよ。それに被害者は俺なんだから…組手を装って今度ボコボコにしよう。

【正義】

「母さんは素材がいいから勿論似合うよ？でも、その長すぎる裾はどうなのさ…父さんは居ないんだから」

ウェディングタイプの裾は引き摺るタイプなので屋外では着れない。それにアレで車を運転…怖いな。色んな意味で。

【英理朱】

「そこまで言うんなら、まー君が選んでくれる？」

まだ諦めて無いのか、ジト目で此方を凝視していた。

【正義】

「黒地に白いストライプが入った、パンツスーツで良いと思うよ。この間『フロンティア』で買ったやつ。あれ着てたら俺でも惚れるんだけどなあ」

と言った瞬間ダッシュで二階の自室に消えた…扱いやすい人だ。

それからキッチンで朝食を摂り、洗面所で歯を磨き顔を洗って自室に戻り着替える事にした。

パジャマを脱ぎ、ドアの横に置いてある脱衣カゴに入れた。

それから壁のフックに掛かっている、鳴響学園の制服を眺めた。

男子の制服は藍色のブレザーに、黒と灰色のチェックのスラックスだ。また学年を区別するためにブレザーの胸ポケットには、着脱式の校章の刺繍が付いている。因みに1年は赤・2年は青・3年は緑だ。

ベッドに腰掛けて靴下を履いた。次にカッターシャツを着てボタンを留める、立ち上がりズボン履いてベルトを通して締めた。ブレザーを着て袖口からシャツの袖を出し、折り返して袖のボタンを留めた。

腰まであるストレートの髪を、リリスさんの形見・シルバーリング



状の髪留めで一本に纏めた。それから鏡の前に立ち全身をチェックした。

鏡の中にはA型 176cm 長身のスラッとした体型。金髪で腰まであるストレートの髪。切れ長の眼に朱色の瞳。落ち着いていて、大人びた印象を受ける男性：つまり俺、七瀬正義が立っていた。

時計を見ると9時になっていたので携帯と財布、ハンカチをポケットに入れて部屋を出た。

リビングに入ると予定通り着替えた母さんが、ソファから立ち上がり此方を向いて。

【英理朱】

「どうかな？惚れちゃった？」

と言って顔を手で覆い、身体をくねらせていた。目の前まで行き、真剣な顔で

【正義】

「結婚式はいつにする？」

と言ってやると、ボンッと音を立てて全身真っ赤になった。

2分程放置したが戻ってこないの、頬をペシペシ叩くと戻ってきた。

【英理朱】

「もう一回だけ、言って欲しいな？」

と頼み込んできたが、無視して玄関に向かった。後ろから まー君のイケズー とか聴こえたが気にしてはいけない。

後ろから追いついてきた母さんと靴を履き、並んで外に出た。

#### 鳴響学園正門から500メートル手前

目の前にはリムジンやベンツ、BMW等の高級車が並んで駐車場待ちの列が出来ていた。(因みに駐車場には300台止められる)

【正義】

「ここで降りてから、歩いて行くよ。」

【英理朱】

「また後でね、いつてらっしやい」

車から降りて高級車の列を眺めながら、流石金持ちが集まる学校だ。と思いながら校門を目指した。

俺が今日から通う鳴響学園はR県天瀬川市、大瀬区の北部、天峡山の麓にある。

#### 以外地区別詳細

大瀬区は大きく分けて西部・中部・東部に縦の線が引ける。区の中心を東西に走る鉄道、新京線の線路を横の線として6つの地区に分けられる。

西部の北側が俺の住んでいる高級住宅の立ち並ぶ、新住宅地・藍ヶ丘地区。（双葉幼稚園や藍ヶ丘小学校がある）

西部の南側は市営のマンションや住宅が立ち並ぶ、新住宅地・茜ヶ原地区。

中部は会社や病院、デパートなどが立ち並ぶ区の中核、新市街地。北側が鳴響北、南側が鳴響南に別れている。（春日中学校がある）

東部の北側は個人の店や商店街などがある旧市街地・風波地区（おそらの庭がある）

東部の南側は格式のある名家や地主のお屋敷が多く残る旧住宅地・ひがしみなぎせ東観風瀬地区

#### 地区詳細文終了

鳴響学園は簡単に言えば、市立の金持ち高校だ。生徒数は1学年で6クラス、1クラス平均30人なので全校で550人程だ。

授業のタイムテーブルは8時半迄に登校して、10分間のSHR後に50分授業と10分休憩を繰り返す。

昼休みは40分と若干短い。だが6時限目が3時に終わる為、習い事をさせている親御さんには大変好評らしい。

各学年週1で選択授業があり美術コース（デッサン・水彩画・油彩画）と音楽コース（フルート・ヴァイオリン・ピアノ）から1つを選ばなければいけない。

選択授業は単位が0でも、学期末の実技で5人の試験官が審査して（凄く厳しい）4人からOKが貰えれば単位が貰える。

部活動・委員会は無いに等しく、どれだけ遅くても5時半迄に終わるので部活に入る生徒はあまりいない。

校舎は四階建てで、昇降口から入って左手に教室がある教育棟。教育棟の突き当たりの右側、正面から見て中庭を挟んで奥にあるのが

教員・特別教室棟。右手にあるのが部活・委員会棟だ。

教育棟は上から四階に1年・三階に2年・二階に3年の教室がある。

一階にはコンビニと休憩所があり、朝8時から完全下校時間の夕方5時半まで利用できる。。

食堂は存在せず、昼食は

一階のコンビニで買う

自宅から持参する

朝一に昇降口横にある注文カウンターで、有名ホテルの日替り弁当を頼む の3パターン。

教員・特別教室棟の屋上には全面ガラス張りのカフェテリアがあり、昼休みから5時半まで景色を眺めながら優雅なティータイムが楽しめる。

校舎の外には右手前に通常の4倍はある総合体育館。奥には広大な面積のグラウンドがあり、校舎の外左側には50メートルの屋内プールがある

あとは校外に教員・来客共用の駐車場がある。

どんな学校？と聞かれたら、こう答えるだろう。：気が付けば、校門の目の前だった。校門には『風紀』と書かれた腕章を付けた生徒が両側に何人か立って、髪の色やスカートの丈の長さにピアス等の注意をしていた。

俺もあなるのか…と思いなながらも、門を通り過ぎようとすると。

【風紀委員】

「おい！ソコ金の髪！…お前だよ！ふざけてんのか！！」

無視して歩いて行くと、男子の風紀委員に腕を掴まれてしまった。

【正義】

「地毛なんですけど…離してくれませんか？…それに、茶髪OKで金の髪は駄目なんですか？」

【風紀委員】

「百歩譲って地毛でもなあ！長すぎるし、そのカラーコンタクトも違反だ！没収する！！」

茶髪云々をスルーしやがった。何を言っても聞かないなコイツ、どうするかな…逃げようかなあ？

【????】

「おい。その新入生を離してやれ」

なんか、聞き覚えがあるなあ…この女子の声…まさかね

【風紀委員】

「しかしながら。委員長、コイツは…「オレの言ってる事が解んねーのか！」……すいませんでした」

腕を掴んでいた風紀委員は声が出た方向を見ると、手を離して頭を

下げた。

声は校舎の方向からだよなと思いつながら視線を向けると、明らかに知り合いの娘だった。

【???】

「久しぶりだなあ。正義、クリスマス演奏会以来じゃねーか」

彼女は目の前まで歩いて来て、右手を差し出してきたので此方も右手でしっかりと握り返して離し顔を見ながら。

【正義】

「お久しぶりです…芽衣さん…：鳴響だったんですね。驚きましたよ」

園田芽衣 《そのだめい》 2年C組 AB型 169cm Dカップ 国内で外食チェーン最大手の園田グループ代表の娘。スポーツーな引き締まった体型。髪は茶髪のロングをポニーテイルにしている。つり目で綺麗系の顔。凜とした雰囲気のカッコイイお姉さんタイプ。男言葉&サツパリした性格のせいで、男子からは『突撃お嬢』女子からは『芽衣様』と呼ばれている。幼い頃から剣道+薙刀で鍛えられていた為凄く強い。陸上部のエースで足も速いので『最恐の風紀委員長』として今日も学園の治安を守っている。【竹刀+黒スパッツはデフォルト】一人称は【オレ】正義とは3年前おそらの庭のクリスマス演奏会で出会った。

【芽衣】

「しっかし驚いたよ。緑台受けるって言ってた正義が…まさかウチに来るとはねえ」

【正義】

「俺だつて驚きましたよ。いつも私服だったから…その制服良く似合ってますよ」

女子の制服はブレザーは同じなのだが、校章が縫い付けてあり外れない。かわりに襟元のリボンで学年が解るようになってる。因みに芽衣さんは2年なので青。スカートはプリーツタイプで赤と黒のチエックだ。

【芽衣】

「まあ、ガキ共と遊ぶと汚れるからな。それに、恥ずかしいじゃねえか。オレみたいなのが、お嬢様ばっかの学校に通ってるなんて」顔を真っ赤にしながら言ってきた。やっぱり芽衣さんは優しい人だなあ。フランクで話しやすいし。

【正義】

「さつきは助かりました。いい加減ウザかったですから」

【芽衣】

「すまねえな。コイツ達にはきつちり言い聞かせとくからよ」

そう言うってから頭を下げてきた。

【正義】

「そうしてくれると助かります。頭を上げて下さい…芽衣さんは何も悪くないんですから」

頭を上げてくれたのでホッとした。いつもケジメは確りしないとい



けないって、子供達に言ってるからな……アレ？……そういえば今何時だ？……携帯を取り出すと9時48分……周りをみると俺と芽衣さんしか居なかった。

【正義】

「ヤバい！……芽衣さん。遅刻なんでもう行かないとっ！」

【芽衣】

「急がなくてもいいぞ？……元々ウチのモンの不手際だからな。オレと一緒に行って、事情を説明してやるよ！」

断ろうか悩んだが、自分の考えは絶対に曲げない人だからなと思ひ。

【正義】

「それじゃ宜しくお願いします」

と言って2人で教室に向かった。

昇降口でクラス発表を見るとA組だった。それから世間話をしながら歩いて、教室の前に着いた。

【芽衣】

「ちょっと待つてるよ?…直ぐ済むからな。」

そう言い残し教室に前の扉から入って行った。教室の中がざわついたが、直ぐに芽衣さんは出てきた。

【芽衣】

「もう何も言われないから、安心して行ってこい。…言い忘れてたが、クリスマスはありがとな。ガキ共喜んでたぜ。じゃあまたな。」

そう言い残し廊下を曲がって視界から消えた。教室のドアを開けると視線が集中したが、直ぐに散っていった。

窓際の一番後ろが空いていたので、座ると机に『マサ君専用』と書かれた紙がテープで貼ってあった。

視線を上げると目の前に航が座っていた。此方を向いて小声で話かけてきた。

【航】

「災難だったね…でも結果的に1日で片付いて良かったかもね」

鳴海航 1年A組 B型 165cm 昔から続く名家の跡取り。男に見えない程身体の線が細く、声が高い。髪は黒髪の中分けに刈り上げの坊っちゃんスタイル。パツチリとした大きな眼で童顔。女の子に間違われる事がコンプレックスなので、自分を強く魅せる為乱暴な言動で振る舞っている。しかし化けの皮が剥がれると、女子に揉みくちやにされるクラスのマスコット。恋華の許嫁兼恋人(主従関係?) 一人称は【俺／＼僕】

【正義】

「なんか朝から凄い疲れた…入学式で俺寝るから、終わったら起こして」

【航】

「わかった…因みにさっきの先輩は知り合い？」

やっぱり聞かれたか…まあ問題ないし教えてやるか。

【正義】

「ああ。知り合って3年になる…園田芽衣先輩だ、体育会系だけど優しい人だぞ」

【航】

「やっぱり？…竹刀持ってたもんね」

そんな話をしていると突然、教室が騒がしくなった。周囲を見回すと、担任らしき男性が教室から出ていった。気になって時計を見ると10時になっていた。

【正義】

「入学式は？確か10時からじゃなかったか？」

入学案内にはそう書いてあった筈だ。遅れてるのか…まあ問題ないな。

【航】

「マサ君が来る少し前に先生が10時15分から体育館に移動して、30分から式が始まるって行ってたよ」

【正義】

「へえ…そうなん」「うわぁ久しぶり。て言うか航と知り合いだったんだ？」……だ？」

不意に直ぐ横から女子の声が聴こえてきたので、そちらを向くと見覚えがある娘だった。航を呼び捨てにしている……年明けに電話で言っていた許嫁か？…身体的特徴も一致してるし……それに久しぶりって言ったよな？…何処で会ったかなあ。

航に視線を送ると苦笑していた。視線を戻すと、胸の前で祈る様に両手を組んで此方を見つめていた……聞いてみるしかないな。

【正義】

「以前、何処かでお会いしましたか？…顔には見覚えがあるのですが」

そう言うと彼女は肩をガツクリと落として、顔を伏せた。悪い事したなあ…でも思い出せない……情けないなあ。そんな自分に少しだけ自己嫌悪した。

【????】

「去年の年末に春日東公園で……会ったじゃん」

年末は辛い事ばかりだったからなあ。……年末…春日東……女の子！…泣いてた娘か！！

【正義】

「ゴメン。思い出したよ。確か……恋華だっけ？」

恐る恐る聞いてみると彼女はガバツと顔を上げて笑顔になり、コク

コクと頷いた。

【恋華】

「うん。…あの時はありがとね。お陰様で3人仲良く暮らせてるよ」

橘恋華 1年A組 O型 158cm Aカップ 鳴海家の分家、橘家の二女。本人はスラツとしたモデル体型と言っているが、航曰く凹凸の無いコケシらしい。髪は茶髪のショートカット。眼はタレ目で童顔の可愛い系。初対面の人に対して必ず、猫被りスキルを発動する。スキルを解除した途端、語尾に『〜じゃん』みたいな喋りかたになる。航に対してキレると『女王様モード』を発動して、航を犬の様に扱う（絶対服従・ガード不可）因みに航は猫被り発動中に、5秒で恋華に惚れた（笑）。一人称は【アタシ】

【正義】

「それは良かった…ところで、恋華って航の許嫁？…呼び捨てにしているし」

【恋華】

「うん。航はアタシの許嫁兼恋人」

言いながら航の腕に抱き着いた。ジト目で航の顔を見ると

【航】

「付き合ってるのを言わなかったのは悪かったけど…ほら、川上さんの事もあったし」

そう言って悲しそうな顔をした。航…気を遣ってくれてたんだな。心の中で サンキュ と呟いた。

【正義】

「お前が気にしてどうすんだよ…て言うか、何でお前が知ってる？」  
と言ってから睨み付けた。航にも川上さんの事は言っていない。本人から…いや、それはない筈だ。じゃあ何で知ってる？

【航】

「川上さんの背中を押したの…僕なんだ。前から相談されてて…視てられなくて…ゴメン。黙って勝手な事して」

航は深く頭を下げた。偶然、テレビで視たとか言えば良いのに。本当に真つ白な奴だ。これじゃ…怒るに怒れねえよ。恋華の顔を見ると頭の上に????マークが飛んでいた。

【正義】

「頭を上げてくれ…悪かったな。俺が釘を刺しとけば…皆、辛い想いをしなかった筈だ。それに、もう過ぎた事だろ?…川上さんとはたまに電話で話すけど、全然気にしてないって言ってるよ」

そこまで言うと漸く頭を上げてくれた。ふと周囲を見ると皆、此方を観ていた。

【航】

「本当にゴメン。でも川上さんも元気そう良かった」

【正義】

「航…恋華が暇そうだ。それに俺達、注目浴びてるぞ」

航は恋華の顔を見ると青ざめた。存在が空気になっていたのでキレ

た様だ。恋華の背後に炎の様なものが見える。

《女王様モード発動》

【女王・恋華】

「航君…このワタクシをシカトですか？……いい度胸ですねえ。…  
そういえばこの部屋、暑いですわねえ……ねえ…わ・た・るっ！！  
！」

【航】

「……………逝ってきまーす！」

《女王様モード解除》

眼が糸目になった恋華に言われると、航はダッシュで教室を出ていった。なんか字が違った気がするが。て言うかもっ皆、廊下に出てるし。

【恋華】

「それじゃ廊下に並ぼっか。マー君」

【正義】

「……………ああ」

余りの変わり様に声を出すのがやっとだった。我に還って廊下に出た恋華の後を追って、隊列を組んで体育館に向かった。

5分後 教室前

1階のコンビニでお茶を買って戻って来た航。

【航】

「ハア…ハア…買ってきた…よ？…僕一人？…遅れるうー  
ー！」

誰も居なくなった廊下に航の叫び声が響いていた。



体育館に入るとパイプ椅子が並べられており、担任に誘導されて椅子に座った。

保護者席の方向を見ると、母さんがビデオカメラで此方を撮りながら手を振っていた。

そこで漸くバッテリーを抜き損ねた事を思い出し、頭を抱えた。

視線を逸らして腕を組み、顔を伏せて眼を閉じた。 まー君。寝ちゃ駄目、せめてこっち向いて寝てー と叫んでいたが反応すると、ウチの親だとバれるので無視を決めこんだ。

あまりの恥ずかしさに、顔から火が出そうだった。そのまま2分程すると式が始まったので静かになった。航の事が気になったが、眠気に勝てず意識を手放した。

体を揺すられる感覚で意識を取り戻した。眼を開けると航の顔が至近距離にあったので、手で顔を押しして距離をとった。

立ち上がって辺りを見回すと、数十人の上級生らしき生徒と保護者数人しか居なかった。

【航】

「入学式はもう終わったよ。中途半端な時間に寝ると、相変わらず寝起き悪いね？」

【正義】

「今日は特別だ…朝から疲れすぎた」

【航】

「教室に行かないと…自己紹介とかするらしいよ」

【正義】

「しっかり笑いを取ってくれよ？…恋華・俺・航の順だろ。出席番号順なら、トリはお前だろ？」

そう言って踵を返して歩き出した。航も直ぐについてきたが、隣を歩きながらブツブツなにかを言っていた。

教室に戻る途中に担任の名前、担当教科を聞いた。名前は松原誠一、まつはらせいいち担当は数学らしい。

教室に戻ると担任はまだ来て無かったので、席に座ってとりあえず『マサ君専用』と書かれた紙を剥がして航の背中にそっと貼りつけ

た。

航と話していると前の方に座っていた恋華が寄って来た。

【恋華】

「航は良いとしてマー君はこの後、用事とかあったりする？」

【正義】

「別に用事は無いが…何かあるのか？」

【航】

「俺は良いとして…まあ暇だからいいけど」

【恋華】

「カフェテリアに行ってみない？…ケーキがかなり美味しいって聞いたから。教室に戻る途中で、中学から仲の良い娘に誘われちゃって…駄目かなあ？」

と不安そうな顔で聞いてきた。ケーキは好きだから別に行っても良いかな。今日はレッスンも無いし。どうせ家でまったりする予定だったしな。

【正義】

「いいよ。ケーキは好きだしね。」

と言ってやると忽ち笑顔になって 良し！ と言いながら小さくガッツポーズをしていた。

その姿を眺めていると教室の扉が開き30代後半位の眼鏡をかけた男性教師が入って来た。

それまで立っていた生徒は皆、席に座り忽ち静かになった。教師は教壇に立って皆の顔を眺めてから口を開いた。

【松原】

「俺の自己紹介は済んだが、お前達の顔と名前を覚えていない。…俺とクラスメイトに覚えてもらえる様に、一人一人自己紹介をしてくれ。どれだけ長くても、短くても構わないから…出席番号順で一人ずつ前に来い」

それから暫く聞いていたが、金持ち学校らしく家柄の自慢や習い事で賞を取ったなど…全く自分の事を話していなかった。

【松原】

「次は…橘」

恋華が立ち上がり教壇に立って此方を向いた。

【恋華】

「皆様、初めまして。鳴海家の分家、橘家の橘恋華と申します。どちらかと言うと、勉強より体を動かす事のほうが好きなので勉強は苦手です。解らない時に教えて下さると嬉しいです。趣味は映画鑑

賞で、特技は犬（航）の躰です。1年間宜しくお願いします」

恋華が自己紹介を終え微笑むと、拍手が巻き起こった。猫被りスキルを発動しやがった。犬が航にしか聞こえなかったが……次は俺か……まあ、何とかなるだろ。

【松原】

「次は……七瀬」

立ち上がり教壇に歩いて行くと、すれ違い様に恋華から 頑張っ  
と小声で言われた。教壇に立つて皆の方を向くと、ヒソヒソと小  
声で大多数が話していた。またかと思いつながら、後ろの黒板を視  
ながら口を開いた。

【正義】

「春日中学から来た、七瀬正義です。俺はハーフなので、金髪と瞳  
の色は産まれつきです。趣味は音楽鑑賞、特技は英会話。1年間宜  
しくな」

と無難に纏めて教壇を降りた。席に戻っていると 怖そうよね  
……格好良い アイツ何処の会社の後継者だろ？ 様々な声が聴こ  
えてきた。

航の横を通り過ぎ様に 頑張れよ と小声で言って、肩を叩いて自  
分の席に座った。

【松原】

「次は……鳴海？」

【航】

「先生！何で俺だけ疑問系なんですかつ！」

勢い良く立ち上がり、机を叩いて教壇に向かった。

背中に貼った『マサ君専用』の紙を視て皆大爆笑だった。

航は大爆笑の原因が解らずに自己紹介を始めた。

【航】

「春日中から来た、鳴海航です。先ほど橘さんが言っていた、鳴海家が俺の家です。勉強もスポーツも一通り出来ます。趣味は読書で、特技はタイピングです。宜しくお願いします。」

クスクスとクラス中から笑われながらも、自己紹介を終えて戻って来た。

【航】

「何で皆笑ってたのか知ってる？」

【正義】

「さあな…それより前を向け、自己紹介してる奴に失礼だろ？」

航が前を向いたので『笑いの原因』をそつと回収して机の中に入れた。

自己紹介が終わり、松原が1年間のスケジュールを黒板に書いていた。幾つか気になる事が書いていた。…学園全体社交会？…本校+

附属大学集団社交界？……なんだあの2つは？…誰も質問しないしな。その時になれば解るか。

【松原】

「明日から通常授業だから、忘れ物の無い様にな。それじゃ今日はお疲れさん」

と言いついて教室を出ていった。すると、直ぐに恋華が寄ってきた。

【恋華】

「じゃあ2人で先に行つて。友達連れて行くから」

と言いついて教室を出ていった。航と顔を見合わせて。

【正義】

「行くか？」

航が頷いたのを確認して、鞆を持ってカフェテリアを目指した。

普通なら屋上のドア（ガラス製）を開けてカフェテリアに着くと、8割位の席は埋まっていた。

【ウェイトレス】

「2名様ですか？」

【正義】

「いや、後で2人来ます」

中に入ると直ぐに、20代前半位のウェイトレスの女性に話し掛けられた。

【ウェイトレス】

「それでは此方へ」

と言われて着いていくと、壁際にある4人掛けの長方形のテーブルに案内された。椅子に座ると。

【ウェイトレス】

「注文が決まりましたら、此方のボタンで御呼びください……それではごゆっくり」

テーブルのボタンを説明してから頭を下げて、テーブルから離れた。置かれていたメニューを一通り眺めてから、俺はコーヒーとレアチーズケーキ。航はミルクティーとティラミスを頼んだ。



ケーキを食べ終わりコーヒを飲んでいると、目の前の椅子が引かれて顔を上げると恋華だった。

【恋華】

「ゴメンね。遅くなって」

言いながら航の対面の椅子に座った。1人しか居ないなと思っていたら、3年間で綺麗に成長した幼馴染みが入口の方から歩いて来た。

目の前まで来て俺と視線が絡むと。

【???】

「ヒロ君っ！逢いたかった！」

持っていた鞆を床に落とし、走って勢い良く横から抱き着いてきた椅子から立ち上がり、正面から抱き返して耳元に優しい声で囁いた。

【正義】

「お帰り。美咲桜」

美咲桜は声を殺して、俺の胸に顔を擦り付けて泣いていた。ポンポんと背中を軽く叩くと、ゆっくりと離れて顔を上げた。

【美咲桜】

「ただいまっ。ヒロ君っ！」

桐原美咲桜 3 / 14 生まれ 1年D組 A型 172cm C  
カップ 政財界に多大な影響力を持つ桐原財閥の代表の娘。モデルの様なスレンダーな体型。髪はシャギーの入った黒髪で、背中の中

程まであるセミロング。切れ長の眼に形の良い少し高めめの鼻、ピンクの小さな唇。パーツの揃った綺麗な顔。道行く人が皆振り返る程の美人。基本的には優しいが、特別扱い（お嬢様扱い）されるとキレる。正義以外の男には基本的に毒舌になり、プライドを粉々に破壊する『姫モード』になる。スポーツ、勉強がトップクラスの文武両道型。料理は上手いが辛党。携帯以外使えない程のメカ音痴。一人称は【私】

ブレザーのポケットからハンカチを取り出して、涙を拭ってやると美しい笑顔を向けてきた。周囲を観ると、航や恋華も含めた全員が啞然として口を開き此方を観ていた。

【正義】

「とりあえず座りなよ。皆観てるよ？」

正面の椅子を勧めながら、自分の椅子に座った。美咲桜は頬を真っ赤に染めて、落とした鞆を拾い素早く椅子に座った。

【正義】

「美咲桜も恋華も何か頼んだら？…俺もコーヒーもう一杯飲みたいし」

と言って恋華の方を見ると、何か言いたそうな顔をしていた。俺と美咲桜の関係を知りたいんだろうな…まあ話すけどね。

美咲桜が毎のミルクティーとダージリンティー、恋華はアップルパイとミルクティーを頼んだ。ついでに俺は、コーヒーをもう一杯頼んだ。

恋華は関係が余程知りたいのか、凄い勢いでパイが皿から消えた。視線を美咲桜に移すと、ゆっくりと上品な動作で味を楽しんでいた。えらい違うなあと思いつつ、コーヒーを飲んでみると。

【恋華】

「マー君っ！美咲桜とはどういう関係なの？」

やっぱり聴かれたか。解りやすいなあ…さて、何処から話したのか？

【航】

「うん。こんな綺麗な娘と、どうやって知り合ったの？」

最初からになりそうだなあ…と思いつつながら美咲桜に視線を送りウインクすると、微笑み返してきた。

当時を思い出しながら、ゆっくりと口を開いた。

【正義】

「俺が初めて美咲桜と出逢ったのは…5歳の春だった。当時俺は、幼稚園で浮いてたんだ。この外見だろ？…化け物とか言われてた。いつも1人…遊戯室でピアノを弾いてた。ある日いつもの様にピアノを弾いてると、美咲桜が眠そうな顔して部屋に入って来たんだ。俺は美咲桜が心配だった…俺と遊ぶと皆、その子を相手にしなくなるんだ。最初は何人か仲の良い子が居たけど、孤独の重圧に負けて離れていった。…でも美咲桜は違った。俺から離れなかった。しかも他の子とも根気良く接して、俺と皆の両方を手に入れやがった。欲しい物は自分で勝ち取る姿が…俺には天使に見えたよ。それから

美咲桜は俺の母さんからピアノを教えてもらって、小学校卒業迄いつも一緒だった。……それで先程、3年振りに再会した……そんな関係」

ピアノの話をした時、美咲桜の表情が曇ったのが気になるな……まあ今は聞くべきじゃないな。

【恋華】

「なるほどねえ……じゃあ何で『ヒロ君』なの？……正義だね、名前？」

【美咲桜】

「それは私が話すよ。正義って漢字『せいぎ』って書くでしょ？『せいぎの味方』だからヒーロー。それを縮めて『ヒロ君』にしたの。金髪で朱色の瞳のヒロ君がピアノを弾く姿が、絵本の中の王子様みたいだったから……私の『ヒーロー』になっってくれなかなって」

顔を真っ赤しながら説明を終えた。恥ずかしいなら縮めての件で終われば良いのに……後半は初めて聴いたなあ。……そういえばいつもママゴトの配役が、王子と姫だった気がする。

【恋華】

「へえ〜。『ヒロ君』て呼び名にそんなエピソードがあるとはねえ」  
言い終わると、恋華はニヤニヤしながら美咲桜に視線を向けていた。  
その一方で、航は2人の胸を見比べて溜め息を吐いていた。

【美咲桜】

「もっ…もっつこの話はお終いつ！…解った!？」

動揺しながらダンツと机を叩き、会話を打ち切った。そろそろフォロ―してやるか…話題でも変えよう。

【正義】

「そういえば…皆、選択授業は何にするか決めた？俺は一応ピアノだけだ」

【航】

「俺は油彩画かな…油絵に興味あるし」

【恋華】

「アタシも油彩画。昔から絵は好きだしね」

【美咲桜】

「……………」

美咲桜は顔を伏せて黙り込んでしまった。やっぱり…ピアノで何かあったのかな。俺も3年間コンクールに出てないから、解らないしな。何があったかはゆっくり探ればいいとして…原因は俺だし、この重苦しい空気をどうにかしないと。

【正義】

「今日は俺の奢りだから。3人とも遠慮なく食ってくれ」

俺の意図が伝わった様で、恋華は航に目配せしてメニューを眺めてから、ボタンを押した。ウエイトレスに俺からは見えない様にメニューを見せて、ココからココまでお願いします と指差しながら言った。ウエイトレスは驚いた顔をしたが 畏まりました と言つてカウンターに戻った。

数分後のテーブルには隙間無く大量のケーキが置かれた。

【正義】

「こんなに食えるわけ無いだろっ！」

【恋華】

「アタシが10個は食べるから大丈夫だよ?…あとは1人2、3個食べれば無くなるじゃん。……………いざという時は航(犬)が居るから大丈夫」

啞然としたが、場を盛り上げようとしている恋華に感謝した。

【航】

「あの栄養が少しでも胸にいけばなあ…すみませんっ、恋華さんは今のまま「プツ…クスクスツ…」…でとてもお綺麗です?」

女王様モードが発動しかけて、航が必死でフォローしていると漸く顔を上げて笑ってくれた。

【美咲桜】

「…ゴメンね。気を遣わせちゃって。良しっ！ヒロ君…私もご馳走になるね！」

と言って目の前のモンブランを食べ始めた。原因が解るまでピアノの話は避けよう…原因が解って…もし力になれるなら、全力でフオローしよう！…そう決心してから、目の前にある洋梨のタルトを口に運んだ。

あの後、何とか全てを食べきり（恋華が航の口に、無理矢理ケーキを詰め込んでいた）学校生活の展望や、とりとめの無い話をしてカフェテリアを出た。

校門まで来ると女子2人は、迎えの車で帰って行った。帰り際、美

咲桜の家に誘われたが 近いうちに行く と告げると 絶対来てね  
っ！ と言いつつ残し帰って行った。

駐車場を見に行くと、母さんのフェアレディは停まって無かった。

航に 乗って行く？ と言われて、航の家のリムジンで家まで送っ  
てもらった。

【正義】

「ありがとな…お陰で歩かないで済んだ」

家の前でリムジンから降りて、頭を下げた。

【航】

「別にいいよ。確かに家とは反対方向だけどさ、俺が送りたいから  
送った…それだけだよ」

【正義】

「わかった…じゃあ、また明日な」

【航】

「うん。明日の朝に電話するから、じゃあね」

そう言い残しリムジンは走り去って行った。それから踵を返して家  
に入った。

玄関に父さんの靴があったので、珍しいなと思いつつも靴を脱ぎ  
捨てリビングに向かった。



【正義】

「ただいま。父さん…………と母さん」

2人はソファアに座って、テレビに繋いだビデオカメラの映像（入学式）を観ていた。

【明斗】

「お帰り。寝ちや駄目だろ正義：折角母さんが撮ってくれてたのに」

七瀬明斗 37歳 B型 178cm 長身で引き締まった体型。黒髪の短髪でシャープな顔つき。七瀬流護身術の師範。現在は特殊警備を派遣するSGSスペシャル・ガードイアン・サポートの社長。正義は明斗に鍛えられて、現在は正義の方が強い。基本的には優しいが『家族』を傷付ける奴を絶対に許さない。

【英理朱】

「私はいいでなの？」

【正義】

「だって何も言わずに帰ったでしょ。それに父さんっ！…今度じっくり組手でもしようね？…じっくりとね」

【明斗】

「正義：なんでそんな恐ろしい顔をしてるんだ？俺が何かした…」（滝汗）「」

【正義】

「心当たりがあるみたいだねえ…今週末にでも、会社の道場にお邪

魔するから……逃げたら……わかってるよねっ!？」

父さんは青ざめて母さんに抱き着いてガタガタ震えていた。

【英理朱】

「まー君。あんまり明斗さん虐めちゃ駄目よ?……先に帰ったのは謝るから、ゴメンね」

2人をいじるのも飽きたので、部屋に戻る事を母さんに告げて自室に戻った。

制服を脱いでクローゼットにしまい、黒のスウェットを着て携帯を枕元に置きベッドに倒れ込んだ。

今日一日の出来事を思い出していると、急激な眠気に襲われて其処で意識が途絶えた

正義が自室に戻った後のリビングでは。

【明斗】

「育て方を何処で間違えたかなあ？」

【英理朱】

「まー君は格好良い・優しい・強い・三拍子揃ってるから間違っていないんじゃない？」

噛み合わない会話が続いていた。

## 6 4月第1週【鳴響学園に行こう!】（後書き）

入学式長つ…と思った読書の方、スミマセン。地域説明や学校説明で一頁使いきる位気合い入れて書いてます。拙い解説文ですが、世界観を想像してもらえれば嬉しいですね。此処から彼処が近いとか思いながら読んでもらえたら幸せです。

恐らく来週になると思いますが 7でお会いしましょう。

7 4月第2週【三年という月日】（前書き）

7できました。割と直ぐに書き上げたのですが……誤字だらけ  
でしたので修正を繰り返してました（笑）。それでは 7お楽しみ  
下さい。

## 7 4月第2週【三年という月日】

入学してから早くも1週間が過ぎた。中学の時は2人（航と川上さん）しか友達と呼べる人物は居なかったが、鳴響に来て更に2人も増えて4人になった（航・恋華・芽衣さん・美咲桜）

なかでも一番印象深いのは、3年振りに美咲桜と再会できたことだ。お互いに連絡を絶つていて、受験先が同じなんて…あの時、美咲桜は『こつちの高校を受ける』としか言つて無かつたのにな。

それでも約束通り、宮園から藍ヶ丘に帰つて来てくれて本当に嬉しかった。外見は綺麗になつていたけど、中身は変わつてない様だったので安心した（正義が知らないだけで『姫モード』によつて、かなりの数の男子が心に大きな傷を負つた）因みに犠牲者の数は30人を超えたとか（恋華調べ）

ではその一部始終をご覧下さい。

PLAYBACK

恋華SIDE

金曜日の5・6時限目にある選択授業が終わり、アタシは廊下を歩き教室に戻っていた。

### 【恋華】

「油絵も面白いじゃん…思ったより簡単に描けたしね」桐原さんっ

！」「……………あらっ。」

階段の下から男子の声が聞こえてきた。よりによって美咲桜に声掛けるし…CG回収できそうだから、行くしかないっしょ。

階段から下を覗き込むと、中タイケメンの2年生男子が美咲桜と向き合う様に立っていた。

【男子】

「本当にお美しい、僕らは出会うべくして出会った…そう！これは運命！…僕と付き合えば君はもっと輝ける！…さあこの手を「虫が嫌いですねえ！」……………へ？」

あっちゃ。また犠牲者が増えた…ご愁傷様。アタシでもアレは止められないしね。それにあの台詞、王子様かつての……マー君なら似合いそうだけどね。

【美咲桜】

「虫が嫌いと言ったのですが、聴こえませんでしたか？貴方の事ですよ？その頭の悪そうな顔…鏡で一度、自分自身をご覧になった方がいいと思いますよ？…それに貴方と居ると不愉快ですっ！消えて下さいっ！そうですか、消えないんですか？じゃあ私が消えてあげます！」

凄いい勢いで畳み掛けて、美咲桜は去って行った。残された男子は、口から白い煙の様なものが出ていた。

とりあえず男子は無視して美咲桜の後を追った。

【恋華】

「相変わらずモテるねえ〜…今日は何人目？」

美咲桜は腕を組み、首を傾けてう〜んと唸ってから。

【美咲桜】

「…5人目かなあ」

【恋華】

「昨日迄に27人だから、32人目かあ…犠牲者はまだ増えそうだねえ〜？」

【美咲桜】

「犠牲者って…私は断ってるだけじゃない？」

無自覚で彼処まで毒舌になるとは…本当に恐ろしい。

【美咲桜】

「授業も終わったし、早くカフェテリアに行かない？」

【恋華】

「マー君に逢うため？」

【美咲桜】

「うん。クラスが違うから話し足りないの…昼休み一緒にご飯食べてるけどね」

からかうつもりだったけど、こんな寂しそうな顔されたら何も言えないよ…よし！早くカフェテリアに行きますか！



【恋華】

「マー君は選択サボってるから…もう居ると思うよ！」

アタシはそう言って美咲桜の手を握り、教室に向けて走り出した。

恋華SIDE

END

あとは美咲桜の家に行って父親のかずき一樹さんと母親のみさき美咲さんに美咲桜とのツーショット写真を撮られたり、買い物に連れ回されたりした。夕飯をご馳走になり、美咲桜が風呂に入ったのを見計らって久しぶりに弾いてくれない？ と美咲さんに頼まれた。ピアノに触ると埃が積もっていたので、ハンカチでサツと拭き取った。最近では弾いてなかったショパンの黒鍵のエチュードを弾いた。

演奏が終わり2人も喜んでくれたが、俺はピアノに埃が積もっていた事が気になっていた。埃の量から考えても、2年近くは弾いてないのは間違いない。弾いてない事を確信したので2人に理由を聞いたが 解らない、中学生になって突然弾かなくなってしまったの一点張りだった。その日は問題の時期が特定できただけでも収穫だった。

家に帰ってから美咲桜の事を考えていて、殆ど眠れずに朝起きると9時半だった。急いで準備を済ませリビングに入ると、誰も居なかった。母さんのバカー と叫びつつ、テーブルに置かれた弁当を鞆に入れて家を出た。車庫に行き自転車に跨がると、学園へと続く傾斜角35度を誇る坂・通称『地獄の壁』に戦いを挑み20分程かけて勝利した。しかし教室で2時限目を受けて、授業が終わると

同時に放送で『くおらあー！正義いー！オレの部屋（風紀委員教室）まで来いやあー！』芽衣さんに呼び出されて昼休みまで正座  
&芽衣さんの愛（説教）を喰らった。

日曜日に父さんの会社に行った。昼休みに出先から戻って来た父さんを、引き摺って道場に連れて行き組手（制裁）を行なった。

今週に続く

今週は特に目立った事も無く、今は4月第2週目の金曜日の朝。

七瀬家 リビング

登校の準備を終えてソファアに座り、テレビでニュースを観ながら航が迎えに来るのを待っていた。

ニュースに飽きて視線を移すと、対面のソファアに座っている母さんはパーティー用衣装のカタログを眺めていた。

【英理朱】

「これなんてなかなか……こっちも棄てがたい……これも良いし」

カタログにペンで印をつけながら唸っていた。着るのは俺なんだし自分で選ぶ…事は目の前の人によって先程阻止された。

これは来週の水曜日に学園で行われる『学園全体社交会』で俺が着る衣装だ。

【正義】

「無理して買わなくても…ポール・スミスのスーツがあるでしょ、コンクール用のが」

【英理朱】

「アレも棄てがたいんだけど…このカタログに、もっと似合いそうなのが沢山あるからねえ」

【正義】

「わかったよ。母さんに任せる…けどっ！あんまり高いのだったら返品するからね」

あのポール・スミスも20万ちょっとするし…母さんは俺の服や衣装になると見境が無くなるからなあ。

【英理朱】

「わかってるわ。でもね、アレもそろそろ新調しようと思ってたの…だから丁度良い「ピンポン」……かなって」

航が来たみたいだな。話も一区切りしたし待たせるのも悪い、行かないとな。

【正義】

「じゃあ衣装は任せるよ…航待たせるのも悪いし、いってきます」

横に置いた鞆を持ち、ソファーから立ち上がってリビングを出た。

靴を履き終え玄関で身だしなみをチェックして家を出た。

【航】

「遅かったねえ…何かあったの？」

リモジンの窓から顔を出して聞いてきた。目の前まで行ってその顔を車内に押し込み、ドアを開けて隣に座った。

ドアを閉めると同時に学園に向けて、音も発てずに走り出した。

【航】

「なにするのさっ！聞いただけでこの扱いは酷くない？」

【正義】

「細かい事を…男らしく無いんじゃないか？」

【航】

「うっ…そつだよね…男らしく無いよね。うん。もう気にしてないよ？」

本当に扱いやすい奴だ…そろそろ勘弁してやるかな。

【正義】

「来週の学園全体社交会、あれの為に着る衣装を選んでたんだ…  
母さんが」

【航】

「英理朱さんが？…またいつものパターン？」

そう。俺の服は必ず母さんが選ぶんだ。買いに行く時も必ず後からついてくる……そう…必ず（ストーカー？）捕まらない事を祈るばかりだ。

【正義】

「ああ…カタログ観てたら取り上げられた」

【航】

「いいんじゃない？…英理朱さんセンス良いし。それに買いに行ったら……ねえ？」

【正義】

「選択肢は無い…と」

【航】

「いや、多分『母さんに任せる』が3つあるんだよ」

【正義】

「……………お前自己紹介でタイピングが特技とか言ってたけど、ギャルゲーとかやってんじゃないの？」

【航】

「やってるよ？…シナリオとか良くできたの多いしね」

コイツ言い切りやがった。すっかり男らしくなりやがって…ヤベ、ちよっと泣きそうだ。

【航】

「マサ君、どうしたのさ？急に黙って」

こんな気遣いまで…コイツも成長してるんだなあ。…今度からもっといじり倒そう。うん！そうしよう。

【正義】

「すっかり男らしくなって…義兄さんは嬉しいよ」

【航】

「いつ俺の兄になったのっ！それも義兄って…ちよっとリアルなのがなんかイヤだっ！」

【正義】

「そうなんだ…残念だ、君には失望…やっばいいや」

【航】

「裏設定で実は…とか期待してたでしょ。絶対！」

【正義】

「そんな訳……………チツ……………あるわけないだろ？」

【航】

「今、絶対に舌打ちしたよね！…チツ…って鳴ってたよね」

あれだけ音を抑えたのに良く聴こえたな…まあいいや。ギャルゲーツていう、対恋華用の弱点もGETしたしな。

【正義】

「わかったわかった、俺が悪かったな…調子に乗りすぎた。ゴメンな」

【航】

「わかってくれれば良いよ」

『女王様モードの発動ワード』として『ギャルゲー』を手に入れた。

やっぱり航をいじるのは楽しいなあ。とか考えているうちに学園についでいた。

ガラーン ガラーン ガラ

終了を告げる鐘が鳴り、4時限目が終わった。

航が自分の机を反転させて俺の机に繋げてきた。それを合図にしてお互いに弁当をとりだした。それを確認した恋華が航の横から机を繋いだ。少し遅れてD組の美咲桜が教室に入って来て、俺の隣の机に座り横から机を繋げた。(俺の隣の娘は、いつもカフェテリアに持って行って食べる為空いている)これがいつも昼食を摂る時のポジションだ。

【恋華】

「いただきます」

いつもの号令で皆食べ始める。今日は何も無ければ良いなあ、と思いつつながら弁当箱を開くと……ご飯の上に海苔で描かれた『まー君LOVE』の文字が凄い存在感を放っていた。

【正義】

「……………ハア」

【恋華】

「今日はなんて…LOVEかぁ。ファイトだと思ったのになぁ」

【航】

「英理朱さんも頑張るよね。ローマ字やカタカナまで自由自在、見ていると和むというか」



【美咲桜】

「本当に。英理朱さんて若いよねえ。ただ少し行き過ぎな気もするけど…ヒ口君。元気出してね？」

ありがとなあ美咲桜、お前だけだフォローしてくれるの…慣れるしかないんだろうなあ。美味しいから文句なんて言えねえしな。いつまでも考えてないで食べよう。

【正義】

「ありがとう。美咲桜…わかってくれて嬉しいよ、いただきます」

【美咲桜】

「いえいえ。はいお茶」

わざわざ自分の水筒からお茶まで注いでくれるし。いい嫁さんになるんだろうなあ。

【正義】

「ありがとう」

お茶を受け取ると恋華がニヤニヤしながら此方を観ていた。

【恋華】

「なんで付き合ってるアタシ達より、カップルっぽく見えるんだろうねえ〜？」

【航】

「うんうん。長年連れ添った夫婦みたいだよねえ？」

【美咲桜】

「~~~~~」

美咲桜はボンツと音を発てて、耳まで真っ赤になってしまった。

やれやれ…いつものことながら美咲桜は慣れないなあ。まあそこが可愛いんだけど…2人共悪乗りしすぎだ。

【正義】

「航君？恋華さん？…あんまり美咲桜を虐めると…2人の恥ずかしい事言っちゃうよ？」

【航】

「恥ずかしい事って、なにさ！？」

えらく強気で来たなあ…今朝の事もう忘れたのか？幸せな奴だな。そろそろ現実の厳しさを教えてあげよう…コイツの為に。

航を手招きして『発動ワード』を耳元で囁いた。

【航】

「……………ゴメンなさい」

【恋華】

「なっ…アタシの航（犬）が、マー君っ！航（犬）に何を言ったのっ！」

【正義】

「別に何も…それより恋華は美咲桜に謝らないのかなあ？アレ…言っちゃうよっ？」

【恋華】

「あつ…あれってなによ!？」

強情な娘だ…アレは航も知らないはず。恋華も同じ様に手招きして呼び寄せ、耳元で『あの時、公園で泣きじゃくってたよなあ?』と囁いた。

【恋華】

「……………ゴメンね。美咲桜」

【航】

「うそっ!…恋華が従った……………俺でも無理なのに」

【正義】

「美咲桜にも教えてあげようかなあ?」

【航・恋華】

「それだけは勘弁してっ!」

【美咲桜】

「プツ…2人とも同じ事言ってる…らぶらぶだねえ?」

【航・恋華】

「……………っ!」

おお…美咲桜の逆襲だ。良い傾向なのかな?2人共顔真っ赤だし…これで少しは懲りたかな?

【美咲桜】

「2人共顔が赤いよ。どうしたのかなあ?」

【正義】

「もう良いだろう？許してやれ…な？」

言いながら美咲桜の頭をポンポンと撫でてやった。

【美咲桜】

「む〜〜〜〜〜わかった」

【正義】

「いい子だ」

笑顔を向けてやると、頬を赤く染めた。

【正義】

「ほらほら、3人共メシ食わないと選択始まるぞ？」

時計を見ると1時5分つまり後5分になっていたので皆、慌てて残りを腹に納めた。

ガラーン ガラーン ガラーン

5限目開始の鐘が鳴り、皆自分の選択授業の行われる教室に向かった。

【恋華】

「マー君、今日も寄って帰るんだよね？」

【正義】

「カフェテリアだろ？今から行くつもりだけど？航、悪いけど終わったら鞆頼むな。戻って来るの面倒くさいから」

【航】

「サボるのは良いけど…帰りのHRは出た方が良いと思うよ？…ハア…終わったら持ってくよ」

2人とも油彩画なので、並んで教室から出ていった。

選択サボれるのは有難いけど…鞆取りに来るの面倒くさいしなあ。持って行ったら帰ったと思われるし、とりあえず行くとするか。

椅子から立ち上がり、人気の無い廊下を歩いてカフェテリアに向かった。

【ウェイトレス】

「いらっしやいませ、お一人様でしょうか？」

【正義】

「はい」

【ウェイトレス】

「では此方へどうぞ」

授業中にも関わらず、カウンター席に案内されると先客が居た。

【正義】

「芽衣さん…どうしたんですか？」

芽衣さんは端の席に座って悲しそうな顔をしていた。

【芽衣】

「…正義じゃねーか！お前、サボりか？」

無理矢理作った笑顔は引きつっていた。何があったかは知らないが…悟られたく無いみたいだな。

【正義】

「ええ…それはお互い様でしょう？」

【芽衣】

「ハハッ…違うない」

漸く本来の笑顔になったな…話してくれないのかな？俺じゃ力になれないのかな？

【正義】

「芽衣さんって、カフェテリアに余り来ないんですか？」

【芽衣】

「ああコーヒーは飲むけど、甘いモンは苦手なんだ」

【正義】

「へえ〜…芽衣さんにも苦手な物があったんですね？」

【芽衣】

「お前：オレを何だと思ってる？…オレだって苦手なモン位あるよ」

【正義】

「冗談ですよ。……………すみません、コーヒーとティラミスお願いします」

【ウエイトレス】

「畏まりました」

なにか頼まないと悪いので、とりあえず注文を取った。

【正義】

「芽衣さんも何か飲みませんか。奢りますよ？」

【芽衣】

「ありがと……………悪いな……………じゃあコーヒー良いか？」

【正義】

「いえ。芽衣さんにはいつもお世話になってますから……………すみません、コーヒーもう一つお願いします」

ケーキを持って来たウエイトレスに、ついでにコーヒーを頼んだ。

【芽衣】

「正義はよく来るのか？」

【正義】

「ええ…毎日来てますよ。連れが3人居ますけど」

【芽衣】

「そっか…オレは来週の事を考えてたんだ」

【正義】

「来週ですか？確か学園全体社交会がありますよね？」

【芽衣】

「ああ…風紀取締りでウチから5人出さないといけないんだが…オシ含めて4人しか決まってないんだ」

それで悩んでいたのかな？いや、何か違和感があるな…違う気がする。この話が終わればハッキリするか。

【正義】

「社交会に出るから、取締りの人数が集まらないんですか？」

【芽衣】

「そうなんだよ…皆出るって聞かねえんだ」

そこまで言うと芽衣さんはコーヒを飲み干し、カップをカウンタ―に叩きつけた。

【正義】

「その社交界って、出たくなる様なメリットがあるんですか？」

【芽衣】

「彼氏彼女をつくりたい奴と、親に言われて出る奴の2パターンだ



な

【正義】

「前者は解りますけど…何で親が出てくるんですか？」

【芽衣】

「正義の家はたしか…親父さんが社長だったよな？」

【正義】

「はい。まだ小さな会社ですが…それが何か？」

【芽衣】

「ウチはかなりの企業だろ？例えば、オレと正義が付き合うとする。オレのオヤジに、正義の親父さんの会社を紹介するとどうなる？…企業提携を結んだとしたら？」

なるほどねえ…良くできたシステムだな。恐らく学園にも、リベイトが入る筈だ。よくこんなもの考えついたものだ。

【正義】

「凄いシステムですね。色んな面でかなりの利益が見込める…でしょ？」

【芽衣】

「ああ…お前もリベイトに気付いたか。だからこの学園は生徒数の割に、設備が充実してるんだよ」

【正義】

「確かに…寄付という形でなら罪になりませんかからね」

【芽衣】

「だからこそ、親は必死なんだよ…こればかりは強制して出ろって言えねえしな」

確かに…親子関係に亀裂が入り兼ねない、3人集めるのも大変だったろうな。良しっ！あの時の恩を返そう。

【正義】

「それって風紀委員以外がやったら、マズイですかね？」

【芽衣】

「どうゆう事だ？…オレが許可すれば可能だけど」

【正義】

「じゃあ許可して下さい…俺がやります」

【芽衣】

「…本当か？本当に良いのか？」

【正義】

「はいっ！男に二言は無いです」

【芽衣】

「ありがとう…本当に助かった」

そう言って立ち上がり、深く頭を下げてきた。ケジメ…か、礼には及ばないんだけどな。

【正義】

「芽衣さん、頭を上げてください。いつもお世話になっている…俺

からの気持ちです。…少ないですけどね。

【芽衣】

「いや、お釣りが返せなくて悪い位だ…本当にありがとう」

頭を上げてくれたのでホツとした。良かった…少しでも返せて。

【正義】

「それで具体的には、何をすれば良いんですか？」

そこで芽衣さんは椅子に座り直して、コーヒーをもう一杯頼んだ。

【芽衣】

「頭髮や持ち物検査と…警備だな。正義なら強いし問題ないな」

【正義】

「まあ学園の生徒相手なら、負ける気はしません」

【芽衣】

「ハハッ…頼りにしてるぜ？」

【正義】

「ええ…やるからには妥協はしませんよ」

内容は解った。しかし、あんな顔をしていた理由は解らずじまい…か。何か裏があるのかな…でも話してくれそうもないしな。もう少しだけ詰めとくか。

【正義】

「時間は何時間なんですか？」

【芽衣】

「ああ…当日は18時開始で21時半終了だ。校門には警備員が立つ。オレ達の仕事は取締りの後、体育館の内外を巡回する。因みにオレと正義は外回りを考えてる、アイツ等は頼りにならないしな。中の連中は、本人の意思を無視して相手を無理矢理誘う奴を退場させる。……これが主な仕事だ。」

主な…ねえ。外回りに俺と芽衣さん…そこまで警戒する理由でもあるのか？

【正義】

「わかりました。けど、一つだけ質問良いですか？」

【芽衣】

「……………当日に答えるよ。…また連絡する、コーヒーご馳走様」

そう言っつて椅子から立ち上がり、店から出ていった。

去り際に見た、彼女の真剣な顔が暫く頭から離れなかった。

ガラーン ガラーン ガラーン ガ

芽衣さんが去ってから、暫くその場から動けなかった……気が付けば6時限目終了の鐘が鳴っていた。

何故今日話してくれなかったのか……何故話を打ち切ったのか……頭の中で堂々巡りが続いていた。

【美咲桜】

「ヒロ君？……どうしたの？……なにかあったの？」

もうそんな時間か……時計を見ると3時10分になっていた。

美咲桜の顔を見ると、泣きそうな顔をしていた……俺そんなに酷い顔してるのかな？……心配かけない様に笑顔を向けて、口を開いた。

【正義】

「もう終わったんだ？……じゃあ4人掛けの席に移動しようか？」

美咲桜の後ろに居る航と恋華にも聞こえる様に言っつて、ウエイトレスに席を移る事を告げた。どうぞと行っつて案内するため先を歩いて行っつた。それから伝票を持って、その場から動かない3人を残してウエイトレスの後を追っつた。

案内された席で暫く待って入ると、3人が小走りで行って来た。

【美咲桜】

「先に行っちゃうなんて酷いよヒロ君っ！」

美咲桜は両手を腰に当てて、上半身を前に倒し頬を膨らませて怒っていた。…プツ…全然恐くない、寧ろ可愛いし。

【航】

「はい。鞆……………松原先生呆れてたよ？」

【恋華】

「うん。…『七瀬はまた居ないのか』ってアイツは『って言うってたよ』」

【正義】

「とりあえず3人共座れよ。恋華は物真似の才能……………皆無だな」

3人とも座ったが、美咲桜はまだ怒ったままだった。

【恋華】

「凄い溜めてから言わないでよ。きつついな」

凹んだ恋華を航がフォローするという珍しい光景だった。とりあえず2人は無視して、美咲桜の機嫌をとる事にした。

【正義】

「美咲桜：ゴメンな？心配してくれたんだよな？…ありがとう。嬉しかった」

微笑みかけながら、髪を鋤く様に頭を撫でてやった。暫く続けてやると、目を細めて気持ち良さそうな顔をした。

【航】

「そういえば…マサ君の衣装はどんなのに決まったかなあ？」

美咲桜の顔を眺めていると航の無情な言葉によって、思い出したくない事を思い出してしまった。

【正義】

「普通なのが良いなあ」

【恋華】

「英理朱さん…白とか好きだから、タクシーとかじゃない？」

【美咲桜】

「ヒロ君にタクシード……………良いっ！」

【恋華】

「あっちゃ〜美咲桜が自分の世界に……………当分戻ってこないな、こりゃ」

【航】

「うん。腕を祈る様に組んでるし、ほぼ真上を向いてるしね。…10分コースじゃない？」

美咲桜が自分の世界に旅立つと、何をしても反応しない。動作によつて戻ってくる時間が推測できるのが特徴だ。

『レベル1・腕を祈る様に組む』約5分

『レベル2・更に顔を上に向ける（ほぼ真上）』約10分

『レベル3・更に（うふっ…うふふっ）の様な声を漏らす』約30分（声も続く）

【正義】

「恋華…気を付けてくれ。レベル3になったら……わかるだろ」

【恋華】

「うん。恥ずかしくて…ねえ。今度から気を付けるよ」

【航】

「俺まだレベル3見たこと無いんだけど…凄いの？」

【恋華】

「とりあえず、人が多い所では勘弁して欲しいなあ」

【正義】

「ああ…それは俺も同感」

【航】

「ちよつと俺にも教えてよ？」

【恋華】



「いずれわかるって。アタシもドレス選らばないとなあ」

【正義】

「航はもう決めてるのか？」

【航】

「うん。いつも大体4着を着回してるから」

やっぱり住む世界が違うなあ。パーティーとか結構頻繁に出るっていうし…何か疎外感を感じるなあ。羨ましい訳じゃないけど…なんだかなあ。

【恋華】

「…急に黙っちゃってどうしたの、マー君」

【正義】

「いや…2人はパーティーとか慣れてそうだって」

【航】

「確かに結構出てるけど、あんまり良いモンじゃないよ？…媚を売る人間ばっかで」

【恋華】

「うん。汚い感情っていうか…気分が悪くなる…そんな場所だよ？」

それは想像通りなんだけど…解らないだろうな。

【正義】

「上手く言えないけど…大変だな」

【航】

「もう慣れたよ。それに同年代や年下の子は普通に話すしね」

【恋華】

「たまに、子供を使って近寄って来る親もいるけどね」

さつき芽衣さんと話した内容と同じだな…そんな親ばかりなのかなあ。子供を道具みたいに……ムカつくっ！

【恋華】

「マー君？怒ってるの？…怖い顔してるよ？」

【正義】

「……………顔に出た？」

【恋華】

「うん。……………眉間に皺を寄せて、眼が鋭くなってるよ？」

ハア…余計な心配かけちゃったな。今度から顔に出さない様に気をつけよう。

【正義】

「ハハッ…すまない、考え事してて。それより、学園全体社交会って何をするんだ？」

【航】

「ただの立食パーティーだと思えば良いよ……気楽にさ」

【恋華】

「うん。アタシ達はいつも通りに話してれば問題ないよっ！」

あっちゃ。風紀取締りの事、言いづらくなっちゃったなあ。……  
最初に言わなかった俺が悪いしな。

【正義】

「今更悪いけどさあ…社交会出られないから…俺」

【航】

「なんでっ!?理由は?」

【正義】

「芽衣さんが、当日の風紀取締りの人員集めてて…集まらないみた  
いだったから…ゴメン」

【航】

「ハア、良いよ…それがマサ君だからね」

【恋華】

「うん。困ってるのが知り合いなら助けないとねっ！」

2人共ありがとな…今度必ず埋め合わせするから。

【美咲桜】

「私は納得してないよっ！」

『社交会に出られない』に反応したのか10分経って戻ってきたの  
かわからないが、声を震わせて叫ぶ様に言ってきた。…周囲の生徒  
は皆此方を観ていた。

このままじゃマズいな…仕方ない。財布を航に渡して 精算頼む、10分経ったら教室に来てくれ と言ってから美咲桜の手を掴み、引き摺る様にカフェテリアを出た。

美咲桜を引き摺ったまま教室に入って扉を閉め、窓際の席に座らせた。

横の席に座り、向きを変えて美咲桜と顔を見合わせた。

【美咲桜】

「……………」

顔を伏せて黙ったまま…このままでは埒があかないので口を開いた。

【正義】

「美咲桜：言いたいことがあるんだろう？…全部聞くから、話してくれ…な？」

優しく諭す様に語りかけた。美咲桜は顔を上げてくれたが、その顔は涙でボロボロだった。

【美咲桜】

「ヒロ君はっ…楽しみっ…じゃ……なかったの？……わた…しっ…  
…3年間…っ……逢えなっ……かった分…まで…一緒にっ……居た  
いのにい！！！」

涙声で途切れ途切れになりながらも、想いをぶつけてきた。「3年間逢えなかった分まで一緒に居たい」俺も同じ気持ちなんだけどな。

【正義】

「俺も同じ気持ちだよ…できるだけ、美咲桜と一緒に居たい。…でも初めて逢った美咲桜が俺に『友達』を与えてくれた様に、俺も困ってる『友達』の為に『何か』をしてやりたいんだ。…全部俺のエゴだけど……ゴメンな？」

俺の想いをぶつけると、美咲桜は凄じ勢いで抱き着いてきた。支えきれずに、床に押し倒される形になった。

【美咲桜】

「ゴメンっ…なさいっ…グスッ…でも…っ」

胸に顔を擦り付けて、しゃくりあげながら。

【美咲桜】

「寂しいっ…よ！……昔はっ……っ……私だけ…の……ヒロ君っ…  
だったのにい！」

確かに…航・恋華・芽衣さんが増えた…均等に接しても当時の『四分の一』にしかならない。もっと真剣に向き合わないと…気付いてやれなかったしな。

【正義】

「コレからは、もっと一緒に居るから…もっと話すから…もっと真剣に向き合うから…ゴメンな？」

【美咲桜】

「うあああーっあーっわあーっ」

諭す様に言ってやると、声をあげて泣き出した。心の中で『いつも一緒だから』と繰り返し、背中に腕を廻して優しく抱き締めた。

5分程して美咲桜は泣き止み、俺の上から降りて立ち上がった。

美咲桜に手を借りて立ち上がり、顔が向き合う様に立った。

【正義】

「本当にゴメンな？…勝手に決めて。でも必ず埋め合わせするから…今週…来週の週末、2人で出掛けよう？荷物持ちでも何でも1日付き合っから…な？」

【美咲桜】

「本当に？…絶対…絶対だよっ！？」

凄い勢いで詰め寄って来たのを手で征しつつ、微笑みながら力強く頷いた」

【美咲桜】

「約束…指切り」

【正義】

「ああ…約束だ」

そう言っただけで差し出してきた左手の小指に小指を絡めて、顔を見合わせ微笑み合った。

壁に掛かった時計を見ると、カフェテリアを出てから20分近く経っていた。

遅いなあと思いながら教室の扉を開けると、2人が屈んだ体制で扉に貼り付いていた。

【正義】

「……………何してる？」

【航・恋華】

「……………ゴメンなさい」

2人共その場で膝をつき土下座して謝ってきた。ちょうどその時、美咲桜が俺の後ろから顔を出し土下座する2人に視線を向けた。

【美咲桜】

「プツ…アハハハハッ」

美咲桜の笑い声が、夕陽が差し込み茜色に染まった廊下に響き渡った。

あの後校門でいつも通り女子2人と別れ、鳴海家のリムジンで帰宅した。

【英理朱】

「ねえ、まー君。コレとコレどっちが良い？」

英理朱は手で2着を持ち、タキシードと貴族が着る様な装飾だらけ



の服を笑顔で此方に向けてきた。

【正義】

「.....チエン  
ジで」

因みに英理朱の足元には、数十着のスーツが散乱していた。

7 4月第2週【三年という月日】（後書き）

今回は特に書くことが無い…新キャラをもう少し先で出す予定です。  
次回は学園全体社交会 + ……それでは ♪でお会いしましょう。

## 8 4月第3週【進む覚悟、少女の楔】（前書き）

遅くなりましたが 8 出来ました。ページが消えたり、ループしてたり…エラーになったり本当に苦労しました。本当は昨日アップする予定だったのに…すみません愚痴って。それでは 8 お楽しみ下さいませ。

## 8 4月第3週【進む覚悟、少女の楔】

今日の授業も終わり、生徒は社交会の準備の為に一時帰宅した。

俺は予め持つて来ていたスーツ（ポール・スミス）に着替え、風紀委員教室に向かって廊下を歩いていった。

放課後の校舎には全く人氣が無く、少し不気味に感じられた。

……そんな事を考えていると、目的地に着いていた。コンコン……2回ノックして声を掛けた。

【正義】

「……………芽衣さん……正義です」

昼休みに『放課後部屋に来てくれ』と言った時の真剣な表情を思い出して、大きな声が出なかった。

室内でガタツという音がして、足音が此方に近付いてきた。すぐ近くで足音が止まり、扉が乱暴に開かれた。

彼女の顔は険しかった。言葉も発さずに顎で室内を差し、中に入ると扉が閉まり鍵が掛けられた

奥に置かれたソファアに座ると、彼女はその正面に腰を降ろした。

声を掛けようとした彼女の顔は険しいままで、喉まで出かけた言葉を飲み込んだ。

場の空気に耐えられなくなり床に視線を落とす、それから暫く時間が経った。

痺れを切らし顔を上げると、先程までの険しい顔は消え青白くなっていた。両腕を胸の前で交差させて肩を抱き、身体を震わせていた。

その様子を見ていられなくなり、視線を落として考えた。やはり去年なにかあったのだろうか。彼女は間違いなく『何か』に怯えている。他の人は『何か』を知らない。

……カフェテリアで取締りに参加すると決めてから、去り際に見せた芽衣さん真剣な表情が気になっていた。

警戒の仕方から考えて、不審者が入ったのではないかと推測した。翌日から2年と3年の先輩に、去年の社交会は何も無かったかを聞いた。…結局200人近くに聞いて回ったが、何も得られなかった。

今日まで他の可能性を考えたが、時間が経つばかりで何も思いつかなかった。

思考を中断して正面に視線を向けると、ソファ―に居た筈の彼女が居ない。視線を少し上げ更に奥を見ると、此方に背を向け窓の外を眺めていた。

【芽衣】

「去年……オレは殺されそうになった」

殺されかけただって！……じゃあ何故騒ぎになつてない！？……誰も知らない？……矛盾だらけで訳が解らない……考えても仕方無い、聴くのに集中しよう。

【芽衣】

「去年もオレは3年の先輩と外回りだった。その人はオレが憧れてる人で、美月響子先輩みつききょうこって言ってな。ウチの道場の先輩だった。オレ達は常に真逆の位置を保って、体育館の外周を歩いていた。8時半を過ぎた頃。響子先輩から電話があって、グラウンドに誰か居る、私が見てくるから芽衣は歩く速度をあげて、って言って電話が切られたんだ。それから10分位経つても連絡が無いから電話したら。電源が切られてたんだ。それから5分位して。いきなり後ろから頭を撲られたんだ。

オレは痛みを堪えて振り返った。フルフェイスのメットを被って、全身黒のライダースーツを着た奴だった。

ソイツはいきなりポケットからナイフを出して、突っ込んで来たんだ。隙の無い動きだった。声を出す余裕も無かったよ。相手の攻撃をかわすのが精一杯で、後ろから近付いて来るもう一人に気付かなかったんだ。……もう一人に後ろから背中を蹴られて、前から来る奴の持つてるナイフに突っ込んだ。奴が下段に構えてたナイフが……」

そこまで言っただけで彼女は此方に振り返った。スカートの中に両手を入れ、下に履いているスパッツを引き摺り降ろした。

スカートの裾を掴んで軽く持ち上げると、右の太股に裂傷が残っていた。

【芽衣】

「刺した奴を両手で突き飛ばしたら、2人共別々の方向に走って逃げたんだ。……オレは錯乱してて。止血も忘れて動けなかった。その後、緊張の糸が切れてバツタリ……。起きたら傷口が縫合されてて、オレの部屋で寝てたんだ。オヤジに聞いたら学園から電話で

学校の体育館裏で倒れて居た。周囲の割れたガラスに血が着いていたから、ふざけていて割れたのでしょうか。って言われたらしい」

【正義】

「ガラスが割れてた？…しかも血が着いてたって、全然噛み合わないじゃないですか!？」

刺されて気を失った…気が付いたら家？おかしい事だらけだ。その間が空白だし…時間は？他の生徒は？マズイな…頭痛くなってきた。

【芽衣】

「解らないって顔してるな…オレがどれだけ調べても解らないのに、解る訳ねえよ」

彼女は苦笑していた、何であんな顔できるんだろう？…殺されかけたってのに。

【芽衣】

「情報操作されてんだよ。第一発見者は校門に立ってた警備員。時間は生徒が皆帰った後の10時過ぎ。オレが居た場所もグラウンドで使う道具倉庫の裏、割れてたガラスも倉庫のだ。確かに倉庫も体育館裏だけだな」

誰かが隠蔽しようとしてるって事か…権力を持った人間がグルになってるんだろうな。アレ？そういえば。

【正義】

「そういえば美月先輩はどうなったんですか？」

【芽衣】

「響子さんはグラウンドの隅で倒れてたらしい。起きたら首がちょっと痛かったって言ってた……自分の家で」

何でこんなに空白だらけなんだ？……でも、無事で良かった。

【正義】

「美月先輩が気絶させられたのは間違いない……けど2人共どうやって家まで帰ったんです？」

【芽衣】

「オレは寝たまま担任の車で、鳴北の天瀬川総合病院で治療受けて……それから家だな。響子さんはオレが病院に向かった後に、同じ警備員が見つけて家に連絡して迎えが来たらしい」

普通は救急車呼ぶよな……それに、後でって事は10時半位か？

【正義】

「その警備員は今何処に居るんですか？」

【芽衣】

「去年の5月に辞めたよ……父親が亡くなって実家に帰ったらしい」

【正義】

「じゃあ……お手あげですね。『園田芽衣』が調べても解らなかつたなら、俺じゃ解りっこない」

オヤジさんに頼んで解らないなら……警察も一枚噛んでるだろうしな。



【芽衣】

「ああ…オレも悔しいし恐いけどよ、諦めた訳じゃねえ。いつかシツポを掴んでやる！」

そりゃそうだろう…身体に傷を付けられて、殺されかけたんだ…俺だつて許せない！

【正義】

「じゃあずつと険しい顔をしてたのは当時の記憶が甦つて……なんですか？」

【芽衣】

「ああ…夢で見ちまうんだ、最近。身体が憶えてるんだろうな……トラウマになつちまった……ハハッ」

【正義】

「芽衣さん…すみませんでした。…俺なんかが聞いて良い話じゃオレは正義なら構わない」……え？」

なんで俺なんか…何も力になれない奴になんか。…悔しくて泣きそうなのを唇を噛んで耐えた。

【芽衣】

「何も力になれないとか思ってねえか？…勘違いすんなつ！オレが話したのは、お前に背中を預けるからだ！護つて欲しいからだつ！…だから話した。お前だから…」

叱咤されちまつた。顔に出てたのかな？……確かに、俺には犯人なんて解る訳ないし…捕まえる事も出来ない…時間も戻せない。ならこれ以上傷付かない様に、同じ事が起きない様に…護つてやるっ！

【正義】

「わかりました。…必ず護って見せます」

真剣な顔で決意を告げると、彼女は顔を真っ赤にしていた。…まさか照れてる？可愛らしい人だ。

【芽衣】

「……………反則だろあの顔」

【正義】

「何か言いました？よく聞こえなかつたんですが」

【芽衣】

「なっ…何でもねえよ！」

動揺を隠すかの様にスパッツを履き直して、先程の位置に座った。

【芽衣】

「正義は無手だったな。拳サポーターは持って来てるんだろ？」

頷いてから上着のポケットから取り出し、ソファーに囲まれたテーブルの上に置いた。

【芽衣】

「正義…組手してくれっ！あっ…勿論今日じゃねえぞ？…たまにで良いから頼めないかっ！？」

襲われて負けたと思ってるんだろっな…やっと力になれた。あんな必死な顔して頼んで来るなんて…恐かつただろっな。

【正義】

「解りましたよ…俺で良ければ。じゃあ、おそらの庭に行く時連絡してください」

【芽衣】

「解った…ありがとう」

此方に頭を下げてから立ち上がり、横を通り過ぎ扉の鍵を開けた。

その姿を目で追っていると視線がぶつかった。彼女は眼を細めて口元を吊り上げ。

【芽衣】

「なんだ正義…そんなにオレの裸が見たいのか？……一緒に更衣室来るか？」

想像してみた。あの胸で…ヤバい、鼻血が出そうだ。それより早く誤解を…あのニヤニヤした顔、もう手遅れだ…なら

【正義】

「ええ…一緒に行きましょうか。1人は危ないですからねえ」

【芽衣】

「~~~~~」

全身を真っ赤に染め扉をバンツと勢い良く開き、廊下を走って行った。

外が薄暗いのに気付いて時計を見ると、5時45分だった。ソファ

ーに座り直して携帯を取り出し、美咲桜に　今日は俺の分まで楽しんで来いよ！　とメールを送った。

10分程して足音が近付いて来たので、立ち上がり廊下に向かった。廊下に出ると白いパンツスーツに着替え、右手に木刀を持った彼女が居た。全身を眺めてから顔に視線を向けると、その表情は少しだけ強ばっていた。

【芽衣】

「正義…行くぞっ！」

顔を見合わせて頷くと彼女は踵を返して歩きだした。俺はその後ろを歩きながら、拳サポーターを着けていた。

【女性徒A】

「芽衣様!…頑張ってくださいね」

【女生徒B】

「芽衣様、今年も外なのですか?」

【女生徒C】

「後で差し入れ持って来ますね」

体育館の入口に立つてからずっとこの調子だ。女子生徒が彼女に詰め寄り、口々に声を掛けていた。

【芽衣】

「ああ…楽しみにしてる。…皆は楽しんでくると良い」

嫌な顔一つせず、笑顔で一人一人にちゃんと答えていた。俺はその様子を観ながら入場者リストのチェックをしていた。

【美咲桜】

「ヒロ君、お疲れ様。はい…休憩の時にでも飲んでね」

声に反応して顔を上げた。薄いピンクのロングドレスで着飾り、右手で持ったステレスの水筒を此方に差し出していた。

【正義】

「ありがとな…後で飲ませてもらうな」

受け取った水筒を受付の机に置いて、美咲桜と向き直った。本当に綺麗な…絵画みたいだな。変な虫が付かない様に頼まない…航はまだか？

【美咲桜】

「どうしたの？…私の顔に何かついてる？」

見とれてた…って言ったたら真っ赤になるだろうし、なんて言っかな？

【美咲桜】

「本当にどうしたの？…難しい顔して」

不安そうな顔をするな…お前が原因なんだよ。ハア…考えるのが馬鹿らしくなってきた。ストレートに褒めよう…

【正義】

「綺麗だから見とれてたんだよ…美咲桜に」

【美咲桜】

「~~~~~」

ポンツと音を発てて顔が真っ赤になった。やっぱりこうなったか…いい加減に慣れないかなあ…疲れる。

【航】

「マサ君お疲れ」

声に振り返ると、航と恋華が手を繋いで立っていた。航はグレーのシックな感じのスーツ、恋華は清潔感があるライトグリーンのロン

グドレスを着ていた。

【恋華】

「マー君お疲れ様。どうしたの…コレ？」

恋華が顔を真っ赤にした美咲桜を指差しながら、怪訝な顔を向けてきた。

【正義】

「綺麗だから見とれてたんだ…どうしたの？って聞かれたから、お前に見とれてたって言ったら…」

【恋華】

「こつなつた…と。ハア…まだ慣れないんだ？」

【航】

「マサ君も…大変なんだねえ」

俺も？恋華もこんな感じになるのか？…想像出来ない。今度聞いてみよう。

【芽衣】

「正義！早く美咲桜達を入場させる。その3人で最後だ！」

芽衣さんの声で我に還ると、周囲を見渡した。3人以外は誰も居らず、芽衣さん一人だった。

固まっている美咲桜の腕を掴んで引き摺る様に体育館の中に入ると、航と恋華も小走りであつてきた。

体育館の中は別世界だった。床にはペルシャ絨毯が敷かれ、多すぎて数えきれないテーブルには所狭しと豪華な料理がならんでいた。

【正義】

「……………凄いなあ」

思わず口から溢れた。持つて帰っていいのかなあ、あの料理。母さん達にも食べさせてあげたいなあ。

【航】

「どうしたの 마사君…………成る程ねえ、テイクアウト出来るから安心して良いよ。…見繕つとくから、帰りに渡すね」

そんなに料理を凝視してたのかな。恥ずかしい。でも取り置いてくれるらしいし、母さん達喜んでくれるかな。

【正義】

「ありがとな…あと美咲桜に変な虫が付かない様に頼むわ」

【恋華】

「大丈夫だよ…『マー君以外の男に興味ない！』って言ってたから（本当は姫モードで相手にしないからなんだけどね）」

それは良かった。ん？良かったのか？…まあいいや、心配事が一つ減ったし。

【芽衣】

「正義！時間だぞ、早く来いよ」

声に反応して入口に視線を向けると、木刀を肩に担いで口元を吊り



上げた『突撃お嬢』が居た。

【正義】

「じゃあ2人共、美咲桜の事頼むな…楽しんで来いよ！」

そう言つて急いで入口に戻つた。靴箱から運動用の紐靴を取り出して革靴を脱ぎ、紐靴に履き替えて外に出た。

外に出ると彼女は屈伸運動をしていた。隣に立つと立ち上がつて顔を向けてきたので、気になっていた事を聞く事にした。

【正義】

「今回は入場者リストもあるし、中から鍵を掛けてるなら俺一人でもいいんじゃないですか？」

去年は鍵を掛けてなかったらしい…入場者も簡単にしかチェックしてなかったと言っていた。今年は大丈夫だと思うけど…なんでかな？

【芽衣】

「リベンジ。今年も来るか解らないが…だからオレが外回りになつた」

相当深刻な問題だな。リベンジか…危ないから止めてほしいんだけど、聞かないだろうな。何も無い事を祈るしかない…まああれば俺が護るつもりだが、相手が素人とは限らないしな。警戒を怠らない様に、集中しながら歩こう！

【正義】

「一緒に行きますか？それとも別々ですか？…俺としては前者の方が「別々で行く！」……解りました」

【芽衣】

「真裏に着いたら電話する。…それから歩き始める。…それと、何かあったら必ず連絡しろ。一時間経ったら、入口に集合だ！……じやあな…頼りにしてるぜ！」

そう言っただけで彼女は歩き出し、暫くしてその背中が曲がり角の先へと消えた。

心配だな…肩に力が入りすぎて。不審者と接触したら危険だ、何も無ければいいんだがな。今年も来たら間違いない…犯人は学園絡みの人間だ。これ以上は憶測の域を出ないな…それ以前に性別も解らないんだ。集中しないと。

6時過ぎでこんなに暗くなるんだな…確かに照明が無い体育館裏だと、相手の顔は見えっこない。下段に構えたナイフが太股に刺さるとすると…相手が突っ込んでくる、イコール前傾姿勢で腕が下がるよな。彼女が169cmだから、170ちょっと…男か？

□  
〵  
〵  
〵  
□

ズボンのポケットに入れた携帯が鳴り出したので、思考を中断して

携帯を取り出し通話ボタンを押した。

【芽衣】

『オレだ。今のところ異常は無い…そっちはどうだ？』

【正義】

「異常無しです…裏に着いたんですか？」

【芽衣】

『ああ。じゃあ見回りを始めてくれ』

電話が切られたのを合図に立ち上がり、気を引き締め外周を歩き出した。

あれから、異常も無く1周目を終えた。かなりの大きさなので30分近くかかってしまった。

今は2周目を歩きながら発見現場の事を考えていた。

1周歩いてみて解ったが、裏面以外は少しだけ明るい。中の照明が足元の窓から外に漏れているからだ。裏面は窓すら無いため、2メートル先は殆ど見えない。

それに、道具倉庫まで100メートルは離れていた。気を失ってから誰かが運んだんだろう…ガラスは入れ換えられた後で、どの辺に倒れていたか解らなかった。抱き上げて歩いたのか？…引き摺って？…2人か？…調べても解らないって事は、足跡も消された後だろ。うな。刺された場所も下は土だ…土を入れ換えれば、血痕も消える。翌朝に調べたとしても、10時間近く時間がある……

全ての証拠を消し去る時間は充分だ…しかし、1人で証拠を消したとしてもやることはかなりある。

流れるにはまず倉庫のガラスを割る。次に倒れていた彼女を運び、割れたガラスに血液を着け姿を隠す。警備員が彼女を見つけ担任を呼ぶ。更にグラウンドの隅で美月先輩を見つけて、誰かが家に連絡する。誰も居なくなってから現れて、土を入れ換え足跡を消した。ガラスは翌朝にでも、用務員が片付けたんだろう。

情報操作をする人間と襲った2人、証拠を消した人間…最低でも4人は居る筈だ。後日警察に連絡したとしても…証拠も残って無いし、捜査が続いても圧力が懸かればアウトだ。

犯人グループは最低4人で、かなりの権力者が居る筈だ。彼女を刺した人間はかなりの長身…こんなものか、これ以上は解らないな。行き詰まった思考を止め暫く歩いていると携帯が鳴った。

『 』

1時間絶ったのか？と思いながら、ポケットから携帯を取り出し通話ボタンを押した。

【芽衣】

『今何処だ？オレは真裏から戻ってる』

【正義】

「俺はもう少しで入口です…時間ですか？」

【芽衣】

『ああ。着いたら待っていてくれ、オレも5分あれば着く。じゃあ後でな』

通話を終えるのと最後の角を曲がるのは、ほぼ同時だった。入口に着いて扉に背を預ける様に座った。少し待っていると彼女は走ってきた。

【芽衣】

「ハア…ハア…待たせたな…悪い」

そう言った彼女は木刀を壁に立て掛け、両手を膝に付き息を切らせていた。

【正義】

「とりあえず座って下さい」

そう言うと彼女は右隣に、俺と同じ様に座った。

俺は立ち上がり携帯を取り出すと、美咲桜にメールで 受付の机の上に置いたお前の水筒を外に渡してくれ と書いて送った。

1分程で扉が開き、美咲桜が姿を現した。

【美咲桜】

「はい。持って来たよ…コーヒーが入ってるけど熱いから火傷しない様にね？」

【正義】

「ありがとう。…3人共楽しんでるか？」

水筒を受け取って皆の様子を尋ねると、美咲桜は苦笑していた。

【美咲桜】

「私と恋華は女子と話を楽しんでるよ。鳴海君は…3年の女子から揉みくちやにされてる」

気になって扉から中を覗き込んだ。航がテーブルの間を縫うように走りながら何かを叫び、その後方を20人位の女子が追いかけていた。……「ご愁傷様」

【正義】

「楽しんでる様だな…良かった。もう戻って良いよ…恋華が暇してるだろうし」

【美咲桜】

「うん。じゃあ見回り頑張ってるね？」

美咲桜は微笑むと中に戻って行った。それから芽衣さんの隣に座り水筒の蓋を開けた。外蓋と中蓋をコンクリートの地面に置き、コーヒーを注いだ。

【正義】

「どうぞ」

外蓋を持って彼女に差し出した。

【芽衣】

「ありがとうございます」

渡してから中蓋を持ち冷ましながらゆっくり口を付けた。

【芽衣】

「15分休憩したら再開するぞ」

【正義】

「解りました」

今が7時過ぎという事は、次の休憩時間は8時15分位から。襲われたのは8時50分前後だったな。今のところは問題ない、今年も来るのか？そつえば病院からは情報を得られたのか？。ダメ元で一応聞いてみるか。

【正義】

「芽衣さん…治療した病院の医師からは、情報が得られなかったんですか？」

此方を向いて呆れた様な顔をしたが、首を傾けうんと唸ってから。

【芽衣】

「まだ考えてたのか？。しょうがない奴だな。カルテを観たが、処置した時間は10時45分。発見から40分位だ。傷もガラスが刺さったと書いてあった。医師の言い分、居合わせた看護師。食い違

いは無かった。本当に手際がいい奴等だ」

確かに学園から車を飛ばせば病院まで30分位で着く。しかし刺されてから約2時間、発見後に止血しても1時間位はそのまま…あの大きな傷から考えても出血は酷い筈だよな?…血が足りないんじゃないか?

【正義】

「止血は誰がしてくれましたか?」

気になったので聞いてみると、急に彼女は怪訝な顔をした。

【芽衣】

「……警備員がオレを見つけた時、オレのハンカチが巻かれていたらしい。上着のポケットに入れてた物で…家に置いてあるよ」

じゃあ解らないって事か…刺して直ぐ誰かが止血したとすれば、殺すつもりは無かったのか?…じゃあ脅すのが目的か?…犯人グループの狙いがやっぱり解らないな。

【正義】

「すみません。気になって…俺もお手上げです。犯人グループの狙いが解らない」

【芽衣】

「オヤジ絡みだと思うけど…ウチに恨みのある会社なんて、腐る程あるだろうしな」

成る程、園田グループに恨み…か。じゃあ学園に金を渡して…汚い手口だ。代表の娘である芽衣さんに危害を加えて、間接的に脅迫し



てるのか。

【正義】

「オヤジさんは、だんまり…ですか？」

【芽衣】

「ああ。オレを心配させない為の配慮だろ…」

…園田グループの脅迫が目的なら、やっぱり今日も来る可能性は高いな。今からは彼女を護る事だけに集中しよう。

【芽衣】

「時間だ…次は正義からな」

時間になったと気付いて、中蓋に残る冷めたコーヒーを飲み干した。慌てて蓋を閉め、彼女に水筒を渡して 受付の机に置いて下さい。後、扉の施錠を中に居る委員に頼むのお願いします と言い残して外回りに向かった。

あれから1時間…異常は無かった。今は最後の休憩を終えて、外周を歩いていた。

真裏に着いて携帯を取り出し、時間を確認すると9時2分だった。

もう少しで終わるな。そんな事を考えていると、手で握ったままの携帯が鳴った。

『  
　　』

嫌な予感がして直ぐに通話ボタンを押した。

【芽衣】

「正義っ！ルートを走りながら戻れっ！そっちに逃げられた。…オレも追い掛ける、挟み撃ちにするぞ！！」

電話越しに聴こえた怒鳴り声に反応して、携帯をポケットに突っ込み直ぐ様グラウンド側に走った。

暫く走ると、此方に走って来る2つの人影が見えた。

【正義】

「止まれっ！」

走りながら叫び、スピードを上げて一気に残りの距離を詰めた。相手は5メートル程先で立ち止まった、その後方には彼女が居る様だ。

【芽衣】

「正義っ！追い込むぞ！」

【正義】

「解りました！」

体育館の壁に追い詰める様に移動しながら、慎重に距離を詰め相手の姿を確認した。黒のライダースーツを着て黒いフルフェイスのヘルメットを被っていた。

ビンゴ！でも身長は俺より少し高いな…中身が違っのかな？まあいい…捕まえれば解るしな。

次第に奴は後退り、壁際に追い詰めた。彼女の方に視線を送ると頷いた。

【芽衣】

「大人しく捕まれば危害は加えないっ！…頭に両手を乗せて壁の方を向けっ！」

彼女が投降を促したが、奴は動かない…仲間が居るかもしれない。早く捕まえないと…逃げられるっ！

【正義】

「芽衣さん…増援が来る前に捕まえましょう！」

彼女に視線を送ると首を横に振った。

【芽衣】

「オレが殺るっ！…逃がさない様な位置取り頼むっ！」

言い終わると同時に木刀を上段に構え、相手に向かって駆け出した。

俺はもう1人を警戒しつつ、奴の退路を絶ちながら移動していた。

2人に視線を向けると彼女が木刀で攻め、奴は攻撃を避けながら蹴

りで応戦していた。

それから3分程経っただろうか……彼女の動きが鈍くなってきた。恐らくスタミナ切れだろう……攻め続けてるからな、手を貸すか。

様子を見ていると彼女も同じ事を考えたのか、視線を一瞬だけ此方に向けた。

彼女は相手の蹴りをバックステップして避けると、此方に視線を向け奴に突っ込んだ。

【芽衣】

「オラアーーー!!!」

彼女が胴を狙うと同時に俺は奴に向かって走った。奴は胴への一閃を此方にバックステップして避け、勢いを利用して俺に右の裏拳を放ってきた。咄嗟に体を沈めて裏拳を避けた。その腕を掴み、捻りつつ背負い投げた。投げた瞬間靱帯の切れたブチツという鈍い音が辺りに響いた。続けてドンツという音と同時に、奴はうつ伏せの体制で地面に叩き付けられた。

駆け寄って直ぐに奴の背中を踏みつけ、投げた時掴まなかった左腕を押さえつけた。

【芽衣】

「ああ……オレだ、飯島に『野犬』を捕まえたと伝える………そうか、じゃあ直ぐに来い………グラウンド側に居る………ああ頼む」

声に反応して彼女に視線を向けると、携帯で何処かに電話していた。

暫くして通話を終わると、此方に向かって歩いて来た。

【芽衣】

「手こずらせやがって……言い訳はあるか？」

彼女は目の前で立ち止まり、押さえつけている奴に視線を向けて言い放った。

何も反応が無いのを確認してから彼女は言葉を続けた。

【芽衣】

「だんまりか？…まあいい……直ぐに喋りたくなる…覚悟しとけっ  
！」

そう言った彼女の顔は、不敵な笑みを浮かべていた。

あんな芽衣さん見たこと無い…少し恐い、あんな顔も持ってたんだ。

【正義】

「どうするんですか？…コイツ」

【芽衣】

「すぐに園田の人間が回収しに来る…それから徹夜で尋問だな」

やっぱり知らない方が幸せな事もあるな…同情はしないが、鞆帯切ったのはやり過ぎたかな？……考えていると数人の足音が聴こえてきた。視線を向けると4人の男性だった。全員サングラスをかけて黒いスーツを着ており、体格も良かった。

【ガードA】

「お嬢様。お怪我は無いですか？」

【芽衣】

「ああ。大丈夫だ…コイツを連れていけ！…オレも帰るから」

彼女の言葉に反応して2人が此方に来た。俺が奴から降りると両側から腕を掴んで立たせ、更に2人が奴の前後に立ち校門の方に連れて行った。……俺は連行の見事な手際に見とれていた。

その姿が闇に消えると、彼女が此方を向いて頭を下げてきた。

【芽衣】

「本当に助かった…ありがとう」

頭を上げると満面の笑みを浮かべていた。その顔は今までに見たことのない魅力的な顔だった。

【正義】

「いえ。力になれて良かったです…お互いに怪我もしてないですね」

【芽衣】

「ああ。そうだな…1つ聞いても良いか？」

そう言うと彼女は怪訝な顔をした。

【正義】

「なんですか？」

なんだろうな、あんな顔して…何か問題があったのかな？

【芽衣】  
「背後から背負い投げた技……奴の靱帯切れたよな？……あれはどういう技なんだ？」

アレか：普通は禁じ手だから知らないよな。

【正義】  
「相手の背後から一本背負いをしただけです……その際に腕を捻ったんです、だから靱帯が切れたんですよ」

【芽衣】  
「あの一瞬で掴んだ腕を捻ったのか？……それにしても危険な技だ、名前はあるのか？」

なんかあった様な気がするけど……たしか長いから忘れたんだよな。

【正義】  
「本当の名前は忘れました……今は逆一本背負いって言ってます、まんまですけどね」

そこまで言うつと体育館の入口の方が騒がしくなった。……社交会が終わっただろう。

【芽衣】  
「オレは中の委員と話して帰るから、先に行くな。……じゃあまたな！」

此方に手を振ってから踵を返し、入口の方に走り去った。その姿が闇に消えてから、入口に向けて歩き出した。

入口の前に着くとまだ多くの生徒が残っており、離れた位置からその様子を眺めていた。

暫くは人が減らないと結論づけ、先程の出来事を思い出ししていた。やがて生徒が減り始めて、美咲桜が恋華の手を掴み引き摺る様に走り寄って来た。

【美咲桜】

「ハア：ハア：ヒロ君：お疲れ様でした」

【恋華】

「ハア：はっ走るの早いよ：ハア：美咲桜」

凄いスピードだな：恋華が不憫に思えてきたな、ご愁傷様。

【正義】

「ああ、そっちもお疲れ。楽しめたか？」

美咲桜は満面の笑みで頷き、恋華の顔は引きつっていた。：中で一体何があったんだ？



【恋華】

「マー君…良くこんなのと7年も一緒に居れたね…」

何故か疲れた顔で、肩を叩きながら言われた。こんなので…酷い扱いだなあ。聞きたいが…聞いたら取り返しがつかない気がする。

【航】

「誰かあゝゝ助けてえゝゝゝ!」

声が出た方を向くとお姉様が一カ所に集まって居て、航の姿は確認できなかった。気のせいだと結論つけて視線を戻した。

【美咲桜】

「ヒロ君は土曜日と日曜日…どっちが良い?」

頬を赤く染めながら軽く屈み、上目遣いで聴いてきた。

土曜?...日曜?...ああ週末に出掛ける約束だったな。土曜はおそらの庭に行くから日曜だな。

【正義】

「土曜は用事があるから日曜で良いか?」

【美咲桜】

「うん。じゃあ土曜日の夜に電話するね?...あっ!...私迎えが来るからもう帰らないと...じゃあねヒロ君っ!恋華!また明日!」

美咲桜は此方に何度か手を振ってから、校門の方に小走りで駆けて行った。

【恋華】

「日曜日ねえ〜？なにをするのかなあ〜？」

ニヤニヤしながら聞いてきた。盗み聞きしてた癖に…お灸を据えてやるか。

【正義】

「そりゃベッドの上で色々するよ？……野暮な事聞くなよ」

【恋華】

「~~~~~」

アレ？全身真っ赤になっちゃった…まだだったかな？やりすぎだったか。

【航】

「助けてえ~~~~！！」

又だ…アイツは何処に居るんだ。声がした方を再び見ると、お姉様方の隙間から航の顔が見えた。

固まっている恋華を残して、お姉様方から航を救出に向かった。

【正義】

「先輩方…すみません、連れを返してもらえませんか？」

後ろで一本に纏めた髪をほどいて母さん直伝のウインク&スマイルで言うと、何人が鼻血を出して倒れた。

《リリーススマイル》

解説：リリィスマイルは百合好きに凄い破壊力を発揮する（髪をほどいた正義は英理朱曰く、クールな女にしか見えないらしい）ノーマルには効かない。

【航】

「ハア…ハア…マサ君…助かったよ」

航は着衣が乱れてボロボロになり、顔中キスマークだらけだった。次にこうなるのは体育祭か？……「ご愁傷様。」

航が此方に来るとお姉様方は飽きたのか、ゾロゾロと帰って行った（倒れていた娘は引き摺られて行った…過激な人達だな）

【正義】

「お前…鏡で自分の顔を見たほうが良い。凄い事になってるぞ」

そう言ってやると携帯のカメラで自分を撮った。確認して上着のポケットから凄い勢いでハンカチを取り出し、まるでタオルで拭くように顔を拭っていた。

【航】

「どう？綺麗になった？」

【正義】

「その台詞…お前が言つと女にしか見えないな。綺麗になったよ…  
……………多分」

プツ…所々グロスやら口紅の跡が延びて凄い事になってるがな。

【恋華】

「わたるうゝゝプツ… キャハハハハ！」

恋華が復活して俺の横に来るなり、腹を抱えて笑いだした。膝を付き地面をバンバン叩いている。

【航】

「ちよつとゝゝ何が可笑しいのか教えてよっ！」

【恋華】

「キャハハハハハ…もっ…もうダメっ…可笑しすぎるっ!!！」

生徒も殆どが帰宅して誰も居ない学校に、女性徒の笑い声がいつまでも響いていた。

あの後、靴を履き替えて校門で恋華と別れた。鳴海家のリムジンで家まで送ってもらい、取り置きした料理の入った重箱を受け取った。家に入ってリビングに居た父さんと母さんに重箱を渡し、2階の自室に戻った。

スーツを脱いでスウェットに着替え、スーツにアイロンをかけ10分程でかけ終わった。クローゼットにスーツを仕舞ってリビングに戻ると、重箱が空になり父さんがソファーでお腹を擦っていた。

【明斗】

「産まれそうだった！」

【英理朱】

「ゴメンね。まー君…止めたんだけど」

【正義】

「俺の夕飯がぁー！」

風紀取締りをする事を伝えていなかったのも、夕飯は食べてきたと思っただけ。結局…俺の夕飯はカップラーメンだった。

【正義】

「ハア…虚しい」

最早溜め息しか出なかった。

昨日はおそらの庭で1日中過ごした。ピアノを教えた後子供達と遊んだが、その日芽衣さんは姿を見せなかった。

そして今日は日曜日。昨夜に美咲桜から電話があり 1時位に迎えに行くね と言われたので軽めの食事を摂り、リビングで寛いでいた。

【英理朱】

「美咲桜ちゃん遅いねえ〜?」

声がした方に視線を向けるとリビングのドアが開き、母さんがコー

ヒールを運んできた。此方に来てテーブルにコーヒーを置くと、対面のソファに座った。

壁に掛かった時計に視線を移すと1時3分になっていた。1時位つて言つてたし…許容範囲なんじゃ？

【英理朱】

「時間にルーズな人つて私嫌いだなあ」

今日はえらく噛みつくなあ…何でこんなに不機嫌なんだ？…俺何かしたかなあ？

【正義】

「母さん…今日はどうしたの？…機嫌悪くない？」

恐る恐る聞くと切れ長の眼が鋭くなり、思いきり睨まれた。やっぱり俺なのか…何かあったっけ？……………駄目だ、思い出せない。ハア……良しっ！

【正義】

「母さん？俺が何かしたんだよね…ゴメン。…思い出せないんだ」

そう言つと母さんは腕を組み、ハアと大きな溜め息を吐いた。

【英理朱】

「先々週に約束したの憶えてないの？一緒に買い物に行かつて…ハア……今日は仕方無いけど、次は絶対だよ？」

先々週？……………ああ！地下室でピアノ弾いてた時に何か言つてたな…全く聞いてなかった。

【正義】

「ゴメンね。また今度行こう?…次は忘「ピンポン」……れないから、いつてきます」

美咲桜だろうなと思いつながら玄関に向かった。靴を履き終えて、鏡で軽く身だしなみをチェックした。

鏡に映った俺は白のロングTシャツの上に青いTシャツを重ね着して、黒地に白のムラ染めがアクセントになったジーンズを穿いていた。ネックレス等は嫌いな為、全く着けてない。可笑しな所は無いな……良しっ行くか!

玄関のドアを開けて空を見上げると、曇っていて雨が降りそうな感じがした。

門に視線を移すと、付き人の桜さんがリムジンのドアを開け此方に会釈した。

【桜】

「正義様、おはようございます。…お乗り下さい」

霧生桜 《きりゆうさくら》 23歳 AB型 180cm Dカップ 美咲桜の付き人。長身で程よく引き締まったスポーティーな体型。髪は腰まである黒髪を、三編みで一本に纏めている。眼はややつり目がちで、整った顔立ちと合わさりクールな印象を受ける。長身&スタイル抜群の為、街で良くスカウトに追われている。【黒のパンツスーツ+赤いカッターシャツ+白ネクタイ+メガネはデフ



オルト】一人称は【私】

【正義】

「おはよう桜さん。今日はお願ひしますね」

軽く会釈を返して開いたドアに視線を向けると、車内の美咲桜が此方に小さく手を振った。乗り込んで隣に座るとドアが閉められ、直ぐに桜さんが運転席に戻った。

【桜】

「お嬢様。今日はどちらに？」

【美咲桜】

「雨が降りそうよね…フロントシアにお願い」

【桜】

「畏まりました」

桜さんが応えると同時に、車は音も無く住宅街を走り出した。

あれから社交会の話をしつつ30分程が経ち、鳴響南にあるデパート『フロンティア』に着いた。

【桜】

「それではお嬢様…お気をつけて」

車から降りると頭を下げ、直ぐ車内に戻って車は走り去った。

【美咲桜】

「今日の格好…どうかな？」

そう言われてから不安そうな顔をした美咲桜の全身を眺めた。

ピチツとして身体のラインが良く解るピンクのTシャツに、細めの黒いジーンズを穿いていた。靴は茶色のウエスタンブーツを履いていて、腰に巻いたためのベルトがアクセントになったパンク系の格好だった。

【正義】

「ジーンズなんて珍しいね？…でも良く似合ってるよ」

【美咲桜】

「良かったあ。…それじゃ行こっか！」

笑顔になると俺の右腕に抱き着いて、入口に向けて歩き出した。

あその後10階から店を眺め休憩を挟みながら、4時間掛けて1階まで戻ってきた。俺の両手には途中で美咲桜が買った、服が入った紙袋が4つぶら下がっていた。

【正義】

「……………疲れた…喉渴いた…腹減った」

美咲桜に4時間も引き摺り回された為に、足が悲鳴をあげていた。

【美咲桜】

「ヒロ君…体力落ちたねえ。それじゃあ…もう6時前だし、フードコートに行こっ！」

そう言うなり腕を掴まれ、ずるずると引き摺られてフードコートに向かった。

美咲桜に席に任せて俺はドーナツショップ《めり〜》で2人分のセツトメニューを受け取り席に戻ってきた。

【正義】

「お待たせ…少し混んで遅くなった」

【美咲桜】



一応電話口に話してみた。

【美咲桜】

「ふえ…いついつから居たの?…もう食べ終わったの?」

俺の方にある空になったトレーを見て目を丸くした。

【正義】

「早く食べないと桜さん迎えに来ちゃうよ?…もう6時30分になるし」

【美咲桜】

「えっもうそんな時間なの?」

キョロキョロしてフードコートにある時計を見つけると、もの凄い勢いで食べ始めた。その顔は、頬がハムスター見たいに膨れていて……ちよつと可愛かった。

10分程で食べ終わり、桜さんから電話があつたので紙袋を持ち外に出た。

正面入口前のロータリーでリムジンを待っていると、隣に立つ美咲桜に袖を引かれた。顔を向けると美咲桜は口を開いた。

【美咲桜】

「楽しい時間は何で早く終わっちゃうのかなあ…ヒ口君もそう思わない?」

なんでそんな顔…泣きそうな顔してんだよ。さっきまで笑顔だった

のに、いつもより酷い顔……なんで

【正義】

「俺も美咲桜と居ると、時間が経つのが早く感じるよ」

言つと美咲桜は顔を伏せて、肩を小刻みに震わせてから……

【美咲桜】

「私の一番はヒロ君なのっ！……ヒロ君の一番は私だよね？……ねえ……教えてよお？」

いきなりどうしたんだろう……いつもの美咲桜はこんな事絶対に言わない筈だ。何かに怯えてる様な感じがする……

【正義】

「俺の一番は美咲桜だよ。……昔からずっと」

優しく語りかけると抱き着いてきた。シャツを両手で掴み、胸に顔を擦り付けて声を殺して泣き出した。

両手の紙袋を地面に置いた。左手で腰を抱き寄せ、右手で頭を撫でてやった。

暫くすると泣き止んで俺の胸に手を突き、ゆっくりと離れた。

【美咲桜】

「私達つて他の人達から見たら変なのかなあ？……両想いなのに……付き合ってないし」

変じゃないっ！という言葉が喉まで出掛かったが、無理矢理飲み込んだ。お互いに立ち止まった今の状態じゃ…付き合っても、ただ傷を舐め合うだけだ。お前もそんな関係望んでないだろ？…なあ美咲桜。

【正義】

「そうかも…な。でも俺は必ず答えを出すよっ！…言ってる意味解るよな？…その時はお前…いや…なんでもない」

まだ時間はある、だが俺が強要しても無意味だ。頑張れ美咲桜…俺は信じてるから、いつかまた…

【美咲桜】

「……………うん。そうだね」

そう言っつて力強く頷いて顔を上げ、ぎこちなく微笑んだ。その顔はまだ意思が揺れ動いている様だった。

その後お互い無言になり、桜さんが迎えに来てリムジンに乗り込んだ。車内でも気まずい空気が続き、気が付くと家の前に着いてドアが外から開かれていた。

【正義】

「じゃあまた明日」

【美咲桜】

「うん。ヒロ君またね」

お互いに顔を見合わせて小さく手を振り合った。車を降りて門を開

けようとすると肩を掴まれた。振り返ると桜さんが悲しそうな顔をしていた。

【桜】

「お嬢様に何があったのでしょうか？…あんなお嬢様は初めて見ました…」

多分戸惑ってるんだろう…置いて行かれる様な感じがするんだろうな。ピアノだけだと良いが…こっちはズカズカ踏み込んで来る癖に、昔から抱え込むからなあ。

【正義】

「……………揺れてるんだと思います。桜さん、時期が来るまで美咲桜を頼みます」

深く頭を下げて1分程して頭を上げた。

【桜】

「揺れてる…ですか。…解りました！その時が来たらお嬢様を頼みますっ！」

桜さんは会釈して踵を返し車に乗り込み、静かに車は走り去った。遠ざかる車が視界から消えると、門を開けて家に入った。



先程七瀬家を出てからリムジンは桐原家に向かって走っていた。

【美咲桜】

「必ず答えを出す…か。ヒロ君は強いな」

それに引き替え私は…駄目駄目だ、恐くて触る事すらままならない。  
…ヒロ君は『何を』歩く事を止めたんだろう…そして今度は何処まで行くんだろう。隣に立って同じ景色を歩きたいなあ。ハア…やめよう、夢見るのは自由だけど虚しくなるだけ。夢大きければ大きい程の反動が…絶望が…耐えきれずに私が壊れてしまう。

【美咲桜】

「期間限定の恋…砂時計の砂が止まる事はないよね。約1年…みっ…みじかいつ…よお！…！」

1年後に訪れる絶望を想像したら涙が出た。『恐くないっ！恐くないっ！恐くないっ！』何度も自分に言い聞かせたが、溢れる涙は止まってくれなかった。

【美咲桜】

「ヒロ君っ……っは……なんで？……ヒロ君なのっ……なんでっ……ねえおしえてよお！！……うああーっあーっあーっ！！！」

音も無く走る車内に一人の少女の悲痛な泣き叫ぶ声が響いた。

V I E W C H A N G E

E N D

帰ってから直ぐに部屋に戻って、ベッドへ仰向けに倒れ込んだ。

とりあえず具体的に『何が』あったのかを知らないとな……動きようがない。宮園女学院だっけ、川上さんに頼むしかないな。できれば当時仲が良くて、同じスクールに通ってる娘が理想的だ……更にピアノを弾いていれば言うことない。……3年前だから難しいかもな、できれば直接逢って話したいが……

……スクールも見に行った方が良さだろうな。やっぱり色々と準備が必要だな、何ヶ月か覚悟したほうが良さそうだ。……俺の方は多少手こずるかな？でも子供は大丈夫だから何とか為りそうだ。

【正義】

「どのみち体育祭が終わってからだな。宮園も同時期だし、中間テストがあるけど点数影響しないし…来月から頑張らないとなっ！！」

天井に向かって握り拳を突き上げた。

8 4月第3週【進む覚悟、少女の楔】（後書き）

9は新キャラが登場します。早く全員出したいんですが、難しいですね。

因みに芽衣を襲った犯人は秘密です。個別ルートの伏線なので書けません。ご了承下さい。

それではまたお会いしましょう。

9 4月第4週【にゅーふえいす?】(前書き)

9です。新キャラです。疲れました。……ではお楽しみ下さいませ。

9 4月第4週【にゅーふえいす?】

【航】

「そついえば、あの娘の事どうするの?」

【正義】

「接触して来ないんだから…別にどうもしないよ。多少迷惑だがな  
今週に入ってから、俺はある女子に追い廻されている。接触して来ないのだが、柱の影に隠れて此方に視線（睨んでる?）を向けてくる。」

顔も見覚えがないし、話した事もない。恨みを買う様な事もない…正直うつとうしい。今の所は無視を決めこんでいるが……いつまでも続きそうで激しく不安だ。

今日は木曜日：俺は今、鳴海家のリムジンで学園に向かっている。隣に座った航は腕を組んで首を傾け、うくと唸っていた。

【航】

「どっかで見たことあるんだよなあ?あの娘…思い出せないけど」

【正義】

「別にどうでもいいよ。どうせ…どっかのパーティーなんじゃない?この学園に通ってるくらいなんだ…お嬢様だろ?」

【航】

「うくん?…パーティーねえ?…あっ!!!思い出した!。御堂グループのパーティーだ!…ほらっ!…フロンティアを経営して

る」

フロンティア…ね。先週のデートを思い出すなあ…俺にとっては踏み込む決意が固まって良かったが、美咲桜は辛いだけかもしれないな。

月曜日は明らかに空気が違ったしな…観てるこっちが辛かった。昨日漸く普通に笑ってくれる様になった…場の空気を読んで、フオロ―してくれた航と恋華には本当に感謝してる。…今日はどうなんだろう?…元気な顔を見せて欲しいな。

【航】

「マサ君どうしたの?…眉間に皺寄せて」

また顔に出たか…ポーカーフェイスってのは難しいモンだな。

【正義】

「考え事してた…御堂グループねえ。…あのストーカーとは、やっぱり面識無いな」

【航】

「無視を続けるならどうでもいつか…あつ!芽衣先輩が門番してる、珍しいね?」

航の声に反応して車の進行方向に視線を向けた。校門の前に仁王立ちした彼女が居て、彼女の目の前に4人の男子生徒が正座していた。

【正義】

「本当だ…部屋(風紀委員教室)に居ないなんて珍しいな」

【航】

「アイツ等もついてないよね…厳しいもんねえ〜芽衣先輩」

そんな事を話していると車が停まり、外からドアが開かれた。

【正義】

「ほらっ…着いたんだから降りるぞ？」

まだ前方を凝視していた航を車内に残して、校門に向かって歩きだした。

【航】

「ちょ…マサ君っ！待ってよ」

少し歩くと慌てて走ってきて隣に並んだ。そのまま歩き校門に近付いて行くと、彼女の怒声が聴こえてきた。

【芽衣】

「嫌がる女を4人掛かりで…お前等っ！男として恥ずかしくねえのかよっ！！！」

正座した4人は顔を伏せて黙ったままだ。嫌がる女？…ナンパでもしてたのか？

【航】

「ねえマサ君？…芽衣先輩の背中にしがみついているの…あの娘じゃない？」

航の言葉に反応して、彼女の背後に視線を向けると…例のストーカー娘が居た。



【正義】

「本当だ……なんか震えてるな」

無理矢理に引き留めて腕でも掴んだのか？怯えてるなああの娘……可哀  
想に。

【航】

「マサ君？………顔が怖いよ？」

【正義】

「だろうな……アイツ等にムカついているからなっ！！！！」

そう言い残してスピードをあげ校門に向かった。

【芽衣】

「何も言い返せないだろ？……一人でナンパも出来ないチキン野郎が  
っ！」

校門に辿り着き彼女の顔に視線を向けると、此方に気付き首を横に  
振った。……手を出すなという事か。俺が頷くと彼女は再び4人に向  
き直った。

【芽衣】

「男なら恥ずかしい真似をするなっ！……強引に話し掛けても恐がら  
せるだけだ、何故わからない？……相手の気持ちを少しは考えろよ馬  
鹿！………もう行け、二度とこんな真似すんなよ！！」

【ナンパ×4】

「………すみませんでしたっ！！！！」

4人は立ち上がり凄腕い勢いであの娘に近付き、深く頭を下げて走り去った。

【芽衣】

「ほらっ…もう大丈夫だ。これからは気を付けな」

彼女は優しく語り掛けながら、ゆっくりと体を離した。

【???】

「園田先輩っ！…助けられて、ありがとございましたっ！」

深く頭を下げた後に此方を向き（睨まれた）

【???】

「……………フンッ！」

腕を組み鼻を鳴らして顔を背け、その場から走り去った。

【航】

「……………思いつきり睨まれてたね？」

いつの間にか隣に居た航に、哀れみの視線を向けられた。

【芽衣】

「知り合いなんじゃねえのか？…あの娘だよな？例のストーカー」

航の反対側に立ち、怪訝な顔で走り去る背中を指差した。

【正義】

「あのストーカー娘：何がしたいんだ一体？」

まだ考え込んでいる二人をその場に残して教室に向かった。

あれから休憩時間の度に廊下から視線（睨まれた）を向けられた

今は4時限目のLHRで、再来週に迫った体育祭の出場種目を決めていた。

一人何種目出ても問題ない為、俺が寝ている間に（恋華&航の陰謀）

徒競走系を8つも走る羽目になってしまっていた。

- ・学年別400
- ・学年別800
- ・全学年男女混合1500（各クラス代表者の男女各1名）
- ・全学年男子1500（各クラス代表者1名）
- ・借り物競争
- ・学年別200×4リレー
- ・全学年男女混合200×4リレー（色別に代表者男女各2名）
- ・クライマックス400×4リレー（色別に代表者4名）

大体赤組の推薦人が何で松原なんだよ。クライマックスリレーはポイント高いし、責任重大じゃねえか…俺。

【航】

「大丈夫だよマサ君っ！…1500とクライマックスリレー以外は俺も出るし、なんとかなるよっ！」

航が振り返ってそう言いながら肩を叩いてきた。

【正義】

「別に良いけどさ…玉入れとか綱引き出なくて済むし、でもクライマックスリレーがなあ〜」

【航】

「大丈夫だよ。100を10秒台で走れるんだからさ…混合リレーは俺も出るし、頑張ろうっ？」

【正義】

「男子2人共1年かよ…先輩に足が速い人居ないのか？」

【航】

「マサ君が速すぎるんだよ…因みに恋華も出るよ、混合リレー」

言われてから黒板に視線を向けると、混合リレーの所に七瀬・鳴海・橋と書かれていた。……この学園の先輩もつと頑張れよ…頼むから。

【正義】

「最早色別対抗じゃなくて、クラス対抗じゃねえか…後1人もウチのクラスで良いんじゃないの？」

【航】

「なんか陸上部から選ぶらしいよ？…3年の先輩に、全中の時100で3位取った人が居るって言ってた」

混合リレーの勝ちが決まったな…航も100は11秒前半で走るし、恋華も女子の体力テストでタイム学年3位だったしな。女子の先輩も期待出来そうだ…200でも問題ないだろう。

【正義】

「じゃあ問題は混合1500とクライマックスリレーだな…青組には芽衣さんと美咲桜が居るし、メンバー次第じゃ間違いない苦戦するな」

色分けはA組とB組が赤・C組とD組が青・E組とF組が緑だ。

芽衣さんは航より速いからなあ。美咲桜は女子の体力テストでタイム学年1位。2人共持久力あるし侮れないな。

【航】

「2人共相当速いもんね。美咲桜ちゃんもやっぱり出るのかな？1500」

【正義】

「とりあえず芽衣さんは確定だろ、俺と殆ど互角だし。両方来るだろ。美咲桜は。解らないなあ。まあ昼飯の時に聞けば解るだろ」

【航】

「そうだね。…そういえばあの娘は昼も来るのかな？美咲桜ちゃんも恋華もなんか知り合いつぽいんだよねえ」

そんな話初耳だぞ。恋華も知ってるって事は宮園繋がりか？だったら美咲桜に何が有ったか知ってるかもな。…接触してみるかな。

【正義】

「その話本当なのか？…本当だったら話してみたいな」

【航】

「昨日移動教室の時に、3人で話してる所観たからね。かなり親しげだったよ？」

あの2人が俺と一緒に居ても近付いて来ないし。やっぱり俺に恨みでもあるのかな？ハア。…解らん。決めたっ！話してみよう。

【正義】

「今日話してみるよ…相手にしてくれるか解らんけど」

話しかけて逃げられたらどうしよう、明らかに敵意を向けてくるしな…もし逃げられたら凹むなあ。

【航】

「きつと大丈夫だよ！…マサ君の事何か誤解してるかも知れないし」

【正義】

「誤解って何だよ？」

何か噂でもあるのか？聞いた事無いな…あつ！俺が何処かの会社の隠し子がナントカっていうのは聞いたな。どうでもいい噂だけど…関係あるのかな？

【航】

「いつもハーレムだよね…美咲桜ちゃんに恋華に芽衣先輩。ナンパ野郎のレットルでも貼られてんじゃないの？」

ナンパ野郎…俺ってそんな風に見えるのか？……ギャルゲー野郎にナンパ野郎って言われるとは……俺ってギャルゲー野郎以下なんだ。……ハア…凹むなあ。傷を付けられたお返しをしなければ……いけないよなあ？

【正義】

「大体恋華はお前のだろ？ハア…まさか『ギャルゲー野郎』にナンパ野郎って言われるとは、思ってたなかったよ鳴海君つ！！！」

いつの間にか寝ていた恋華に聴こえる様に、わざわざ『ギャルゲー』を強調して言っちゃった。

【航】  
「なっ！…なんて事を…危ないじゃないかっ！…ハッ…なっ何でもニヤいんで続けて下さいっ！」

恋華が寝ている事を確認してホッとしている航に、周囲から生暖かい視線を向けられている事を教えてやった。ハッとして弁解を試みる航に、皆クスクスと笑っていた。

【正義】

「プツ…何でもニヤいねえ。こういうの属性って言うんだっけえ  
く鳴海君？」

【航】

「なっ！違うよ…噛んだだけだっ！…絶対に信じてないよねえ…その顔？…それにいつの間にか、呼び方が鳴海君になってるし！」

はて…どんな顔してんだろ。どうせなら語尾に『ニヤ』って付ければ需要有りそうなのに……残念だ。

ガラーン ガラーン ガラーン ガ

【松原】

「良しっ！…体育祭は皆頑張れよっ！。もし最優秀クラスに選ばれたら、俺のボーナスが気持ちアップするらしいっ！…これです！…これでLHRを終わる」



何か奢るとか言えよっ！それに気持ちアップするって…良く誰も突っ込まないなあ。ある意味凄いなあ…この団結力。

【恋華】

「マー君？…ご飯食べないの？」

恋華の声で我に還って弁当を取り出した。

【美咲桜】

「ヒッロ〜君っ！…体育祭の種目決まった？」

廊下からの声に視線を移すと、ニコニコしながら美咲桜が小走りで寄ってきた。これで全員揃ったな。

【恋華】

「いただきます」

美咲桜がいつものポジションに座り、恋華の声で皆食べ始めた。美咲桜からお茶を受け取っていると、航はまだ此方をジッと睨んでいた。

【美咲桜】

「鳴海君はどうしてヒロ君を睨んでるの？」

【恋華】

「むぐっ？…本当だ。なんでかなあ？」

2人が怪訝な顔を向けてきた。恋華…口に物を入れたまま喋るなよ、お嬢様の自覚ゼロだなあ。面白くなりそうだし……話すしかな

いな！

【正義】

「それは航がギャル」さっ！最近はガソリンが高くて困るよねえ？」………「プッ…アハハハハッ！」

【美咲桜・恋華】

「「……………ギャル？」」

【航】

「そっそれは！…最近のギャルはメイクが濃いなあ〜って思ってさ」

【正義】

「クククッ…しかしお前っ…露骨な話の逸らし方するな？…ガソリン？…メイク？…それはちよつと苦しいんでない？」

面白すぎるぞコイツ…侮れん。もしギャルゲーまで言った後だったらなんて答えたのが気になるなあ。……………いつか必ず実践してみよう。

【航】

「そっそっだ！…美咲桜ちゃんは体育祭、何の種目に出るの？」

コイツまだ警戒してるのか…しっかし強引に話題を変えるなあ〜。

【美咲桜】

「そうだった！ヒロ君は何に出るの？…私は徒競走とリレーと騎馬戦と障害物競争と……………アレ？忘れちゃった」

【恋華】

「んぐんぐ…美咲桜も結構出るねえ〜。アタシと被りまくってるしね」

【航】  
「1500とクライマックスリレーは出るの？…マサ君は両方出るよっ！」

何でお前が嬉しそうに言うんだよ。

【美咲桜】  
「混合リレーと1500は出るよ。…青組のクライマックスリレーの出場者はまだ未定なんだって。なんでも当日に活躍した人から、投票で選ばれて決まるらしいよ？」

赤組もそれで良くない？松原は何を考えてるんだろ…あの人も読めないな。

【恋華】  
「じゃあアタシと直接対決が多いねえ〜…でも負けないからねっ！」

【美咲桜】  
「ヒロ君が敵なのは嫌だなあ〜…でも私だって負けないよっ！」

【正義・航】  
「……………」

なに、この空気？なんか2人の間の空間が歪んで見えるんですけど…背後に炎の様なモノも見える。

【美咲桜】

「ヒロ君っ!」

【恋華】

「航っ!」

2人はいきなり俺達に詰め寄ってきた。なんか顔が怖いよ。

【正義・航】

「「…………… ナンデスカ?」」

【美咲桜・恋華】

「「私が（アタシが）勝つから観ててねっ!」」

【正義・航】

「「…………… ハイ」」

ナンデスカこの展開?頭痛がしてきた:只でさえ色別対抗ドッジボールの事で頭が痛いのに。時間もまだあるし:ちよつと現実逃避してこよう。

【正義】

「航、ドッジボールのメンバー考えといて:俺ちよつと風にあたつてくるわ!」

そう言い残して席を立ち教室を出た。廊下にストーカー娘が居たが無視してそのまま屋上に向かって歩いた。暫く歩くと背後に視線を感じ、いきなり後ろを振り返ってみた。

【正義】

「……………?」

【????】

「ジッ……ッ!?……フンッ！」

俺の視線に気付くと驚いた様な顔をしたが、鼻を鳴らして顔を逸らされた。…尾行に気付いてないと思っていたのだろうか？

ストーカー娘は此方をチラチラと観ながら、その場から動かない。……仕方無いので無視して屋上に続く階段を上がり、外に出た。

奥のフェンスに歩み寄って背中を預ける様に地面に座った。……隣にストーカー娘が同じ様に座って居るが、気にしない事にした。

ガラーン ガラーン ガラーン ガラーン

【????】

「ねえ?…キミって『あの』七瀬正義だよな?」

暫く空を眺めていると5時限目開始を告げる鐘が鳴った……鳴り終わると同時に、隣に座った彼女が顔を伏せたまま突然口を開いた。

彼女は俺の事を知っているのか？…それに強調して言った『あの手て何の事だ？考えても仕方無い…話してくれるみたいだし、聞いてみるか。』

【正義】

「確かに俺の名前は七瀬正義だけど…『あの手て何のことだ？』」

【?????】

「……………3年前の4月、市のピアノコンクールに出てたよね？…」

「キミ」

「……………彼女もあの場に居たのか？…まさかまだ覚えてる人がいるなんてな。ハハツ…今の俺は凄い顔をしてるだろうな。」

【?????】

「……………その無言は肯定と受け取って良いんだね？」

「なんだ？急に声のトーンが下がった…前髪に隠れて表情は見えないが、肩を震わせている。……………怒ってるのか？」

【正義】

「……………出てたけど？」

【?????】

「ツ……………!!」

「ピアノ」

一瞬何が起きたか解らなかった。……………右頬の焼ける様な痛みで、  
漸く頬を叩かれた事に気付いた。

【????】

「なんでっ！…なんでコンクールに出なくなったのっ！？お姉ちゃんから一番大切なっ！……………ピアノを奪っておいでっ！！」

彼女のお姉さんから俺がピアノを奪った？…どういう事だ？…意味が解らない。…話の続きを促す為に彼女に視線を向けると、鋭い視線で此方を観ていた。

【????】

「あの時の事は……………今でも覚えてる」

回想

?????SIDE

3年前：市のピアノコンクール。ボクは2歳年上の香津美<sup>かすみ</sup>お姉ちゃん  
の演奏を聴きに、天瀬川市民ホールに来ていた。

お姉ちゃんは何をしても1番を取れる天才で、特にピアノは凄かった。  
いつかボクもそんな風になりたくて、その大きな背中を必死で  
追い掛けていた。

お姉ちゃんは中学1年からピアノの勉強をする為に、オーストリア  
のウィーンに留学した。先週、突然家に帰ってきた時は本当に嬉し  
かった。

ボクのヴァイオリンを聴いてもらえただけでも嬉しかったのに お

礼に一曲弾いてあげる と言つて、弾いてくれたベートーベンのピアノソナタ『悲愴』の表現力は本当に凄かった。

今日は久しぶりのコンクールだから 楽しんで演奏する と言つていたんだけど、参加者リストを観てから 必ず金賞を取る！ と態度が激変してしまった。話しかけても何も応えてくれず、控室に姿を消してしまった。

参加者全員の演奏も終わつて、表彰式が始まつた。

…お姉ちゃんは演奏が終わつても客席に戻つて来なかった。…失敗したのかな？とも考えたがボクの聴いた限りミスは無かった。

ボクは他の参加者と競べてもお姉ちゃんの弾いた『悲愴』が1番だと信じて疑わなかった。

【司会者】

「次は銀賞の発表です！。銀賞は……………エントリーナンバー13番……………御堂香津美さんですっ！……………御堂さんはステージへ御上がりください……………御堂さん？」



【????】

「っ……………う……………そ……………でしょ?」

信じられなかった…ボクはお姉ちゃんが負けた所を見たことが無い。それから暫くの間…司会者はお姉ちゃんを呼び続けたけど、結局現れなかった。

【司会者】

「遅くなりましたが、いよいよ金賞の発表ですっ!…金賞は……………  
……………エントリーナンバー14番……………七瀬正義君っ!…七瀬君はステージへ御上がりください」

誰があのお姉ちゃんに勝ったのが気になって、ステージ上に視線を向けた。

ステージ上では美しい金髪を背中の中程まで延ばした、1人の少年にスポットライトが当たっていた。

【????】

「そうだっ!…見とれてる場合じゃない……………お姉ちゃんを探さないと!」

暫くその少年に見とれていたが、演奏後から姿が見えないお姉ちゃんが心配になって外に飛び出した。

ホールから出て直ぐにロビーを探したが、居なかったなので控室に走った。控室の扉の前に居る警備員に、身内だと説明して入ろうとしたが 中には誰も居ない と言われて建物の外に走った。

【????】

「ハア…ハア…お姉ちゃん…何処に居るの？」

辺りを見渡したがお姉ちゃんは居なかった…入口正面に在る階段を駆け降りると、お姉ちゃんは遙か前方を覚束無い足取りで歩いていた。

【????】

「ハアハア…ハア…お姉ちゃんっ！…ツ…待って！」

お姉ちゃんの居る所へ全力で走りながら叫んだ。声に反応して立ち止まったので、残りの距離を詰めた。

向き合う様に立って息を整え顔に視線を向けると、お姉ちゃんは顔面蒼白だった。

何て声を掛ければ良いのか悩んでいると、お姉ちゃんは此方に背中を向け口を開いた。

【香津美】

「ハハハハハッ！………また負けた………またあの子に負けちゃった…留学っ…まで…っ………したのに！………」

いつも自信に満ち溢れたお姉ちゃんが泣いている…また？お姉ちゃんは負けた事なんて無い筈…何を言ってるの？

【????】

「なっ…何を言ってる…の？負けた事なんて「3年前っ…にも…負けたのよっ！…あの子にっ！！！」………えっ！？」

3年前つていつたら、ボクが4年生の時だ。……そういえば一度だけ、風邪を拗らせて見に行けなかった事がある。……あの時負けてたんだ。今日はあの子に動揺したのかも知れないけど、その時のお姉ちゃんは落ち着いていた筈……それでも勝てなかったのかな？

【香津美】

「だから1年後につ……ウイーンに留学したのよ……また負けちゃったけどね」

【????】

「でも……お姉ちゃんが1番」お世辞なんて要らないっ！」……そんな事無いよ……」

【香津美】

「ウイーンにもあんなレベルの高い演奏をする学生は居なかった……あの子は本当の天才なのっ！『神の指先』を授かった」

そう言ってお姉ちゃんは此方に背を向けたまま、敷地の外に向かつて歩き出した。ボクはその場から動けずに……小さくなっていく背中を見つめていた。

回想

END

【????】

「それからお姉ちゃんはピアノを弾かなくなった……なのにつ……あれ以来キミはコンクールから姿を消したっ！……1回も出なかったっ……！……」

…そうか。彼女はあの人の妹だったのか。惜しいな…あの人は良い演奏をしていたのに。

【正義】

「君はあの人の妹…だったんだな。あの人は『言葉を音に乗せる』  
…良い奏者だったんだけどな、残念だ」

そう言うと彼女は驚いた様な顔をした。……………どうしたのかな？

【????】

「覚えてるのっ!?!?…当時の事を…お姉ちゃんの演奏も?」

よく覚えてるよ…違ったカタチでだけど。俺のせいで彼女の姉が  
ピアノを辞めてしまったなら…話さないといけないよな、俺がコン  
クールに出なくなった理由を。

【正義】

「君の姉さんの演奏も…当時の事も良く覚えてるよ」

回想

正義SIDE

【司会者】

「では最後にステージ上に居る受賞者の皆さんに、大きな拍手をお  
願いします」

受賞式が終わったのでステージから降りると、母さんが走り寄って  
来た。

【英理朱】

「おめでとう。まー君っ！……疲れてるかも知れないけど、取材受けても大丈夫？」

そんなに疲れた顔をしてるのかな？全然平気なんだけどな。

【正義】

「俺は大丈夫だよ。母さんの教え子が増えるチャンスなんだから、それに場所は控室でしょ？…どうせ行くつもりだったし構わないよ」

【英理朱】

「ゴメンね。15分後に記者の人を連れて行くから…ゆっくりしていると良いよ」

【正義】

「解った！…15分後だね？」

そう言い残して控室に向かった。控室の中には誰も居らず、着いてから5分位して扉がノックされた。取材には早すぎるよな？と思いつながらも、歩み寄り扉を開けた。

【参加者A】

「居たぞっ！…お前等コイツを捕まえる！」

開けた瞬間、同い年位の3人の男子が入って来た。1人がそう言った後に、残りの2人にタックルを喰らった。押し倒されて、うつ伏せの体制で床に押さえつけられた。

一瞬の出来事に俺は何が何だか解らなかった…何で俺の床に押さえつけられたんだ？…コイツ等は誰なんだ？…何がしたいんだ？

【参加者A】

「良しっ！…そのまま押さえてるよ？」

頭上からの声に顔を横に向けて、ソイツを覗き見ると片手で髪を掴まれた。その後直ぐに『ジヨキ』という音がして、目の前に金色の髪が落ちてきた。

切られた髪が自分のモノだと思いたくなかった。…母さんや美咲桜が長くて綺麗だと、大好きだと言ってくれた金髪……許さないっ！！！！

頭の中で何かがキレた音がした。俺を抑さえつけていた2人を力任せに引き剥がして立ち上がり、引き剥がされた反動で尻餅をついた2人を思いきり蹴り飛ばした。

蹴り飛ばした2人が呻き声をあげていたが、無視して髪を切った奴を睨みつけた。

そして何故こんな馬鹿げた事をしたのか聞くことにした。

【正義】

「何で髪を切ったっ！……答えろっ！！！」

【参加者A】

「っ…お前みたい不良はっ！…この場所に相応しく無いんだよっ！！！」

今までもこの外見で理不尽な中傷や暴力を受けてきたが、刃物を出されたのは初めてだ。

【正義】

「どうせお前が何も受賞できなかった腹いせだろっ！……人のせいにするなっ！！！」

【英理朱】

「ちよつと声が大き……まー君っ！……っ！……その髪！！！」

殴り掛かろうとした時に扉が開いて、母さんが入って来た。床に散らばった髪に気付くと、此方に駆け寄ってきた。

母さんが心配そうな顔をしていたが、俺は髪を切った奴の手に持ったままのハサミを指差した。

【英理朱】

「この子達がやったのね？」

母さんの声のトーンが下がった……キレたな。髪を切った奴も怯えている……母さんの方を見ていると、その時また扉が開いた。

【記者】

「すみません。遅くなってしまっ」主催者を呼んで来なさいっ！！！！……はっ……はいい！！」

母さんの叫び声なんて久しぶりに聴いたなあ……アイツを殴るのはもう無理だろうな。

【英理朱】

「まー君？……またいつもの？」

【正義】

「うん。くだらない中傷…ひがみ……………母さん俺、何か疲れちゃったから先に帰っても良い？」

【英理朱】

「ええ。こっちは任せなさいっ！……………確りと主催者に文句言っとくからねっ！」

【正義】

「ありがと…じゃあ先に帰ってるね」

そう言い残し髪を切った奴を睨みつけてから控室を出た。

回想

END

【????】

「ボク達が出て行った後に……………そんな事があったんだ。でも髪の毛を切られただけで……………！ッ……………ゴメン……………ゴメンなさい」

『切られただけ』という言葉に反応して、彼女を無意識のうちに睨んでしまった様だ。それに気付いた様で、ペコペコと頭を下げて来た。

【????】

「髪の毛を切られたのが嫌だったから？…また切られるかも知れないって思ってるから？……………『その程度の事』が原因なのっ！？」

今度は『その程度の事』って言いきりやがったっ！…それに声のト



ーンも上がった。…また怒ってるのか？…忙しい娘だな…怒って謝って、原因がそれだけだったら苦労はしてない。彼女納得してないみたいだし…話すしかないな、俺が人前で『弾けない理由』

【正義】

「でもそれが原因で…人前で弾けなくなってしまったんだ。…誰かに観られてると手が震えて…指が動かないんだっ！…動いてくれないんだよっ！…！」

コンクールの翌日…レッスンでいつもの様に母さんに観てもらいながら鍵盤に手を置くと、手が震えて全く弾けなかった。まるで自分の指に針金が入ってるかの様だった…母さんが心配して 今日はい中止ね と言って部屋を出てから、自棄になってもう一度試したら今度は弾けた。その時に俺は『人前で弾けなくなった』事を自覚させられた。

『弾けない理由』を話すと、隣に座る彼女は立ち上がった。

【?????】

「ボク…キミの都合を何も考えないで…キミも苦しんでいたのに、一方的な感情をぶつけちゃって…本当にゴメンなさいっ！」

そう言って深く頭を下げた。その深く下げた頭からポツポツと雫が落ちて、コンクリートの地面に小さな染みをつくった。

…頬を叩かれた時は驚いたが、優しい娘じゃないか…他人の為に涙を流せるなんて。

【正義】

「顔を上げてくれ…叩いた事も怒鳴られた事も…怒ってないから」

顔を上げた彼女の目元は真っ赤に腫れていた。俺は立ち上がり、ブレザーのポケットからハンカチを取り出して彼女の手握らせた。

ちよつと待つてね　と言って此方に背中を向け、ハンカチで目元を押さえていた。

…暫く視線を外して景色を眺めていると、後ろから肩を叩かれたので振り返った。

【???】

「ハンカチありがとう。その……………ピアノは続けてるんだよね？」

彼女は不安そうな顔をして両手でハンカチを握りしめ、恐る恐るといった感じで尋ねてきた。

【正義】

「ああ…今でもピアノは続けてるよ。まだリハビリ中だけどな」

そう言うと不安そうな顔が怪訝な表情に変わった。

【???】

「リハビリ中? ……ケガ…しちゃったの?」

【正義】

「そっちの事じゃなくて…人前で弾く練習だよ」

彼女はポンツと手を叩き　そっちの事だったんだっ！　と小声で呟いていた。

【????】

「じゃあ…いつかコンクールに戻ってくるんだね？」

何でそんなに嬉しそうな顔をするんだ？…お姉さんからピアノを奪った男に。

【正義】

「ああ…今はまだ、子供や親しい人の前でしか弾けないけど…いつか必ずっ！…」

リリスさんと母さん…2人の母親からの愛情を…受け継いだ俺の音を、世界中の人達に届けたい。

【????】

「その時はボクも…キミのピアノを聴いてみたいな？…あの時はお姉ちゃんの演奏しか、良く聴いてなかったから。………それにお姉ちゃん…ピアノは辞めちゃったけど、今は指揮者を目指してるんだよ。いつかキミと同じステージに立ちたいって…言ってたよ！」

あの人は指揮者を目指してるのか、いつか共演したいな。彼女のヴァイオリンも一緒に…3人で同じステージに立てる日が来るといいな。

【正義】

「いつか君とお姉「亜沙美」……………えっ？」

【????】

「ボクの名前は御堂亜沙美…とっ！…友達なのに、いつまでもキミじゃ呼びにくいでしょ？」

そう言つて彼女は頬を赤く染め顔を逸らし、右手を差し出してきた。同じ様に右手を差し出して、彼女の手をしっかりと握つた。

【亜沙美】

「これからよろしくっ！え〜っつと…正義君っ！」

彼女は此方を向いて握つた手を離すと、顔を耳まで真っ赤にしながら言つた。

何でこんなに赤くなつてんだ？…まさか照れてるのか？……まるで美咲桜みたいだな。

【正義】

「ああ、よろしく。亜沙美……つて呼んでも良いのか？」

【亜沙美】

「……うん。そう呼んで良いよっ！」

御堂亜沙美 1年C組 O型 162cm Bカップ 国内に70店舗を構えるデパート『フロンティア』を経営する御堂グループ代表の二女。小柄だがスポーティーで引き締まった体型。髪は黒髪を肩口で切り揃えている。パツチリした目にシャープな顔だちで、遠くから観ると男の子に見える可愛い系。姉の影響で何にでも一生懸命になる傾向がある。身体を動かす事が好きなのでスポーツは得意（勉強は普通より上）ヴァイオリンは同年代の中では、ずば抜けた実力とセンスを持っている。スポーツの事になるとテンションがあがり、プレイ中にピンチに陥ると『女帝モード』を発動して常に笑いながら好戦的になる。一人称は【ボク】

【正義】

「早速だけど…桐原と橘は知り合いなのか？」

【亜沙美】

「美咲桜と恋華の事？…あの2人とは中学の時から友達だよ？」

ビンゴ！友達だったか…美咲桜に何が有ったのか知ってるかな？…  
…そういえば彼女は授業サボっても大丈夫なのか？

【正義】

「そういえば亜沙美は授業サボっても平気なのか？…さっきの鐘つて6時限目開始の鐘だぞ？」

【亜沙美】

「今までサボった事ないから大丈夫だよ？…それにお互い様でしょ？」

ニヤニヤした顔で言ってきた。ノリが良いし話易い…良い友達になれそうだな。…時間もまだあるし、もう少し美咲桜の事を聞いておくかな。

【正義】

「確かにな…もう少し聞きたいんだけど、美咲桜とはいつ頃知り合っただ？」

【亜沙美】

「うーんとねえ…確か2年生になってからだったと思うよ？…それまで違うクラスだったからね」

時期的に考えても…知らないだろうな。やっぱり川上さんだけが頼りか……ダメ元で、どこでヴァイオリンを習っていたか聞いてみるか。

【正義】

「じゃあ美咲桜とは結構長いんだね。…あとヴァイオリンを習ってるんだよね？……俺は自宅でレッスンを受けてるけど、亜沙美は何処で習ってたんだ？…ヴァイオリン」

【亜沙美】

「ボク？…自宅に先生を呼んでるよ」

アテが外れたな…まあいいや。そんなに都合良く解る訳ないよな。考えが甘かった…来月頑張ろう。

【正義】

「話は変わるけど、亜沙美って何組？…もうすぐ体育祭だしさ」

【亜沙美】

「ボクはC組だから青だよっ！……今から楽しみだよええ！……早く当日にならないかなあ〜？」

アレ？…何でテンション上がってるの彼女。体育祭に此処まで食いつくとは…もしかして熱血タイプか？

【亜沙美】

「正義君は赤だよねっ！？…ボクも色々出るよっ！…徒競走にリレーに玉入れ！…1500でしょ？…騎馬戦と…綱引き…借り物……あと障害物競争もあつたなあ〜」

クレイジーだ！…彼女はクレイジーだった！…一体幾つに出てんの？  
………この娘、鉄人？

あれだけの種目に出るのに1500とリレーにも出るみたいだし、  
足も当然速いんだろうなあ？

【正義】

「亜沙美はこの前の体力テストで、100のタイム何位だったか覚えてる？」

彼女の顔は良くぞ聞いてくれたと云わんばかりに輝いていた。

【亜沙美】

「ボクは2位だったよっ！…美咲桜に僅差で負けたけど、恋華には勝ったしねっ！」

指を2本突き出して、ピースサインを此方に向けてきた。……宮園  
出身者が体力テストのトップ3独占かよ。

【亜沙美】

「そついえば正義君は、色別対抗ドッジボールはどうするのっ!？」

解説：色別対抗ドッジボールとは！…円形のコートを中心から3つ  
均等に分けた陣地で殺し合うゲームだ。

自陣の後方に3人の外野を配置する、つまり味方同士のパスは自由  
だ。

内野は死んだら退場で外野には行かない。外野も殺しても内野には

入れない。

顔面はセーフで、ボールを持って歩くのも歩数に制限は無い。

色別に人数は各クラスから2名、つまり内野9人で外野3人となる

全滅した色から順位が決まるバトルロイヤル形式で行われる。

つまり、常に2方向から狙われるスリリングなゲームである。

解説終了！

【正義】

「まだ決まってる筈だ……と思う……多分」

航にメンバーは一任してるからなあ。さっき頼んだばかりだからまだ決まってる筈だよな？……多分……選手じゃない事を祈りたい。

【亜沙美】

「ボクは出るからさあ……もし出ることになったら……楽しく殺し合おうねえ？」

何であんな晴れやかな笑顔なんだよ！……芽衣さんも競技説明の映像で、満面の笑顔で敵選手を殺したもんなあ……まさか美咲桜も？

【正義】

「そっ……そうだね。……出てたらね？」



自分の顔が引きつっているのが良く解る…芽衣さんの剛球なんて取れるかよ、喰らった男子5メートルは吹っ飛んでたし…亜沙美もクレイジーだしさ。

ガラーン ガラーン ガラーン

【正義】

「6時限目終わったな…亜沙美はこれからどうするんだ？…俺はカフェテリアに行くけど」

彼女は腕を組んでうくと唸っていた。

【亜沙美】

「美咲桜達も来るんだよね？…行きたかったけど、ボクは今日レツスンがあるからまた今度ね」

そう言っつて顔の前で両手を合わせてウインクした。

【正義】

「じゃあ最後に一つ頼んでいいか？」

【亜沙美】

「いいよ？…ボクに出来ることなら」

【正義】

「俺が人前でピアノを弾けない事…皆に黙っててくれるか？」

彼女は怪訝な顔をしたが、首を縦に振ってくれた。

【亜沙美】

「じゃあねえ〜！明日の昼休み、教室にお邪魔するからあ〜！」

そう言い残し扉の前まで歩いて此方に振り返った。手をブンブンと振った後、踵を返して彼女は校舎の中へ消えていった。

口止めの理由を聞かれなかった…感謝しなきゃな、あの優しい娘に。

【正義】

「さてと、カフェテリアに行きますかね！」

首を長くして待っている3人の顔を思い浮かべ、苦笑しながらカフェテリアに向かった。

カフェテリアに着くと3人は口を揃えて 遅いよっ！ と言ってきた。

遅くなった事を謝りながら定位置に座ると、航から死刑宣告を言い渡された。

【航】

「松原先生が言ってたんだけど、ドッジボールは棄権者ばかりで戦力不足らしいよ。……………という訳で、俺達ドッジボールに出るから！」

【正義】

「どんな訳だよっ！！」

まだ多くの生徒で賑わうカフェテリアに、正義の 人柱はイヤだア  
――――っ！！！！ という叫び声が響き渡った。

9 4月第4週【にゅーふえいす?】(後書き)

9 9 どうでしたか? : やつと4月終了です。早くも作品の評価を戴けて嬉しい限りです。次も頑張りますよっ! 10はゴールデンウイークのお話です。それでは次回をお楽しみに。

10 5月第1週【心の傷痕、少女の祈り】（前書き）

10 出来ました。徹夜で書き上げたので今、猛烈に眠いです。…ページ多いし…エラー多すぎて泣きそうですよ。何千文字消えた事か、ハア…ゴメンなさい。愚痴ってしまいましたね。ちよつと体調不良気味で更新が遅れてすみませんでした（言い訳？）長々と書いてしまいました。それでは 10 お楽しみ下さい！

## 10 5月第1週【心の傷痕、少女の祈り】

初日から両親に 旅行に行くから！ と言われて朝の6時に叩き起こされ、引き摺られる様にして車に詰め込まれた。

それから空港に向かい飛行機に乗り込み、辿り着いた場所は蟹やホタテが美味しい北の大地だった。

空港からタクシーでホテルに移動し、チェックインしてからが本当の地獄だった。

部屋でゆっくりしているとノリノリな2人に腕を掴まれ、引き摺られる様にしてホテルを出た。

それから【観光 買い物 移動】の高速ループを喰らいまくり、俺の体力はあっという間に底をついた。

途中美味しい食事という名の罠で、体力は回復するのだが……直ぐに高速ループとコンボするので疲労が2乗になって襲いかかってくる。

この旅行は二泊三日の為、高速ループは帰る日まで毎日続いた。

家に帰って直ぐに航から電話があった。疲れ果てていた俺は、通話の途中で強烈な眠気に襲われた。通話しながら覚束無い足取りで自室に戻り、ベッドに倒れ込むとそこで意識が途切れた。

ゴールデンウィークも今日で最終日。旅行で蓄積した疲労を少しでも減らそうと、死人の様に眠っていた。

壁の時計が6時半を指した時、静かな部屋の中に携帯の着信音が響き渡った。

『 』

自作の着信音に反応して眼が醒め、布団の中でモゾモゾと手を動かし携帯を探した。

枕の下敷きになっていた携帯を掘り出し、眠い目を擦りながら通話ボタンを押した。



『おっはよ〜！起きた？』

電話から聴こえたのは、ム力つく程爽やかな友人の声だった。壁に掛かった時計に視線を向けると6時32分だった。

こんな朝早くに爽やかな声で電話をかけてきた友人に、殺意が湧いた。

【正義】

「今…何時だと思ってやがりますか！？…鳴海君っ！！」

【航】

『ろくじはん』

間の空いたム力つく喋り方に、殺意が急激に膨れ上がった。

【正義】

「殺らないか？」

ありったけの殺意を込めて、声にドスを効かせて言ってやった。

【航】

『ゴメンなさい！ゴメンなさい！ゴメンなさいっ！』

声が大きいつての……こっちは眠くて仕方無いつてのに。大体何の用だ、こんな朝早くに……さっさと用件を聞いて寝よう。

【正義】

「用件は何だ？事と次第によつては……潰しますよ？」

【航】

「ええ〜！昨日俺が電話で言った事、覚えてないの!？」

「昨日の電話?……アレ?……昨日家に帰ってからの記憶が無いなあ。」

【正義】

「えっ?……電話なんてしたのお前？」

【航】

「ハア〜……昨日電話の途中で寝たみたいだね、疲れてるって言ったし。……マサ君が旅行に行ってる間に、連休中、何処かに皆を誘って遊びに行こうよ! って恋華が言ったんだよ。それで今日皆で篠井スーパーランドに行く約束をしたから、マサ君も誘ったんだよ……昨日」

「篠井スーパーランド?……確か小さい頃に母さんで行ったなあ。何年振りだろ?懐かしいなあ……ん？」

【正義】

「あそこって……子供向けのアトラクションしか無いんじゃないか?」

【航】

「それって何年前の事?……2年前にリニューアルしてから相当変わってるよ?……逆走するジェットコースターとかも出来たし、敷地も相当広くなってるよ」

「逆走するジェットコースターって何?……デンジャーなマシンなのは間違いないな。へえ〜……意外と楽しめそうだなあ。」

【正義】

「まあそれは解った。……………じゃあ6時半に電話した理由は何？」

【航】

『だって英理朱さんに先を越されたらアウトじゃん。それに連休初日から……………ハア……………それじゃ再現するよ、3・2・1・スタートツ！……………』

PLAYBACK

航SIDE

ゴールデンウィークの初日。……………俺は昨夜から徹夜でパソコンの前に座り、溜まり過ぎた『積みゲー』を消化していた。

【航】

「ハア……………恋華もコレ位胸が大きければなあ。……………ん……………選択肢……………どうせCG回収しないといけないから……………とりあえず『中を出す』って……………」

恋華かな……………でも今日は分家の集まりに顔出しに行くって言ったよな……………誰かな。

首を傾けながら携帯を開くと、液晶には『桐原さん』と表示されていた。

美咲桜ちゃん……………珍しいな、電話してくるなんて。疑問に思いながらも通話ボタンを押した。

【美咲桜】

『鳴海君っ！…私のヒロ君は何処っ！？ずっと電話してるのに繋がらないのっ！……………どうしよう…もしヒロ君の身に何かあったら私っ！』

凄い動揺してるな。いつも冷静な美咲桜ちゃんがこんなに取り乱すなんて…とりあえず話を聞こう。

【航】

「美咲桜ちゃん？…少し落ち着い、落ち着ける筈ないよっ！……………とりあえず、順を追って話してくれる？」

あんなに声を震わせて…余程マサ君の事が心配なんだ、早く不安を取り除いてやらないとな。

【美咲桜】

『いつも休日は、私がモーニングコールしてるの。それで今日も電話したんだけど……………1時間位続けても全然繋がらないし…桜さんに家まで見に行ってもらったんだけど、誰も居ないって。前の日は何も言っでなかったのに…』

確かに…マサ君、連休中は家でゆっくりするって言ってたしな。…何処に行ったのかなあ？……………GPSで調べてみるかな。これだけ取り乱してるなら、まだ試してないだろう。

【美咲桜】

『まさかっ！…綺麗なお姉さんに甘いモノあげるって言われて、着いて行っちゃったんじゃない？』

ちよ…それは無いでしょ。相当テンパってるな……………急がないと、もっと大騒ぎになりかねない。

【美咲桜】

『そうだった！…警察！捜索願いを「ちょっと待ったっ！！今探してるから、少しだけ待って！」……………解ったよ…』

子機がわりに置いてある携帯を高速で操作して、GPS情報を検索した。……………H県？…何故？

【航】

「美咲桜ちゃん？……………マサ君はH県に居るよ」

そういえば確か去年も……………シーサーが有名なO県に連れて行かれたって言ってたな。なるほど…家族旅行だな。去年は美咲桜ちゃん居なかったし、知らなくて当然だろう。それに当日フラグが起つって言ってたし……………さすが英理朱さん、行動が全く読めない。

【美咲桜】

『何でH県なんか居るの？……………私を残して』

何でって…本当にこの2人どういう関係なんだろう？

【航】

「家族旅行だよ。去年もそうだったんだけど、当日にいきなり言われるらしいよ？…『旅行に行こう！』って…俺も去年遊ぶ約束してて、ドタキャン喰らったからね」

【美咲桜】

『そうだったんだ…それじゃあ仕方無いね。……………そうだった！連休中に皆で遊びに行かない？ヒロ君は強制参加でっ！！！！』

あつちやくキレちゃった…まあ自業自得だよ。たまには痛い目を見ないかね。

【航】

「うん。解った！恋華も同じ事言ってたから、相談しておくよ。…日取りは連休の最終日にしよう！去年も最終日の前日には帰って来てたから、マサ君」

【美咲桜】

『うん。ゴメンね鳴海君？…ヒロ君が帰って来たら連絡宜しくね！…それじゃ！』

ご愁傷様…あの感じだと、1日中引き摺り廻されそうだな。まあ俺は恋華とゆっくりしよう。

P L A Y B A C K

E N D

【航】

『……………という事があったんだよっ！』

ツッコミどころが多すぎて、手がつけれん。……それに、なんでコイツは自分のプライベートを赤裸々に語ってんだ？……男らしいと思ってるのか？声も自慢気だしな。

【正義】

「なるほどねえ。それは悪かったな。ところで…皆で行くって、メンバーは？…時間は？」

いつものメンバーかな？…芽衣さんと亜沙美は用事が有るかもしれないしな。

【航】

『俺達4人と芽衣先輩に亜沙美ちゃんの6人。時間は9時に現地集合だよ』

フルメンバーだな。俺は美咲桜にロックオンされるだろうし……クレイジーな2人は航達に任せよう。

【正義】

「解った。ところで…今日も送迎頼んでいいか？…もし母さんに頼んだら……ハア」

母さんに遊園地行くななんてバレてみる…間違いなく着いて来るに決まってる。…バレない様にしないとな。

【航】

『了解。じゃあ7時50分位に行くから……バレない様にね？英理朱さん勘が鋭いから』

【正義】

「気を付けるよ。じゃあ、また後で」

【航】

『うん。気を付けて』

電話を切って液晶に視線を向けた。7時10分か…40分も話してたんだな。

【正義】

「さてと、準備しますかね！」

あの後着替えて玄関を出ようとした所で、何故か外に居た母さんとエンカウントしてしまった。

こんな朝早くに何処に行くの？ と言う母さんの尋問に耐えきり、無事に航と合流した。

車に乗り込み1時間程走った頃、今日の目的地である篠井スーパーランドが見えてきた。

【正義】

「お〜！…確かに大きくなってな……昔はあんなアトラクション



無かった筈だ。…何か有名な乗り物ってある？」

【航】

「でしょ？…有名なのはジェットコースター3機かな？速さ・長さ・恐さのコンセプトに別れてるんだ。電話で話してた逆走するのが『恐さ』のマシン、後は観覧車とお化け屋敷に高速メリーゴーランド位だね。他にも色々と凄いらしいけど…行かないと解らないしね」  
高速メリーゴーランド？…なんだこのやるせなさ、罰ゲーム用？

【航】

「皆もう来てる！……うわあ…人多いねえ？」

隣に座る航の声に反応して前方に視線を移すと、ゲート前の4人とチケット売り場に群がる人だけが見えた。

【正義】

「此処って穴場っぽいイメージあるけど、大盛況だな」

【航】

「そうだねえ、でもギャラクシーワールドよりはマシンだと思うよ。  
……着いたよ？降りないの？」

ハツとして2人で車を降りると、4人が此方に気付いて走り寄って来た。

【恋華】

「随分遅かったねえ？…またマー君絡み？」

【芽衣】

「正義っ！今日は1日宜しくなっ！」

【亜沙美】

「2人共、誘ってくれてありがと！……今日は存分に楽しもうねっ  
！！」

【美咲桜】

「ジ………ッ!?…ギロツ!!!」

美咲桜が此方を凝視していたので顔を向けると、気付いた途端思い  
きり睨まれた。……あまりの迫力に視線を逸らして、4人の格好を  
眺めることにした。

4人の服装は動きやすさを重視した様なラフな格好で、全員ハーフ  
パンツやジーンズを穿いていた。美咲桜と恋華が可愛さを、芽衣さ  
んと亜沙美はカッコよさを強調した様な着こなしだった。

【航】

「ちよつとマサ君…美咲桜ちゃんに謝らないと、マズくない？」

隣に立っていた航が小声で耳打ちしてきた。小さく頷いて美咲桜に  
視線を移すと、背後にどす黒い炎の様なモノが見えた。

【美咲桜】

「ヒッロッ君？私に何か言うことがあるんじゃないの？」

そう言いながら此方に近付いてきて、両手で顔を挟む様に押さえら  
れた。そのまま顔を寄せてきて額同士を合わせ、ゼロ距離で睨まれ  
た。

【正義】

「……………ゴメンなさいい！（滝汗）」

謝ったら今度は睨んでいた眼が糸目になって、引きつった笑顔を向けてきた（超恐い）

【美咲桜】

「何に対してのゴメンなのかなあ〜？…クスクス…それで謝ってるつもりなの？」

笑ってるう〜！？声もドスが効いてるし、あの純粹無垢な娘がこんなになるなんて…俺の知らない3年間に一体何がっ！？

【正義】

「美咲桜さんの許可も無く…勝手に旅行なんかに行つて…ゴメンなさいっ！」

謝ると美咲桜の眼からポロポロと涙が頬を伝い、地面に小さな染みをつくつた。

【美咲桜】

「電話…したのにい…全然っ…繋がらないし…うっ…心配したんだからっ！」

顔を掴まれていた両手が離れ、そのまま抱きしめられた。

そうか…休日のモーニングコールは、俺の所在を確認する為だったんだ。本当に悪い事したな…向こうに着いてから、携帯はホテルに置きっぱなしにしたからな。

それに……こんなにも心配させて、また気付いてやれなかった。どこかでサインを出してた筈なのに、それに気付かないなんて……俺は本当に馬鹿だっ！……救いようのない大馬鹿野郎だっ！！！！

【美咲桜】

「うぁーっ！……置いてっっちゃヤダー！！……ひとりはイヤーッ！！！」

そうだった！……俺の事なんて今はどうでもいいじゃないかっ！！

4人の方を向くと驚いた様な顔をしていた。……美咲桜が子供みたいに駄々をこねて泣き出したからだろう。……航に視線を向けて片目を瞑り、顎で入口を指した。俺の意図が伝わったみたいで、此方にウインクを返してきた。直ぐに啞然としたままの3人の背中を押しながら、入口に向かって行った。

【正義】

「もうお前を置いて行ったりしないから……絶対一人になんてしないから……ゴメンな美咲桜……馬鹿な俺を許してくれ……」

優しく抱き返して耳元で『俺は此処に居るよ、美咲桜は一人なんかじゃない』と何度も優しく語りかけた。

暫く抱き合っていると泣き止んだのか、背中に廻された腕がゆつくりとほどかれた。そのまま右腕に抱き着いてきて、泣き腫らした顔を此方に向けた。

【美咲桜】

「今日は絶対に私から離れちゃ駄目なんだからねっ！？」

言葉遣いは幼いまま……俺が急に居なくなつたから、あの時の事を思い出してしまつたんだな。……トラウマになつてたなんて知らなかつた。……本当に俺は昔から何も変わつちやいない……馬鹿は馬鹿のまままだ。

多分……今日一日この状態だろう。美咲桜がこうなつてしまつた全ての原因は俺にある……あの時の二の舞にならない様に気を付けなとな。

【正義】

「ああ！……ずっと一緒に居るよ。だから……俺から離れるなよ？」

空いている左手で髪を鋤くように撫でてやると微笑んで、右腕を抱きしめてくる力が強くなつた。

【美咲桜】

「うん！……今日はずっとヒロ君から離れないもんねっ！」

航達に冷やかされるだろうなあ……挑むところだ。今日の美咲桜は照れたりしないからな。

【美咲桜】

「ほらほらっ！……早く行こうよ！」

そう言いながらグイグイと腕を引っ張り、引き摺られる様にして入場ゲートに着いた。美咲桜が首に架けていたパスケースを係員に見せるとゲートが開き、中に入り辺りを見渡したが皆は居なかつた。

携帯を取り出して航に連絡すると 中央広場にある時計塔の下に居るよ と言われたので、俺達は遙か前方に見える時計塔を目指して

歩き始めた。

美咲桜と話しながら15分程歩き、時計塔の直ぐ傍まで来た。

皆の姿を探していると、此方に気付いた4人が駆け寄って来た。

【恋華・芽衣・亜沙美】

「「「……………」」」

女子3人は俺達をチラチラと観ながら、小声で話し合っていた。

【航】

「良しっ！……じゃあ皆揃った事だし……何処から行くっか!？」

俺達の事を気にしてる3人に、さっきの話をさせない様に気を遣ってくれたんだな。航……ありがとうな。

【正義】

「美咲桜：何処に行きたい？」

【美咲桜】

「んとねえ……アレ！……アレに乗りたい！」

そう言いながら右の方を指差したので視線を向けると、狂った様なスピードで回り続けるメリーさん（馬）が居た。……いきなりメリーさんの？……あれって動物虐待にならないのか？……違った意味で。

【航】

「よし逝こう！……ほらっ3人共！ぼーっとしてないで逝くよっ！？」

航はそう言いながら3人の背中を押して歩いて行った。

なんか字が違った様な気がする。あのメリーさん、本当に大丈夫なんだろうな？……まさか振り落とされたりしないよな？

【美咲桜】

「ほらっ……ヒロ君！……私達も早くうっっ！」

美咲桜に引き摺られてメリーさんに向かった。

先に着いていた4人の傍に歩み寄ると、女子3人は眼を輝かせていた。航に視線を移すとその顔は真っ青で、注意書きを指差している手はブルブルと震えていた。

その様子を疑問に思いながらも注意書きに視線を移した。

《注意！》

・当アトラクションをご利用になる前に、必ずこの注意書きの熟読をお願いします。

・15歳以下のお客様は当アトラクションをご利用になれません。

・係員が首にしがみつくと腕の長さが足りないと判断した場合、危険ですので当アトラクションはご利用になれません。

・帽子や鞆等は身に付けたままだと他のお客様が大変危険な為、必ず入口の係員に預けてからお乗り下さい。

・2人乗りを希望される場合は必ず係員に『道連れベルト』を借りてから、指示に従って正しく装着して下さい。

・乗馬後は『振り落とされない様に』両腕を確りと首に廻してしがみつき、両足に力を入れて馬体を挟みこむ様にしてください。

・稼動している際、片手を離したりするのは大変危険ですので絶対にお止め下さい。

・降りる際、稼動が完全に停止したのを確認してから下馬して下さい。

・ジェットコースター等のアトラクションで乗り物酔いされるお客様はご利用をお止め下さい。



・“最後に”当アトラクションに少しでも不安を感じた場合、絶対に乗らない事をお勧めします。

(最後に〜から先は赤の極太文字で書いてある)

従業員一同

ちよ…『振り落とされない様に』ってなんだよっ！…それに『道連れベルト』？…どんなネーミングセンスしてんだよっ！？…何を道連れにするのっ！？……ツッコミどころが多すぎて疲れる。

【航】

「イ〜ヤ〜だあ〜！お願いだから離して〜っ！〜！」

航の叫び声で我に還って声が出た方に視線を向けると、恋華に腕を掴まれズルズルと引き摺られていた。他の2人は既に乗馬して居り、ニコニコしながら航と恋華のやり取りを眺めていた。

【恋華】

「往生際が悪いなあ〜？…さっさと楽になっちゃいなよ？」

【航】

「楽になんてなりたくないってっ！…は〜な〜せ〜っ！〜！」

《女王様モード発動》

アレ？…恋華が急に笑顔になった…眼も糸目になってるし……久々の女王様モード？

【女王・恋華】

「いい加減にきなさい! …いつまでもグズグズと男らしくない! …  
…恥ずかしいと思わないのっ! …!」

【航】

「男らしくなくていいから離してっ!」

おお〜…今日は結構頑張るなあ。 ……でも時間の問題だな。

【女王・恋華】

「あゝ〜っ! ? 今なにか言っただっ! ! ?」

【航】

「ヒイツ! ……ゴメンナサイ」

【女王・恋華】

「本当に困った人なんだから。ハア…手間をかけさせないで頂戴?」

《女王様モード解除》

恋華は航をズルズルと引き摺ってメリーさんに連れて逝った。

所詮は航…1分ちよつとか……3分位は粘れよな…面白くない。

【美咲桜】

「ヒロ君も早くっ! …私達も逝こっ! ?」

【正義】

「えっ? …ちよっ! …なんか字が違っ……引っ張るのは止めてえ〜  
っ! …イヤ〜っ! …!」

美咲桜に引き摺られて入口に連れて逝かれ、係員に『道連れベルト』を付けられた。

抵抗しながらも（道連れベルトで二人の腰周りが固定されている為、逃げられなかった）乗馬して首にしがみつき、この地獄が早く終わる事を切に願った。

ブーッ

ブザーが鳴り聞き覚えのある曲が鳴りだし、ゆっくりと動き出した。

【美咲桜】

「楽しみだねえ〜!!」

言いながら俺の腰に廻された手にギュッと力がいった。…その結果、背中に胸が押し付けられてちよつと嬉しかった。

【芽衣】

「オレはこつこの初めてだから楽しみだ!」

【亜沙美】

「ボクも遊園地なんて来たの、久しぶりだからワクワクするよ!」

【恋華】

「ホントホント!…あつ!速くなってきた!」

【航】

「……………」

航は顔面蒼白で首にしがみつき、道連れベルトによって恋華は航の背中にしがみついている。因みに芽衣さんと亜沙美は別々に乗っていた。

『~~~~~』

徐々にスピードが上がってきて、鳴っている曲の音量も上がってきた。……このスピード、ハッキリ言ってヤヴァい。……それにこの曲は。

【正義】

「確かにっ……このスピードはっ……『革命』……だけどっ……ピツタリっ……でっ……なんかっ……ムカつくっ！」

風圧が凄くて上手く喋れない。……シヨパンの『革命のエチュード』とはね……選曲がピッタリなのがスゴいムカつくな。

【美咲桜】

「た〜のしいい〜」

【航】

「ギヤーーーーッ逝っちゃうってーっ！……！」

【恋華】

「キャハハハハハ……サイッコーーーーッ！……！」

【芽衣】

「意外とっ……面白いつ……モンっ……だなっ……！」

【亜沙美】

「へえ〜っ…楽しっ…ボクっ…こんなもの…初めてっ…だよっ!〜!」

この後5分程、この『メリーさんのスピード革命』は続いた。

メリーさんから無事に生還した後、色々なアトラクション（絶叫マシンの高速ループ）に連行された。

…特に『速さ』のジェットコースター『レーザー』は本当に恐かった。普通はスタート後に上昇してから加速するので安心していったが、スタートからトップスピード…完全に意表をつかれて意識が飛びそうになった。他にも本格的なカートや妙にリアルなオバケ屋敷等、心臓に負担がかかりまくるモノばかりだった。

12時半頃に美咲桜が お腹空いたあ〜! と駄々をこね始めたのでレストラン街に向かい、少し遅めの昼食を摂っていた。

#### 【美咲桜】

「ん〜っ美味しいい〜」

#### 【芽衣】

「あのカートは楽しかったな!…あそこまでスピードが出るモンだとは思わなかったぜ」

【恋華】

「やっぱり1番は『レーザー』でしょ!…あの時の航の顔……  
プツ…アハハハハッ!」

【亜沙美】

「ボクはオバケ屋敷かなあ…オバケの人口密度が高くて、凄くビツクリしたよ」

【正義】

「俺はメリーさん以降の事…よく覚えてない」

【航】

「俺も同感…もう本物の馬にすら乗れない様な気がする」

女子4人は本当に人間なのか?…普通に食べてる。俺達なんてコ  
ーラすら飲めないってのに、最近の娘は皆タフなのか。

【美咲桜】

「ねえねえ…ヒロ君?…これ食べないの?」

そう言つて隣に座る美咲桜が、俺の前にある辛口チキンバーガーを指差した。まだ食うのか…相変わらず辛いモノは別腹みただな。

俺は無言で美咲桜のトレーにハンバーガーを載せてやった。

【美咲桜】

「いいの?…ヒロ君、コーラしか無くなっちゃっうよ?」

申し訳なさそうな顔をして言ってきたが、両手で包装紙を剥がしながら言われても説得力は皆無だ。

【正義】

「食べていいよ…腹が減ったら、後で何か適当に摘まむから」

『食べていいよ』って言った瞬間から食べ始めてるし……昔はこんなだったかなあ。…可愛いけどさ。

【美咲桜】

「むぐ…んぐ……ヒロ君ありがとっ!」

口にモノを入れたまま喋るなよ。ハア…恋華の影響をモロに受けてるな。

【恋華】

「マー君っていいお父さんになりそうだよね?」

【芽衣】

「性根が確りしてるからな…正義は」

【亜沙美】

「うん…ボクの予想では正義君、親バカになるタイプだと思うよ?…美咲桜の顔観ながらニヤニヤしてるし…」

【航】

「確かに…子供に『パパ…アレ買って?』…とか言われたら何でも買ってあげそうだなね」

声に反応して正面に視線を移すと、隣に居た筈の航がいつの間にか向こう側に移動していた。4人共此方を観ながらニヤニヤしており、コソコソと小声で何かを話し合っていた。

このタイミングで冷やかされたか……まあいいや、今の美咲桜はある意味無敵だからな。………考えていると急に右腕が引つ張られ、そちらに視線を向けた。………美咲桜は顔を真っ赤にしながらモジモジしていた……照れてるのか？

【美咲桜】

「ヒ口君っ！私………トイレ行きたい」

赤くなっていたのはトイレに行きたかったのが原因だったのか。ん？………トイレ？

【航・恋華】

「グハアーーーーッ！！」

【亜沙美】

「美咲桜………かゝわいいっ！」

【芽衣】

「ん？…なんでコイツ等は倒れてんだ？」

声に反応して視線を移すと、亜沙美はテーブルに突っ伏して口をパクパクさせていた。航と恋華は椅子ごと背後に倒れ鼻血を噴き出しており、芽衣さんは怪訝な顔をして3人を見比べていた。

【美咲桜】

「早くっ！……ト~~~~イ~~~~し~~~~ッ！！」



腕を引かれて視線を戻すと、さつきよりも顔が赤くなっていた。

【正義】

「ちよつとっ！…俺も行くの！？」

色々とマズイだろ……この歳で犯罪者の仲間入り？…思いつきり掴まれてるから振りほどけない！？……これってもしかして回避不可！！？

【美咲桜】

「さつき『俺から離れるなよ！』って言ったあゝ！……アレって嘘…だったんだ？」

うっ！…そんな汚れの無い純真な瞳で俺を見るんじゃないっ！くっ……俺の弱点を…ヤバいっ！ちっ…力が抜ける……このままでは俺は……俺はっ！！

《LLCモード発動》

【正義】

「はいはい、トイレね？……ほらっ早く行くよ？」

ラウラウチルドレン

解説：…LLCモードとは！…子供特有の汚れの無い純真な瞳で見つめる事により、無類の子供好きな正義の心に訴えかける事で発動する。発動後は何にでも子供を優先する様な言動をとってしまう。何故かというところ『おそらの庭』に通い続けた結果………  
……こつこつという体質になってしまったのだっ！！！！

【美咲桜】

「うんっ！……じゃあ早く行こっ！」

椅子から立ち上がり腕に抱き着いた美咲桜を引っ張る様にして、トイレの前まで連れ行った。

【美咲桜】

「ちゃんと此処で待っててよ？……居なくなっちゃヤダよ？」

【正義】

「うんうん……ちゃんと待ってるから、早く行っておいで」

【美咲桜】

「……じゃあ行ってくるねっ！……直ぐに戻るからっ！」

腕から離れて此方を振り向き、小さく手を振ってからトイレの中に駆けて行った。

《LLCモード解除》

その間に我に還った俺はジロジロと女性客に観られているのに気づき、辺りを見渡すと自分の立っている場所は女子トイレの前………恥ずかしくて穴があったら入りたかった。

結局……美咲桜が出てくるまで3分程この生殺し状態は続き、放心状態の俺は美咲桜に引き摺られ晒し者の気分で皆の所に戻った。

【正義】

「……………ハア」

【芽衣】

「正義…なんがあったか知らねえけど、元気出せよ！」

【亜沙美】

「さっきの美咲桜は反則だよねえ？」

【航】

「ホントホント…アレはやバいつて！」

芽衣さんは背中をバシバシと叩いてきて、航と亜沙美は先程の美咲桜について熱く語り合っていた。

【恋華】

「……………ねえ美咲桜、一体どうしたの？…コレ」

【美咲桜】

「ヒロ君の事？うん……………私がトイレから出てきたらこうなっていたよっ。」

【恋華】

「なるほどねえ〜…えいつ！…そりゃ！」

【正義】

「いひゃいつ！…よむろっへ！（痛い！止めろって！）」

テーブルに突っ伏していると、背後から頬を摘ままれ左右に引っぱられた。……………恋華ってこんなに握力あったのか……………痛い……………色々。

【美咲桜】

「そんな事しちゃダメ〜ッ!…私のなんだからっ!…」

【恋華】

「だから、その顔は反則だって…ゴメンね…マー君は美咲桜のだもんね?」

恋華が離れた途端、今度は美咲桜が首に腕を廻して抱き着いてきた。

…背中に胸が押し付けられてちょっと嬉し!?!…ちょ!首っ!…極ってるって!…!

【美咲桜】

「むう〜〜〜っ!」

【亜沙美】

「睨まない睨まない…ボクは取ったりしないから安心して?…愛されてるねえ〜正義君?」

【航】

「ホントホント…でもあの2人って付き合ってないんだよ?」

【亜沙美】

「それはボクも知ってるけど…知らない人が今の状況を観たら、誰も信じないだろうね?」

首が極っていて声が出ない!お前等…俺に気付けっ!…誰か助け…て…くれ!…ガクッ。

意識が朦朧としてきて、視界に映っているテーブルがブレて見える…もう…駄目…だ。俺の意識はそこで途切れた

ん？……………あれは俺と母さんと……………美咲桜か？…俺達はまだ小さいな……………それにこの場所って…小1の頃か…懐かしいな……………帰る時に母さんが車を正面入口に移動させる為に、居なくなっただよな……………そうそう、こんな感じだった…ベンチに座って待ってる間に、美咲桜が遊び疲れて眠っちゃったんだよな……………安心しきったかのような…嬉しそうな寝顔しやがって……………変わらないな…俺も美咲桜も……………でも確かこの後で……………アッ！…馬鹿っ！…行くなっ！！……………声が出せない？……………そうだった……………これは夢なんだよな……………ん？…景色が歪んで消えていく……………『ロ君』……………『ヒロ』……………誰かが俺を呼ぶ声が聴こえる……………『ヒロ君っ！！！！』……………美咲桜の声？……………それに体が揺れて……………いや、揺すられてるな……………どうやら夢から醒めたみたいだな……………心配そうな声だしやがって…早く起きてやらないとな。

瞼を上げると目の前には今にも泣き出しそうな美咲桜の顔があった。

【美咲桜】

「…っ！？…ヒロ君っ！…私っ…ゴメン……………ゴメンなさいっ！！」

なんか後頭部に柔らかいモノが当たってる感じがする……………そうか、

膝枕されてたんだな。

アレ？そういえば俺はいつ眠ったんだ？…確か美咲桜をトイレに連れて行った後…背後から首を締められて…気を失ったのか？

ん？…なんか違和感を感じる…言葉遣いが戻ってないか？…まあ今はそんな事よりも早く安心させてやらないとな。

【正義】

「大丈夫…少しの間懐かしい夢を観てただけだよ」

少しでも安心してもらえる様に笑顔をつくり、優しく語りかけた。

【美咲桜】

「私が力任せに抱き着いたりしたからっ…本当に…ゴメンなさいヒロ君っ！」

そう言った美咲桜の顔は青ざめており、頬にはうっすらと涙が伝った跡が残っていた。

ダメだ…全然安心してくれない。どうしたものかな……そういえばさっきの夢は小1の頃だったな。当時は泣き止まない時や落ち込んだ時にしてあげたっけ。最後にしたのは確か……小学校の卒業式の日だったな。久しぶりに『アレ』…やってみるか。

真上から顔を寄せて覗き込む様にしている美咲桜の後頭部を右手で掴んで引き寄せ、左手で邪魔な前髪を払ってから額にそつと唇を付けた。

【正義】

「俺は大丈夫だから、元気出せ…な？」

額から唇を離し耳元で囁いてから顔を覗き込むと、頬を赤く染め口をパクパクと動かしていた。

【恋華】

「やるねえ〜っ！…さすがはマー君。私達が何をしてても無駄だった美咲桜を……いとも簡単に復活させちゃうんだもんなあ」

【亜沙美】

「今のつて、普通ならキザに見えるんだけど…この2人がやると絵になるよね？…それに正義君、キスするのを全く躊躇しなかったもんね！」

【芽衣】

「確かに…正義はあの歳で妙に落ち着いてるよな。…まあオレはそこが気に入ってるんだけどよ」

【航】

「母親がアレだからね……挨拶でハグとかするのを昔は常識だと思ってた位だからね」

この人達は誰一人、気を失っていた俺の心配をしてくれないのか…  
なんか凹むなあ。

【美咲桜】

「久しぶりだから、ビックリしちゃった……嬉しかったけど」

美咲桜はそう言って顔を両手で覆い、身体をくねらせていた。

最後の方は声が小さくて良く聞こえなかった……でも顔色も元に戻ったし、本当に良かった。

【恋華】

「それじゃあマー君も復活したことだし、後半戦と行きますかっ！」

【亜沙美】

「そうだねっ！……ボクは早く『リバースグラヴィティ』に乗ってみたいな！」

【航】

「え？……まさかあの逆走するジェットコースターじゃないよね？」

【芽衣】

「なんだ……男のクセにビビってるのか？」

航は顔を青くして小刻みに震えていた。恐らく乗った時の事を想像しているのだろう。……面白そうだな、俺もいじりたくなってきた。

【正義】

「芽衣さん？……コイツが男らしくないのは当然ですよ、実は男装してる女なんですから」

【芽衣】

「なにぃ！本当なのか？……言われてみれば、確かに女みたいな顔してるな」

さすがは芽衣さん……乗ってきたというより、引っかかったみたいだな。



【亜沙美】

「そうだったんだっ！…ゴメンね？気付いてあげられなくて」

【美咲桜・恋華】

「っプツ…アハハハハッ！！」

航に視線を向けると顔を真っ赤にしながらプルプルと震えていた。

もう一押しだ…次は亜沙美を使うか？…どう切り返してくるのか気になるな。

【正義】

「これマジだよ？…体育の時、俺が皆から見えない様にしてから着替えてるんだ。いつもバレないかヒヤヒヤしてるよ。何なら亜沙美…触って確かめたら？」

【亜沙美】

「え？…ボクが？」

【正義】

「ああ…何か信じられないって顔してるからさ」

【亜沙美】

「じゃあ失礼して…ちよつと！…何で逃げようと「俺は男だっ！…ちよ！…何でこっちに来るの？…イヤァーッ！」…確認だけだからあ…ね？」

逃げ出した航を亜沙美が凄いスピードで追い廻していた。キレたのは逆効果だったみたいだな。

やっぱり足速いな…体育祭の前に確認できて良かった、注意しないとな。

【恋華】

「おい！…2人共、早くおいでよ」

【芽衣】

「正義っ！…ぼーっとしてると置いてくぞー！」

声に反応して視線を移すと2人は席を立っており、レストランの外に居た。

【美咲桜】

「私達も行こうか？」

隣に座る美咲桜が立ち上がり手を差し出してきた。

【正義】

「ああ…そっだな！」

立ち上がってその手に指を絡ませる様に握り、ゆっくりと歩きながら皆の後を追った。

後半戦も絶叫マシンばかりだった。やっぱり、リバースグラヴィティは『恐さ』を追求しているだけの事はある。地面を観ながら上昇して行くだけでもかなりヤバいのには、捻りながらの縦回転や垂直落下……本気で死ぬかと思った。相変わらず女子4人は平気だったが、航はグツタリして一言も喋れない状態だった。

それから絶叫マシン責めでキレた航の提案で、男女別行動をする事に決まった。美咲桜は昼食時の事を思い出したのか、反対しなかった。

2人でゲーセンや軽めのアトラクションを廻り、集合場所である中央広場に向かって歩いていった。

【航】

「もうすぐ5時半か…恋華達は時間通りに来るかなあ？」

【正義】

「芽衣さんが居るから大丈夫だよ？」

【航】

「そうかなあ？…何処かで撒いてるかもよ、恋華ならやりそうだし」

【正義】

「仮にも自分の彼女だよ…普通そこまで言うか？」

【航】

「マサ君は恋華の事何も解ってない……本当に恐ろしい娘なんだ、色んな意味で」

【正義】

「色んな意味…ねえ」

話してる間に中央広場に着いた。時計を見ると集合時間まで5分程の時間があった。

少しの間話し込んでみると、ジーンズのポケットに入れていた携帯が鳴った。

『  
くくくくく  
』

取り出して液晶に視線を向けると、『橋』という文字が表示されていた。

【航】

「恋華達じゃない？…もう時間過ぎてるし」

広場の時計を指差しながら液晶を覗き込んできた。

【正義】

「確かに恋華からだけど…何でお前に電話しないのかな？」

疑問に思いながらも通話ボタンを押した。

【恋華】

『マー君っ！…美咲桜っ…美咲桜が居なくなっちゃった！！』

【正義】

「とりあえず落ち着けっ！…どういう事だ？…ずっと一緒に居たんだ

る？…それに美咲桜は携帯『あの娘の携帯、電源が入ってないの？！』……………居なくなったのはいつ頃だ？」

【恋華】

『広場に戻ってる途中皆でトイレに行つて…出てきたら居なくなつてたの。それで今、皆で近くを捜してるんだけど…全然見つからないの』

状況は違つがあの時と似てる……………そんなことより今は美咲桜を捜さないとな。

【正義】

「解つた！…俺達も今から動く。因みに呼び出しは頼んだか？…桜さんとかに連絡は？」

【恋華】

『呼び出しは5分間隔で頼んでる…桜さん達にはまだ…』

声が震えてる…一人で捜させる訳にはいかないな。

【正義】

「桜さんや美咲さんにはまだ連絡するな…騒ぎがデカくなりすぎる…そんな泣きそつな声を出すな！…きつと見つかるから元気出せて！……………それじゃ切るな」

通話を終えて時間を確認すると、5時35分だった。

【航】

「美咲桜ちゃんが居なくなつたの？」

声に反応して隣に視線を移すと、航が心配そうな顔をして此方を見ていた。

【正義】

「ああ。トイレから出てきたら居なくなってたらしい。…連絡が取れないけど呼び出しも頼んであるし、俺達も捜すぞ！」

【航】

「解った！…マサ君はどっちを捜す？…入口側と奥側？」

【正義】

「お前は恋華と合流してから入口のゲート前に居てくれ！俺は奥の方を捜すから。…アイツかなり落ち込んでるから、ちゃんと支えてやれよ？」

【航】

「了解！…ちゃんと見張ってるから安心していいよ。…それじゃ！」

航が恋華に電話するのを確認してから、奥のエリアに向かって走り出した。

あれから皆と連絡を取りながら走り回ったが、手掛かり一つ見つからなかった。捜している途中で不安になり『誘拐』という最悪なシナリオが頭をよぎったが、桜さん達から連絡が無いので違うと割り切った。

【正義】

「ハアハア…ハア…美咲桜…何処に居るんだ！」

美咲桜を見付けられずに中央広場に戻ってきた。捜し始めてから40分近く経つよな？…広場の時計に視線を向けると6時16分だった。

叫びながら走り回っていたせいで声がロクに出ない。喉もカラカラだし、汗でシャツが貼り付いて気持ち悪い。

一度連絡を取ってみるか？…此方からは連絡してないしな。…とりあえずベンチに座ろう、俺の体力も限界が近いしな。

近くにあったベンチに腰を降ろして携帯を取り出し、航の番号を探していると携帯が鳴りだした。

『 』

一瞬美咲桜かと思ったが、液晶には『公衆電話』と表示されていた。ダレ?…疑問に思いながらも通話ボタンを押した。

【正義】

「……………もしもし?」

【????】

『……………6時半…あの場所で待ってるから……………また来てくれるって…私を見付けてくれるって……………信じてるから』

【正義】

「ちよつと待て!……………クソツ!…切りやがった」

あの声は間違いなく美咲桜の声だ。でも…あんな感情の籠って無い声は初めて聞いたな。別行動の間に一体何があったんだ?

『6時半』 『あの場所』 『また来てくれる』 ヒントはこれだけか……………美咲桜は何でこんなマネを?…10分位でこの難問が俺に解けるのか?

『また』 って事は…初めてじゃないって事だよな。でもあの時の事は殆ど覚えていない……………見つけた場所に確か派手なイルミネーションが点灯してて、目立つ所に時計があった位しか解らない。

6時半…イルミネーションが点灯……………そうか!コレならかなり絞り込める。更に昔から存在するモノの以外は消せるしな!



ポケットからマップを取り出してベンチに広げ、携帯ストラップに付いた短い赤ペンで該当しないモノに印を付けていった。

【正義】

「残ったのは3つか：時間もあと10分無いし、全部最低2kmは離れてるから一ヶ所しか行けないな」

まずは一番奥のエリアにある『大観覧車』：イルミネーションも時計もある。

つぎに此処から真っ直ぐ東側に見える『ホワイトキャッスル』：此処も両方ある。

最後に入口付近にある『天空のステージ』：イルミネーションはあった筈だけど、目立つ時計があるかどうか解らないな。

この3つの何処かに美咲桜が居る筈だ。アイツが好きそうなのは…全部当てはまるな。：クソッ！結局思い出すしかないのか。………ん？：ホワイトキャッスルの所に小さな字で何か書いてあるな。『パレードの無い曜日は稼動しておりませんのでご了承下さい』……今日は無いよな？：これで後2つか。

【正義】

「確率的には大観覧車の可能性が高い、時計もデジタルだけど付いてるしな。天空のステージは目立つ時計があるか解らないんだよね？」

どうする……勘でどちらかに行ってみるか？………そんなの駄目だっ！美咲桜は『信じてる』って言ったじゃないか！……俺がアイツだったらどう思う……信じてるのを裏切られたらどう思うよっ！………何

か考える……考えるんだ………！

【正義】

「入口付近に航が居るじゃねえか！何で直ぐに気付かないんだよ……  
馬鹿野郎っ！」

ベンチを思いきり殴りつけて拳の痛みで冷静さを取り戻した。

航の足なら2分もあれば解る筈だ。電話をかけたばなしで走ればなんとか……どちらにしるギリギリか。良しっ！

携帯を取り出し短縮で航の番号を呼び出し、直ぐに通話ボタンを押した。3回目のコールで呼び出し音が途切れた。

【航】

『もしもし？……どう「今直ぐに天空のステージっていうアトラクシ  
ョンに走れっ！」……… いったい「訳は後で話すから急いでくれ！  
」……… 解ったよ！後で話して「電話は切るなよ？大きな時計がある  
かどうか、教えてくれ！」……… ハア……… ハア……… ハア……… ハア  
……… 無いっ……… みたいだよっ！？………』

直ぐに電話を切って時間を確認すると6時26分だった。

後4分…2km位ならっ！携帯を乱暴にポケットに突っ込むと、  
『最後の可能性』に向かって全力で走った。

【正義】

「ハッハッ…ハッ…ハアハア…ハア…時間はっ!？」

観覧車の前で膝に手を突き、軽く呼吸を整えてから顔を上げ…観覧車のデジタル時計に視線を向けた。

【正義】

「6：31か…結局間に合わなかったな」

観覧車のイルミネーションは走っている途中に点灯を始めていた。終わったなと思いつつもスピードを落とさずに此処まで来て、周囲を見渡したが美咲桜の姿は何処にも無かった。

搭乗口には夕焼けを高い所から眺めようとする人の列ができていた。

俺は人混みを避ける様に正面のベンチに力無く腰を降ろした。

【正義】

「ハハッ……俺って最低だな。覚えていれば……クソッ！……俺はっ！……約束一つ守れやしないのかっ！！！」

肩を落として地面を睨みつけ、右拳を強く握りしめてベンチに叩きつけた。拳に血が滲んでいたが構わず何度も叩きつけていると、その手が誰かにそっと掴まれた。

【???】

「やっぱり来てくれたんだね………ずっと見てたんだよ？……遠くの方から……人にぶつかりながら………つまずきながらも……走ってきて……息切れして………拳を叩きつけて……」

声に反応して顔を上げると、居る筈の無い『一番大切な人』が涙を流しながらも微笑んでいた。

上から見てた？……なるほど、観覧車に乗ってた訳か。あの時の理由ってなんだったかな？……そうか！……『高い所からなら俺が何処に居るのか解ると思った』だったな。今も昔も同じ理由だな、抱えてるモノは解らないけど……大事にしないと。『当時』と『今』の想い。

【美咲桜】

「やっぱり……私のヒーローは君……『七瀬正義』だったね。……信じてたよ……必ず私を見付けてくれるって……」

血で赤く染まった俺の拳を両手で包み込む様に掴むと、自分の胸に抱き寄せ傷口にゆっくりと舌を這わせた。

その行為に驚いて腕を引こうとしたが……慈しむ様な微笑みを浮かべ、傷口を浄める彼女の表情に見とれ指一本動かせなかった。

【美咲桜】

「手は大事にしないと駄目だよ？……ヒロ君の『奏者の世界を音に乗せる』演奏は世界中に届く福音なんだから」

声に反応して我に還ると微笑んでいる彼女の顔が目の前、鼻が触れ合う位近くにあった。

【美咲桜】

「やっぱり私には……んっ……ちゅ……はぁ……しかあり得ないよ」

一瞬頭が真っ白になった。……突然顔が近付いて来て……軟らかいモノで口を塞がれた……キスされた……のか？

【美咲桜】

「ヒロ君のファーストキス奪っちゃった……私も初めてなんだから……許してね」

【正義】

「……………マジで？」

漸く発した言葉がコレだった。俺って初だったんだな意外と。

【美咲桜】

「うん。マジだよ？……これで暫くは……耐えられるよ」

良く聞こえなかったが、暫くの後に何て言ったのかな？一瞬表情が

歪んだし…気になるな。

【正義】

「俺は良いけど……美咲桜は俺で良かったのか？……こんな関」  
「ヒロ君以外あり得ないよっ！」……「ありがとう」

美咲桜のファーストキスか……本気で責任取らないと。早くピアノに刺さった楔、抜かないとな。

【美咲桜】

「うんっ！…此方こそご馳走様」

微笑みを浮かべ両手を後ろに組んで、片目を瞑りチロツ舌を出した。  
ヤバイ…可愛すぎだっつてその顔。フウ…体育祭明けからレッスンを増やさないと、少しでも早くこの笑顔を守れる様にならないとな。

【美咲桜】

「皆心配してるかもしれないから…早く行こうよっ！」

右腕を引っ張られてベンチから立たされ、そのまま腕に抱き着かれた。

【正義】

「そっだな。青い顔をしてた恋華達を、一刻も早く安心させてやらないとな？」

言いながら視線を右肩、頭を載せている美咲桜に向けた。

【美咲桜】

「うんっ！」

此方を向いて頷いたのを確認して視線を戻し、出口に向かって2人寄り添う様に歩き始めた。

あの後：航に電話してから入場ゲートに戻ると、皆から凄いお叱りを受けた（何故か俺だけ）核心部のみをばぐらかして事情を説明すると、厳しい尋問を受けた。

【恋華】

「いい加減話して楽になったら？」

【航】

「後で事情を説明するって言ったよね？」

【亜沙美】

「6時半に見付けて……今何時だと思ってる？」

【芽衣】

「心配させやがって……待たせた分はきっちりスジを通さねえとなあ……正義っ!？」

4人がジリジリと近寄ってきたので後ずさると、突然背後から羽交い締めにされた。

【美咲桜】

「……………ヒロ君ゴメンね？」

裏切り?…ちょ!美咲桜…ヒイ!…悪魔が…皆尻尾みたいなモノが生えてない?…顔が近いって!

【航・恋華】

「さあて…話してくれるよねえ?」「」

【亜沙美】

「何で遅くなったのか?」

【芽衣】

「何で連絡しなかったか?」

【悪魔×4】



「」「」「理由……………教えてくれる？」「」「」

【美咲桜】

「頑張つてっ！」

【正義】

「ちょ！…話せば！？…イヤア—————ッ！…！」

周囲の人垣の中心で愛（と言う名の制裁によるダメージ）を叫ぶ正義の音が響き渡った。

10 5月第1週【心の傷痕、少女の祈り】（後書き）

ゴールデンウィークなのにシリアスって…気がついたら恋華がマサ君とか言ってたし（朝4時頃）亜沙美はオレとか言ってるし（朝6時過ぎ）極めつけは正義の大バツキャロー（手直し中・つい先程）NGが多すぎる。上3つの手直し部分が解ったらかなりの音×恋マニアですよ？

体調不良の為に次週の投稿はお休みするかもしれません。先に謝らせて下さい…ゴメンなさいっ！！！！

それでは次回 11コメディを強化！体育祭でお会いしましょう！

11 出来ましたっつと。

病院での執筆なので執筆時間に制限があり、メチャクチャ手こずら  
されました。

内容はゴメデイフにほのぼの2、シリアス1で構成してます。(そ  
のつもりです)世間は夏休みという事で、暇つぶしに読んで戴けれ  
ば幸いです。(28ページもあるので茶菓子等を用意してお楽しみ  
下さい)因みにで本編とは別物と思ってもらって構いません。長く  
なりましたが、それでは 11 お楽しみ下さい。

ゴールデンウィーク明けから本格的に体育祭ムード一色になり、厳しい練習（ドッジの練習は虐めだろ？）が一昨日（金曜日）迄続いた。

俺は出場種目の変更を要求したが、結局『無理』の一言で却下されクライマックスリレーのアンカーに抜擢されてしまった（ボーナス欲しさに眼がイっちゃってる松原の独断で）

クラス練習では玉入れや綱引き等の団体種目でやることも無く（俺は出ない為）、その様子を毎回遠くから眺めていた。玉入れの練習時に、何故か恋華が籠ではなく航を狙っていた事があった。その時航が助けを求めてきたが、その後を追ってきた悪魔（恋華？）に眼で脅された為に目の前で起こる惨劇を見守る事しかできなかった。

全体練習の時に、敵軍の混合リレー出場選手が確認できた。青組はやはりクレイジー娘×2 + 美咲桜が出演していて、もう一人は3年の男子陸上部員だった。芽衣さんはあの先輩は正義より速いと思っぜ？…実業団からスカウトされてるって顧問が言ってたしな！と言っていた。航にその事を話すと、クライマックスリレーは責任重大だねえ…頑張ってるねマサ君 と他人面してプレッシャーをかけてきやがった。

全体練習も無事に終わり、安心して校舎に戻っていると、ドッジボ

ールの出場者はこのまま残ってくれ！　と言う松原の声によって地獄への門が開かれた。

では此処でドッジボールの練習風景（惨劇）の一部始終をご覧いただくと思う。

P L A Y B A C K

正義 S I D E

2日前：体育祭もいよいよ明後日に迫り、グラウンドでは選択授業を差し替えて最後の全体練習が行われていた。

今は金曜日……俺と航は先程のまで行われていた体育祭の全体練習を終えて、校舎に向かって歩いていく。

【航】

「体育祭の振休は何か予定ある？」

【正義】

「月曜日か？……うん……今のところは無いな」

本当は『おそらの庭』で、子供達に1日中ピアノを教える予定なんだがな。

【航】

「予定無いんだったら、久しぶりに俺の家に遊びに来ない？……このあいだ母さんが寂しそうに『最近……マサ君遊びに来ないね？』って言うてからさ！」

広海さんねえ〜…そういえば最近逢ってなかったな。高校入ってから一度も遊びに行っていないし、近いうち顔出しに行こう。

【正義】

「また今度にしとくよ…多分疲れ果ててると思うしな」

【航】

「解った、母さんにもそう伝えておくよ。確かにいろんな種目に出るもんね…お互い」

【正義】

「まあ…程々に頑張れ」ドッジボールの出場者はこのまま残ってくれ!」……………え?」

2人で顔を見合わせて背後からの声に振り返ると、走りながら石灰でライン引きをする松原が居た(一人一殺と書かれた鉢巻き装着済み)

【航】

「松原先生…何であんなに気合い入ってるの?…鉢巻きまで巻いてる…」

【正義】

「知らねえよ。どうせ、ボーナスが懸かってるから必死なんじゃないか?…妻子持ちだしな」

【航】

「あつ!…彼処に芽衣先輩達が居る」

そう言いながら航が指差した方に視線を向けると、青組3人が集まって何かを話していた。

【正義】

「とりあえず行ってみよう…敵だけど」

【航】

「そうだね。情報収集は大事な事だし」

2人頷き合って、青組3人の所に向かって歩きだした。

近くまで行くと、此方に気付いた美咲桜が大きく手を振り此方に駆け寄ってきた。

【美咲桜】

「A組はヒロ君と鳴海君なの？」

【正義】

「ああ。不本意ながらも…当日は軍手が必要になりそうだ」

【航】

「いい加減に諦めたら？…俺だつてイヤだよ。あんな銃弾みたいなボール、捕球できる訳ないんだから」

【美咲桜】

「そんなに凄いの？」

人が次々と吹っ飛んでいく様な球って言ったら……どついつ反応をするんだろっ？

【正義】

「まあな…美咲桜達のクラスは、競技説明の映像を観てないのか？」

【美咲桜】

「うん。なんか観ない方が良いつて言つてて、見せてもらえなかった」

【航】

「それ正解！…もし観てたら棄権者続出だったと思うよ？」

【松原】

「良しっ！…色別に別れてコートに入れっ！…ジャンパーは真ん中に来い、直ぐに始めるぞ」

【美咲桜】

「準備が終わったみたいだね…じゃあ2人共、怪我には気をつけてねっ！…それじゃ！」

【航】

「俺達も行くつか……戦場に」

【正義】

「だな。芽衣さんに狙われない事を祈るしかない」

美咲桜に続いて、俺達も赤組のコートに入った。青組のコートに視線を向けると、亜沙美と美咲桜が此方を指差して何かを話していた。

【航】

「あの2人よりも芽衣先輩に注意しよう。ジャンパーだから、捕球したらそのまま狙って来るよ…こっち観てニヤニヤしてるし」



航の声に反応してジャンパーに視線を向けると、芽衣さんは此方を観ながらニヤニヤしていた。

【正義】

「なあ……俺達って明らかに狙われてない？」

【航】

「間違いなく狙われてるね！……まだ死にたくないし、頑張っ  
て避けよう？」

【松原】

「んじゃ始めるぞっ！……レディ……ゴーツ！！」

松原がボールを高く投げると同時に、ジャンパー3人がボールに手を伸ばし跳躍した。

チツ…捕ったのは緑かよ。とりあえず後ろに下がるか。先ずは様子見だな……青狙いか。

【緑組男子】

「食らえっ！」

陣地に転がって来たボールを拾った男子が直ぐに、青組女子を狙ってかなり速い球を投げた。

【芽衣】

「おっと！…まさか女から狙うとは思わなかったぜ」

【青組女子】

「あつ…ありがとう園田さん！助かったわ」

ボールの軌道上に体を滑り込ませ、味方の女子を庇う様に捕球していた。礼を言ってきた女子を手で征すると、ボールを投げってきた男子を鋭い視線で睨みつけていた。

【芽衣】

「弱い女から狙う卑怯なテメエは……………死ねやぁーっ！！！」

ライン際まで助走してからアンダースローの体制で、地を這う矢のようなボールを投げた。

【緑組男子】

「こんな球！……………跳んで避けグハァーっ！！！」

【一般の選手全員】

「ええええええー……………っ！！！！？」

【正義】

「ズドン！って音したよ今……………何アレ？」

芽衣さんが投げた地を這う矢のようなボールは、跳んで避けようとした緑組男子の目の前で急浮上した。そのままボールは彼の腹に突き刺さり、彼はコートの外まで吹っ跳んでいった。

【航】

「さあ？…ただ、これだけは言える……………絶対に無理っ！！！」

ボールは青組のコートに跳ね返っており、彼女はボールを弄びなが

ら捕食者の様な眼で次の獲物を捜していた。

【芽衣】

「次は…ダレ逝つとくか？アイツ等はメインディッシュだから……  
……とりあえずお前は逝つとけ！！！」

【赤組男子】

「フツ…捕ってみせギャー……ッ！！！」

こつちを観ながらメインディッシュとか言つてたよね？……とか考  
えてる間に、斜め前に居た赤組の先輩が跳んでいった。

【亜沙美】

「園田先輩っ！次は私が殺りたいですっ！！！」

【芽衣】

「亜沙美か…ほらよっ！……あの2人以外は殺つちまっつて良いぞ  
っ！！！」

芽衣さんは眼を輝かせて近寄つて来た亜沙美にボールを手渡してい  
た。もうこの際、字が違ふ事に突っ込むのは止めよう…キリがない。

次は亜沙美か……そこはかたなく嫌な予感がするな。…『ドゴーン  
！』とか『ズドーン！』みたいな、あり得ない擬音が耳に届かない  
事を祈る。

因みに『あの2人』とか言いながら、思いつきり此方を指差してま  
したが何か？

【亜沙美】

「さして、誰から殺つちやおつかなあ？……赤組に投げたらあの2人に当たるかもしれないからっ！……キミから逝つちやえ！！」  
軽く助走をつけてから緑組男子に向けて、オーバースローの体制から矢のようなボールを放った。

【緑組男子】

「コレなら捕れる！……良しっ！……なっ！？……馬鹿ぐはあーっ！……」

【一般の選手全員】

「ドゴーン！……ってナニ？」

【正義】

「ドゴーン！って音したよ今……何あの球！？」

普通のバックスピンじゃない回転の仕方だったな……捕球した両手を弾き飛ばしやがった。しかも喰らった奴うづくまってるし……でも芽衣さんのと比べたら遅いし、球威も無さそうだな。……俺に捕れるか？

【航】

「ジャイロボール！？……今の絶対スパイラル回転してたよっ！？」

ああ！野球で速球派の投手が投げる……ってコレ野球じゃない！……ドッジボールだしっ！！

【正義】

「お前、アレ捕れる自信ある？……俺は勝算70%位かな、不安要

素がまだ多いけど……」

とりあえずあの回転が厄介だな……回転に対して逆に回転を与える様に捕球しないと、弾き飛ばされる可能性が高いな。球威も吹っ飛ばない位なら問題ない……スピードはあるけど、もし捕れなくてもアレ位なら避けられるしな。

【亜沙美】

「次はっ！……キミが逝っちゃえ！！」

【緑組男子】

「こんな球っ！……ギャーッ！！」

気がついたら、また1人チャレンジャーが亜沙美の投げる球の餌食になっていた。

【航】

「うーん……芽衣先輩のアンダーやオーバーローに比べたら捕れそうだよ。……処理できなくても、あのスピードなら避ければ良いだけだしね！」

コイツ……捕る気あるのか？……下手したら永久コンボだぞ？

【航】

「まあ何とかなるよ！……避けて外野に拾って「次はテメエだっ！！」……もらえば「ぐギャーッ！！」…………良いだけだしね……」

今度は芽衣さんか……今のはオーバーローだったな。やっぱりアンダーよりも速い、球威は同じ位か……軌道から考えても捕るならこっちだな。でも避けるのはギリギリだし……そもそもアレを捕れるか

なあ…俺？

【正義】

「外野か…確かに亜沙美はそれでなんとかなる。……でも芽衣さんはどうする？…アンダーは避けるとして、お前はあのスピードのオ―バーを避けられるのか？」

【美咲桜】

「次は私の番だねっ！…逝つくよぉ〜！…！」

声に反応して美咲桜に視線を移すと、サイドスローで女子には結構速い球を投げていた。

【赤組男子】

「この程度のスピードでっ！…なにい！…！」

美咲桜のは……フォークボール？…胸の高さから膝下まで落ちたな、とんでもない落差だ。……初見じゃまず捕れねえよ、あんな落差のフォーク。

【航】

「アレは捕れるっ！……本番でアレだけなら良いんだけど」

【正義】

「俺も同感。…美咲桜にしてはスピードも球威も無いし、本気で投げてない様な気がする」

【航】

「っていつか…俺達、ボールに触れてくない？」

【亜沙美】

「逝ってらっしゃい!!」

【赤組男子】

「俺なら捕れるっ!! ツ!? ……訳な……… かった……」

そういえば触れてないな………段々味方が減ってきてるし。

【航】

「マサ君っ!! ……ボールこつちに残ってるよっ!! ……はい、パス!」

漸くボールに触れたな…練習だから青組の3人は狙わないとして、誰から殺るかなあ………航に選ばせてやるか。

【正義】

「サンキユ。因みにお前、青と緑どっちの色が好き?」

【航】

「青かなあ? ……山よりは海派だからね!」

【正義】

「そうか、海は溺れるから嫌いか! ……じゃあ青組に死んでもらうとしよう! ……逝っちまいなあーッ!!」

【青組男子】

「なっ!! ……速グボア!!」

とりあえず近くに居た男子を1人殺っておいた。ボールも戻って来たし、言うこと無いな!

【航】

「ちょ！…俺が狙えって言ったみたいに言わないでよ！！」

大きな声出しちゃって…そうか、そんなに目立ちたいのか。じゃあ絶叫でもしてもらうかな……死ぬなよ。

【芽衣】

「殺ってくれるじゃねーかつ！！…お前等そんなに死にたいなら早く言えよ？」

予定通り食い付いてきたな…後一押しでお前は人柱確定だ。

【正義】

「コイツが『青なんて色は見るのも不愉快だから消せ』って、さっきから煩いんですよ」

【航】

「ちょ！？芽衣先輩っ！…俺じゃなく」わあゝたあゝるうゝゝツ！  
「……………ヒイ！！！」

さてと、後はボールを向こうに残すだけ……………楽勝ゝ

【航】

「まだボールは俺達にある！…渡さ無ければどうという事は無い！  
」！」

……………甘いよ航…激甘だよ！！…手元が狂えば何とでもなるのだよ  
！！

【正義】



「くらえやー（棒読み）」

前に出ていた青組男子の顔面めがけて、ボールを思いっきり投げつけた。

【青組男子】

「なっ！……顔面はセグフツ！」

【松原】

「七瀬…惜しかったな？…顔面はセーフだから、青ボールで再開だっ！！」

【航】

「えええ〜〜っ！？」

先程までの強気な航は完全に消え去り、後方のライン際ギリギリまで物凄いスピードで後ずさった。

【芽衣】

「航う…オレは優しいから選ばせてやるぞ？…上と下…どっちで逝きたい？」

指の上でボールを回しながら、満面の笑顔で死刑宣告を告げた。

【航】

「……………女の子らしいボールをお願いします！」

【正義】

「バカヤローツ！……お前！なに禁断の呪文唱えてん」「女の子らしいだあ！？」……………だ！？」

ゴゴゴゴゴ

何か大地が震える音がするんですケド!?!?! ヤバくない?

【芽衣】

「オレはそんなに男みたいか!?!?!?!?! ならっ!男らしく殺してやらアーーーーーッ!?!?!?!」

!?!?!?!?! レーザー光線!?!?!?!?!

【航】

「ちょ!?!?!?!?! 避けラグハアーーーーーっ!?!?!?!?!」

とまあ、こんな感じで殺つたり殺られたりが1時間程続いた。結局赤組は俺達2人以外全滅（航は顔面ブロックでセーフ）、緑組は全員殲滅された。青組は例の3人+女子1人が生き残った（俺が本気を出せば、殺ろうと思えば殺れた……と思う）

因みに芽衣さんの餌食になった男子生徒（女子は全員、美咲桜が処理していた）は全員保健室送りで、亜沙美に殺られた男子生徒は腹をおさえてウンウンと唸っていた。

P L A Y B A C K

E N D

………という訳で今日は体育祭当日、先程いつもの様に迎えに来た鳴海家のリムジンに乗り込んだ。

【航】

「ドッジボールコワイ！ドッジボールコワイ！ドッジボールコワイ  
！！」

隣に座り頭を抱え、此方を観ようとせせず繰り返して呟いていた。

「昨日のトラウマ？…しかし、顔面セーフのルールは使えるな。ド  
ツジも総合ポイント次第で勝つ必要性が出てくるし、死なない程度  
に頑張ろう。」

【正義】

「大丈夫だって！…赤組がリードしてれば無理に一位狙わなくてす  
むからさ？…そうならない様に『男らしく』頑張ろうぜ？」

酷い怯えっぷりだったので、久しぶりに航の操作ワード『男らしく』  
を使ってみた。

【航】

「男らしく？…そうだっ！…俺は男！…青組には負けねえ！  
！」

相変わらず単純な奴だ……今度は熱くなりすぎでちよっとウザいな。  
…なんか最近のコイツは微妙に扱いづらいなあ。

【正義】

「まあ…程々に頑張ろうぜ？……配点高い種目だけは…」

俺は1500×2と混合リレーにクライマックスの4つ、普通に多  
いな。

【航】

「配点高い種目か……俺は混合リレー位しか無いから、出場種目は青組に全力で勝ちに行くよ……！……ドッジボールを棄権できる様に、お互いに今日は頑張ろうねっ！」

勝とうと思えば勝てるんだけどなあ……亜沙美を自力で殺れればだ  
けど。

【正義】

「ああ……まだ死にたくないしな！」

校門前で車を降り、打倒青組の作戦を考えながら教室に向かった。

【正義】

「はよーっす！」

【航】

「おはよー……今日は頑張ろうね！」

【女子A】

「七瀬君っ！今日は頑張っつてね！」

【女子B】

「七瀬君って、クライマックスリレーのアンカーだよね！？…私達も応援頑張るから、頑張ってるねっ！」

【女子C？】

「鳴海君…私…応援…してる…から…頑張ってる…」

教室に入るなり何故か激励を受けた。無視されてプルプルと肩を震わせている（凹んでいる？）航を残して席に着いた。

【女子C？】

「鳴海君？…どうかしましたか？…お顔が赤く「ふっ」…ふっ？」

【航】

「…ざけんなっ！…なにが女子Cだっ！…立ち絵が無いキャラに為りすましてから手の込んだマネすんじゃないっ！…！」

立ち絵？為りますます？…何の事を言ってるんだ。恋華がちよつと声色と言葉遣いを変えただけじゃないか。またギャルゲーの電波でも受信してるのかな？

【女子C？】

「チツ！…使えねえな！このシャバ憎があ！…イジられキャラの分際で…」

【航】

「誰だよソレっ！？何キャラなの？ワケわかんねーよ！いい加減に名前枠を修正してよ！ハアハア…疲れた」

【女子C？ 恋華】

「本来の台詞は……えーつと?…うええ!?!?…おはよー2人共!  
!今日は頑張ろうね!(棒読み)」

誰だ?…廊下でカンペ持つてる奴。何々……………

恋華様専用

ゴメン!恋華ちゃん!!

航の馬鹿がネタに気付くの早すぎて尺が余る!

ツッコミも微妙で間がもたないから台詞アドリブで尺稼いで!

エキストラから笑いも取って!(余裕があれば良いです!)

音×恋

尺とかエキストラって何?…何かの撮影してるのか?

【航】

「ハア…朝っぱらから疲れたよ…」

椅子に座るなり机に突っ伏して、魂の抜けた様な声を出した。

【恋華】

「マー君、今日は頑張って絶対に総合優勝しようね!?!」

さっきのはスルーなの?…スゲー聞いてみたい。…でも聞いたら、  
取り返しがつかない様な事になる気がするんだよな。

【正義】

「あ…ああ。頑張ろうな…」



「甘い！……ドッジボール前でケリをつけないと、俺達2人は人柱確定なんだよ？」

緊急回避シールドの分際で何を偉そうに……人柱確定なのはお前だ！

【松原】

「あからさまなのは、注意や減点の対象にされるから気をつける。ルールブックに書いて無い事は反則にならないから、遠慮なく殺つてしまえ！……後は怪我しな「ハイ！……質問です！」……どうした鳴海？」

航が勢い良く椅子から立ち上がり手を挙げた。

【航】

「例えば……玉入れには『自軍の籠に玉を多く入れたチームの勝ち』としか書いて無いって事は、さっき先生が言ってた2つは反則にならないって事ですよね？」

【松原】

「そつだ！……まだあるから、自分の出場種目は良くルールを確認しとけよ！……今40分だから……55分迄に着替えてグラウンドに集合！……解散！」

【恋華】

「航！……また後でね〜！」

女子は更衣室で着替える為に教室を出ていった。

【航】

「生き残る為には……最初から全力でいかないとね！」



【正義】

「お前…たかがドッジにビビりすぎだろ？…ちゃんと秘策を用意してるから心配するな……………多分な（ニヤリ）」

【航】

「本当に？…満面の笑顔でサムズアップしながら言われても……………信じてもいいのだろうか」

【正義】

「いいのだろうか？…って、誰に説明してんだ？…心配するなっ！  
亜沙美を殺れれば330%勝てる！」

【航】

「330%って偉く中途半端な数字だね……………要は亜沙美ちゃんさえ殺せば、楽勝って事だよな？」

【正義】

「YES！…だからそう悲観するな。お前は敵を掃除しながら、亜沙美か美咲桜のボールでもキャッチしとけ。……………あの3人は俺が殺るからさ」

ルールでは開始から30分経過するか、1チーム以外全滅で競技終了だからな。

前者なら俺達2人が残ったら、青組3人のうち2人を殺れば勝てる。でも結局は後者なんだろうなあ？…あの3人の火力なら、10分もあれば終わる気がする。

でも芽衣さんを速攻で倒せれば、俺達さえ死ななければ絶対に勝て

る！……俺がジャンパーになって速攻……が一番手堅いかな。

【航】

「良しっ！……着替え終わったし……鞆なんて開けて、どうしたの？」

確かこの辺に……あつた！……コレが無いと手がボロボロになるからな。

【正義】

「ほらっ！……軍手やるからポケットに容れとけ……んじゃ行きますか！」

軍手を受け取り、ぼーっとしている航を置き去りにして教室を出た。

【航】

「ちょっと待ってよ！……マサ君の分は？」

俺はジャージのポケットからライダーグローブを出して、装着して見せてやった。

【航】

「へえ〜考えたね……それなら高速スピも平気そうだ！……安心して任せられるよ」

ルールの欠点を話しながら、昇降口で靴を履き替えてグラウンドに向かった。

【松原】  
「1 Aはこっちだ！…急いでくれ！他のクラスはもう整列終わってるぞ。…順番はどうでもいいから真っ直ぐ並べ」

松原の声に反応して視線を向けると、最後尾で恋華が此方を向いて手を振っていた。2人頷き合ってから、小走りでその後ろに並んだ。

【松原】  
「良しっ！…全員居るな、直ぐに開会式が始まるから大人しくしてろよ？」

そう言い残し教師の立ち位置に向かった。

【恋華】  
「遅かったねえ……どうかしたの？」

恋華は体操服に着替えて、額には足元まで届きそうな長さの赤い鉢巻きを装着していた。

鳴響の体操服は、男子はオーソドックスな半袖に色違いのハーフパンツ（制服と同様にパンツの色で学年が解る様になっている）因みに俺は1年の赤いハーフパンツの上にジャージを穿いている。

女子の格好は男子と同じ風通しの良い半袖、下には色違いのブルマを穿いている。（恋華は1年だから赤）

【航】  
「裏技とか色々だね?」「ハイ。コレ着けてね!」…鉢巻きは全員着けるの?」

恋華は航に鉢巻きを渡して俺の背後に移動した。

【恋華】

「マー君はアタシが着けてあげるね!…髪サラサラで羨ましい!…良しっ!コレで高めに縛ってポニーテールにしよう!…うわあ〜綺麗…マー君って本当に男なの?」

なんかちよつとだけ痛い…いつもは下の方で纏めるから慣れてないせいか?航…そんなニヤニヤした顔で此方を観るな。いつもの女装ネタの仕返しか?

【航】

「本当に綺麗だよ!…俺が女だったら間違いなく惚れてるね!」

ニヤニヤしやがって…相当根に持ってやがるな?

【正義】

「それだけは勘弁して!…それに惚れても、俺の一番は予約済みだから無理だぞ?」

【航】

「なっ!…想像する暇も無くフられた!?…何か複雑な気分だ」

【恋華】

「キャハハハハ…フられてるう〜!」

【校長】

「ゴホンッ！……ではこれより第40回、体育祭の開催を此処に宣言する！」

パチパチパチパチ

校長が壇上から降りるのと入れ違いで松原が壇上上がった。

【松原】

「えー体育祭運営委員長の松原です。…今から軽く挨拶と注意事項を説明するから良く聴いてくれ！…雲一つ無い快晴で本番を迎えられた事を嬉しく思います。えー今日は保護者の方々も大勢いらっしやっているから、迷惑をかけない様注意を払って各自行動するように。……長話はしないからもう少しだけちゃんと聴いてくれよ？…えー今日は赤青緑の3色に別れて、互いに競い合い…高め合えるよう、全員死力を尽くすように！…後は自分の出場種目の前は5分前行動を心がけてくれ！…種目数が多いので各自、進行が遅れてしまわない様な行動をする様に！……以上だ……では解散！」

【航】

「マサ君と俺ってしょっぱな出番だね？」

【正義】

「ああ…400だろ？さっさと行くぞぜ！」

集合場所に集まると直ぐに競技がスタートした。一周400のトラックを半周したら次の組がスタートするため、進行はかなり早い。

【航】

「次は俺の組だ…行って来るよ！」

【正義】

「ウケを狙うなよ！…一位以外は罰ゲームだからな」

学年別男子400進行中

【航】

「楽勝…お互い余裕だったね？」

【正義】

「美咲桜が『もし負けたらー』とか叫んでたからな…恐ろしくて負けられねえよ！」

2人共一位を取ってから1 Aの待機場所に戻って、女子400を観ながら話していた。

【航】

「おっ！…美咲桜ちゃん出て来たよ？」

スタート地点に視線を移すと此方を向いて両手をブンブンと振っていた。

【正義】

「余裕だなあ…流石は学年トップ」

【航】

「スタートしたっ！……独走だ「美咲桜頑張れーっ！」……声デ  
かっ！」

美咲桜はスタートから一気に後続を引き離すと、そのまま一位でゴールを駆け抜けた。

【正義】

「声がデかいのは当たり前だ！…知らない奴ならいざ知らず、親しい友人が走ってるんだからな！……他の奴がどうなるうと知ったこ  
つちゃけど」

【航】

「ゴメンって！……あっ！…次の組、恋華と亜沙美ちゃんが走る  
みたいだ！」

2人はスタート位置で睨み合っていた。

【正義】

「あの2人って仲悪かった？……周りの人達引いてるんだけど」

【航】

「イヤ普通でしょ？…勝負事だからお互い熱くなって「おっ！スタートしたぞ！」……恋華負けるなーっ！」

2人は緑を置き去りにして競り合っていた。良い勝負だな……どっ

ちが前だ？

【航】

「微妙に負けたっぽい」

【正義】

「ああ多分……………残念だったな？…戻って来たら慰めてやれ」

ガッツポーズしている亜沙美と地に両手を突いて落ち込んでる恋華、  
どちらが勝ったかは一目瞭然だった。

暫くして怒り狂った恋華が戻って来たが、航が体を張って周囲への  
被害は食い止めた。

【恋華】

「芽衣先輩だ！……………うわぁ……………メチャクチャ速いね！」

【正義】

「速っ！…1500はキツそうだなあ」

【航】

「独走だったね……………これは混合リレーも注意しないとね？」

2位を100メートル近く引き離してぶっちぎりの一位だった。

【恋華】

「皆次の800出る事になってるけど、2人はまだ行かないで大丈  
夫なの？」

【航】



「まだ今走ってる三年女子が結構残ってるし、大丈夫でしょ？」

確認の為スタート地点に視線を移すと、10組どころか半分の5組しか居ない。

【正義】

「おいおい、じゃあ急がないとヤバくないか？……後4組しか残って無いぞ！」

【航】

「嘘っ！……さっきまで10組位は居たのに！……ほら、マサ君行くよっ？」

【正義】

「ちょ！……引っ張るなって」

航に腕を引っ張られて、ズルズルとスタート位置付近に向かった。

【恋華】

「2人共頑張ってね〜！……フフッ……亜沙美い〜、次はアンタがアタシにひれ伏す番よ〜！」

学年別男子800進行中

待機場所に戻って来ると、クラスメートから 一位おめでとう！  
次も頼むぞー！ 等の言葉を掛けられた。

【正義】

「本当にこの学園は運動音痴が多いな？」

【航】

「そつだねえ〜…でもこっちの組は中々速い奴が居たよ？」

女子の出番を待ってる間、お互い先程の戦果について話し合っていた。

【正義】

「どうせ陸上部なんじゃないか？……芽衣さんって、軟弱な後輩にはスパルタだしさ」

【航】

「そっか…いつも『それでも男かぁー！』って部活中に叫んでるもんね。それよりも……気になる事があるんだけど」

【正義】

「何だよ？…真剣な顔して」

いきなりその場から立ち上がり、右腕を明後日の方向に向けて空の彼方を指差した。

【航】

「俺達が走ってる時……凄い『はしょられてる』気がしない？……」

ウソツ！もう終わってんのっ！？…みたいな？」

【正義】

「何を言ってるんだ？…お前は電波でも受信してんのか？」

はしょられてる？…コイツ、ギャルゲーのやりすぎで頭が病んで  
いるのでは。

【航】

「なにその『頭でも病んでるの？』みたいな顔…俺は至って正常  
だからっ！」

何で解ったんだ？…俺ってそんなに顔に出るのか？

【正義】

「あれって美咲桜と恋華じゃね？…同じ組みみたいだな」

航をいじるのに飽きたので、スタート地点に視線を移すと2人が睨  
み合っていた。

航…暴走止めるの頑張れよ。

【航】

「また暴れる恋華を止めるのか。ハア…気が重い」

自分の立ち位置、良く解ってるじゃん。おっ！スタートした…  
案外良い勝負か？

【航】

「恋華あーっ！美咲桜ちゃんに負けるなーっ！」

美咲桜は走りながらこっちに視線を向ける程余裕があった。

【正義】

「残念 美咲桜は、こっからが………ほらな？」

一周目は横一線だったがラスト半周でスパートをかけると、あっという間に2人の差が開いた。

【航】

「ねえマサ君…恋華を宥める役………交代しない？」

美咲桜は自分のクラスの待機場所に向けてピースサイン、恋華は地面に膝を突き頭を抱え何かを叫んでいた。

【正義】

「無理だ」

【航】

「嬉しそうだねっ！？ハア………次の次は亜沙美ちゃんの組か」

そりゃ〜嬉しいにきまつてるよ。……さっきは抱き着くと見せ掛けた『サバ折り』だったし、次は何かなあ〜？

【正義】

「まあ何とかなるって？………しかし、美咲桜はやっぱり要注意だな。スピードあるし…持久力も申し分ない、流すのは無理そうだなあ〜1500は……」

【航】

「うええ！？…2種目とも流してあの速さなのっ！？」

コイツは何『マジで！？』みたいな顔してんの？……11秒後半位で走ったつもりなんだが、ペース狂ってたのかなあ。

【正義】

「お前だつて本気じゃ……ほらっ亜沙美が走ってるぞ？」

【航】

「おお〜！…あの緑の娘速いね？亜沙美ちゃんが抜かれてる」

あの娘……陸上部員か？フォームに無駄がない綺麗な走りをするな。

【正義】

「亜沙美はまだ余裕が……あるにきまつてるよね」

抜かれた後をピッタリ着いて走っていたが、最後の直線でスパートしてゴール前ギリギリで抜き去った。

【航】

「スタミナは底無しみたいだね？…純粋なスピード勝負で勝つしか無さそうだ」

確かに…スタートから逃げ切るしかないな。

【正義】

「おっ！…丁度一年生が終わって……芽衣さん最初の「イギヤー」ッー！」……航？」

【恋華】

「ああー悔しい！…またっ！…負けたっ…じゃ…ないっ！」

叫び声に振り返ると、航はコブラツイストを極められていた。

【航】

「ちょ！…イタタタッ！…また次「アンタがつ！確り応援っ！…しないか…らっ！」…俺のせギヤーツ！…？」

【正義】

「俺はイチャついている2人を見なかつた事にして、走っている芽衣さんの応援をする事にした。…めいさんがんばれー！（棒読み）」

【航】

「ちよつと！…誰に説明してんの！？…それにイチャつイタタタッ！…ギブギブギブギブッ！…！」

【恋華】

「…ああー！航虐めたら漸く気が晴れたよ。芽衣先輩はどうだった、マー君？」

【正義】

「お疲れ。残念だったな？…芽衣さんは、彼処で仁王立ちしてる」  
ポロポロになってシートに倒れている航を置き去りにして、恋華が此方に寄って着た。先程の戦果を労ってから、『1』の旗を持って仁王立ちしている芽衣さんの方を指差した。

【恋華】

「芽衣先輩が一位取る度、黄色い歓声が凄いな？」

【正義】

「ああ…それよりも彼処で転がってるゴミは大「誰がゴミだった？」……丈夫みたいだな」

航は顔を伏せたままユラリと立ち上がると、ゆっくりと此方に歩いて来た（ちよつと不気味だった）

【航】

「ハアハアハア…ハア…助けてよ…マジ死ぬかと思った！」

【恋華】

「アンタなにハアハア言ってるの？……コブラツイスト萌え？」

萌え？……恋華も時々ワケわからない事を言うよな…電波カップル？

【航】

「恋華のせいだろうっ！？……ハア…もう良いよ、どうせ俺が全て悪  
「良く解ってるじゃん？」………理不尽だ」

今頃気付くなよ……恋華に頭撫でられてるし、逆に慰められてんじやねーよ。

【恋華】

「マー君？…美咲桜が向こうから凄いスピードでこっちに走って来てるよ？」

ト  
ト  
ト  
ト  
ト  
ト  
ト

指差した方に視線を向けると、砂煙を舞い上がらせながら走る美咲

桜の姿が確認できた。

【美咲桜】

「ヒョロ君っ！…私の活躍観ててくれた？」

此方に来るなり正面から抱き着かれた。

【正義】

「一位おめでとう。…ちゃんと観てたよ？……よしよし」「ふにゃ  
〜」…頑張ったな！」

頭を撫でてやると気持ち良さそうに眼を細めて、猫みたいに身体を擦り寄せてきた。

【恋華】

「美咲桜は玉入れには出ないの？……もうすぐ始まるよ？」

【美咲桜】

「にゃふ？……出ないから此処に来ただけど？」

身体を離して返事をする、今度は右腕に抱き着いてきた。……  
…にゃふ？

【航】

「じゃあ俺達は行くよ……ちゃんと観ててね！絶対に青組を潰して  
くるから」

【恋華】

「フツツ…亜沙美い！今度こそ逃がさないよ？」



2人は立ち上がり、不気味に笑いながら集合場所に歩いて行った。  
……航も裏表でだいぶ雰囲気変わるな。恋華の毒に侵されてない  
と良いが、多分手遅れだろうな。クケケケケッ！とか聞こえ  
るし。

【美咲桜】

「ねえ？…ヒロ君は何で玉入れに出なかったの？」

【正義】

「ん？…俺が寝てる間に全部決まってるから……出なかった訳じゃないよ？」

【美咲桜】

「小学校の頃から変わらないねえ…委員会とか演劇の配役決める時とか、絶対にヒロ君寝ちゃってたもんね？」

懐かしいなあ…あの頃はクラスの皆に無視されてたし、どうせ俺が言っても相手にされないから寝てたんだよな。

【正義】

「ハハッ！そうだったな。寝た後いつも起こしてくれてたよな？」

【美咲桜】

「あの頃のヒロ君の寝顔は可愛かったなあ…ころ！抱きしめたくなる様な！」

言いながら腕を抱きしめる力が強くなった。…右肩に載せてきた頭を軽く撫でてやり、玉入れの準備をしているトラックの中に視線を向けた。

【正義】

「美咲桜？…甘えるのは後！ほらっ！玉入れが始まるみたいだぞ？」

【美咲桜】

「ヒロ君？…久しぶりに『アレ』…して欲しいな？………ダメ？」

そう言いながら顔を真っ赤にしてモジモジしていた。

アレねえ〜？……冷やかされそうだから気が進まないけど、こんな顔されたら断れねえよな。

シートに座って伸ばしていた足を戻して胡座を組んだ。

【正義】

「これでいいんだろ？……おいで」

美咲桜の方に視線を向けて、胡座を組んだ足をポンポンと叩いてみせた。

【美咲桜】

「おっ邪魔っしまあ〜す」

【正義】

「早っ！？…ハハッ！……しょうがねえな〜」

凄く早さで胡座を組んだ足の上に座ってきて、此方に身体を預けてきた。

【美咲桜】

「感触といい座り心地といい……やっぱりヒロ君は最高だねっ」  
八八ッ…最早何も言うまい。俺も美咲桜になら、座られるの嫌いじゃないしな。

【正義】

「ほらっ！…俺の顔ばっか観てないで、玉入れを観ないとな？」

【美咲桜】

「うん。……あっ！始まった」

美咲桜から視線を移すと恋華と亜沙美の2人が両手でガッチリと組み合い、お互いに牽制しながら睨み合っていた。

【美咲桜】

「亜沙美いーっ！…恋華は無視して鳴海君を止めてー！」

牽制し合って動けない2人を無視しつつ、航は3人の男子を引き連れ敵陣に突っ込もうとしていた。

【航】

「お前等は俺の盾だっ！向かって来る奴は全力で排除しろ、俺は籠を殺る！……突撃いーっ！……！」

【航の手駒？x3】

「おおおおー！……っ！……！」

どっだけ声デかいんだよ……軽く100メートルは離れてるんだが。

【正義】

「……………おお〜！殺りやがった。…良いぞー航っ！緑は無視して戻れーっ！」

航は籠の下の棒を支えている選手を蹴り飛ばして、（バレてないの？）青組の籠を倒す事に成功していた。

【美咲桜】

「ああ〜あ…負けちゃった。鳴海君と恋華の作戦勝ちだね…」

赤組の籠を男子で守備を固めて突撃した航の作戦勝ちだな。……………しかし亜沙美に恋華をぶつけて無効化するとは、航…なんて恐ろしい子。

【正義】

「残念だったな……………よしよし…自分の「美咲桜おーっ！何処だーっ！」……………え？」

頭を撫でていると叫び声でしたので、振り返ると芽衣さんがすぐ後ろに仁王立ちしていた。

【美咲桜】

「は〜い？…どうしました先輩？」

座ったまま振り向きもせずに戻事を返した。

【芽衣】

「おい正義！……………美咲桜はこの辺に居るのか？…声が聴こえた様な気がしたが…」

【正義】

「此処に居ますよ！……俺に座ってます」

首だけ後ろを振り向いて、美咲桜が見える様に体の向きを変えた。

【芽衣】

「また正義とベタベタしてたのか？ハア……次の障害物競争に出るんだろ？……さつきから担任が顔を青くして『桐原さん！何処ですかー？』って泣きながら捜してたぞ？」

泣きながら？……どのクラスの担任も苦労してんだなあ。

【美咲桜】

「はい……じゃあねヒロ君！……頑張るから応援宜しくね？」

【正義】

「応援するから頑張れよ！」

立ち上がると此方に手を振って、集合場所に向かって走って行った。

【芽衣】

「味方の応援もしないで美咲桜とベタベタしてるとは、正義も余裕だなあ……まあお前達がいくら頑張ろうが、どのみち勝つのはオレ達青組だけだな！」

ニヤニヤしながら、座っている俺を見下ろす様に挑発してきた。

美咲桜は関係ないだろ！なんだあのニヤけた顔は？……それに上から目線なのが気に入らない。……何があったかは知らないし、芽衣さんらしくない行動だけ………上等だっ！売られた喧嘩は買わねえとな！！

【正義】

「ハハッ！……喜んでいられるも今のうちですよ？」

立ち上がったって顔を近付けお互いに睨み合った。（周囲に人垣が出来ていた）

【航・恋華】

「ねえ？…2人「んだよ！！」……ヒイ！！！」

いつの間にか近くに居た2人が話に割り込んできたが、気が立っている芽衣さんに睨みつけられてガタガタと震えていた。

【芽衣】

「言ってくれるじゃねえーか！……青組はオレが絶対勝たせてみせる、殺れるモンなら殺ってみなっ！！！」

【航・恋華】

「……………マサ（マー）君も止め「黙ってる！！」……………」  
「ごめんなさいいー！！！」

あそこまで言われて引き下がったのか？……冗談じゃねえ！

【正義】

「言われなくても……午前中ラストの1500でどちらが上か、ハッキリさせてあげますよ？」

【航・恋華】

「……………」

【芽衣】

「有言実行…楽しみにしてるぜ？……………ああそうそう！さっきまでの温存した走りじゃオレには勝てねえから、全力で来いよ？」  
そう言い残し踵を返してその場から立ち去った。……………全力を出させる為の挑発か？……………まあ考えても仕方無い…そこまで言うなら望み通り、全力で勝ちにいくだけだ。

【恋華】

「マ…マー君？…とりあえず冷静になる？」

【航】

「そ…そうそう！…リラックスリラックス！」

そんなに恐い顔をしてるのか俺は？…俺が熱くなったせいで無駄に心配かけちまった、それに皆も引いてる。

【正義】

「2人共すまなかつたな？…美咲桜の名前出されてカツとなつちまった」

【恋華】

「良かったあゝ……………いつものマー君だ！」

【航】

「マサ君？…知り合いの前ではキレない方が良い。……………その場に居合わせた人は、マサ君が自覚してる以上に恐がってるんだから…」

自覚してる以上に…ね。本気でキレた訳じゃないんだけどな。





【恋華】

「さつきチラツと観たけど……美咲桜が一位で亜沙美は……クスツ  
…三位だったよ。…因みに綱に絡まって『このボクが…こんな綱  
ごときで負ける?…悔しいーっ!』とか叫んでたよ?」

それは是非観たかったな。……障害物競争が終わったって事は、え  
ーっと…次は学年別リレーか?その次が綱引き…騎馬戦と続くんだ  
よな。

【正義】

「次の学年別リレーって、まだ行かなくても良いのか?」

スタート地点に視線を移すと、かなりの人数が集まっていた。(松  
原?が此方に何かを叫んでいた)

【航】

「行かないとマズイかもね?…松原先生?がこっちに何か言ってる  
し」

【恋華】

「松原先生?…が呼んでるみたいだし2人共早く行こうっ!」

誰も『松原?』に突っ込んでくれなかった……虚しい。

学年・男女別200×4リレー進行中

俺達のチームは一位で、恋華のチームは緑に負けて二位。美咲桜のチームは健闘虚しく赤に敗れて二位、亜沙美のチームは第一走者が転倒して遅れを取り戻せず三位だった。芽衣さんのチーム？……  
……当然一位ですが何か？

【航】

「絶対に俺達だけ、はしょられてるよ！……俺達のチームは一位」  
「って他に何かあるでしょ！？」

【正義】

「そつちか……俺としてはさっきの『松原？』に突っ込んで欲しかった……」

【恋華】

「一位取れただけマシじゃん？……アタシ達は二位だったのにさ」

3人で待機場所に戻り、シートに座り込んで先程の戦果？を話し合っていた。

【正義】

「スルー？……やっぱりボケはむいてないのかな……残念だ」

【航】

「まあまあ……あの『はしより』が無ければ間違いなく突っ込んでたから、落ち込まないですよ？」

【恋華】

「総合ポイントはまだ、青組に少し負けてるなあ？……頑張ろっ！」

【正義】

「会話にも絡まないのかよっ！………もうええデス」

【航】

「ちょ！……語尾がヤバいつて！？………アレ？俺達何か忘れてない」

【恋華】

「何かつて？……橘さんと鳴海君？……先生が、綱引きが始まるから早く来いって言ってたよ？」………あああああ………！！  
！……すっかり忘れてた！………教えてくれてありがとう、ほらっ！航っ！  
！さっさと行くよっ！？」

【航】

「解ったから引き摺らなイヤア………！！！」

航は襟を掴まれてズルズルと引き摺られて行った。

やれやれ……忙しい奴等だ。戻って来る前に気付けよ、なんか松原が可哀想に思えてきた。

【正義】

「一人で観戦って以外と虚しいな」

今喋ってるのも独り言だしな。ん？………遅れてるだけあってもう始まるのか。

人数多いな…綱引きって色別だったつけ。でも構図的には解りやすいな、航&恋華VS美咲桜&亜沙美だな。緑との一線は赤組に知り合いが居ないけど頑張ってくれよ、恋華達の頑張りが無駄になるかな。

始まった！……………航達の勝ちだろうな、対青組のメンバーは男子も多いからな。……………良しっ！対緑組は…早っ！もう勝ってるし。

【正義】

「良かった。…綱引き一年は赤が一位だ。青は…良しっ！緑にも負けてるから三位だな！」

うんうん…言うこと無いな。赤組の2年は…………芽衣さんのチームに負けてるけど緑には勝ってるし、青対緑は…………二年は青が一位だな。

三年は…………なっ！緑が一位？二位が青で三位が赤か…………また引き離された、マズいなあ…騎馬戦は絶対に勝ってもらわないといけないな。

騎馬戦は男子が馬だから…………航がどれだけ敵を潰すかだな。恋華は航達の馬に乗るから、戦力的には期待できるが…………問題はやっぱりあの2人だな。二対一になったらマズイ、戦略を授けといた方が良さそうだな。

【正義】

「航ーっ！…ちょっとこっちに戻って来ーっ！…！」

【クラス女子】

「ビツ…ビツクリしたあゝ！…七瀬君どうしたの？…もうすぐ始まるのに、鳴海君を呼んだりして？」

直ぐ近くに座っていた女子が文字通り跳び上がって、胸を手で押さえながら話しかけてきた。

【正義】

「ん？…敵に厄介なのが2騎いるから、戦略を授けるところと思って…これ以上青に引き離なされるとマズイでしょ？」

【クラス女子】

「確かにそうだよ。…七瀬君は色々考えてるんだね、感心しちゃう」「マサ君っ！…ハア…ハア…どうしたの？」…鳴海君も橘さんも頑張っつてね！」

そう言い残して彼女は友達の間へ戻って行った。

航は『俺は何で呼ばれたんだろう？』と言いたそうな微妙な表情をしていた。

【正義】

「お前ちゃんと作戦とか考えてるか？…騎馬戦のポイントは重要だからな」

【航】

「一応考えてるよ？…三騎で協力してから、速攻で亜沙美ちゃんを潰す…とか」

【正義】

「悪くないなあゝ、それ…じゃあその間に美咲桜を足止めする役は

「？」

【航】

「あっ！…美咲桜ちゃんの事すっかり忘れてた。恋華が亜沙美ちゃん潰す事しか考えてないって言うから」

恋華らしいな…まだ400で負けた事を根に持ってる、本当に呼び戻して正解だったな。

【正義】

「ちゃんと足止めする騎馬を決めとけよ？…玉入れのリベンジされない様に、注意して動けよ！」

【航】

「解った！…殺れるだけ殺ってみるよ！…それじゃ行ってくる！」

さてと、俺は1500のアップでも始めますか。スタート付近まで軽く流して、近くで恋華達の活躍を観よう。

立ち上がりシートから外に出てその場で足踏みした後、緩急をつけながらダッシュでスタート付近へ向かった。

目的地に着くのとほぼ同時に銃声が鳴り響き、騎馬戦が始まったので恋華達の姿を探した。

【正義】

「何処だ？……………うええ！！？」

鉢巻きを取られた亜沙美の姿は確認できたが……………何であの馬鹿2人は敵に囲まれてんの？

【芽衣】

「よっ！…美咲桜の罠にハマった恋華達を観てんだろ？……………ククッ…ありゃそろそろ撃沈だな」

やっぱりなんか今日の芽衣さんは黒いな…何でだろ？……………今度からこの状態を『黒芽衣』と呼ぶ事にしよう。

【正義】

「まあアイツ等が負けても、最終的に数が多けりゃ良いだけだ。………………チッ…負けたか！」

恋華達が潰されてから2分位経った頃、競技終了を告げる銃声が鳴った。

【芽衣】

「チッ…運に助けられたな？…赤が一番残ってやがる！」

【正義】

「青は二位みたいですなえ…でも余裕でしょ？…次は芽衣さんが出ますからねえ」

【芽衣】

「ああそうだな！…赤を全騎潰してやるか！…そこで大人しく、オレの勇姿を観てるんだな！」

そう言い残してから不敵に笑い、青組の仲間の所に向かって歩いて行った。

ぼーっとその背中を眺めていると何故か傷だらけの航と、妙にスッキリした顔の恋華が此方に寄ってきた。

【航】

「……………ゴメン」

潰されて機嫌が悪くなった恋華に殺られたんだろうな。航…なんて不憫な奴。

【恋華】

「マー君ゴメンね？…競技は勝ったけど、私達は負けちゃった」

【正義】

「気にするな！…結果的に勝てたんだから。それより…亜沙美にリベンジはできたか？」

【恋華】

「うん、バッチリ！…速攻で潰して殺ったよ！」

【黒芽衣】

「ジャマだぁーっ！！」

【正義・航・恋華】



「えええええーっ！！！！？」

声が出た方に視線を向けると騎馬の上に立ち、敵の騎馬を蹴り飛ばして潰す黒芽衣さんが居た。

【黒芽衣】

「アハハハハハッ！！！」

【航】

「ルールブックに『騎手の鉢巻きを取れば勝ち。取られたら負け』としか書いて無いつても考えモノだよね？」

【恋華】

「本当に潰すあたりが芽衣先輩らしいよね」

【正義】

「そうだな！……っておいおい、もう殆ど赤組の騎馬残ってねえよ。これで何騎………10は潰してるな。さっき言ってたのはマジだったのか……相変わらず言葉を曲げない真っ直ぐな人だな……」

【恋華】

「今度は緑ばかり狙ってるね？……後3騎しか居ないのに何で赤を狙わないんだろ？」

【黒芽衣】

「どうした？……来ないなら、こっちから行くぞおーっ！！！」

【航】

「純粹に楽しんでるだけ……だからじゃない？」

確かに……あんなに楽しそうな芽衣さんは初めて観たもんなあ。

【恋華】

「うわあ〜…緑全滅じゃん！赤は……1騎しか居ない！？」

【航】

「とか言ってる間にロックオンされたみたいだよ？」

【黒芽衣】

「お前等で最後だ……大人しく死ねやあーっ！！」

アハハハハ…全部で20騎は潰してる。……航がドッジを恐がるのも無理ないか。

【恋華】

「終わっちゃった。……マー君っ！……1500は絶対に勝とうね？  
…航！クラスの皆で確り応援してよ！！」

【航】

「マサ君なら絶対に勝てる！……恋華も頑張ってね！」

航は此方に手を振ってから待機場所に向かって歩いていった。

アップも既に終わっているの、三年の騎馬戦を観戦しながら足の柔軟をしていた。

結果は赤が一位だったが、青が二位になったので手放しでは喜べなかった。

【美咲桜】

「ヒロ君！…恋華もお互い頑張ろうね！」

【亜沙美】

「ボク、正義君と勝負したかったんだ！…恋華も負けないからね！」

柔軟が続いていると2人が肩を叩いてきた。視線を向けると2人共握手を求めてきたので握り返すと、2人はスタート地点に向かっていった。

【正義】

「良しっ！…俺達も行こう！」

【恋華】

「うん。…絶対あの2人に一泡吹かせてやるんだから！」

2人の傍に寄って行った恋華と別れてスタートラインに並ぶと、直ぐに芽衣さんが近寄って来た。

【黒芽衣？】

「正義！…真剣勝負なんだから手抜きすんじゃねえぞ？」

元に戻ったのか？…さっきまでと雰囲気が違うな。『手抜きするな』か…でも全力を出すわけにはいかない。8割位でセーブしないと…午後に影響が出るからな。

【正義】

「ええ！…負けませんよ！」

【芽衣】

「お前…何か怪しいなあ？…良しっ！…マッチレースだ！」

何でバレたんだ？…顔に出てない自信はあるんけどな。

【正義】

「マツチレース？…具体的な説明を要求します」

【芽衣】

「一周毎にお互いが走るペースを決めて、それに合わせて走るんだ。例えばオレが一周目にペースを握るとするだろ？…お前はオレから遅れない様に走らないといけない、もし着いて来れなければ棄権しろ。…スピード調整は自由だが、ラスト一周はお互いに本気で走る。…大体こんな感じだ、解ったか？」

なるほど…これなら殆ど手が抜けないな。ペースを上げれば一周目で終わらせる事も可能って訳だ。

【正義】

「良いですよ？…じゃあ『着いて来れない』の部分が曖昧だから、5メートル離されたら棄権って事にしましょう？」

【芽衣】

「解った。じゃあ1・3周目はオレのペースで良いか？」

【正義】

「それで良いですよ。…まあどのみち勝つのは俺ですけど」

【芽衣】

「言ってる！…直ぐに棄権させてやるぜ！」

【松原】

「七瀬！…橘！頑張れよ！…位置について…ヨイ…」

パアーン

【芽衣】

「オラッ！…着いてこいッ！！」

【正義】

「クッ…」

銃声と同時に飛び出した彼女を一瞬遅れて追い掛けた。（出遅れたが直ぐに彼女の横に並んだ）

思ってたより速いな…あっという間に半周かよ。こんな事になるなんて予想はしてなかったから、体内時計だけが頼りだな。（隣を走りながら）

微妙にペースが変わった？…クッ…彼女は大した策士みたいだな。（彼女がペースを上げて離されそうになったが直ぐに隣に並んだ）

後50メートル位で一周目終わるな…100を12秒前半のペースで様子見しよう。（隣を走りながら）

良しっ！…2周目。一気にペースを上げる！（ペースを緩めた彼女を一気に抜いた）

後ろ着いて来てるのか解らないな…ペースを上げるか？（ペース調整して彼女の前を走りながら）

【航】

「マサ君っ！…芽衣先輩に煽られてるよー！ツッ！…ペース上げてー！」

！？…このペースに着いて来てるのか？…彼女は本当に女か！（少しペースを上げて彼女の前を走りながら）

もしペースを上げて、振りきれないと無意味だからな。……多分3周目からは本気で来るから、ラスト半周まで並走しよう。（先程のペースで彼女の前を走りながら）

三周目…ツ！？…クツ！……どれだけスピードに余力残してんだよ、マジで危なかった。（スピードを緩めた瞬間抜かれて引き離されそうになったが、スピードを上げて隣に並んだ）

ペースが少しずつ上がってるのか？…今の100は12秒フラット位だぞ。（約一歩分後ろを走りながら）

【航】

「マサ君っ！…後一周ちよつとだよ！」

後100メートル位でラスト一周か…今の100は11秒8位だつたし、彼女はまだ余力あるな。良しっ！…ラスト300は11秒6までペースを上げて一気に決める！（約一步分後ろを走りながら）

ラスト！…！？…互角？いや、外側を走ってる俺の方が微妙に速い……チツ…こつちもかなりキツイ……けど行くしかない！！…（一気にペースを上げて隣に並んでから、更にペースを上げて前に出た）

【芽衣】

「クツ…！」

【航】

「直ぐ後ろっ！…着いて来てるよっ！！！」

！？…今のペースは大体11秒4位だよな。クソッ！…もう限界が近い……呼吸が乱れる…胸が熱い……後0・1秒……ラスト200……行くぞっ！！！（更にコンマ1秒ペースを上げた）

後50……30……10…5……勝っ……た！…アレ？…  
…地面が近……痛っ！？

パアーン

【正義】

「ハアハア…ツハ…ハアハア…ゲホッ…ハア…ハア…ハア…  
ハア…ハア…ハア…痛い」

ゴールテープを駆け抜けた途端に身体から力が抜けて、地面に前から倒れてしまった。

【正義】

「アレ？…俺もしかして地球にキスしちゃった？」

息を整えてから瞼を上げると、そこは砂の惑星だった。

【芽衣】

「ハアハアハア…ハア…何馬鹿な事言ってた？…ほら起きろ」

頭をペチペチと叩かれて意識がハッキリしたので、砂の惑星から脱出（視界を確保する為に）体ごと横に転がり仰向けの状態になった。

【正義】

「見上げた空は青かった…BY正義」

【美咲桜】

「『私の』ヒロ君っ！…最高にカッコ良かったよ。それと…一位おめでとう…！」

【恋華】

「本当にカッコ良かったよ！…キツイ種目には自分だけ出ない航とは大違い…ハア」

【亜沙美】

「速すぎて全然着いて行けなかったよ！…正義君ってめちゃくちゃ足速いんだね？」



【芽衣】

「やっぱりお前は大意したモンだ！……ペース乱してスタミナ切れを狙ってたんだが、まさかラスト200で更にペース上げるとは思わなかったぜ………完敗だよ、おめでとう正義！」

空を見上げていた視線を遮る様に、次々と4人の顔が現れ視界を埋め尽くした。

これだけ頑張つて『おめでとう』を言ってくれたのが2人つても………複雑な気分だな。

【正義】

「ありがとう。皆は何位だったんだ？」

【亜沙美】

「ハイハイ！ボクが教えてあげよう。…この紙に書いてあるから………あっ!？」

右手に持ってヒラヒラさせていた紙を奪った。何々………

全学年混合1500

RESULT!

TOP1 10

1・七瀬(1) A) 赤

2・園田(2) C) 青

3・森永(3) B) 赤

4・下井(2) F) 緑

5・宮藤(3) A) 赤

6・桐原(1) D) 青

7・伊東(2) E) 緑

8・牧瀬(3) D) 青

9・御堂(1) C) 青

10・橘(1) A) 赤

芽衣さんは当然だけど……この学園の女子は本当に凄いな。美咲桜が6位に亜沙美が9位、恋華は10位だもんな。友達が成績良いとやっぱ嬉しい……学校行事ってのも案外悪くないな。

【正義】

「へえ……凄いな、皆もTOP10入りおめでとう」

【美咲桜】

「ありがとう！……でも、私はヒロ君と一緒に走りたかったなあ」

【芽衣】

「美咲桜……正義を一人占めしちゃって悪かったな」

【亜沙美】

「恋華に勝てたから9位でも満足だよ」

【恋華】

「亜沙美い〜!……混合リレーで白黒つけようじゃない?」

本当にバラバラで面白い娘達だな……亜沙美と恋華なんて一触即発な雰囲気だし。

【松原】

「お前達はいつまで喋り続ける気だ?……皆さっきから親御さんの所で飯食ってるぞ」

【6人全員】

「あああああー!ー!ー!ー!」

【正義】

「ちよつと待てやあー!ー!ー!」

【松原】

「何だ?……他の4人はダツシユで親御さんの所に戻ったぞ」

そんな事解ってるんだよ!……クソツ!口が勝手に……このままではヤバイ、ツツコミ体質になりかけている。オマケに中途半端なボケを……

【正義】

「『6人全員』ってなんだよ!何でアンタまで『ええー!ー!ー!』」

とか言ってたんだよ!？」

【松原】

「お前には『粹』が見えてるのか？俺としたことが！チツ……じゃあな！」

『粹』って何だよ？…航や恋華も時々言ってるんだよな。……

……チツ？

【正義】

「舌打ちかよっ!?!…しかも説明しないで逃げやがった!」まー君!…早くご飯食べようよ…っと!やっと捕まえた!」………今行くから引き摺らなイヤー……ッ!」

わざわざ呼びに来た母さんにズルズルと引き摺られながら、我が家のシートに向かった。

【英理朱】

「まー君、はい!あゝん「あゝん…ムグムグ」まー君って…あんなに足が速かったんだねえ?」

引き摺られて『七瀬家の場所』と書かれた立て札が刺さっているシ

ートに戻るなり、ビデオ撮るだけで暇だったんだから、お昼ご飯位は好きにさせてね？ と言って明らかに『食べてくれないと解ってるよね？』と言いたげな表情をした為……………こうなってますしまった訳だ。

【正義】

「んぐ…まあね、それよりも父さんは来れなかったんだ？」

【英理朱】

「明斗さん仕事忙しくて抜けられそうもないって…はい、あ〜ん」  
あ〜ん…「ングムグ」出場してたの全部一番だったねえ…まー君の活躍はバッチリ撮ったからね！」

ハア…：また知らない間にこの映像が出回ってて、近所を歩いてたらいきなりお姉さんから『続編はいつ撮るの？』とかまた言われるのかなあ。サービスカット（隠し撮り）の部分クリックしたらパジヤマ姿とか映ってるから勘弁して欲しいな。

【正義】

「そう言えば午前中、母さんは何処に居たの？…全然姿が見えなかったんだけど」

【英理朱】

「色んな所に居たよ？樹の上とか隣のクラスの待機場所とか…あ〜ん」  
「あ〜ん…「ング」報道スペースとかね、競技毎にベストポジションを探すの苦労したよ」

姿が見えなかった訳だ…普通そこまでしないもんな、隣の応援席に居たなんて…………マジで恥ずかしい。

【正義】

「んむ…んぐ…隣のクラスに迷惑とか、勿論かけてないよね？」

【英理朱】

「それは大丈夫だよ。最初は怪しまれてたけど、『隣のクラスに居る七瀬の母ですって言ったら歓迎（女子だけだったけど）してくれただよ？…あ〜ん「あ〜ん…ムウムグ」皆いい娘達ばかりだったから……撮影に集中出来たし、良い絵が撮れたとおもっよ？」

ハア〜…手遅れだったか。まあ此処に居る時点で色々アウトだから、しょうがないよな。

【美咲桜】

「英理朱さん！…こんにちは」

背後からの声に振り返ると、異様な大きさの重箱（5段重ね）を大事そうに両手で抱えた美咲桜が立っていた。

英理朱さん…か、もう先生って呼ばないんだな。母さんも一瞬表情が曇ったし、辞めた事が気になってるんだろうな。…母さんは無理矢理聞く様な事はしないけど、やっぱりこの面子で音楽の話題がタブーなのは辛いな。

【英理朱】

「まあ！…美咲桜ちゃん、どうぞ座って？」

【美咲桜】

「お邪魔します」

素早く俺の右隣に座るとシートの上に重箱を並べて、箸で赤い物体

(ミニハンバーグ?) を掴んで俺の眼前に差し出してきた。

【正義】

「何コレ?…この赤い隕石みたいな物体は」

一応聞いとかないと…この前みたいに弁当のオカズを、興味本意で貰った時みたいな事になりかねない。

【美咲桜】

「ハンバーグ?…だったと思うよ…はい、あ〜ん……………むう〜ッ

!?!…英理朱さんのは食べてたクセに、私の手料理は食べてくれな  
いんだ?」

「いやいやいやいや、『だったと思う』って何だよ。疑問系だし、何  
より赤い時点で辛い確定じゃん。

【正義】

「わかった。食べるから泣きそうな顔をするな。美咲桜の料理は美  
味いから、全然嫌じゃないからさ…な?」

頬を膨らませて可愛らしく此方を睨んでいる美咲桜に、言葉を選ん  
で優しく語りかけた。

【美咲桜】

「本当に?…じゃあはい、あ〜ん「あ〜ん…!」どう?…美味  
しいでしょ?」

首を縦にブンブンと振って肯定してやると、不安そうな表情が忽ち  
笑顔になった。

【正義】

「ソング…辛くないのに、なんでこんなに赤いんだ？…凄く美味しいけど…」

【美咲桜】

「パプリカの色だよ。…色合いを考えて、ピーマンの代わりに使ってみたの」

【英理朱】

「美咲桜ちゃんも色々頑張ってるんだねえ…それって、まい君用の味付けでしょ？…こっちのハンバーグは結構辛いもんね」

いつの間にか母さんは美咲桜の重箱に箸を伸ばしていた。

【美咲桜】

「はい！この間…ヒロ君が私のお弁当食べちゃって…辛すぎるの駄目だって言ってたので、リベンジでつくってみたんです」

このハンバーグ、本当に美味しいな。わざわざつくって来てくれたんだから、頑張って食べないとな。

【正義】

「本当に美味かったよ。じゃあ遠慮なく頂くな？…まずは玉子」はい、あ〜ん…あ〜ん…むぐんぐ……そんなに急がなくても俺は逃げないって…」

箸を玉子焼きに伸ばそうとすると、シュバッと音を発して目の前に玉子焼きが現れた。

【美咲桜】

「ヒロ君は逃げないけど…時間は逃げちゃうでしょ？…次は辛揚げ



ね、あ〜ん「あ〜ん?」早く食べないとお昼の休憩時間終わっちゃうから」

なんか違和感があつた様な気がしたんだけど……唐揚げ……辛っ!?!?  
……辛揚げ!?!?

【正義】

「ギャ〜ッ! 喉が! 喉が焼けるう〜〜〜ッ!?!」

【英理朱】

「プツ…アハハハハハッ!?!…みつ美咲桜ちゃん…今、食べさせたのって自分用じゃない?」

【美咲桜】

「えっ!?!? そんな筈………あああああー……ッ!?!」

その後……水を飲んで何とか生還を果たし、量が多すぎて食べきれないと判断した俺は皆を呼んだ。なんとか時間内に完食して(殆ど芽衣さんと亜沙美が食べた)他愛ない話をした後、競技開始5分前の放送を合図にそれぞれの待機場所に向かった。

【航】

「一体どうやったら、あそこまで殺人的な辛さになるんだろうね？  
……まだ舌が痺れてるよ」

【正義】

「俺は喉が痛い……あの辛さは間違いなくハバネロだな」

【恋華】

「さっきは2人共、災難だったねえ。アタシも中学の時に調理実習で食べた（先に犠牲になった亜沙美に捕まり、道連れにされた）けど、あの時は死ぬかと思ったよ」

なんで美咲桜はアレを平然と食べるんだ？…芽衣さんと亜沙美でさえ端に避けてたのに、それを完食してたからなあ。

【正義】

「今から始まる競技って何？」

【航】

「えーっと？……ご愁傷様、男子1500だつて……」

【恋華】

「その次が女子1500よね？…アタシも行かなきゃ！」

マジで？……ちょっと苦しいんですけど。誰だよこんな順番にした奴、まさか！……松原では？

【航】

「苦しいだろうけど、2人共頑張ってるね！…青組との差を少しでも縮めないとヤバいから！」

他人面しやがって……まあ何とかなるだろ、芽衣さんも居ないし楽勝だな。

【恋華】

「女子は芽衣さんが居るから勝つとは言えないけど…頑張るよ！」

【正義】

「それなりに頑張るわ……じゃあ、応援頼むな？」

返事を返してシートから立ち上がり、恋華と一緒にスタート付近に向かった。

恋華と話しながらスタート付近に着くと、青組の3人が此方に気づいて走り寄って来た。

【美咲桜】

「頑張つてね、ヒロ君っ！！…絶対一番じゃないとダメなんだからね？」

【亜沙美】

「楽勝だよきつと！…あああ…正義君が青組だったらなあ…」

【恋華】

「ファイトだよ、マー君っ！」

【芽衣】

「オレに勝つたんだから……こんな奴等に負ける訳ねえよなあ？」

芽衣さんの声に、めっちゃドスが効いてて恐いんですけど。

【松原】

「男子1500始めるから、選手は集まってくれーっ!!」

【正義】

「皆も頑張れよ!……それじゃ行ってくる!」

背後から聞こえた松原の声に振り返ると、スタートラインに選手が集まっていた。4人に軽く手を振ってから踵を返して、スタートラインに向けて駆け出した。

全学年男女別1500進行中

.....  
1500も無事に乗りきって待機場所に戻り、シートに座って恋華の応援をしていた航の隣に腰を降ろした。

【航】

「お疲れ……やっぱり楽勝だったね?」

【正義】

「いやいやいや、昼飯が消化してないから相当キツかったんだぞ?」

二周目で吐きそうになるというイレギュラーがあったが、何とか耐

えきり無事に一位を取ることができた。

【航】

「全然そんな風には見えなかったよ？…現に独走だったしさ」

【正義】

「お前は気楽で良いよな？…ところで恋華は………四位走ってるじやん！」

トラックに視線を向けると、独走状態の芽衣さんと単独二位を走る美咲桜。少し遅れて三位の直ぐ後ろを走る恋華、その後ろを亜沙美が走っていた。

【航】

「三周目に入ってから、すぐ前を走る亜沙美ちゃんを抜いて四位に上がったんだ……恋華ぁーッッ！！三位いけるぞぁーッッ！！！」

三位の選手って混合1500に出てたよな？…確か美咲桜の前でゴールしてた人だと思っただけど。

【正義】

「結局芽衣さんが一位か。もう美咲桜もゴールだな、となると……恋華ぁーッッ！！抜いたら航が好きなモノ買ってやるってえーッッ！！！」

おお～速い速い…まだ余力あるじゃん。まあ三位の選手、赤組だから抜かなくても良いんだけどね。

【航】

「違うからぁーッッ！！…マサ君が勝手にいーッッ！！！！………」

……抜いちゃったよ」

よしよし、これで恋華のモチベーションが上がったな。種目も残り少ないし、勝てる確率は少しでも上げておかないとな。

【正義】

「三位取れて良かったな。彼氏もさぞ嬉しいだろうなあ」

三位が恋華で四位が赤の先輩、五位には亜沙美が入った。

【航】

「ハア〜…また5桁後半のバッグとか買わされるんだろうなあ…」

【正義】

「まあまあ、10枚位気にするなよ?…ギャルゲー買つのをちよつと我慢すれば良いだけだろ?」

【航】

「なっ!?!?…それは断る!…楽しい夏休みをエンジョイする為に!…それに俺からギャルゲーを取ったら……」

どうなるんだろう?…ツツコミ?…女装キャラ?…それとも何も残らないのだろうか?

【正義】

「取ったら?…」「只のいじられキャラになってしまうじゃないか?!?!?!」………さいですか」

【恋華】

「2人共まだ居たの?…借り物競争の選手はもうスタート付近に集

まっつてたよ?」

え?...次の次じゃなかったか。...ちょ!?スターター構えてるじゃん!

【正義】

「航っ!...早く行かないと失格になるぞっ!...もう最初の組スタート前だっ!...!」

【航】

「ハハハッ!...揃ってないのにスタートな『パーン』...:えええええー!...!」

2人で一斉に立ち上がると、全速力でスタート地点に向かって走った。

【正義・航】

「.....(滝汗)」

スタート地点に着くと直ぐに松原に捕まって、先ほどから説教されていた。

【松原】

「お前達は5分前行動という言葉が理解できてるのか？ハア〜……もう行って良いぞ」

松原は大きな溜め息を吐いて、教師席に戻って行った。

【航】

「ハア〜…長かった。…ところでマサ君は何番目？」

【正義】

「確か一番最後だと思う、お前は？」

【航】

「もう2つ後だね、無茶な紙を引かなきゃ良いけど…」

【正義】

「また女装が似合う男性とか出ないかなあ〜…出たら楽勝なんだけど…」

【航】

「何？その顔、明らかに俺をロックオンしてるよね!？」

そりゃそうだろ……足も速いし、適格者…鉄板じゃん。

【正義】

「そんな都合良くいく訳無いだろ?……お前、呼ばれてるぞ?」

【航】

「本当だ。じゃあ先に行かせてもらっね!」



航はスタートラインに向かって歩いて行った。

V I E W C H A N G E

航 S I D E

スタート地点に着くと、丁度一つ前の組がスタートしたところだった。

【航】

「何か皆、中々見つからないみたいだな？……彼はリボンかな？……あの人は………校長！？……最後の一人は何か走り回ってるな？」

リボンは良いとして……校長はアウトでしょ？……しかも足遅っ！？……残った一人はまだ………うええ！！？

【航】

「何で女子の制服に着替えてんの？………ってか良く貸してくれたな」  
良く見たらゴール地点に変わった人がいっぱい居る………嫌な予感がしてきたな。

【運営委員】

「位置に着いて………ヨイ………」

パアーン

【航】

「良しっ！………」

スタートダッシュは成功だな。後は3つの封筒のどれを選ぶかだな。

【航】

「中学のっ…時はっ…真ん中っ……良しっ！…右だぁーっ！！」

コースの途中に置いてある机から右側の封筒を選んで、封を切った。  
ハア…ハア…何々……………

### 指令書

三年生女子で髪型が『ツインドリル』の人（ターゲットの身長が150cm以下だと順位得点に+10000萌えポイント進呈）

【航】

「なんじゃこりゃー……………っ！！？」

モロ審判の趣味じゃねーかつ！…！…とりあえず三年生の待機場所に急いで行かないと。

【航】

「ハア…ハア…クソッ！…全然見つからない……次のクラスこそっ  
！」

全く居ない……本当に要るのかよっ！此処のクラスはっ……！？

【航】

「あゝああぁー…っ！このクラスッ！…ツインテールばっか  
ウゼエー…っ！…！」

どうなってんだ、このクラスは！？紛らわしい髪型ばっかじゃねーか！……………次は居ると良いなあ。

【航】

「ハアハア…ハア…ツインツイン……………ッ！？居たっ！…ドリルっ娘！…！」

直ぐにトラックと応援席の間に張られたロープを跳び越えて、彼女の元に駆け寄った。

【航】

「先輩っ！…俺と一緒に来てくれませんか？」

身長は多分150cm以下だろうな。物静かな印象を受ける……………綺麗な人だなあ。

【ドリルっ娘】

「嫌っ！」

即答っ！…！？

【航】

「ええええー…」嘘よ。早く行きましょ？……………ありがとうっ！…！」

マジで焦った……………また、この大勢の中から探すのなんてゴメンだ！…彼女の手を確りと握りゴールに向けて駆け出した。

【航・ドリルっ娘】

「ハアハア……ハア………やっ たっ！まだ誰も来てない！  
…チェックを…」

彼女の手を引いてゴールすると審判が寄って来て、お題のチェックが始まった。

【運営委員】

「えーっと何々……三年女子でツインドリル……この娘か…ふん  
？…へえ〜？……GJ！…一位おめでとう+10000萌え〜  
！！」

指令書を書いたの絶対この人だ……ジロジロ観すぎでしょ。

【航】

「先輩！…ありがとうございますっ！」

さてと、後はマサ君を待つだけだ。あんなのばかりなら、マサ君でもキツいかも知れないな。………頑張っ てね、マサ君！！！！

VIEW CHANGE

END

航は一位だったな…でも相当苦労してたっばいし、一体何が書いてあるんだろ。

【正義】

「今回の組も時間かかってるな……アレは長机？……あの人は……お姫様抱っこだな………最後は……スゲーっ！校長、大人気だっ！！  
！」

航の前の組にも校長連れてる奴居たよな？…基準が解らない。……  
……この組の紙は何が書いてあったんだ？一斉に皆居なくなつたぞ？

【正義】

「ブツ！？…何だアレは……あの人…女子の体操服着てる……ドレス！？…チャイナ服！？…ヤバイ……変態さんがいっぱいだー！」  
女子は大爆笑してるな……これ男子専用の罰ゲームなんじゃ？…ヤバイ、不安要素がいっぱいだ。

【正義】

「誰だよ書いてる奴！……おっ！この組まとも……だ？……男同士でお姫様抱っこはキツいな。……ええ！？…競技終了後の選手もありなの？……最後は……ッ！？…おいおいおい、アレって現国の前田が愛用してるヅラじゃねえか！！…ヤバイだろっ！…色んな意味で……！」

今までのお題で『リボン』と『お姫様抱っこ』に『校長』位しかまともなヤツ無いだろ。

【運営委員】

「最終組の選手、スタートラインに着いて下さい」

遂に来たか……とりあえず当たりを引けます様に。祈りながらスタートラインに着いた。

【運営委員】

「位置に着いてー……ヨーイ……」

パアーン

【正義】

「良しっ！」

とりあえず先頭で封筒を選べそうだな。…コスプレだけは勘弁！

【正義】

「航は右だったから……真ん中っ！」

真ん中の封筒を取り、急いで封を切って中の紙を広げた。

指令書

男女・学年指定無し。

『ギャルゲー極愛な人』

ゴールでギャルゲーに関する超難問クイズを3問出題します。

もし一問でも間違えたら、ターゲットを強制変更しないといけなくなります。

我に勝てる強者よ来れ！

【正義】

「もらったぁーッ！」

2人も適格者が居る…他の奴が『当たり前』を引いた可能性もあるし、とりあえず保険も兼ねてゴール地点に居る馬鹿から行っとくか!!  
ゴール地点に着いてから直ぐに航を見つけて、スキップしながら近寄った。(楽勝)

【正義】

「航、一緒に来い！」

声を掛けると航は凄く嫌そうな顔をした。……………まともなものになあ。

【航】

「直ぐそこだし、とりあえず行くよ」

二人ですぐ近くのゴール地点に向かって歩いた。

【運営委員】

「早かったね。……………何々…ッ!……………君が挑戦者か？」

紙を渡すと航に鋭い眼光を向けた。航には内容を教えてない為『一体内容はなんだったの』と、言いたそうな視線を向けてきた。

【正義】

「ギャルゲー超難問クイズを、3問連続正解出来る人…つまりお前」

【航】

「フッ…そういう事なら早く言いなよ…俺様なら楽勝だぜ」

言葉遣いが何かカッコいい、背後に青い炎の様なモノも見えるし。  
俺様って、航……………なのか？

【運営委員】

「お前ごときが俺に勝てると思ってるのか？」

【航】

「フツ……………弱い奴程よく吠える……………ご託はいいから、さっさとかかって来いっ！」

ゴゴゴゴゴ

大地が震えてるのか！？……………2人の間の空間も歪んで見える。

【運営委員】

「発信機は無いが、よからうツッ……………では合言葉っ……………『ギャルゲー潰けですか？』」

【航】

「フツ……………『極愛してます』」

【航・運営委員】

「GQB・FIGHT」

解説：ギャルゲー・クイズ・バトル GQBとは……………ギャルゲーをこよなく愛する者同士が、己の知識とプライドを懸けてクイズで闘う聖戦である！

GQB倶楽部に入会すると、バトル専用の登録番号と腕時計型発信



機を貰える。

この発信機は衛星から電波を送受信している為、世界中で使用できる。

発信機同士が近づくと起動して、音声で居場所を教えてくれる。

バトルは『ギヤルゲー漬けですか?』の合言葉に対して『極愛<sup>じごくあい</sup>します』と答えると発信機がバトル状態に移行して、不正防止の為に情報(映像・音声)が通信される。その後にはバトル開始ワード(GQB・FIGHT)を叫び合うと発生する。

お互いにクイズを出し合い、先に5問先取した方が勝者となる。

お互いにポイントを落とさない場合は、サドデスでどちらかが間違えるまで続く。

問題を出題する時は出題ボタンを押しながら大きな声で出題する(不正防止と通信して音声でコンピュータシステムから正解を検索して、相手の解答を正確に判定する為)

解答者も同様に解答ボタンを押しながら大きな声で解答する。(相手が検索した問題の正解と、此方の解答を正確を照らし合わせる為)

正解すると発信機に表示された数字が0からカウントされていき、5又は5以上で相手の表示と差が着くとバトル終了となる。

勝利すると勝者の発信機に敗者の登録番号が表示される。

勝者は自分の発信機に付いている覇者ボタンを押しながら『敗者の

登録番号』を告げる。(発信機に向かって)

勝者が登録番号を言う事で、通信保存しているバトル中の情報(映像・音声)と勝敗がホームページに記録される。

もしバトルしたくない場合は合言葉を無視して、その場を離れる事で発信機を待機状態に戻せば良い。

勝敗はホームページでリアルタイム表示され、半年毎に上位者には賞(称号とトロフィー)や商品が贈られる。

要するにギャルゲーのクイズで闘い、順位を競い合うのだ!!!

【運営委員】

「問1…リーガルのソフト『スタンダード・ラヴ』のサブキャラ、おさないしのが小山内忍の趣味は!」

【航】

「フツ…バードウォッチングだ!」

【運営委員】

「チツ…1シーンしか出てないキャラなのに…正解だつ!」

【航】

「フツ…何ならプロフィール丸ごと答えようか?」

【運営委員】

「問2だつ!…クリスタルフェザーのソフト『天使の贈り物』のサブヒロイン、あまみひじり天美聖が主人公の4度目の告白を断った理由は!」

【航】  
「フツ… 婚約者に汚されてしまったからだ。 …… 簡単すぎる、ふざけてるのか？」

【運営委員】  
「チツ… 6回も告白するのに良く解ったな。 …… 正解だっ！」

【航】  
「フツ… あんな感動的なシーンを忘れる訳筈が無い。 …… そのシーンのセリフ丸ごと答えてやるっか？」

【運営委員】  
「調子に乗りすぎだな。 問3っ！… カーバンクルの前会社ユーフェリアのソフト『罪の売買』のメインヒロイン、魔咲葵まさきあおいが初めて人を殺してしまった日時は！」

【航】  
「……………」

【運営委員】  
「どうした？… 当時ユーフェリアはサークルソフトを作っていた事を知らないのか？ …… やれやれ、とんだ期待ハ「そのシーン」を思い出して悲しくなっているだけだ」 …… 何だと？… 強がるのも大概に！「黙ってるっ！」 …… チツ！」

【航】  
「……………」  
5歳の時。 12年前の6月27日、 22時49分だ」

【運営委員】

「なっ!?!?……嘘だろ?……当時マイナーで、しかもサークルで制作した幻のソフトだぞ!……販売数50本以下だぞ!何故正解が解る!?!?」

【航】

「プレイしたからに決まっている……お前が最後に出した問題……アレはGQBで触れちゃいけないタブーなんだよ!……ルールも守れないお前に、ギャルゲーを語る資格なんて無いっ!……消え失せろっ!?!?」

【運営委員】

「……わーっ!?!?良かったな七瀬、お前が一位だ!……それじゃあな」

【正義】

「……え?」

全然話しに着いていけないんですけど……審判どっか行っちゃったし、どうしろっていうんだよ。

【航】

「フツ……嘆かわしい、あの程度でツ!?!?……まさ君、どうしたのお?……」  
(口笛&滝汗)

元に戻ったのは良いけど……動揺して声が裏返ってる。やっぱり見ちゃいけない光景だったのかなあ、口笛吹いて明らかに黙殺しようとしてるしな。

【正義】

「今はゴールするのが先だ……さっきの話は後で、たーっぷりと聞かせてもらうから……なッ!!」

【航】

「……………ソウデスネ」

顔面蒼白、呆然自失の航を引き摺って（地面に両手を突いて、蟻の数を数えていた）一位でゴールした。

【航】

「ハア~~~~~」

待機場所に戻り尋問が終わってから、航はずっと大きな溜め息を吐きまくっている。（何故かさっきの審判は、5分程してから何食わぬ顔で戻って来た）

【正義】

「元気出せて……さっきの事は別に何とも思っていないからさ……なっ？」

本当は突っ込みたくてウズウズしてるがな。……別に落ち込む必要はないと思うんだけどなあ、ギャルゲー好きなのは前から知ってるし。

【航】

「…誰にも言わない？」

【正義】

「言わないって！…言っただけに俺に何かメリットがあんのか？」

【航】

「……………本当に？」

本当にコイツは段々扱いにくくなってきてるな。…面倒くさい奴だ。

【正義】

「本当にだ！…因みにこれ以上言わせたら……………ねえ？」

とりあえず今できる最高の笑顔で、声にドスを効かせて言っただけで済んだ。

【航】

「ヒイ！！？……………解ったよ、だからその『いつまでも落ち込んでると殺っちまうぞコラ！』って顔はやめて」

【正義】

「分かれば宜しい……………お前のせいで2・3年男子のお題、見逃したんだからな？」

【航】

「悪かったよ…あつ！…今から女子の部が始まるよ！」

誤魔化しやがった…しかし、コイツは本当に進歩のない奴だな。

【正義】

「お前さあ、露骨に話を逸らす癖直した方が良いよ？……何かを誤魔化してるのバレバレだから」

【航】

「そんな事は、なっ無いんじゃないかなあ？……あつ！恋華の組だ！」

だから声が裏返ってるって！ハア〜…まあいいや。女子のお題でも観て、笑わせてもらおうとするか。

【正義】

「女子のお題はどうなんだ？…もしも男子よりまともな内容だったら嫌だなあ」

【航】

「まだなんとも言えないよ…スタートだっ！」

さてと、何を引いたかな？……テントに入っただけ……アレって？

【正義】

「なあ航…恋華が連れてる白衣着た人、現在年下の彼氏募集中の明日香ちゃんだよな？」

【航】

「うん。廊下を歩いている俺達を『美男子ホイホイ』で捕獲してから、2時間軟禁した人だね」

思い出したくもない…その後で美咲桜にも正座させられた状態で、二時間も説教されたしな。

【正義】

「俺達がお題になったらさあ……間違いなく捕獲されると思わない？」

【航】

「うん。ベッドに手錠で繋がれてから『歳上の男』談義を聴かされ続けるのは間違いないね」

そう言うと航は頭を抱えて、大きな溜め息を吐いた。

【正義】

「ハア…お互いに苦労するな？……おっ！亜沙美の組だ」

【航】

「本当だ……アレ？紙を見た途端にこっちを向いたねえ」

亜沙美は先頭で指令書を取ると此方に視線を向けて、物凄い速さで向かって来た。

【正義】

「それどころか、こっちに向かって来てる……嫌な予感しかない」

此方に向かって来る亜沙美は、獲物を見つけた虎の様な鋭い眼光を此方に向けていた。

【航】

「ねえ…彼女の顔が満面の笑みなのは何故「鳴海君っ！」ギャーッ



！？スケープゴートは俺だったあー！ツ！！！」

航はシートの上に倒れ込み、頭を抱えてゴロゴロと転がっていた。

【正義】

「亜沙美の指令書には何て？」

【亜沙美】

「直ぐに解るよ！…鳴海君、ほらっ！ぼーっとしてないで早く行くよ！」

転がっている航の手を掴んで立たせると、そのままズルズルと引き摺っていった。

【正義】

「アイツ…珍しく抵抗しなかったな？」

指令書の内容…後で解るって言うってたけど、一体何だろうな。トラックから外に出て行ったし、お題+ だから……………！

【正義】

「読めた！…男のプライドを棄てるから抵抗しなかったんだな！

……………（3分経過）……………プツ！？アハハハハハッ！！！」

亜沙美に手を引かれてトラックに戻って来た航は、皆から写真を撮られまくっていた。

【正義】

「今年は猫耳に忍び装束かぁ〜！……………でも何で槍なんて持ってるんだろうな？」

普通にゴールしてるし。…という事は、アレが指令書の内容？…亜沙美の趣味じゃなかったのか。しかし…コスプレ衣装は何処から持ってきてるんだ？

【芽衣】

「正義…隣、いいか？」

背後からの声に振り向くと、何故か木刀を持っている彼女が居た。

【正義】

「どうぞ座って下さい。…その木刀は？」

【芽衣】

「ああコレか？…『木刀』って書かれた紙を引いた時に、持ってたらそのままゴールできるだろ？」

満面の笑顔でそう言うと隣に腰を降ろした。

【正義】

「……………ソウデスネ」

『そのままゴールできるだろ？』って、芽衣さん……………もしかしてバカ？

【正義】

「敵陣に来るなんて……………俺に用事ですか？」

【芽衣】

「用事？…ねえよ、んなモン。退屈だったから来たただ、もしか

して邪魔だったか？」  
そう言つと申し訳なそんな表情をして、視線を泳がせた。

【正義】

「いえいえ、邪魔なんて事はありませんよ。…丁度、俺も1人で観てて暇だったんです」

【芽衣】

「ハハッ！…ありがとな？…そういえばさっき航が面白れえ格好してたが、アレってお題なのか？…あんな衣装去年は無かったからな」

【正義】

「みたいですね…違つと思いたいですけど」

【芽衣】

「ん？…もしかして自分もあんな格好させられると思つてんのか？」

【正義】

「そりゃそうですよ！…誰にも借りられたくないに決まっています。俺には航と違つて、女装趣味はありませんから」

【芽衣】

「ハハハハッ…正義なら似合つと思つぜ？…そこら辺の女より、よっぽど綺麗だからな！」

【正義】

「マジで勘弁して下さいよ。…まあ犠牲になつた航には同情しますかね」

【芽衣】

「そうか？…似合うと思うんだけどな。おっ！…もうすぐ美咲桜が出てくるな」

【正義】

「本当ですね。あつ！あの娘……また校長？…お題は去年も、こんなのはっかりだったんですか？」

【芽衣】

「去年もこんなのはあつたぜ？…そもそも、この競技は保護者の希望でやってるからな。…ただ今年は校長が多いな、今ので何回目だ？」

【正義】

「保護者の希望？……一体どういう事です？」

【芽衣】

「要するに親バカだ。可愛い娘の仮装した姿を、映像に残したい父親どもの強い要望でな。…だから衣装とかは相当種類がある、去年は女性警官とか男性看護婦もあつたぞ」

男性看護婦？…要するに男がナース服を着るのか、男としてのブランドが粉々になりそうだ。……しっかし親バカねえ、まさかウチの両親も一枚噛んでんじゃねえだろうな？

【正義】

「それはキツイですね、大事なモノを失いそうだ…色々と」

【芽衣】

「心配すんな…一回引いた衣装は終わるまで出ねえ様になってるか

ら。もう殆ど出てるから、確率はだいぶ低くなってる筈だ。……おっ！美咲桜の組が始まるぜ！」

トラックに視線を移すと同時に銃声が鳴り、美咲桜達が一斉に走り出した。

【正義】

「俺以外でお願いします！」

膝立ちになり両手を胸の前で組んで、一心不乱に俺じゃない事を祈った。

【芽衣】

「ハハハッ！…大丈夫だろ、そんな簡単に………来たな？」

思いつきり来てるじゃん…もう絶対に神なんて信じねえ。

【正義】

「さつきもこのパターンだったような気が「ヒロ君ーっ！！」………終わった」

美咲桜は俺達の目の前まで来ると、膝に手を突いて呼吸を整えた。

【美咲桜】

「ハアハア…ハア…ヒロ君は何をお祈りしてるの？」

【正義】

「気にするな。それよりも、早く連れて逝ってくれ…苦しみは短芽衣先輩借りるね？」………What has happen

ed?」

芽衣さん？…俺じゃないの？…頭がパニックになり、気が付けば英語で質問していた。

【美咲桜】

「え」と『何が起こったんだ』って言ったんだよね？」「yes!」  
……………指示どおりに芽衣さんを連れて行くだけだよ？」

【芽衣】

「正義じゃねえのか？オレは構わないが……………指令書の内容は何だ？」

【美咲桜】

「コレです。ヒロ君も見たら？」

美咲桜が広げた紙を芽衣さんと一緒に覗き込んだ。何々……………

### 指令書

強くて凛々しくてカッコいい人（女性徒限定）

判定時に瓦割り（10枚）をしてもらうので、必ず合意の上で連れて来て下さい。

木刀やメリケンサック、釘バット等を持っていると順位得点が2倍になります。

【美咲桜】

「……………という訳なんです。芽衣先輩、一緒に来てもらえませ

んか？」

【芽衣】

「いいぜ…それじゃあな、正義」

2人は手を繋いでからゴールに向かって駆け出した。

【正義】

「こんなのアリかよ…この競技で順位変動しまくってんじゃ…」

順位得点2倍ってなんだよ……俺達の苦勞は一体何だったんだ？

ゴールに着いた2人は直ぐに審判のチエックを受けたようで、芽衣さんの オラアーツ！！ という掛け声と瓦の割れる音が聴こえた。

【正義】

「あれから20分以上経ってるし、そろそろ航は死んだ頃」あ、あ、くん！？誰が死んだって？」……………ダレ？」

背後から聴こえた声に振り向くと、目の前に航に見えなくもない人が立っていた。（ボロボロになりすぎていて、本人かどうか微妙）

【航】

「なんであの人は抱きしめる…サバ折りなのかな？…しかもそのまま押し倒してくるし。…呼吸できなくてお花畑が2回は見えたよ」

【正義】

「サバ折り喰らったって事は明日香ちゃん、キレたのか？…原因は何？」

あの普段おっとりした性格の人がキレた？…一体何をしたんだ？

【航】

「『私はまだ22なんだから歳の差なんて関係ない！』って、しつこく迫ってくるから…つい」

【正義】

「地雷を踏んじやった訳だ…明日香ちゃんが歳を気にしてるの、お前も知ってるだろ？」

【航】

「だって恋華が傍に居て…眼で『その女から早く離れないと死なすわよ？』って脅してくるから……しょうがなく…」

【正義】

「しっかし明日香ちゃんは

」

あれから暫くの間、美人保険医の梅澤明日香つめざわあすか通称、明日香ちゃんの話で盛り上がった。（主に愚痴）

途中芽衣さんのターゲットが『木刀』だったり（あり得ないよな）



して、かなり驚いた。（ゴールした後にはやって来て『だから言った  
じゃねーか！』を頻りに連呼していた）

そして遂に死亡遊戯ドッジボールの時間が来てしまった。

ここまでの得点は結局青組が一位で、かなりの差をつけられていた。  
（絶対に借り物競争が原因だろ！）

残り3種目で二位の赤組が逆転するのはかなり厳しい。

最低でもドッジボールで敵を全員殲滅して（殺った人数でポイント  
が増加していく為）混合リレーで二位以内、そしてクライマックス  
リレーで一位を取る必要がある。（青組がドッジボールを2位で混  
合リレーが一位、クライマックスで2位を取ったと想定した場合）

【航】

「……………という訳で棄権出来ない状況になってしまったの  
だ！」

いきなり空に向かって拳を突き上げ、説明口調で意味不明な事を口  
走った。

【正義】

「誰に言ってるの？…あまりの恐怖とプレッシャーで気でも狂った  
か？」

先ほど集合がかかってルール確認も終わり、色別に別れ柔軟等をし  
ながら試合開始を待っていた。

【航】

「そっそんな事ないやい！…早く殺りたくてウズウズしてるぜい！」

【正義】

「『ウズウズしてるぜ！』って…誰だお前は？」

【松原】

「試合を始めるぞ〜！…選手整列！……………良しっ！お互いの健闘を讃えて握手」

【芽衣】

「正義…今日こそは殺ってやるから覚悟しとけよ！」

【正義】

「ええ…お手柔らかにお願いします」

【亜沙美】

「2人共、お互いに頑張ろうね？…まあボクの球で殺っちゃうけどね！」

【正義】

「お互いにベストを尽くそう…因みに勝つのは俺達だ、青じゃない」

【航】

「そっそっだ！…全員潰してやるよ！」

【美咲桜】

「ヒロ君…勝敗はどつでも良いから、怪我だけには気をつけてね？」

【正義】

「どうしても良くはないけど……解った、無茶はしないよ」

互いの健闘を讃え握手を交わして、皆自軍のコートに散って行った。

【松原】

「ポイントの高い競技だから皆確りと応援しろよ！……特に赤組！……最後になるが、チームを優勝させる為に最も危険な種目に出場してくれた36人の勇者に盛大な拍手を！」

パチパチパチ

！！

！

【松原】

「只今より色別対抗ドッジボールを開始する！……ジャンパーは中央へ…………………セット！……レディー……………ゴールツ！！！」

各色のジャンパー3人が一斉に、空に舞ったボールに向かって手を伸ばし跳躍した。

今回芽衣さんはジャンパーじゃないのか？……………！？

【正義】

「下がるぞ、航っ！！！」

ボールはジャンパー3人が弾き合い、運悪く青組のコートに転がっていた。

【航】

「解ってるっ！！！」

航とライン際まで下がると同時に、互いに顔を見合わせて頷き視線を青に戻した。芽衣さんがボールを拾って此方に駆け出し、ライン際から砲撃が放たれようとしていた……オーバースロー！

【芽衣】

「死ねやぁーーーーッ！！！」

軌道上には二年男子の先輩が1人……チッ！早くも1人アウトか

【赤組男子】

「グハアーーーーッ！！！」

喰らった先輩はコートの外まで吹っ飛ばされ、ボールは青組のコートに弾かれていた。

ワアアアー！

目の覚める様な強烈な一撃に、青組の応援席から歓声があがった。

赤組8 青組9 緑組9

青組のコートに弾かれたボールを拾ったのは亜沙美、助走をつけてから此方に投げってきた。

【亜沙美】

「逝っけえーーーーッ！」

此方に向けて反時計回りに回転している、スピードのあるボールが放たれた。

【航】

「マサ君っ！」

【正義】

「分かってるっ！」

此方に飛んで来たボールの正面に移動して左手を下、右手を上を構えた。

【正義】

「……ッ！……よし！捕った！」

ボールを上下から挟み込んだ瞬間に両手を時計回りに動かし、反対から回転を加え反動を相殺してから確りと胸に抱え込んだ。

アレ？…赤組から割れんばかりの歓声が無くない？

【恋華】

「マー君、ナイスキャッチ！…先輩の敵討ちだよ。殺っちゃえっ！」

【航】

「計算通りだね！…どうだった、俺でも捕れそう？」

声援は恋華1人か………なんか虚しいなあ。どれだけ重い球か解らないんだろうな。

【正義】

「軍手だとキツいかもな、でもお前なら3・4球は捕れると思うぜ」

さてと、緑でも削りますかね…青を狙って芽衣さんにでも捕られたらシャレにならないしな。

【亜沙美】

「ボクの球を捕るとはね！…お返しに狙ってみる？…それとも緑に逃げるのかなあ？」

安っぽい挑発だなあ。あんな挑発に載ってたまるかよ、折角掴んだ攻撃するチャンスなのに。

【正義】

「後で殺ってやるから、子供は大人しく待ってなさい！…っという訳で緑は死ねやつ！」

亜沙美と話していたので攻撃は無いと油断したのか、緑組の殆どがバツクしていなかった。

亜沙美と話しながら横目でターゲットの位置を確認していたので、顔は動かさず視線だけを移して小さな動作でボールを投げつけた。

【緑組男子】

「なっ！？…グハッ！」

赤組8 青組9 緑組8

一番近くに居た男子の肩に当たり、弾かれたボールは此方に跳ねて来た。

跳ねて来たボールを掴んで緑組のコートに視線を戻すと、体調が悪いのか動きにキレがない女子が居た。

【正義】

「ゴメン…ねっ！（コートの外でゆっくり休んでね！）」

力を入れずに腕の振りと手首のスナップだけを使って、球威を抑えつつスピード重視の球をフラフラしている足めがけて投げた。

【緑組女子】

「…キャッ!？」

赤組8青組9緑組7

放ったボールは狙い通り太もも辺りを捉え、そのまま緑組のコート内に留まった。

ボールが戻って来ないのを確認してから急いで後方に下がると、傍に居た航が寄って来た。

【航】

「ナイス、マサ君!…でもボールは緑に取られちゃったね」

【正義】

「跳ね返って来ないのは分かってたよ…球威を殺した球だしな」

視線でボールを追いつつ、狙いをつけられない様に移動を繰り返しながら返事を返した。

【緑組男子】

「もらったっ!」

【青組男子】

「…ッ!…ぐあっ!」

【青組男子】

「なっ!?!…足に!」

赤組 8 青組 7 緑組 7

緑組男子が投げた球は青組男子の腕を捉え、そのまま近くに居た男子の足に当たった。

ワァァー!

一気に2人がアウトになり、緑組の応援席から大きな歓声が上がった。

【航】

「芽衣先輩がボール持ってんですけど何か?」

ボールは青組のコートを転がり、彼女の足に当たって停止した。

彼女はゆっくりとした動作でボールを拾い上げ、人差し指の先に載せてクルクルと回した。

【芽衣】

「オレが投げねえからって…お前等調子に乗ってんじゃねえぞ?…

……ムカついたから、そろそろ本気で行かせてもらっぜっ!…!」

彼女がドスを効かせた低く冷たい声で告げると、場の空気が変わった。



青組以外の選手が突然ガタガタと震えだし、会場から拍手や歓声と  
いった音が消えた。

【芽衣】

「先ずは見せしめだ！2人を殺つてくれたテメエは……さっさと  
消えなあーッ！！！」

【正義・航】

「……………」

本気になった彼女は凄まじいの一言だった。砲撃を喰らった男子はコート外に悉く吹っ飛ばされ、俺達も避けるのに必死だった。

彼女の砲撃は計算済みなのか、当たった後8割位の確率で青組のコートに戻る。(残り2割で緑にボールが残ったが、青組を狙って捕球された為に実質は10割だ)

その結果：俺達はボールに触る事すら出来ずに緑の男子は全滅、赤の男子も残っているのは俺達2人だけだった。

赤組4 青組7 緑組1

【美咲桜】

「次は……赤っ！」

美咲桜がサイドスローの体勢から投げた球は、少しだけ落ちながら横に曲がった。

【赤組女子】

「えっ！？横に！……キャッ！」

フォークを予想して体勢を低くしていた為に、横に変化した球に反応出来ずに二の腕に当たった。

赤組3 青組7 緑組1

【航】

「やっとマイボールだね！……今からどう攻める？」

足元に転がっていたボールを拾い上げて、此方に駆け寄って来た。

【正義】

「とりあえず先輩は守るぞ。…緑の女子は無視しよう、まずは青の男子を削らないとな」

青の男子は3人……ボールを捕られたらマズイし、俺が殺るか？

【航】

「どうするの？…芽衣先輩、思いっきり挑発してきてるよ？」

彼女は此方を向いてニヤニヤしながら、腕を前に突き出して中指を立てていた。

【正義】

「ボール寄越せ！……芽衣さんは男子を削ってからだ」

今殺り損ねたら、話にならない……あの作戦は多分一度しか通じないからな。

【航】

「ハイハイっと、あんまり熱くなっちゃ駄目だよ？」

航からボールを受け取って、青の男子を眺めながら笑顔で口を開いた。

【正義】

「しっかし青の男子はヘタレが多いなあ…芽衣さん達が居ないと何も出来ないんじゃない？」

【青組男子】

「なっ！……良く聴こえなかったんだが、もう一回言ってくれる  
かつ！……一年坊！」

クツクツクツ…沸点低い人達だなあ、あっさり畏にかかりやがった。

【航】

「ちょ！ちよつとマサ「黙って観てる！」………解った」

狼狽える航を征して、笑顔を崩さずに口を開いた。

【正義】

「ヘタレって言ったんですが、聴こませんでした？…なら何回でも  
言ってあげますよ、ヘタレヘタレヘタレ「このガキッ！」………  
ガキなのはっ！…アンタ等だっ！……！」

挑発に載って前に出て来た奴に向けて、球威とスピードのある球を  
全力で投げつけた。

【青組男子】

「グギャー……っ！……！」

捕球しようとして前に出していた右手の指先に当たり、鈍い音が聴  
こえてきた。

赤組3 青組6 緑組1

捕球に失敗したボールが此方に跳ねて来たので確りと掴んだ。

【赤組女子】

「七瀬君、ナイス！…やっつと反撃開始だね！」

【航】  
「なるほどね。…という事は残り2人も…「楽勝」…頼んだよ！」

同じ様に挑発を繰り返して残りの男子を潰した。(かなり近くで投げつける為に、狙い通りボールは戻って来た)

赤組3青組4緑組1

【航】  
「やっと希望が見えてきたね?…まだボスが残ってるけど…」

【正義】  
「ああ…今から中ボスの芽衣さんを潰す。…とは言っても裏技だけどな…」

【航】  
「ええ?…ラスボスじゃないの?」

【正義】  
「いや、裏技が使えるから難易度が…ちょっと耳貸せ?」

怪訝な表情をしている航を呼び寄せ、小声で『秘策』を説明した。

【航】  
「良くそこまでヤル気になったね?…恥ずかしくて俺には無理だよ…」

頭の上に????が浮いている航にボールを渡して、ヤル気になった

理由を説明してやる事にした。

【正義】

「さっさ松原がさあ…『最優秀クラスに選ばれたらお前達全員、数学を5にしてやる。あと数学の時間とLHRも自習にしてやるから、絶対に負けるなよ!』って、言っただからヤル気になった訳…OK?」

そう言い残し青組と赤組のコート間に引いてあるライン、ギリギリの所まで向かった。

【航】

「なるほどね。そりゃヤル気になるわけだ。……………健闘を祈るよ」

【正義】

「芽衣さん!…ちょっといいですか?」

怪訝な顔で此方を観ていた彼女に、両手を上げてボールを持って無い事をアピールしながら呼びかけた。

【芽衣】

「なんだ?…今じゃないと駄目「ハイっ!!」……………分かった」

彼女は少し考え込んでいたが、納得したのか此方に歩み寄って来た。

さてと、ここからが本番だ。一回しか使えないが……………成功させる自信はある!

【芽衣】

「どうしたんだ?…真剣な顔なんて「大事なお話しがありますっ!」



「大胆だねえ〜！…こんな大勢の前で告白するなんて、愛されてますねえ〜…園田先輩！」

美咲桜からの『ちよつと待った！』コールを無視し芽衣さんの石化を確認してから、右手をこっそりと背中に移動させ航にサインを送った。（成功！殺れ！）

【航】

「あらよつと…はい、芽衣先輩アウトね！」

背後から航がゆる〜い速さのボールを、石化している芽衣さんに投げた。

【芽衣】

「……………あ？」

彼女の胸に当たったボールは、此方に向かって跳ねて来た。

赤組3青組3緑組1

【松原】

「園田アウトだっ！…試合が進まないから早く退場しろ！（此方にサムズアップしながら）」

跳ねて来たボールを拾い上げ航に手渡してから、松原の方を向きサムズアップを返した。

【芽衣】

「え？…あ…ああそうか…すまない、直ぐに出る」



まだ何が起こったのか解っていない様で、気の抜けた返事をしてコートの外にフラフラと歩いて行った。

【航】

「作戦成功だね！…結果、会場中から白い目で観られてるけどね…」

【正義】

「しょうがないだろ？…俺が本気で投げる球を捕られるんだ、普通に殺れるならこんな事するかよ」

【航】

「まあマサ君の球を捕れるの芽衣先輩ぐらいだからね…残りの娘達、俺が殺ろうか？」

【正義】

「そうしてくれると助かる…美咲「ヒロく〜ん？」……………ナンデシヨウカ？（滝汗）」

背後から聴こえた猫撫で声に首をギギギと動かして顔を向けると、満面の笑顔で握り締めた拳をブルブルと震わせている修羅が立っていた。（握り締めた拳から血が地面に滴って、足元の砂が赤く染まっていた）

【美咲桜】

「ちよつとこつちに来ようかあ〜？」

マズイ…ここまでキレた美咲桜は観たことが無い。何とか回避……できる訳無いよな。

【正義】





「青組のお前が赤組のコートに入っちゃ駄目だろ？……残り時間も少ないから早く退場しろ！」

良く見ると確かに美咲桜は俺達のコートに入っていた。……もしかして結果オーライ？

【美咲桜】

「分かりました。…ヒロ君っ！…話はまだ終わってないんだからねっ！！？」

美咲桜はそう言うとコートの外に向かって歩いて行った。

【航】

「大丈夫、マサ君？……はい。掴まって？」

入れ違いにボールを抱えた航が此方に来て、手を差し出してきた。

【正義】

「悪いな、よつと……アレからどうなった？」

【航】

「皆…啞然として、口を開けて固まってるよ。ほらっ！…応援席の方を観てみなよ？」

言われるがまま顔を向けると、皆は声も出さずに固まっていた。

【正義】

「じゃあ美咲桜がアウトになっただけなのか？」

【航】

「うん。ほらっ！…赤の先輩1人に青の2人、緑の1人は残ってるでしょ？」

今度はコートの方を向いて周囲を見渡すと、確かに亜沙美を含め女子4人が生存していた。

赤組3 青組2 緑組1

【正義】

「なるほどね。…要するに5分位しか経ってない訳だ」

【航】

「そういう事…とりあえずマイボールのままだけど、どうする？」

【正義】

「俺ちよつと頭が痛いから休憩、亜沙美以外を頼めるか？」

【航】

「分かった！…もう5分位しか時間無いし、速攻で殺るから！」

そう言うと航は緑のコートギリギリまで近づいて、何かを言う（少し離れている為、声が聞き取れない）その娘の顔が真っ赤に染まった。

【緑組女子】

「キヤッ！……………約束忘れないでね？」

赤組3 青組2 緑組0

航は固まっている彼女に軽くボールをぶつけて、戻って来たボール

を拾い上げた。(約束って何だ?)

【航】

「また今度ねっ!...良しっ!.....次は青の娘か」

航はそのまま青組のコートギリギリまで歩いて行った。

先程と同じ様に呼びかけたのか、女子は航に近づこうとしたが亜沙美に手で遮られた。

【亜沙美】

「緑の娘に何を言ったのか知らないけど...ボクが居るからには殺らせないよ!」

亜沙美はそう言つと彼女を背後に移動させて、航を睨みつけた。

【航】

「あっちゃ...流石に無理っばいや。どうする、マサ君?」

【正義】

「小細工無しで、全力で行くしか無いんじゃないか?」

【航】

「疲れるから嫌だよう.....砕け散れえええー!」

上半身を大きく捻り、捻った上半身を引き戻す反動を利用して矢のような球を放った。

【正義】

「めっちゃ本気出してっ!?.....しかも、トルネード投法っ!?!?」

スピードはあるが...球威はどうなんだろう?...航はあんまり力が強くないからな。

【亜沙美】

「...ッ!...つとと、楽勝」

亜沙美は太もも辺りに飛んで来たボールを、バレーの様にレシーブした。ボールは頭上に高く弾かれ、落ちて来たボールを余裕でキャッチした。(楽勝とか言ってる割には、油断しすぎて落としそうだったか)

【正義】

「チッ!.....この役立たず」

【航】

「なっ!?...俺だって普通の人なら楽勝だよ!...アレを捕れる亜沙美ちゃんが異常なんだって!...威力15000だよあの球!?!」

【亜沙美】

「.....あの〜?」

【正義】

「俺が知るかよ!そもそも威力15000って何だ!何の数値だよっ!?強いのかよっ!?!?」

【亜沙美】

「.....ねえ?」

【航】  
「強いよっ！普通はヘヴン逝き確定だよっ！！天美さんに逢えるんだよっ！！捕るなんてあり得ないよっ！！！！」

【亜沙美】  
「……………もしもし？」

【正義】  
「このギャルゲー野郎っ！ヘヴンに逝くのはテメエだろっ！現にあり得てんだよっ！！そもそも天美さんって誰だよっ！！！！？」

【亜沙美】  
「今のうちに……………えいつ！！」

【航】  
「なっ！？それはタブーでしょ！それを言うならマサ君だって「キヤアーッ！！」……………え？」

背後から悲鳴が聴こえて咄嗟に振り返ると、後方のライン際に女子の先輩が倒れていた。

赤組2青組2緑組0

航は倒れている女子を完全にスルーして傍にあるボールを拾いに行くと、此方に戻って来て何故かボールを手渡してきた。

【航】  
「亜沙美ちゃん！……そんな卑怯な事してると殺っちゃうよ？……………マサ君が！！！！」



俺かよ？……おっ！あの娘、こっちに背中向けて外野と話してる。  
2人が話してる今なら……丁度ボールもあるしな。

【亜沙美】

「卑怯？……2人が勝手に喧嘩した「ッ！！」………しまった！？避けてえーっ！」

亜沙美が叫ぶのと殆ど同時に、ボールは外野と話している娘の背中に当たった。

赤組2青組1緑組0

【航】

「良しっ！……作戦成功！」

【正義】

「ええ？……お前達が話してたのって計算「キャハハハハッ！！」………ん？」

視線を移すと、亜沙美は両手で顔を覆って笑っていた。

《女帝モード発動》

【女帝・亜沙美】「キャハハハハハッ！！……アハッ！やっと面白くなってきた！」

そう言つと此方に背中を向けて、後方に転がっているボールの方向に向かった。

【航】

「何か笑ってるん……………ッ!?…血が出てる!!」

ボールを拾い上げた彼女は、此方を振り向くと同時に物凄いスピードの球を投げた。

【正義】

「危なかったなあ…顔面はセーフで良かったな、航!」

ボールが航の右頬を掠めて小さく切れ、血が地面に滴り落ちていた。

【航】

「なに今の!?…ビュンってなって直ぐにザシュって血が…今がボールですよ?」

『今がボールですよ?』って……どういう意味だ。動揺しまくってるな……………まあ無理も無いが、俺でもギリギリ見えた位だしな。

【正義】

「今がボールかどうかは知らないが……当たったのはボール」七瀬君っ!ボール投げるよ?」……………っと!ありがとう!」

外野の女子からボールを受け取ると、ラスボスの方に向き直った。

【女帝・亜沙美】

「キャハハハハハハッ!!…早く続きしようよ!折角楽しくなってきたんだからさ?」

さてと、どうやって亜沙美を潰すかな。俺の球は避けられるし、航なんて論外だしな。

【航】

「痛つつう〜アレ？険しい顔してどうしたの？」

【正義】

「ん？…攻略法を考えてる。…打つ手が無いんだよな、亜沙美は俺の球避けられるだろ？」

【航】

「そつだなあ……………挑発してみたら？…『捕れないから逃げてるんだろ』みたいな感じで…」

【正義】

「もし捕られたらシャレにならないぞ？…次にあんな球来たら、どつちか死ぬぞ？」

【航】

「でも、残り時間が3分も無いんだよ？…タイムオーバーなんて事になったら、総合優勝の可能性が…」

【正義】

「混合とクライマックスの両方を勝っても無理なのか？」

【航】

「ハッキリ言つて絶望的だね。…その条件を満たしても、青組がクライマックススリレーで2位になったらアウトだ…」

「確かドッジボールで全滅させれば、混合は二位でもクライマックスで一位をとれば総合優勝だよな。」

「青組のクライマックス三位は確かに絶望的だ…両方とも芽衣さん

が出てるし、混合にも美咲桜と亜沙美に噂の先輩がいるしな。こころで全滅させないと、総合優勝するためのハードルが高くなる……………  
…殺るしかないか。

【青組外野】

「時間稼ぎしないで早く投げろよ！…総合優勝はどうせ青組なんだよ、赤組はさっさと諦めて負けちまえ！！！」

【恋華】

「アンタ達が総合ポイント勝つてんだから黙って観てろっ！…マア君っ！航っ！…諦めちゃ駄目！…まだ大丈夫、勝てるよ！！！」

【航】

「恋華……………マサ君っ！勝負しよう！…やっぱりここで全滅させるしかないよ！」

ギリギリなのは解ってるよ…でも恋華や航が総合優勝を信じてる限り、俺に選択の余地なんて無い！…他の赤組の奴等はどうでもいい、2人の為に勝つただけだ！！

【正義】

「分かった。亜沙美っ！！…お互い避けるの無しで殺らないか？」

【亜沙美】

「キャハハハハハッ！！…ボクは別に構わないよ？…でも鳴海君は嫌なんじゃない？」

航に視線を移すと真剣な表情で深く頷いたので、頷き返して視線を戻し亜沙美を睨みつけた。

【正義】

「勝つのは俺達だっ！……オラアア……」

狙うのは捕りにくい膝から下か、胸から上……彼女は腰を落として  
いるから当然……狙うのは肩だ！

思いきり助走をつけてから彼女の右肩をめがけて、ボールを持った  
右腕を全力で振り抜いた。

【亜沙美】

「クツ！肩につ！？…痛っ！……ボールっ？…ツ！？……  
…まだ終わってないっ！！」

腰を落としていた為にボールの正面に移動するのは間に合ったが、  
高さが合わせられずそのまま肩に当たった。

【航】

「良しっ！これでボールが落ちれば！」

【芽衣】

「まだ諦めんなっ！！走れ亜沙美い……ッ！！！」

【美咲桜】

「亜沙美い……ッ！間に合うよ……ッ！！！」

【恋華】

「お願いっ！！落としてえええ……ッ！！！」

亜沙美の肩に当たったボールは空高く舞い上がり、風に乗るゆっく  
り此方に向かって来ていた。

ボールから視線を正面に戻すと、亜沙美が此方に向かって走って来ていた。

あの軌道だと多分……このライン辺りに落ちてくるよな、亜沙美も間に合いそうだ。……俺がアウトになっても航が居る、確実に勝つためにはボールを捕るしかないな。

【亜沙美】

「ボクはまだっ！……クツ！……お願いっ！届いてええーっ！……」

亜沙美は此方に向かって落ちてくるボールに、手を伸ばして跳躍した。

チツ……あの軌道じゃラインまで届かない！……亜沙美の位置なら多分……青組のコートに飛び込んで、捕られる前に弾くしかないっ！……！！

【正義】

「させるかぁーっ！……」

あの後結局、体育祭は青組の総合優勝で幕を下ろした。

ドッジボールの結果：亜沙美が捕る前に俺はボールを弾く事に成功した。

結果的に亜沙美は捕球失敗でアウト、俺は青組のコートに飛び込んでラインオーバーでアウトだ（俺の体が青組コート of 地面に着く前に弾いたので反則にはならない）

最終的に航が生存していた赤組の勝利に終わった。

混合リレーは『恋華 航 陸上部の三年女子 俺』の順番で走った。

因みに青組の走者は『亜沙美 美咲桜 芽衣さん 陸上部の三年男子』の順番だった。

スタートして直ぐに前に出た亜沙美に恋華は必死で食らいつき、2

メートル位の差で航に繋いだ。

航は直ぐに美咲桜を抜くとその差を拡げて、10メートル位のリードを保ち陸上部の先輩に繋いだ。

先輩はバトンを受け取ると同時にトップスピードになり、少し差を拡げてバトンを受け取った。

15メートル程のリードでバトンを受け取り、後ろを振り向かず全力でゴールを目指して走った。

俺がゴールラインを駆け抜けて力を抜いた瞬間、青組のアンカーが直ぐ横を駆け抜けた。(2メートル位まで詰められていたらしい)

要するに混合リレーは赤組が一位、青組が二位だった。

クライマックスリレーは結構シビアな人選になった。

知らなかったが…メンバーに必ず女子を加えなければいけないし、全学年から最低一人ずつ選出しなければならぬらしい。

つまり『一年＋二年＋三年＋女子1名』の計4人になる訳だ。

三年女子を選択しなければ三年男子を二人使える等、人選から闘いは始まっている。(俺は一年で一番足が速い為に選ばれたらしい)

ここまでの総合ポイントで緑組の総合優勝は消えた。

混合リレーで総合ポイントが逆転した為、赤組は青組より上位で競



技を終えれば総合優勝だ。

逆に青組は優勝するしか総合優勝の可能性は無い。

赤組の走者は『バスケット部の三年男子 陸上部の二年男子 陸上部の三年女子（混合リレーの第三走者） 俺』の順番だ。（何で皆俺より遅いの？）

青組の走者は『陸上部の一年男子 バレー部の三年男子 芽衣さん 陸上部の三年男子（混合リレーでアンカーをつとめた人）』の順番だ。

スタート直後にバスケット部の先輩が転けてしまい、必死に挽回したが10メートル位遅れてしまった。

陸上部の二年はバトンを受け取ると半周程でバレー部を捉え、逆に10メートル程のリードを保ってバトンを繋いだ。

陸上部女子の先輩はリードを20メートル程まで広げた。しかし残り100メートル位で失速して差を詰められ、10メートル程のリードでバトンを受け取った。

混合リレーの時より少ないリードだったので、最初からトップスピードで走ったがゴールの5メートル手前でかわされてしまった。……あの先輩速すぎ！

因みに俺は体力的に限界だったが、無理をして100を10秒8位のペースで走った。（自己ベストは10秒34）

………という訳でクライマックスリレーは青組の勝利に終わり、総合優勝も青組に決まった。(恋華は悔し涙を流していた)

しかし!…最優秀クラスに選ばれたのはなんと1 A、つまり俺達だった。(松原は泣いて喜んでいた)

こうして俺達の汗と涙と青春?の第40回体育祭は終わりを告げた。

閉会式がも終わると美咲桜と芽衣さんに追い掛け廻された。(ドゥッ  
ジボール事件の追及)



11 お楽しみ戴けましたでしょうか？ストーリーバランスを考えたの Comedy なので、あまり面白くないかもしれません。(というより文才が足りない)もし楽しんで戴けたのなら幸いです。本編をしっかりと読んでる方には、次話の展開が解ると思うので次回予告はありません。それではまた 12 でお会いしましょう。

12 5月第3週「少女の過去、失われたモノ」（前書き）

12も病院からお届けしております。いや〜過労を侮ってましたよ。仕事に復帰して一日目で病院に逆戻りとは……しかも同じ部屋。………という訳で 12お楽しみくださいませね。（由衣口調）

12 5月第3週【少女の過去、失われたモノ】

【正義】

「ハア」……………アンタと話していると疲れる」

【警備員】

「……………私もだよ」

ここは宮園女学院の校舎内にある応接室。俺は最高に座り心地の良いソファーに座り、向かい側の座る警備員と優雅なティータイム？を楽しんでいた。

【警備員】

「いい加減に……………本当の事を話してくれないか？……………女子の制服を盗む為に、あんな所に居たんじゃないのか？」

そう言うと警備員はニヤニヤしながら此方を指差した。

【正義】

「だから！」「もう少し待たせると思うから、校内にあるカフェでお茶しながら待ってて」って友達に言われたから、カフェに向かつてただけ！……………場所が解らなくてウロウロしてたら、貴方に捕まった……………はい説明終了！」

【警備員】

「君はまだ若い…罪を償えば「だからっ！俺じゃ無いって！！」……………ステキ丼でも食うか？」

警備員はそう言うと、テーブルの上に置かれていた携帯電話を手に

取った。……………ステキ井？

【正義】

「ステキ井？…ステーキ井の間違えなんじゃ…」

そう言うと警備員は腕を組み大きな溜め息を吐いた。

【警備員】

「取り調べで大活躍のステキ（素敵）井、知らないのか？…：…自白剤がタツプリ染み込んだス」弁護士を呼べっ！今スグにつ！！」…：…激ウマなのに？」

何？その恐ろしいメニュー…：そんなモノ食わされたら黙秘権なんて無いも同然じゃねえか。

【正義】

「ハア……………（何でこんな事に）」

では此処で『何でこんな事に』なったのかをご覧戴く為に、時間を5時間程巻き戻してみようと思う。

PLAYBACK

正義SIDE

体育祭の翌日に川上さんから電話がかかってきて、話しているうちに『久しぶりに逢わない？』という流れになった。

彼女の声を聞いているうちに告白された時の記憶がフラッシュユバツ

クして来て、逢おう と言えなかった。

本当は逢って美咲桜の件で力を借りるつもりだったが、告白を断った理由である美咲桜の事に協力してもらうのは気が引けた。

彼女からの告白を覚えていながら、軽々しく力を借りようとした最低な自分に自己嫌悪して、ゴメン と言って電話を切った。

電話を切ってから丸一日考えても『美咲桜の過去』を知る方法が思いつかず、結局此方から電話をかけた。

昨日一方的に電話を切った理由を話してから謝り、そして美咲桜に対する想い。今の状況。これからの願望の全てを話した。

20分近く話が続いたが、彼女は何も言わずに最後まで聞いてくれた。そして 私に対して申し訳ないと思う気持ちがあるなら……少しでも早く問題を解決して……付き合って……幸せな2人の姿を見せてほしいな?……それが貴方を好きになった……いえ……今でも好きな私からのお願い。……だから……さ……私に出来る事なら何でもするから、遠慮なく言ってくれ! と言ってくれた。

今でも俺の事を好きだと言ってくれて、それでも俺達の仲を応援してくれた彼女の優しさに泣きそうになった。唇を噛み何とか堪えて、何度も感謝の言葉を述べてから 美咲桜の入学当時の友人と、同時に駅前のスクールに通っていた生徒を捜して欲しい と頼むと、二つ返事で引き受けてくれた。

見つけたら直ぐに連絡するから、期待して待っていてね!……それじゃあまた……おやすみ、七瀬君 と言って電話が切れた後、堪えきれなくなつて涙が溢れた。……彼女が変わらず友達で居てくれた事に……



自分の気持ちを殺してでも俺を応援してくれた優しい言葉に……声から感じた包み込む様な温もり……彼女に頼らないと何もできない自分の情けなさに……枕に顔を埋めて、声が枯れるまで泣き続けた。

その2日後、つまり今日の昼休みに携帯が鳴った。隣に美咲桜が座って居たので教室を出て、通話ボタンを押し 少し待ってて と告げてから走って屋上へと向かった。

屋上に着くと周囲に人が居ないのを確認してから、奥のフェンスに背中を預けて携帯を耳に当てた。

【正義】

「待たせてゴメン……電話してきたって事は、もしかして『見つかったよ!』……早速で悪いけど、詳しく聞いても良いか?……時間があればいいけど……」

【川上】

『こつちも昼休みだから大丈夫だよ?……入学当時から桐原さんと仲が良かった娘は、結構居るみたい。彼女……人気者だったらしいよ?でも……一ヶ月位経った頃から、少し変わったって皆言ってた……』

入学して直ぐなら、美咲さんが言っていた時期と重なるな。……変わった?

【正義】

「一体、何がどういう風に変わったんだ?」

【川上】

『感情を表に出さない様になった……ってというのが一番多かった意

見だね』

感情を表に出さない？…今の美咲桜からは全く想像できないな。ア  
レ？…美咲さんはそんな事、一言も言わなかったよな？…外でだ  
け感情を抑え込んでるって事が、何が原因なんだろう。

【川上】

『話を続けるよ？…同じスクールでさっきの条件、つまり今の一年  
生であてはまる娘は2人。1人はピアノを習ってる娘、もう1人の  
娘はフルートだって。……今日会ったばかりでまだ詳しくは聞いて  
ないから、これ以上は解らないの……役に立つ情報だった？』

ピアノの娘は俺が望む条件に完璧当てはまるな。……期待して良  
さそうだ。……もう1人の娘はピアノの音と指使いの微妙な変化を  
感じとれるかどうかだが……難しいだろうな。

【正義】

「本当にありがとう。…とても役立つ情報だったよ、特にピアノの  
娘は今から逢いたい位…」

【川上】

『……七瀬君、今日は何か予定あるの？……無いなら聞いてみるけ  
ど？』

今日はいつも通りにカフェテリアに寄って、帰宅後6時から10時  
まで弾く予定だったな。……でもこっちの方が重要だし、悩むまで  
も無いか。

【正義】

「今日は予定無いよ…全然大丈夫だ。……それにあっただとしても、川

上さん達に合わせるよ。頼んでるのは俺の方だからね」

【川上】

『分かった。…ちょっと待っててね?…ピアノの娘が今、廊下に居たから聞いてみるよ………(5分経過)………ピアノの娘はOKだつて!…フルートの娘は予定があるから、今日は無理みたい。………どうするの?』

都合良しか…フルートの娘は不確定要素があるから無理に会わなくても良いが、でもピアノの娘と2人きりなのは流石に気まずいな…  
…初対面だし。川上さんはどうなんだろう?

【正義】

「できれば逢いたいけど…川上さんは今日何か予定あるの?………久しぶりに逢って話したいしさ」

【川上】

『私は大丈夫だけど……生徒会の仕事で少し遅くなるよ?………大体終わるのは5時位かなあ…それでも良いなら、5時位に学校まで来て欲しいんだけど……その娘と一緒に校門まで迎えに行くから』

【正義】

「もちろん行くよ!…じゃあ5時少し前にそっちに着く様にする、それじゃまた後で!」

【川上】

『うん。逢えるのを楽しみにしてる、じゃあね七瀬君!』

電話を切ってから液晶に視線を移すと5時限目が始まる直前だった。どうせ次の数学は自習なので(体育祭で勝ち取った)その場に座り

込んで空を見上げ、雨が降りそうもないのを確認してから瞼を閉じた。

目を醒まして携帯で時間を確認すると3時40分になっており、着信ランプが点滅していた。着信履歴を確認すると114件と表示されており、驚きのあまり携帯を落としそうになった。

### 着信ランキング

## 1ST BATTLE

- 1・美咲桜（51回）
- 2・航（19回）
- 3・恋華（17回）
- 4・英理朱（14回）
- 5・亜沙美（12回）
- 6・芽衣さん（1回）

ちよ！？美咲桜は少しかけすぎだろ！…しかも何で母さんが14回もかけてきてんの？…留守電も入ってないし、どうでもいいか。

とりあえず航にメールを送っとくかな。『俺は今日用事が入ったから、カフェテリアに行けない。……………』という訳で美咲桜をキレさせない様に説明しろよ？……………健闘を祈る！！』つと、こんなモンだろ。送信っ！

【正義】

「今が3時40分だから…」

ええ〜つと4時55分迄に着くには…此処から大瀬中央駅まで車で25分…大瀬中央 宮園間は約30分…宮園駅から学校まで徒歩15分……………余ってる時間…5分？

【正義】

「ヤバい！電車の時間次第じゃギリギリじゃねえか！……とりあえず教室に鞆：クソッ！俺の馬鹿！……走りながらタクシー呼ばないと……間に合ってくれえー……ッ……！」

あれから教室で鞆を回収して校門まで2分で到着した。

（過去最速）呼んでおいたタクシーに乗り込み、（実は校門前に偶然停まっていた）タイムロスなしで駅前のロータリーに着いた。タクシーを降り改札を潜ってホームを見渡すと、上りのホームに電車が停まっていたので走って乗り込んだ。宮園駅に着き南口から外に出てロータリーの時計を見ると4時40分だった。そこで漸く間に合うのを確信して、ゆっくりとした歩みで宮園女学院を目指した。

【正義】

「なんとか間に合いそうだが、それにしても……此処は城なのか？」  
駅から少しゆっくりと歩きながら、宮園女学院の城壁？……を眺めながら校門に向かって歩いていった。

左側の景色は全く変わらず、高さ3メートルはある真っ白な壁が続いていた。

【正義】

「しつかし……防犯カメラの数、多すぎないか？……しかも首を振るタイプのヤツだし……」

視線を上げると城壁？の上に5メートル間隔で防犯カメラが設置されており、次々と此方を向き俺をロックオン……此処は刑務所か？

【正義】

「ん？……他の通行人にはロックオンしてないよな？……何故に？」

前方から歩いて来る明らかに怪しい人（季節外れのロングコートに黒いサングラス）にはカメラは反応しておらず、視線だけ左上に移すとやはりロックオンされたままだった。

溜め息を吐いて視線を正面に戻すと、漸く目的地である校門が見えてきた。

【正義】

「やっと着いた……時間は……57分。セーフだな……」

携帯で時間を確認してから傍にあるガードレールに腰かけ、遙か前方に見える校舎を眺めた。

ここ私立宮園女学院は宮園地区の北側、市街地のほぼ中央に位置する。

広大な敷地内には中等部、高等部の校舎が立ち並び学生を支援する為の施設も充実している。

コンビニや本屋にファミレス、塾や英会話スクールまである。

生徒数は中高合わせて約1500人が通う、国内最大級の女学校だ。

【高等部女子A】

「こんにちは！……その制服……鳴響の方ですよね？……学院に何か御用ですか？」

【高等部女子B】

「こんにちはあ〜！……ハーフなんですかあ〜？……綺麗な髪で羨ましいですう〜」

校舎から声が聞こえた方に視線を移すと、すぐ傍に宮園高等部の制服を着た娘達が立っていた。

宮園女学院の制服は黒を基調としたセーラー服で、高等部は襟元や袖口に赤いラインが入っている。（中等部は白いライン）

【正義】

「こんにちは。……ええ鳴響ですよ。……学院に用事は無いですけど、人と待ち合わせをしているんです」

何の躊躇も無く見知らぬ男に挨拶するなんて、流石は宮園だな……皆



礼儀正しい。

【高等部女子A】

「待ち合わせですか？…それなら場所を変更したほうがいいと思いますよ？」

【高等部女子B】

「そうですねえ〜…制服泥棒とお〜…間違われるかも知れないですしい〜…ハーフですよねえ〜？」

制服泥棒？…だからカメラがあんなに設置されてたのかな？…でも俺にだけ反応してた理由は？…それに川上さん達は大丈夫かなあ。…何か心配になってきた。

【正義】

「制服泥棒ですか？…すみませんが、詳しく聞いてもいいですか？…此処に通ってる友人が心配なので…」

【高等部女子A】

「ええ構いませんよ？…今月に入ってから、高等部に通う生徒の制服が盗難にあう事件が起きてるんです。それも結構頻繁に…目撃者の詳言だと犯人は、『長身』で、『金髪』の方らしい…ですよ？…ね？…移動した方が良いでしょう？」

わざわざ『長身』と『金髪』を強調しなくても…思いっきり疑われてるなあ。…移動した方がいいかな？

【高等部女子B】

「ちよつとお〜！…み〜ちゃ〜ん！…この人はそんな事しないよお〜！…それとハーフですよねえ〜？」

この娘もめげないなあ。別に答えてもいいんだけど、もう会うことも無いだろうしな。

【みくちゃん？】

「私はこの人が疑われない様につ！ハア……忠告はしましたよ？……私達は用事がありますので……ほらっ！……ルミ、行くよっ！」  
みくちゃん？はルミと呼んだ娘の襟首を掴むと、ズルズルと引き摺って行った。

【ルミ？】

「ハーフなんですかあああ……っ！」

ルミ？って娘……あんなタイプの娘が友達に居たら面白いだろうなあ。  
遠ざかって行く背中を眺めていると、ズボンのポケットに容れていた携帯が鳴った。

取り出して液晶に視線を向けると『川上さん』と表示されていた。何かあったのかな？……と思いながらも、通話ボタンを押し耳に当てた。

【川上】

『七瀬君、待たせちゃってゴメンなさいっ！……生徒会の仕事が片付かなくて……暇だったんじゃない？』

電話の向こうは凄いんだろっなあ？……足音……叫び声……阿鼻叫喚っ言葉がしっくりきそうだ。

【正義】

「そうでも無いよ?…さっきまで面白い娘達と話してたから」

【川上】

『そうなんだ?…本当はあの娘を迎えに行かそうと思ってたんだけど…忙しいから手伝ってもらって…本当にゴメンなさい』

【正義】

「謝るのは俺の方だ…忙しいのにゴメンな?…俺の事は後でいいから、生徒会の仕事頑張って!」

【川上】

『うーん…外で待たせるのも悪いし……そうだ!もう少し待たせると思うから、校内にあるカフェでお茶しながら待ってて!……ゴメン!忙しいからまた後で!それじゃ切るね』

本当に忙しいみたいだなあ。今日を選んだのは失敗だったかな。これから会って話したら帰宅が遅くなるし、例の娘にも迷惑だよな。……今更云っても仕方ないな。

【正義】

「カフェねえ…とりあえず高等部の校舎に行つて、誰かに場所を尋ねよう」

携帯を定位置に仕舞い、遙か前方に見える正面玄関を目指して歩き始めた。

正面玄関に着き中に入って来客用スリッパに履き替え、カフェの場所を尋ねる為に人を捜して歩き始めた。

5分後

【正義】

「誰も居ない。職員室すら見つからないし……まあ適当に探せば、い  
ずれ見つかるよな？」

更に10分

【正義】

「アレ？……さっきも理科室の前を通らなかったか？………気のせい  
だよな？」

更に更に10分

【正義】

「ここはドコですか？」

いい加減歩き疲れたので立ち止まり、何故いつまで経っても目的地  
へ着かないのか考えた。

大体何でこんなに広いんだ！……階段も無駄に多いし。何処かにルー  
プするポイントでもあるんじゃないか？

【正義】

「そうとしか考えられない。……さっきまではこんな部屋無かったしな?……更衣室か「動くなっ!」……そこで何をしているっ!」……  
「……は?」

声が出た方に振り向くと、警官の様な恰好をしたガタイの良い男が立っていた。

【警備員】

「こんな所(更衣室の前)で何をしていたっ!?!……ん?…金髪  
の長身……ちよっと来いっ!!!」

いきなり腕を掴まれて、そのまま引き摺る様に前を歩き始めた。

【正義】

「あの〜?一体何」「つべこべ言わずに歩けっ!」……いや、しか  
着けば解るっ!」……もしかして最悪のパターン?」

回避不可だと悟った俺は、抵抗もせずに警備員の後を着いて行った。

カチャ

応接室と書かれたプレートが付いた扉を開け、中に入ると鍵を掛けられた。

【警備員】

「そのソファに座ってる!……俺は紅茶淹れるから、少し待ってるよ?」

そう言って警備員は隣の部屋に入って行った。

言われた通りに高そうなソファアに腰かけると、2分程経ってから戻って来て紅茶をテーブルに置き対面に腰を降ろした。

警備員は足を組んでソファアに深く体を沈め、天井を見上げて此方を観ずに口を開いた。

【警備員】

「最近…高等部に通う生徒の制服が盗まれる事件が起きてる。……  
…どう思う?」

どう思う…ねえ。俺が犯人だと云いたげな物言いだな。

【正義】

「その話は知ってますよ。…先程、此処の生徒さん達が教えてくれましたから。……歯に布着せた物言いは止めて……ハッキリ言ったらどうです?」

どうせ『身体的特徴が一致している』とか言われるんだろう…本当に疲れるな。…こんな意味の無い事早く終わらせて、川上さんに連絡しないと。

【警備員】

「知ってるなら話が早くて助かる……私も忙しいのでな。なら言わせてもらうが……犯人はお前だろ?」

【正義】

「ハア…残念ですが違いますよ。俺は初めて此処に来たんですから……友人に逢う為に……」

【警備員】

「捕まった奴は皆そう言うんだ。…それにお前は目撃者が観た犯人と同じ『金髪』の『長身』だ。時間帯も人気がない放課後。更には更衣室の前に居た。物的証拠以外は完璧だと思わないか？……………  
…なあ制服泥棒？」

確かに容疑者としては申し分ない……………せめて目撃者が此処に居ればなあ。直ぐに容疑は晴れると思うんだが…そう都合良くいくわけないか。

【正義】

「でも違いますっ！……………そもそも俺が彼処に居たのは偶然だっ！…会いに来た友人が『遅くなるから校内のカフェでお茶でも飲んで』と言ったから…カフェを捜してただけだ！……………その結果、場所が解らなくて…」

【警備員】

「更衣室に忍び込んだと？……………じゃあ、やっぱりお前」

この後10分程『お前だ！』『俺じゃない！』の押し問答が続いた。

PLAYBACK

END

つまり簡単に説明すると……………校門前 電話が鳴る カフェに行く為  
校舎に入る 人を捜す 放課後なので誰も居ない 適当にカフェを  
探す 迷子になる 女子更衣室前で思案 制服泥棒の犯人と間違わ  
れる 応接室に連行 取り調べ ステキ井 弁護士を呼べ！「お

前だ！ 俺じゃない！×10分間」 GOAL！！！！……とい  
う訳だ。

【正義】

「遅くなりそうなのでちょっと、電話をかけてもいいですか？…友  
人が心配するといけないので…」

【警備員】

「好きにしろ……とりあえずステキ丼は頼んでおくから、夕飯の心  
配はしなくて良いぞ？」

警備員を無視して携帯を取り出し、川上さんに電話をかけた。

【川上】

『ゴメンなさいっ！…ハア…ハア…今カフェに着いたからっ！……  
アレ？…何処に居るの？』

【正義】

「応接室。…カフェ探してたらさあ…警備員に捕まっただけ『え  
え~~~~~ツ！？』…耳が痛い……直ぐにそっち行くからっ！  
』……これで助かる…かな？」

【警備員】

「終わったか？……夕飯（ステキ丼）は後10分程で届くからな！」

【正義】

「ふざけんなっ！そんなモン食っわけねえだろっ！」

【警備員】

「とりあえず『俺が制服を盗りました』と言えば、食わなくても良



いぞ？……どうする？」

【正義】

「そうやって無理矢理に証言させて……調書にそのまま記入するんだろ？……それ今まさに社会問題になってるって！……どうせこの部屋に盗聴機がカメラでも仕掛けてんだろ？……言ってたまるか！」

川上さん……お願いだから早く来てよ。……この人と話していると疲れる。

【警備員】

「やれやれ、強情な奴だ……じゃあどうする？……喋らないなら警察に引き渡してもいいんだぞ？」

いい加減しつこい……多分コイツも事件の事で学院に色々言われて、必死なんだろうな。……減給だ！とか……職務怠慢だ！とか……普通に考えれば、目撃者を呼んで確認すれば終わりだ。顔まで見ているかは分からないが、『長身』と言ってるあたり……結構近くで見ている可能性が高い。大体は判別できるだろう。それに……最初に『目撃者』という言葉を使ってから、その事に一度も触れてない。……『コイツは犯人じゃないかも知れない』という自覚はあるんだろう。……かといって犯人になってやる気は無いが。

【正義】

「そこまで言うなら目撃者を呼んだらどうです？……さっさと」「ガチャ！ガチャ！……ドン！ドン！ドン！……七瀬君っ！中に居るのっ！？」……ああ！ちよつと待っててくれ！」

突然、扉が乱暴に叩かれ彼女の声が聞こえてきた。警備員に視線を向けると顎で扉を指したので、立ち上がって扉に向かい鍵を開けた。

【川上】

「七瀬君っ！……捕まった理由って……制服泥棒じゃない？」

鍵を開けた途端勢い良く扉が開き、申し訳なさそうな表情をした彼女が入って来た。

【正義】

「説明する前に電話を切つたのに、よく解つたね？」

そう言つと彼女は握り拳で胸を叩き、『当然だよっ！』と言いたげな表情をした。

【川上】

「ハア……やつぱりね。……でも安心して？あの娘を連れて来たから……入って！由衣ちゃん！」

あの娘？……一体誰の事を言ってるんだ？……でも安心してつて言つたし……もしかして目撃者？

川上さんが廊下に呼びかけると扉が開き、小柄でいかにも『お嬢様』という印象を受ける娘が入って来た。

【由衣】

「失礼します。……貴方が七瀬さん？……うん……全然違つわね」

此方を向いて問いかけてきた由衣さん？に頷くと、警備員の方を向き口を開いた。

【由衣】

「警備員さん！…犯人はこの方じゃありませんわ！…私が見たのは走り去って行く後ろ姿でしたけど…髪は彼のように長くありませんでしたわ！」

そう言うと由衣さんは此方を向いて微笑んだ。彼女達に軽く頭を下げて警備員の方に視線を向けると、苦虫を噛み潰した様な表情をしていた。

あの顔を観てるとムカつくな。自分が悪いと微塵も思っていない様な…あの時…俺の髪を切ったアイツの顔も。

【川上】

「七瀬君？…ッ！？…どうしたのっ！！凄く顔色が悪いよ！？」

ハツとして声がした方に顔を向けると、先程まで扉の前に居た彼女が隣に立って心配そうな顔で此方を見ていた。

顔色が悪い？…アイツの顔を思い出したのが原因かな。あの時の事は、もう乗り越えたと思ってた…『身体は嘘をつかない』とは良く言ったものだな。

此処に居ても何も始まらない…俺の無実も証明されたし、とりあえず移動しよう。

【正義】

「大丈夫…ちょっと気分が悪いだけだよ？…警備員のオッサン！…俺もう行ってもいいんだよね？」

【警備員】

「……………あぁ」

ソファーに座る警備員は此方を観ておらず、頭を抱えて頭を垂れていた。

あの人も後で学院に色々言われるんだろうな。…まあ人を制服泥棒扱いたした人間に、同情なんてしないがな。

【正義】

「行ってもいいみたいだ……2人共とりあえず移動しない？…さつきから喉が渴いちゃって…良かったら奢るよ？」

まだ心配そうな顔をしている彼女に、できるだけ明るく話しかけた。

【川上】

「……じゃあ、ファミレスに行くから着いてきてね？」

彼女の言葉に頷くと、彼女は由衣さんの手を引いて廊下に出た。

その姿が視界から消えると、警備員にもう一度視線を向けてから部屋を出た。

廊下の突き当たりで俺を待っていた2人と合流して、高等部の校舎を出てファミレスがある施設棟に向かった。

【猫耳ウエイトレス】

「おかえりなさいませ…お嬢様! ……三名様ですね?」

【正義】

「(コスプレ喫茶のファミレスVER?)」

お嬢様って…もしかしなくても俺も含まれてない?…女と間違われるなんて…凹むなあ。

【川上】

「ええ…お願いね?」畏まりました、では此方へどうぞ?」…七瀬君?…ほらっ! 行こう?」

猫耳ウエイトレスに驚いて(女と間違われて)固まっていると、彼女に肩を叩かれて我に還りウエイトレスの後を追った。

席に着いて皆適当にメニューを頼むと、さっきから疑問に思っていた事を尋ねることにした。

【正義】

「川上さん?…由衣さんが目撃者なのは解ったけど…例の娘つても由衣さんなのか?」

さっきから誰も呼ぶ気配が無いし…応接室に来た時、由衣さんも『この人が』って言ってたしな。

【川上】

「うん。由衣ちゃんがそうだよ! ……さっきは本当にゴメンね?…

由衣ちゃんから犯人の特徴を聞いてたのに……私が校舎に入れなんて言うから……」

彼女は申し訳なさそうな顔でそう言うと、頭を下げた。

『特徴を知ってて中に入った』って言ったら……川上さん呆れないかなあ。

【正義】

「実はさあ……校舎に入る前から犯人の特徴……知ってたんだよねえ」「ええ!？」……ほら、電話で面白い娘達と話してた……って言ったでしょ?……校門前でその娘達が教えてくれたんだ……」

そう言うと彼女は大きな溜め息を吐き、肩を竦めジト目でこつちを見ていた。

うわあ……スツゴい呆れてる。無理もないか……勝手に迷子になって勝手に捕まったんだからな。

【由衣】

「フツ……七瀬さんは彌生さんのおっしやっていたとおり……とっても面白い方ですね?」

そう言うと、由衣さんは口元をハンカチで押さえクスクスと笑った。

おっしやっていた?……川上さんは学院で俺の事を話したりしてるのか?

【川上】

「もあ……心配して損したよ!……話が脱線してるし……この娘は高

倉由衣。話し方で分かると思うけど、正真正銘のお嬢様。ちょっとお堅いけど、面白い娘だよっ！」

彼女はそう言うと、隣に座る由衣さんの肩をバシバシと叩いた。

【由衣】

「痛い！痛い！……これだから彌生さんは……ハア……初めまして、高倉由衣と申します。……私の事は由衣とお呼びくださいませ」

由衣は丁寧な言葉遣いでそう言うと立ち上がり、綺麗な動作でお辞儀をした。

頭を上げて腰を降ろし、此方に握手を求めてきたのでそれに応じた。

完璧なお嬢様だな……美咲桜も俺と居ない時は、こんな感じなのかなあ？……そうだと思いたい。

【正義】

「初めまして。七瀬正義です。俺の事も好きに呼んでくれて構いません。……じゃあ早速で悪いんだけど、由衣を呼んだ理由は分かっているよね？」

そう言うと由衣は大きく頷き、真剣な顔つきになった。俺はそれを確認してから口を開いた。

【正義】

「桐原さん……つまり美咲桜の事なんだけど……ピアノを辞めた理由が知りたいんだ。だから……ピアノに関する事で、どんな些細な事でもいいから教えて欲しい」

俺はそう言ってテーブルに手を突き、深く頭を下げた。暫くして顔を上げると、由衣は云うのを躊躇っている様な顔をしていた。

やっぱり何かあったんだ。大好きだったピアノを辞める位だし……こっちも覚悟して聞かないとな。

【由衣】

「桐原さんがピアノをお辞めになった訳……ハッキリとは申せませんが、恐らく……ピアノが楽しくなくなっただんじやないかと私は思います。4月の半ば位だったでしょうか。その日いつもの様に、一緒にスクールでレッスンを受けていたんですが……いつもは嬉しそうに弾く彼女が……ピアノに触るまで明るかった彼女が……触れた途端、無表情になって……でもその時はまだ……けど一時間くらい経った頃突然、彼女の音が走らなくなっただんです……全く……」

そこまで言うと由衣は顔を伏せて黙り込んでしまった。

俺が最後にコンクールに出た頃だ……音が走らないって事は、技術的な事じゃないな。精神的な問題……一体何が美咲桜に起こったというんだ？全く……っていう事は、鍵盤を譜面どおりに叩くだけ……それじゃあ素人と同じだ。

それに……ピアノに触ってから無表情になった……か。という事は……自分の意思じゃないという事なのか？……だから楽しくない……『楽しい』が無いピアノに残るモノ……『苦痛』『意地』……空っぽだ。

そんなピアノに自分の音が乗りはしない。

もしピアノが原因で楽しくないのなら『怖い』『嫌い』『挫折』……位か、『怖い』か『嫌い』なら何か間接的な原因がある筈だ。『挫





個人レッスンの後、時々……腕に痣ができてたり……お腹を押さえてツラそうな表情をしてましたから……私が『どうしたの』って聞いても、『何でもないから』の一点張りで……」

彼女はそこで一旦言葉を切って、手元にある紅茶を口に含んだ。

手を……嘘だろ！？……何でそんな事！……何があつたとしても、教え子に手を挙げるなんて許される事じゃない！それに……卵が先か鶏が先か分からないが、普段大人しい美咲桜がそこまで言うなんて信じられない。……俺の好きな音……か。アイツも色々なモノを守ろうとしてたんだな。もし、それが原因でぶつかつたとしたら……やりきれないな。結果的にアイツは……ピアノそのものを失ってしまったんだから。

【由衣】

「スクールではそんな感じで……それでとうとう、4月の終わりには来なくなってしまったんです。……学院も同時期に……」

【正義】

「感情を表に出さなくなつた……か？」

口を閉ざし顔を伏せた彼女にそう言うと、小さく頷いた。

そういえば、学院で感情を表に出さなくなつた理由って何なんだろうな？……スクールでの事が原因なのか？……時期は同じだけど……それだけでは何とも言えないな。他に要因があるかも知れないし、こっちはまだ断定できる段階じゃないな。……でも駅前のスクールは、近いうちに行かないといけないのは確かだな。……真相を知らないと前に進めない。

【由衣】

「それからの彼女は…人を寄せ付けなくなってしまっ…話しかけても相手にしてもらえなくて…でも二年生になって、クラス替えをしてから凄く明るくなっ…たんです。2人のクラスメイトと話す様になってから、以前の様に…今の彼女を知りませんから…その後は…比べようがありませんけどね？」

2人のクラスメイト…亜沙美や恋華の事だろうな。…本当に今あの2人と繋がっている事に、感謝しないと。2人共ありがとう…二年もの間、美咲桜を支えてくれて。

眼を閉じてからこの場に居ない2人に、心の中で深く頭を下げた。

【由衣】

「私が桐原さんについてご存知なのは、こんなところでしょうか。……お役に立てましたか？」

そう言うと彼女は綺麗な笑顔を作って首を傾げた。

得られた情報は…駅前の音楽スクールで暴力を振るわれていたかも知れない事。先生と教え方についてぶつかっていた事の2つ位か。でも間接的な原因が解ったし充分だ…一歩前進ってところだな。まだ先は見えないけど…頑張ろう！

【正義】

「ありがとう由衣。十分に役立つ情報だったよ。……こっちもツライ事を思い出させてゴメンな？」

心を傷めながらも語ってくれた彼女に、席を立ち上がって深く頭を下げた。

【由衣】

「お役に立てて何よりですわ。七瀬さん…紅茶と桐原さんに対する熱い想い、ごちそうさまでした。……それでは私は門限がありますので、これで失礼させて戴きますね。…彌生さん、後はお2人でごゆっくり……頑張ってくださいましね？…それでは」

彼女はそう言うのと席を立ち、此方に小さく手を振ってから出口に向かって歩いて行った。

本当にお嬢様なんだなあ。歩き方にも気品を感じる。ハア…恋華にも見習わせたい位だ。……美咲桜に対する熱い想いつて…『これから先、隣に立って支えていく』って言った事だろうな。…まあ本心だから恥ずかしくはないけどな。

【川上】

「ハア…全くあの娘は…何を言ってるんだか」

川上さんは何故か頬を赤く染めて、体をくねらせていた。……  
……川上さん？

【正義】

「そこで体をくねらせている川上さんに、一つ聞きたい事があるんだけど……いいかな？」

そう言うのと彼女の動きがピタッと止まり、両手を頬に当てて頭を横にブンブンと振った。

【川上】

「うんうんうん、何を聞いてもいいよ！…3サイズ？…上から8」

ゲホッ！ゴホッ！」「…どうしたの？…突然コーヒーなんて噴いちやって？」

一体さつき何を考えてたら、いきなり3サイズが出てくんだよ！…  
…彼女、着痩せするタイプなんだな。…そんなにあるようには見えないんだけどなあ…やっぱり女性は不思議だ。

噴き出したコーヒーを台拭きで素早く拭き取り、先程聞き損なった事を尋ねることにした。

### 【正義】

「此処（宮園）の校舎内に他校の生徒が入って良かったのか？…  
…文化祭も相当、一般入場者の制限が厳しいのに…」

宮園女学院の文化祭はとにかく凄いらしい。（航調べ）生徒1人に割り当てられる招待チケットの数は3枚。そのうち2枚は親族限定で、入場する際には身分証明書を提示しなければならない。つまり一般招待客は、生徒数と同じ人数しか入場できない。宮園女学院に通う生徒は相当レベルが高い為、（何のレベル？）毎年飢えた狼達によるチケット争奪戦が繰り広げられる。因みにオークションでの最高落札額は一枚72000円（航が購入）……というくらい凄いらしい。

### 【川上】

「授業中は駄目なんだけど、放課後はコンビニとかファミレスを一般解放してるから…入っても大丈夫なんだよ。部室棟周辺は入れないけどね」

そう言っただけで少し離れた席を指差したので、視線を向けると男性客が座っている席が目についた。

へえ〜…この猫耳ウエイトレスも一般解放してるんだ。…まさか航とか居たりしないよな？

しっかし…男性客もそこそ居るな。でも女子校なのに防犯意識が低すぎやしないか？…敷地内にこうもアツサリ男が入れるってのも…考えモノだよな？

【正義】

「解放するのは良いが…セキュリティが甘すぎだろ？…だから制服盗難事件なんてのが起こるんじゃないか？…俺も簡単に校舎に入れたし…」

正面玄関以外でカメラは観てないよな？…あの広い校舎でカメラ無しは無防備すぎだろ。…そもそも、俺がすんなり中に入れた時点で色々と終わってるし…父さんなら『生徒達が危険だから直ぐにでもプロに頼むべきだ！』って言うだろうな。

【川上】

「多分、七瀬君は女の子と間違われたんじゃないかな？…玄関に居る守衛さんに用件聞かれたりとか、ボディチェック受けたりしなかった？」

守衛なんて玄関には居なかった筈だ。この学院の管理体制は大丈夫なのか？

【正義】

「守衛すら見てないよ。…そのおかげで不審者扱いされて、巡回警備に捕まった訳。拳げ句の果てに…ハア〜俺は被害者だと思っただが…」

【川上】

「ハハハッ！…確かにね！…警備については生徒会で議題

」

彼女とはあれから一時間ほど警備について熱く語ったり（彼女は熱心にメモをとっていた）、お互いの近状報告等をしてから別れた。

1時間程かけ漸く帰宅して夕飯を摂ると、疲れた体を引き摺って自室に戻りベッドに倒れ込んだ。

【正義】

「色々ありすぎて疲れたけど……収穫の多い一日だったな」

川上さんも元気そうだったし、美咲桜の事も……まさか暴力を振るわれていたなんて考えもしなかった。でも、本当にそれが原因でピアノを辞めてしまったのか？……直ぐにスクールを辞めて別の所に通えれば良いだけだよな？……それに余程の事が無いと怒ったりしない美咲桜が、本当にあそこまでキツイ事を言ったりしたのか？……これだけは、やっぱり信じられないな。

【正義】

「一因ではあるんだろうが……もし先に手を挙げられていたとしたら、少しの間スクールに通い続けた理由が解らない。美咲桜の性格から考えても逆の可能性は低いし、確かにアイツは負けず嫌いだが……クソツ！……さっぱり解らないっ！」

美咲桜……お前は一体何を抱えてるんだ。何がお前からピアノを奪ったんだ。何がお前を変えてしまったんだ。

【正義】

「まだ先は見えてこないけど……今できる事をやるしかない！……まずは問題のスクールに行ってみないと！」

俺のトラウマも何とかしないとイケないけど……あんな事を聞かされた後じゃ、美咲桜の事しか考えられない。……来週からテストだけだ。

【正義】

「全てはテストが終わってから……よし！眠いから寝る！」

布団を被ると同時に眠気が襲ってきたので、来週からの予定を考えながら眠りについた。



12 5月第3週「少女の過去、失われたモノ」（後書き）

12は作風が変わってしまった為、本編が一区切りしたら大幅に修正する予定です。お粗末なモノで申し訳ありませんが、走り書きだと思つてください。…前話で無理な書き方をしたのが原因だと思つてますが、今回は更に変わってしまったって違和感バリバリだと思います。まだまだ先は長いので本編を進めるとい判断から、不自然な形でもとりあえず投稿しました。出来損ないを読ませた事をお許してください。長くなりましたが、それではまた次回 13でお会いしましょう。

13 5月第4週【見えない傷痕、少女達の決意】（前書き）

13 お待たせしました。（待つてると良いなあ）資料を間違えて  
グランドエンドの伏線やらを書いてしまい、半分を書き直すという  
事態が起きてしまった為に投稿が遅れました。（ゴメンなさい。言  
い訳デスね）話の方はそろそろストーリーが動き出しますよ〜。（  
多分…新キャラ次第……だと思っ）……………という  
訳で 13 お楽しみください。

### 13 5月第4週【見えない傷痕、少女達の決意】

月曜から始まった中間テストはハッキリ言って最悪のデキだった。

由衣に美咲桜の話聞いてから、暇さえあれば美咲桜の事を考える様になっていた。

その結果夜になると当然の様に美咲桜の事を考えてしまって、全然眠れない状況に陥りそのままテスト期間に突入してしまった。

テストは国・数・社・理・英・保の6教科で、1日2教科ずつ行われた。

初日は教室に着くと同時に強烈な眠気に襲われ爆睡してしまい、航に起こされた時には帰りのHRだった。（実施科目は国語と保健）

2日目もやはり朝から強烈な眠気に襲われた。1時限目に実施された理科（科学）は襲いかかってくる睡魔に何とか勝利したが、次の数学は開始から20分の激闘の末敗北：夢の世界に旅立った。例によって航に起こされた時には帰りのHRだった。（理科80点、数学40点は堅いと思う）

最終日は前2日の二の舞にならない様に、テスト終了後すぐに帰宅して無理矢理眠った。（布団に入ってから寝るまで6時間かかったが）

最終日（一昨日）の結果は完勝で社会（世界史）、英語ともに全ての解答欄が埋まった。（社会はそこそこの点数、英語95点以上は堅いと思う）

テストが終わるといつものメンバーに『打ち上げも兼ねて遊びに行かない?』と誘われた。しかし日曜に川上さん経由で由衣に連絡してもらい、例のスクールを案内してもらおう約束を取り付けていた為断った。

帰宅後約束の時間（宮園駅前に4時半）に間に合う様にピアノを弾いて時間を潰し、頃合いを見計らって家を出た。

小一時間かけて宮園駅前に到着し、改札口前に居た彼女と合流して大手音楽スクール『ルーシエ』に向かった。

彼女は5時からレッスンを受ける為、案内はするが一緒には居られない。そのためルーシエに向かって歩きながら、色々な事を教えてくれた。

ルーシエは業界大手の音楽スクールの為数多く点在し、生徒の指名（それなりの実績が必要）によって講師の移動が頻繁に行われる事。あの当時のピアノ講師は一人も残って居ない事。宮園校は美咲桜が辞めた同時期から生徒数が減少し始め、今では当時の生徒が残っている可能性が低い等の事を教えてくれた。

想像もしてなかった話の内容で俺の中にある『講師が生徒に手を挙げていたかどうかの真相を知る』という目標が、ガラガラと音を発てゆっくりと崩れ落ちていった。

ルーシエに到着してレッスンを受ける彼女と別れ、気を取り直し救世主（当時の事を知る人物）を捜して手当たり次第生徒に声をかけて廻った。（女性徒達は友好的だったが、男子生徒達の反応は冷たかった）

その後彼女がレッスンを終える7時までその様子を眺めたり、生徒達に声をかけ続けたが結局『当時から現在に至るまで、講師が生徒に手を挙げていた』という事実は一件も確認できなかった。

聞き始めは、ひよつとすると誰か一人位は知ってるんじゃないか？  
…現在も暴力行為が行われてるんじゃないか？…その当事者が居るんじゃないか？…  
…と思っていたが結果は惨敗。有力な情報は何一つ得られなかった。

『まだ会ってない生徒達が居る筈だ！まだ何か得られる可能性はある！また此処に来て聞けばいい！』と何度も自分に言い聞かせ、レッスンを終え手持ち無沙汰になっている彼女に 駄目だった…今日は案内してくれてありがとう と告げ足早にルーシエを後にした。

慌てて後を追って来た彼女と表に出ると、彼女に迎えの車が来ていた。乗り込んだ彼女に手を振って走り去る車を見送っていると、強烈な眠気に襲われた為家路を急いだ。

家に帰り着くと真っ直ぐ自分の部屋に戻り、ベッドにダイブすると直ぐに意識が途切れた。

その翌日（昨日）から『一刻も早くスクールに行つて真相を確かめない！』という重圧から解放されたせいか、美咲桜の事を考える時間も減り普通に眠れる様になっていた。

そのせいか学園では朝一から眠つてしまい、眼を醒ますと保健室の天井が目につきベッドに寝かされている事に気づいた。（何度起こしても全然起きない為、航と恋華が運んだらしい）

手には確りと手錠がかけられており、明日香ちゃんの『歳上の男』談義を放課後まで（眼を醒ましてから3時間弱）みっちり聞かされた。（話すのに夢中になっている明日香ちゃんの間について、航にSOSメールを送ったが返事は無情にも『無理』の二文字だった）放課後解放されてから直ぐにカフェテリアに行き航を虐め、いつものメンバーとゆっくり話をした後帰宅……………とい  
うのが大体昨日までの出来事だ。

【正義】

「ハア〜…来月から慎ましく暮らさないとなあ」

【航】

「仕方ないよ。…2教科白紙だし、数学の解答欄に『3(美)3(咲)0(桜)』って書きまくってたし…英語は100点だったけど、他が悪すぎ…困ったらお金なら貸すから…元気出しなよ?」

【恋華】

「アレは笑わせてもらったよ!…最初の6問以外全部『330』って書いてたからねえ…皆大爆笑してたし」

【美咲桜】

「ヒロ君は学年で何位だったの?」

【亜沙美】

「正義君は確か…182人中181位だったよ?…順位表観たときはボクも驚いたよ。…でも英語はよく満点なんて取れたね?…ボクも英語は得意だけど90点しか取れなかったよ」

金曜日の昼休み。いつものメンバーが集まり昼食を摂った後、朝から返却されたテストの話題で盛り上がっていた。(俺以外)

俺の点数は6教科合計で302点、学年で下から2番目だった。

我が家には色々な家訓があり、そのうちの一つに『常に自分を磨くべし』というモノがある。要約すると『他人と競うなら一つでも上を目指せ!』という事だ。

それに基づいて俺の小遣いはテストの点数や通知表の成績で決定している。

テストの前に母さんは 一年生って180人位だったわね?…それじゃあ30番以内ならお小遣いアップ!…60番以内で現状維持…それ以下なら半分にするから頑張ってね! と言っていた。

よって俺の小遣いは来月から現在の4万円から、半分の2万円になる予定だ。

【正義】

「携帯代引いたらカフェテリアに行けない…ハア…バイトでもしようかなあ〜」

何冊か譜面買ったらアウトじゃん。『おそらの庭』の子供達に、差入れのお菓子も買わないと…マジでバイト探さないといけないな。

【航】

「ヤバいなら貸そうか?…バイトなんて始めたら『色々』と問題があるんじゃない?」

目の前に座る航は『色々』を強調してそう言うと、俺の隣に座る美咲桜に一瞬だけ視線を向けた。

確かに美咲桜は問題だな。…下手したら『ヒロ君がバイトするなら、私もする!』とか言い出しかねない。…絶対にバレない様になければ。

【美咲桜】

「ねえ鳴海君?…今ヒロ君バイバイキングを食べに行かないかって言っただよ!そうだよなあ航!」…ヒロ君が行くなら私も行くっ!」



今月はまだ余裕あるし、バイキングで済むなら美咲桜の分ぐらいは喜んで奢ってやるよ。

【亜沙美】

「バイキング？…確かバイ」「バイクが欲しいなあ〜って言ったんだよ！ねえマサ君っ！」「…………乗るなら貸そうか？」

話に割り込んできた亜沙美に航が懸命にフォローしたが、隣に視線を向けると美咲桜はジト目で此方を見ていた。

あの馬鹿！話を合わせるよ！…うわあ〜…この娘めっちゃ疑ってる。…………これはマズいな、さりげなく話題を変えよう。

【正義】

「俺の事はもういいだろ？…………それよりも皆は何位だったんだ？…特に航と美咲桜の順位が気になる…やっぱりトップ10に入ってたのか？」

【恋華】

「アタシは493点で『亜沙美より上』の42位だったよっ！」

【亜沙美】

「クッ！…1点差のクセにい！…期末試験では必ずボクが勝つ！」

【航】

「俺は562点で5位だったよ。…英語の72点さえ無ければ、もう少し上だったのになあ〜」

【美咲桜】

「私は576点で1位だったよ!……という訳でえ……ダ〜イブツ!  
!」「うおっ!?!」「…エへへへエ〜」

美咲桜はそう言つと横から勢い良く抱き着いてきた。視線を向けると上目遣いで『誉めて欲しいなあ〜』という表情をしていたので、先程の事を誤魔化す為に気合いをいれて頭を撫でてやった。

【正義】

「1位取るなんて、やっぱり美咲桜は凄いなっ!」「にやふ?」「…よしよしよし!」「ふにゅ〜」……それにしても、そんなに英語難しかったか?」

【航】

「いやいやいやいや、あの配点10の長文問題5問は大学入試レベルでしょ?…英語の学年平均点39だよ?」

【恋華】

「航の言つとおりだよ!…英語で満点取つたのマー君1人だけなんだよ?…アタシなんて49点だったし」

【亜沙美】

「まあお子ちゃまの恋華には難しかったかも知れないでちゅね〜」「亜沙美い!そういうアンタは何点だったのよっ!」「…ボク?…さつきも言つたと思うけど『90点しか』取れなかったんだ…ホント悔しいよお〜」

【恋華】

「航う〜!亜沙美がアタシの事虐めるう〜!」

亜沙美が『90点しか』を強調して言つと、恋華は可愛い声を出し

て航に抱き着いた。

恋華と亜沙美は本当に良いコンビだな。観てて飽きないっていうか。

【航】

「よしよし…………… 亜沙美ちゃん？…もう気がすんだでしょ？…期末試験でリベンジすればいいんだから、その辺で勘弁してやって」

何で時々航がカッコ良く見えるんだろっな？…不思議だ。

【美咲桜】

「ヒロ君？…鳴海君がどうかしたの？」

撫でていた手を止めた途端、そう言っつて顔を見上げてきた。

【正義】

「ん？…いやな、たまに思うんだが…航が男みたいにみえる時があるんだ…眼科に行った方がいいのかなあ」

【美咲桜】

「そっかなあ〜？…私には女同士が抱き合ってる風にしか見えないよ？」

【亜沙美】

「何言ってるの！…鳴海君は……………航さんは『男らしい』女性だよ！」

【航】

「違っつ！…俺は女じゃないっ！…男らしい女だっ！……………アレ？…何か間違えた様な」

【恋華】

「キヤハハハハッ！……いやいやいや、合ってるっ！それ合ってるよっ！……！」

【美咲桜・亜沙美】

「鳴海君って……本当はどっちなのかなあ〜？」

【正義】

「う〜む……胸にサラシを巻いてるちょっと変わった娘じゃない？」

【航】

「ハッ！……そういう事かっ！……俺は「女×4」………もういいよ女で」

【正義】

「じゃあ明日からスカート穿いて来いよ？……母さんにカメラ借り」「ゴメンなさいっ！俺はやっぱり男でしたっ！」「………中途半端は嫌われるぞ？」

やれやれ……ん？そつえば何の話をしてたんだっけ？……確かバイキングに行く話だった様な。

【正義】

「航で遊ぶのも飽きたし………何か面白い話」

ガラーン ガラーン ガラーン

喋っている途中、昼休み終了を告げる鐘が鳴った。



とりあえず今は亜沙美だな。

2人が教室から出て行くのを確認して、席を立ち亜沙美の傍に歩み寄った。

【正義】

「選択はサボるのか?…」「うん」…そうか……人に聞かれたらマズイ話?」

【亜沙美】

「大した話じゃないんだけど…まあジャマが入らない方が良いのは確かだね」

ジャマが入らない方が良い…ねえ。一体何の話なんだろうな。

【正義】

「分かった。…何だか知らないが、カフェテリアでゆっくり聞かせてもらおうわ…行こう」

そう言って彼女が頷いたのを確認してから、カフェテリアに向けて歩き出した。

カフェテリアに着くとウェイトレスにカウンター席を勧められた。周囲を見渡すと10人程の先客が居たので、それを断り奥の2人掛けテーブルに移動した。

席に着くと直ぐに俺はコーヒー、彼女はアイスレモンティーを注文した。

【正義】

「んで…話って何?…此処なら誰にも聞かれたりしないから、遠慮なくどうぞ」

【亜沙美】

「正義君って、学校ではピアノ弾いてる事を隠してたんだね?…結構聞いて廻ったんだけど、誰一人知らなかったし…」

何で今更そんな事を聞くんだ?…理由が全く解らないな。………彼女は一切何が言いたいんだろう。

【正義】

「ああ…言つと生徒や教師がウザイからな。選択授業もサボれなくなりそうだし…何より言つ必要性を感じない」

俺はこの容姿のせいで昔から皆に敬遠されがちだった。でもピアノを弾いてると知るや「神の指先を持つ有名人」として見られ、今まで見向きもしなかった奴等が腐るほど寄つて来た。

奴等は誰一人として「俺」を見てはいなかった。此方から話しかけても相手にしなかつたクセに、コンクールの時だけニコニコしながら寄つて来た。俺は「アイツ凄いだろ！」とか「私あの子と友達なんだあゝ」とか、友達に自分の事の様に自慢する奴等が大嫌いだつた。

奴等が求めているのは「ピアノが上手い人」であつて、そこに「俺」は存在しない。…それから学校内では弾かなくなつたし、ピアノを弾いてる事を隠す様になった。「友達になれるかも知れない！」つて期待して…裏切られて、傷つくのはいつも俺なんだ。…そんな連中に言つた所で何になる、また傷つくだけじゃないか。…俺はこの学園で静かに過ごしたいだけなんだ。ピアノを弾かなくても「俺」を必要としてくれる数少ない友人達と…他には何も望まない。

### 【亜沙美】

「へえ…そうなんだ？まあ、正義君がそれで良いなら、ボクは何も言わないけど…」今は「ね」

そう言つた彼女は「納得いかない」と言いたげな顔をしていた。

「今は」、か。いつか話せて言ってるんだな。トラウマが治つたら話すさ…クラスメイト位は、な。



【正義】

「言動が一致してないぞ？ハア〜…まあいいや。それよりも、わざわざ選択をサボったってことは、他にも話があるんだろ？」

【亜沙美】

「うん。さつき教室で、鳴海君とアルバイトの話をしてたでしょ？」

そう言った彼女は腕を組み眼を細め、ニヤニヤしながら此方を観ていた。

やっぱりバレてたか。まあ航のフォローだし、仕方ないよなあ。しかしあの顔……嫌な予感しかしないな。

【正義】

「ああ……してたよ。誤魔化してたのは悪かった、すまない。さつきは美咲桜が居たから、バレたらどうなるか……分かるだろ？」

そう言うと彼女は苦笑していた。

【亜沙美】

「分かってるよ。…美咲桜を巻き込みたくなかったんだよね？…話に交せてくれなかった事への、ちよつとした仕返しだよ。だから『何を要求するつもりなんだ』って顔をしなくてもいいんだよ？……ボクはただ、アルバイトを紹介しようと思ったただだからさ」

マジで？…渡りに舟じゃん！…一体どんなバイトなんだろう？

【正義】

「紹介してくれるのは有難いが……どんなバイトなんだ？…あまり手

を使うのはちょっと」

【亜沙美】

「それは大丈夫っ！…なにしろ、ピアノを弾くのが仕事だから。…内容は「ちよっと待った！」……どうしたの？」

ピアノを弾くのが仕事？…プロでもコンサートとか、人前で弾かないとお金は取れない筈だ。…まだアマチュアの俺が弾いてお金になるのか？…それに、もし人前だったら……今の俺は弾けるのか？

【正義】

「一つ確認したい事があるんだけど……人前で弾くのか？」「うん…」「……そうか」

【亜沙美】

「まださっきの話聞いて、人前で弾くことに抵抗があるのは分かってる。でも……結論を出すのは、とりあえずボクの話全て聞いてからにして欲しいな？」

そう言った彼女の表情は真剣で、此方に向けられた力強い視線に思わず頷いてしまった。

【亜沙美】

「じゃあ内容を説明するよ？」  
「  
話の内容は…来週からフロンティアで行われる集客企画『音のある生活』でピアノを弾くというものだった。」

企画内容は催し物スペースに設置するピアノの演奏を全館に流し、お客様に癒しの空間を提供するというものらしい。

因みにコンセプトは『癒し空間で楽しくお買い物』で、期間中の集客率アップが目的だと言っていた。

時間は夕方5時から8時までの3時間。日取りと期間は此方で自由に選択可能。時給は2000円というものだった。

【亜沙美】

「こんな感じかな。これだったらレッスンの時間やプライベートな時間もあまり削らなくて済むし、手も傷付かない。それに…一人で頑張ってる正義君の力になりたいんだ！」

彼女はそこで言葉を切り、話してる途中に届けられていた紅茶を口を含んだ。

こんなに好条件なバイト他に無いよな。俺の事を第一に考えてくれるし、強制もしてこない。俺の力になりたい…か。正直、今の俺が人前でまともな演奏なんて出来るか分からない…でも。

【正義】

「ありがとな。…まともに弾けるか分からないが、やってみるよ。……リハビリにもなるしな」

このバイトは多分、俺に『人前で弾くのに慣れさせる』事が目的なんだろうな。やれやれ、世話好きな奴等だ。

【亜沙美】

「ホントにいいのっ?…企画して良かったあ。…じゃあOKってことで」

わざわざ俺の為に企画したのか？…いや、そんな筈ないか。

【正義】

「今、確か『企画して良かった』って言ったよな？…もしかして、家業を手伝ったりしてるのか？」

【亜沙美】

「たまにだけだね。…これで漸く正義君のピアノが聴けるよ。いやあ…ここまで長かった」

そう言っただけで彼女は額を拭う様な仕草をした後、遠い目をした。

もしかして…俺の演奏を聴きたいが為に企画したのか。亜沙美…恐ろしい娘。

【正義】

「トリップしてるとこ悪いが…話をもう少し詰めなくて良いのか？」  
とりあえず日取りと期間ぐらいは決めといた方がいいよな？…美咲桜にバレたくないし、ルーシエに行く時間も欲しいしな。

【亜沙美】

「ボクの企画だから、難しく考えなくてもいいよ？…選曲とか考えずに自由に弾いてくれてOKだから。…強いて言うなら、美咲桜にバレない様にするぐらいじゃない？」

【正義】

「美咲桜の対処法は考えてるが…本当に好きにして良いのか？『運命』とか弾くかもよ？」

【亜沙美】

「構わないよ。…とりあえずバイトの話はここまでにしない？…まだ話す事もあるし」

「まだあるのか…今度は一体なんだろう？…ピアノ　ピアノときてるから……ピアノ？」

【正義】

「次は何？…好きな娘以外なら答えるが」

【亜沙美】

「いや、今更言われてもバレバレだって。…でも今からするのは、その娘に関わる話だよ」

「美咲桜に関わる話？…一体なんだろう。さっきまでピアノの話をしてたし……まさか？」

【亜沙美】

「ボクは回りくどいの嫌いだから、単刀直入に言うよ？……美咲桜がピアノを辞めた理由を調べてるよね？」

「ッ！？…何で亜沙美が全部知ってるんだ？…亜沙美には美咲桜が昔ピアノを弾いてた事すら言っていない。さらに辞めた理由を調べてる事は、航達にすら言っていない。宮園の二人と知り合いなのか？…いや、そうだとしても彼女達が言うとは思えない。一体どこから情報が漏れたんだ？」

【亜沙美】

「『解らない』って顔してるね？…美咲桜がピアノを辞めた理由を調べてた事以外は、出会ってからの正義君を観てたら分かるに決ま

ってるよ。…美咲桜が居る時だけ音楽関係の話を避けてたでしょ？  
…いや、正確にはボク以外かな。避けるって事は『辞めた』か『嫌  
い』のどっちかだし、『嫌い』なら徹底する必要が無いからね。…  
後はあの3人に音楽関係の話をすれば、経験者かどうかは直ぐに分  
かる。…つまり美咲桜が気分を害するから、意図的に話題を避けて  
たという事になるよね？…ここまでは合ってる？」

確かに当たってる…まあ亜沙美は皆の前で、最初から音楽関係の話  
をしなかったしな。空気を読んだんだろうけど、本当に良く観てる  
よ。

【正義】

「流石だよ。ここまではパーフェクトだ。文句のつけようが無い。  
…でも俺が疑問に思ってるのはこの先だ。…何故お前が知ってい  
るっ？」

そう言った声は自分でも分かるくらい低く冷たいモノだった。

【亜沙美】

「言っても怒らない？「努力はするよっ」……………偶然見ちゃったん  
だ……………ボクが知らない娘と一緒に、宮園のルーシエに入って行く  
とっ…」

なるほどな。俺達が帰った後でコソコソと、生徒達に俺が何をして  
たか聞いた訳だ。……………気に入らないなあ。

【正義】

「もう言わなくていい……………その先は嫌でも分かるから……………俺は  
こんな話、亜沙美の口から聞きたくなかったっ……………」

【亜沙美】

「結局怒ってるし」「あ、あ？」「ゴメンっ……ハイエナみたいな事したのは謝るよ。勝手なマネしてすみませんでしたっ……でも、ボク達だって怒ってるんだよっ？……一人で悩んで寝不足になる位ならっ、相談ぐらいはして欲しかったっ！……ボク達は友達でしょ？……友達は助け合うモノじゃないのっ？」

確かに、黙ってて悪かったのは認めるが……偶然にしては出来すぎな気がするんだよな。前々から計画してた様な……疑うのは止めよう。黙ってた俺に『友達』と言ってくれた亜沙美に対して失礼だ。

【正義】

「それは悪かった。此方こそ謝るよ、すまなかった。……でも俺の問題だし、皆に迷惑を「ふざけるなっ！」……え？」

亜沙美は俺の言葉を遮り両手を振り上げ、その手を勢い良くテーブルに叩きつけた。

【亜沙美】

「ボク達に迷惑をかけたくなかっただっ？ふざけるなっ！……友達に迷惑かけて何が悪いんだっ！……さっき友達は助け合うモノだって言っただろっ！……悩む位なら頼ってよっ！……頼むから一人になるうとしないでよっ！……！」

彼女は声を荒げてそう言うと、鋭い視線で此方を睨み付けた。

そうか……だから亜沙美は怒ったのか。俺が友達の意味をはき違えてたから……俺が今までやってきたのは、ただの一人よがりだったという事か。謝らないとな……大事なことに気付かせてくれた彼女に……いや、彼女達に。

両手をテーブルに突いて少し腰を浮かせ、額がテーブルにつくまで頭を下げた。

【正義】

「すまなかったっ。……………俺っ…大事なことを何も分かってなかったっ…何でも一人で出来る気になってっ…すぐ傍に居た皆がっ…周りが見えてなかったっ……………大事な事に気づかせてくれてっ……………本当にありがとうっ！」

額をテーブルに擦りつけたまま、この場に居ない3人の顔を思い浮かべながら感謝を述べた。

【亜沙美】

「分かってくれた？…黙って一人で頑張ってた正義君もツラかったと思うけど……………何も言ってくれずに…一人悩んでる正義君を観てるしかなかったボク達も、ツラかったんだよ？……………それを忘れないでね？」

頭上から聞こえた優しい声に反応してゆっくり頭を上げると、彼女は顎に指を添えて微笑んでいた。

亜沙美のこんな顔初めて見たな。本当に綺麗だ……………ハッ！思わず見とれてしまった。

【亜沙美】

「おんやあゝ？…何だか顔が赤くなってますかあゝ？…もしかしてボクの魅力にやられちゃったのかにやゝ？」

そう言った彼女の顔は先程の面影は全く無く、いじりがいのある玩



具を見つけた子供の様な顔だった。

！？…見とれてたのは認めるが…クツ！不覚っ。

【亜沙美】

「美咲桜が正義君にベタ惚れした理由が漸く分かったよっ。あの照れた顔は破壊力抜群だねっ。美咲桜の拾得物を危うく抱きしめるところだった…危ない危ない」

拾得物って…アハハッ…俺って美咲桜に拾われてたんだ。そんな風に見られてたなんて知らなかった。…でも嫌な感じがしないのは何故だ？

【亜沙美】

「どうしたの？…さっきから黙っちゃって？もしかしてえ…ボクのカ・ラ・ダを想像しちゃってるのかにゃ？」

彼女は両手で顔を覆って 食べられちゃうっ と言いながら身体をくねらせていた。

【正義】

「それは無いっ！…俺は一途だからなっ」

確かに亜沙美は可愛いと思うが…何か一緒に居ると疲れそうなんだよなあ。

【亜沙美】

「即答っ！？…それはそれで傷つくなあ」

そう言うと彼女は力無くテーブルに突っ伏した。

【正義】  
「もうそのネタはいいから、話を戻さないか？…そのテンションに着いていくの疲れるから」

【亜沙美】  
「ボクは至って真面目なんだけど…まあいいや。え〜と…何の話をしてたんだっけ？」

呆れた奴だ……さっきまではあんなにカッコいい事言ってたのに。  
…ちよつとだけ仕返しするかな。

【正義】  
「確か亜沙美が俺に『アルバイトも引き受けてくれたことだし、良しっ！…今日はボクが奢っちゃうから遠慮なく食べてね？』って言うってたのは覚えてるんだが」

【亜沙美】  
「そうだったっ…ゴメンゴメン、忘れてたよ。…じゃあ好きなモノ頼んで良いよ？」

何で気付かないんだ？…バイトの話がいきなりこうなる訳無いだろ、普通。…早く頼もう。

【ウェイトレス】  
「失礼します。お客様……お呼びでしょうか？」

気づかれる前に素早くテーブルのボタンを押し、1分もしないうちにウェイトレスが注文を取りに来た。

亜沙美は気づいてないな……さて、それじゃあ最近食べてなかった幻のメニューでも頼むかな。

【正義】

「ここからここまでを一つずつと…この『激レアチーズケーキ』を5つとコーヒーをブラックでお願いします」

メニュー表をウェイトレスが見えるように持ち、メニューを指差しながら大量のケーキを注文した。

【ウェイトレス】

「ご注文繰り返し」復唱しなくていいですよ…全部はテーブルに載らないと思うので、チーズケーキだけ先をお願いします。残りは次に呼んだ時、持ってきてください」……フッフッ……畏まりました。それでは、直ぐにお持ちします」

ウェイトレスは『何で復唱を拒んだんだろう』と言いたげな顔をしていた。

話しながら亜沙美の方に一瞬だけ視線を向けた。すると此方の意図が分かった様で、口元をトレーで隠して小さく笑った。そして笑いを悟られない様に口元をトレーで隠したまま席を離れた。

【亜沙美】

「何で今のウェイトレス笑いを堪えてたの？…ボクはあんな人キライだなあ」

【正義】

「そうか？…俺はああいう理解のある人、好きだけどな」

【亜沙美】

「理解のある人?…今のやりとりにそんな要素があったの?…」「聞くな」……ん?…?」

彼女は怪訝な顔をして顎に指を添えると、首を傾けてウンウンと唸っていた。

面白い顔してるなあ。良しっ!…恋華に見せてやろうっ!

パシヤ

こっそりと携帯を取り出しバレない様に撮影して、その画像をメールに貼り付け恋華に送信した。因みにタイトルは『考える人(ボク編)』だ。

【ウェイトレス】

「お待たせしました。…こちら『激レアチーズケーキ』になります。フフツ………それではごゆっくり」

注文を持ってきた彼女は亜沙美の方を向くと、またトレーで口元を隠し小さく笑ってから席を離れた。

【亜沙美】

「ねえ…何で彼女はニヤニヤしてたの?」「じゅるり」……ボクにはアレが理解のある人には見えないんだけど」

【正義】

「あむっ…んうう!美味すぎるっ!…このレモンの酸味が絶妙「早っ!…もっ2個目を食べてるっ!?!」……ん?何か言ったか?」

【亜沙美】

「いや、美味しそうに食べるなあ〜って思っただけ……って食べるの早すぎでしょ？…1個2000円もするんだからもう少し味わって「ふう…大変美味しゅう御座いました」…ええーっ!?!?…ボクの分は？」

【正義】

「ん？…あるわけ無いじゃん。ちーずけーきは俺一人分しか頼んでないし」

【亜沙美】

「正義君にとつては5個が一人分なんだ……ああ〜あ!…ボクも久しぶりに食べたかったなあ〜!…ん？…そういえば2000円つてさつき…時給？…ああ〜っ!…騙したねっ!ボクは奢るなんて一言も言っていないっ」

どれどれ、10分ちよつと……意外と気づくの早かったな。

【正義】

「まあまあ、亜沙美のお陰で『クツ!…大切な妹達の誕生日に、俺はケーキすら買ってやれないのかっ!』と嘆きながらケーキ屋のシヨ〜ウインドウを食い入る様に観てた、一人の苦学生と家で兄の帰宅を待っている3人の妹達を救ったと思えば良いじゃん？」

【亜沙美】

「何？その妙にリアルな話。ボク、ちよつと感動してしまっただけど………実話？」

そう言った彼女はスカートポケットから、表紙に『嘘泣き用』と書かれた小さなノートを取り出して何やら書き込んでいた。

【正義】  
「いや、ただの例え話。似たような話は知ってるが……それよりも、そのノートは何？」

【亜沙美】  
「ああ……コレ？ボクはこういう話を集めるのが好きなんだよ。……また何かあったら、よろしくねっ？」

満面の笑顔で宜しくって言われても……一体どういう場面で嘘泣き用のエピソードを提供すればいいんだよ。『良い話が入荷したぜ』とでも言えばいいのか？

【亜沙美】  
「さてと、美咲桜の件はどうしようか？……本人には当然秘密にしておくとして、5人で動くのは決まりだよな？」

おいおいおい、何の前触れもなく話をシリアスに戻すなよ。……航と違って扱いづらい奴だな。

【正義】  
「ああ……そうしてくれると助かる。くれぐれも美咲桜には勘づかれない様にな？……アイツ結構鋭いトコあるからさ」

【亜沙美】  
「分かった、皆にはボクから話しておくよ」

【正義】  
「助かる。……次はバイトの話を「ちょっと待ってっ！」「……どうした？」

【亜沙美】

「本当は皆で一緒に聞いた方が、正義君も説明する手間が省けて良いんだろっけど……気になるからもう一つだけっ！……美咲桜がピアノを辞めた理由が解つたら、正義君はどうするつもりなの？」

理由……か。これから皆には力を借りることになるし、捲き込んだ時点でもう後戻りはできない。逃げ道を塞ぐ為にも、自分を追い込む為にも話した方がいいだろっな。

【正義】

「まだハッキリした原因が解らないから何とも言えないが、できるなら原因を取り除く。それからアイツがもう一度ピアノを弾けるように、好きになれるように力を貸すつもりだ。……最終的にはお互い前に進んで、美咲桜と付き合いおうと思ってる。……ハッキリ言って、俺が考えてる理想の関係を築く為の願望だよ。……失望したろ？アイツの想いや都合……その全てを無視して勝手なこと言ってる……やろっとしてる最低なヤツだっ……俺はそんな人間なんだよ」

100%自分の事しか考えてないしな。ただ付き合いだけなら簡単なのに、わざわざ進んだ関係を望んで皆を捲き込んだ。……こんな事が赦されていいのかな？

【亜沙美】

「好きな娘とより良い関係を築く。……そのどこがいけないことなの？……好きな娘とより楽しく、より幸せに過ごしたい……誰だっ……て願う普通の事じゃないか。ボクは……いや、ボク達は絶対に最低だなんて思ったりしないっ。……だから、自分を卑下しないで？」

彼女はそこで言葉を切って立ち上がり、此方に手を伸ばして頭を撫でてきた。

卑下するな…か。今は無理だよ。アイツがピアノを取り戻す日まで…心からの笑顔を見せてくれる日まで俺は………自分を好きになれそうもないから。

【亜沙美】

「それに、人の気持ちなんて本人にしか解らないのは当たり前だよ。言葉で伝えない限り伝わらないし、思ってる事全てが伝わるわけじゃない。……だから正義君は、自分勝手なんじゃなくて……人を」

彼女はそこまで言うとう頭を撫でていた手を戻し、顔を伏せた。

確かにそのとおりだと思う。……でも、美咲桜に『何でピアノを辞めたんだ？』なんて聞けるわけがない。もう、あんなツラそうな顔した美咲桜は見たくない。だからこそ勝手に調べて、何とかしようと思っただから。

【正義】

「…人を？」

最後に掠れる様な声で言った言葉が気になり、聞き返すと彼女は顔を上げた。

なんで悲しそうな顔をしてるんだ？…さっき一体ナニを言おうとしてたんだろう。

【亜沙美】

「うっん、何でもない。……正義君は優しすぎるんだよ。美咲桜の



事を大切に想ってるからこそ、またピアノを弾かせてあげたいと思っただよな。…ボクには解らないけど、ピアノは二人にとって特別なモノなんですよ？」

もしあの時ピアノを弾いていなければ…音色に誘われて美咲桜が遊戯室に来なければ…『友達』とは何かも知らないままだった筈だ。

【正義】

「ああ…二人が出会えた…『絆』だから」

アイツがピアノに興味を持って…母さんにピアノを習う様になったお陰で、いつも一緒に居られる様になった……お互いが一番大事だと言ひ合えるほど仲良くなれた……他人に関心を持てる様になった。

【亜沙美】

「なら頑張って取り戻さないとねっ！」

美咲桜と友達になっていなければ、航の事にも関わろうとしなかった筈だ。その結果…川上さんとも仲良くなれなかつただろうし、告白なんてあり得ない。恋華にも話しかけたと思えないし…コンクールに出ていなければ亜沙美も俺に興味を持たないだろう。という事はあの事件も無く、おそらの庭に行き芽衣さんと出会う事もなかった。……つまり皆と関わり合う事も無く、今の俺は一人だった筈だ。

俺にとってピアノは2人の母親から授かった『宝物』であり、皆と出会うきっかけを作ってくれた『絆を紡ぎだす魔法の楽器』だ。

【正義】

「ああ！…皆には迷惑をかけると思うけど、協力頼むな？」

【亜沙美】

「うんっ！…全力でサポートするよっ！……ボクが知りたい事も分かったし、この先は皆が揃ってからだね。という事は……えっつと、確かバイト」

あれからバイトの具体的な日取りを決めた。（平日の放課後はカフェテリアに行かないと美咲桜が心配するため、土日のみという事にしてもらった）日取りが決まると話す事も特に無く、手持ち無沙汰になった亜沙美が二人の昔話が聞きたいと言ってきた。

特に秘密にする様な事も無かったので、小一時間かけて事細かに話

してやった。話し終えると亜沙美は何故か赤面して、二人つて一体…と小声で何度も呟いていた。

その様子を観察していると6時限目の終了を告げる鐘が鳴り、5分もしないうちに皆が集まって来た。

【恋華】

「アレ?...この高級感溢れる場違いな皿って、まさか.....激レアちーずけーき食べたのっ?まだあるのっ?食べられるのっ?」

恋華はテーブルに置かれていた皿を観るなり此方にズカズカと歩いてきて、胸ぐらを掴むとガクガクと揺さぶってきた。

ちよ!?!...苦しっ!...航ヘルプ!.....俺の瞳を観ろっつ!

【航】

「落ち着きなっつて...(恋華の手を掴んだ)...っつてナニイ!5皿もあるっ!?!俺でさえ1日に最高2個しか買えなかったのに、それを5個もっ...クツ...なんて羨ましいっ!」

なっ!?!...恋華の手を掴んどいてスルーかよっ!.....誰か助けてっ!

【美咲桜】

「アレ美味しいもんねえ〜。...確か一日に10個だったよね?」

美咲桜が喋ってる途中に、亜沙美が俺と美咲桜の間に移動してきた(一瞬だけ此方を向いて口元をつり上げていた)

コイツっ!...絶対にワザとじゃねーか!.....ヤベ.....オチそう...芽衣さんヘルプ!

【亜沙美】

「うん…美味しかったかどうかはその金髪の人しか分からないけどっ、ねっ？…チッ…しぶといっ」

亜沙美はそう言うと、今度は俺と芽衣さんの間に移動した。（それを合図に、他の3人は俺を取り囲む様に移動してきた）

コイツ等グルだっ！……………もうどうでもよくなってきた……なんか眠いし…力が抜けるし……！

【芽衣】

「コラコラ、お前達っ！…悪ふざけがすぎるぞっ！……………大丈夫か正義？……………うおっ！？……………ほら、正義が怖がって隠れちまったじゃねーかっ」

芽衣さんは亜沙美を押し退けると此方に歩いてきて、恋華の腕を掴んで俺から引き剥がし皆を叱った。

俺は悪魔達から逃れる様に芽衣さんの背中に隠れ、肩口から皆を睨み付けた。

【正義】

「お前等っ！…たかがケーキで大人気ないぞっ！……………ちーずけーき以外は呼べば持ってくるんだから、それでも食って大人しくしてろっ！……………このっ人生の負け組どもがっ」

そう叫ぶと辺りが静まりかえり、4人は顔を伏せて肩を震わせていた。アレ？……………何この空気？

【航】

「もうキレたっ！…恋華、マサ君を殺るよっ！（指を鳴らしながら）」

【恋華】

「フフフフツ…食べ物への恨みは…怖いよ？（満面の笑み）」

【亜沙美】

「せっかくボクが奢ってやったのに、正義君は恩を仇で返すんだ、そうなんだー（棒読み）」

【美咲桜】

「ヒロ君が5個とも食べたんなら…今のヒロ君はちーずけーきの味がするよねえ？…じゅるり（舌舐めずり&妖艶な顔）」

4人は顔を見合わせ頷き合うと、ジリジリと距離を詰めてきた。（泣く子も裸足で逃げ出すぐらい怖いッス）

【正義】

「ちょ！？…ジョークに決まってるからっ…話せば分かる…落ち着いてっ…なっ？」

一人だけヤバい事を口走ってた娘がいるんですけど…俺、もしかして食べられちゃう？

【芽衣】

「ん？…お前はあんな美味しいモンを一人で食ったのか？…じゃあ自業自得じゃねーか？…強くっ『ガシッ』『ガシッ』って何っ！？ちょー！？」…生きるよっ！（ウインク&白い歯を輝かせて）」

芽衣さんはそう言いながら素早く俺の背後に回り込んで、羽交い締めを極めてきた。

ヤバいつ、力が強くて外せないっ！…早く逃げないと殺られるっ！  
……あはははは、しんだーよ。

【航】

「さてと、マサ君は4人の弱点攻めに耐えられるかなあ？…恋華は俺の反対から耳ね？」

航はそう言つと耳元に顔を寄せてきた。

【恋華】

「分かつてるよっ！…マー君？…昇天させてア・ゲ・ル」

恋華は航とは反対側に回り込み、耳元に顔を寄せて呟いた。

【航】

「亜沙美ちゃんは脇腹を攻めて？…指でソツとなぞる様になると効果的だからっ！」

亜沙美は頷くと俺の正面に立ち、ブレザーのボタンを外してきた。

【亜沙美】

「要するに擦ればいいんだねっ！…正義君って意外と弱点多いみたいだねえ？」

そう言いながらシャツを掴んで引っ張り上げ、露になった脇腹に手でソツと触れてきた。



【美咲桜】

「芽衣先輩、この抹茶シュー美味しいですよ…甘さ控えめでイイ感じです。…一つ食べませんか？」

【芽衣】

「そうか…じゃあ貰うな？…ング……本当だ、苦味が効いてて美味いなコレ」

【亜沙美】

「このザッハトルテ美味しいけど不思議な味……何を使ってるんだろ？」

あの天国？は5分ほど続いて解放された時には手足に力が入らず、力無くテーブルに突っ伏していた。

ムツか…シカトですか。そうですか。コイツ等も悶え死にさせてやるっ！……まずは皿をこっそり指差して恋華に教えた亜沙美からだっ！

気付かれない様にこっそり立ち上がり亜沙美の後ろまで行くと、髪留めを外してからポンポンと肩を叩いた。

【正義】

「亜沙美…こっち向いてみ？」

《リリーススマイル発動》

【亜沙美】

「ん？…どうしグハア…！…金髪のお姉さまっ！イイツ！抱いてっ！（床に倒れ込んでピクピクしていた）」



フツ…お前が百合属性なのは調査済みだ。…次は恋華だな…アイツは確か。

同じ様に恋華の背後に移動してポンポンと肩を叩いた。

【恋華】

「ん？…ダレが「恋華おねえちゃんっ！」…ガハツ……かつ可愛すぎるうーっ！お持ち帰りしてえーっ！…（テープルに突っ伏してピクピクしていた）」

予想通りだ。…この前、弟が欲しいと言っていたのはやはり本当だった様だな。…さてと、航はどうするか。スマイルだけじゃ効かないし……ん！閃いたっ！

航の背後に移動すると本能的に何かを感じ取ったのか、バツと此方に振り向いた。

【航】

「恋華達が妙に静かだと思ったら……マサ君の仕業だったんだね。……しかし俺にリリーススマイルは効かないよっ！「ちよつとのあいだ前を向いてみようか？」……何をしても無駄だって……どうせ俺は倒せないんだからっ！」

そう言いつつも航は前を向いた。それを確認して髪を真ん中から左右に分け、耳の上ぐらいのところを掴んで左右に尻尾を作った。

【正義】

「航？…もうこっち向いて良いぞ」

【航】

「さてと、何を見せてくれ「航様」…ツツ…ツインテールなんか「航様あ〜っ」…メイ…ド…の「わ・た・る？」グハアーーーーーッ！…！！…金髪…ツイン…メイド…玲音さん…とは（鼻血を噴き出して椅子ごと後ろに倒れた）」

玲音さんってダレ？…まあいいや。スッキリしたっ！…残り2人にも報復したいが無理だろうな。もしカウンターで美咲桜にあの純真無垢な瞳で観られたら…俺は自分をコントロール出来なくなる。…芽衣さんは体育祭で免疫が出来ただろうし、ただ俺を押さえつけただけだしな。

【美咲桜】

「ヒロ君も抹茶シュー食べない？…美味しいよっ！」

【芽衣】

「美咲桜の言う通りだ。正義も食ってみるよ？…抹茶が効いてて美味いぜ」

椅子ごと倒れた航を観察していると2人が声をかけてきたので、美咲桜の隣にある椅子に座った。

【正義】

「そうか？…それじゃあ食べてみる」

あれから2時間ぐらい他愛ない話をして時間を潰した。5時半前に母さんから電話がかかってきて、今日は明斗さんが早く帰れるから『食事にも行かないか』って、さっき電話があつたの。だから、まー君も早く帰ってきて?…久しぶりに3人で食事に行きましようと言われた。

席を立ち皆に電話の内容を説明して、という訳で俺は帰るから、皆はゆっくりしてなよ、と言ってから出口に向かっていると、後ろから美咲桜が追いかけて来た。

隣に並ぶと、私も用事があるから一緒に帰らない?…いつも鳴海君ばかりに任せて悪いし…それに、たまには私にも家まで送らせてほしいな?、と言ってきたので、じゃあお願いするよ、と言って2人でカフェテリアを後にした。

V I E W C H A N G E

亜沙美 S I D E

【航】

「都合良く二人とも帰ったことだし、そろそろ本題にいくつか。…  
……亜沙美ちゃん、どうだったの?」

2人の姿が此方から確認できなくなると、対面に座る鳴海君が真剣な表情で言ってきた。

確かに都合良いよね。どちらの話をするにせよ、美咲桜が居ると話

すわけにはいかないもんね。

【亜沙美】

「ボクの口から話すより、本人の声で聴けるよ? ……はい、鳴海君。  
………再生は、その赤いボタンを押せばいいだけだから」

【恋華】

「何コレ? ……マイクみたいだけど」

【芽衣】

「どれどれ、ICレコーダーか。 ……亜沙美はわざわざ、今日の話  
記録する為にコレを持ってきたのか?」

【亜沙美】

「いえ…鳴海君に『マサ君は聞かれたくない事を聞かれると声に微妙な変化が現れるから、声で判断しないと本当の事を言ってるのか分からない』って、教えてもらってから常備携帯してたんです。正義君がいつ話してくれてもいい様に……鳴海君…結構長いから早く聴いた方がいいよ?」

鳴海君はICレコーダーを弄びながら、何故か苦笑していた。

【航】

「いや、場所を変えよう。 ……もうカフェテリアの閉店時間過ぎてるみたいだから」

鳴海君はそう言つと店内にある時計を指差した。

【恋華】

「本当だっ! ……もう40分じゃん。 ……早く出ないとお店の人に迷惑

だよね？」

【芽衣】

「恋華の言う通りだ……お前達っ、サッサと出るぞっ！」

園田先輩の言葉を合図に皆で席を立ち、会計を済ませてから店を後にした。(まさか3万オーバーしてるとはね)

【亜沙美】

「鳴海君の家のリムジンで良いよね？」

校門にたどり着くと各々に迎えの車が来ていた。

さっきの話の続きをする為に鳴海君に尋ねると、頷いてくれたので皆でリムジンに乗り込んだ。

【航】

「皆好きに寛いでくれて構わないからね？…飲み物とかもソコに入ってるから……じゃあ再生するよっ」

鳴海君は備え付けの冷蔵庫を指差してそう言うと、レコーダーの再生ボタンを押した。

『んで…話って何?…此処なら誰にも聞かれたりしない』

ICレコーダー再生中

『頑張つて取り戻さないとねっ!』

【亜沙美】

「美咲桜がらみの話はここで終わりだよ。…この先はバイトの話を詰めてから、二人の昔話を聞いてただけ」

サイドボードに置いていたレコーダーを手にとって再生を止めた。

【航】

「悩んでたのは美咲桜ちゃんのピアノ……か。大体は亜沙美ちゃんの予想通りだね。……マサ君の為になんとかしてあげたいな」

【恋華】

「そうだね。マー君の言葉を聴く限り、アンタの言ってた『マサ君は俺達を友達だと思ってない』ってのは本当みたいだし……凹むなあ」

【亜沙美】

「ボクも昔の正義君を知らないから良く分からなかったけど、あんな事を言われたら信じるしかないよ」

昔は全然違ってたって言ってたからなあ。一体どんな感じだったんだろう？……この前の鳴海君の説明は興奮し過ぎてて要領を得なかったし。

【芽衣】

「ああ……皆に迷惑を云々って話だろ？……昔の正義ならあんなこと絶対に言わねえ筈だ」

園田先輩も中1から正義君のこと知ってるって言ってたし、やっぱり今とは何か根本的に違うんだろうな。

【航】

「確かこの中に……あつたっ！……この写真を見れば分かると思うよ？……マサ君のこんな顔を見たことないでしょ？」

鳴海君はそう言つと座席の肘置きを持ち上げ、中から一枚の写真を

取り出した。

【亜沙美・恋華】

「……………ッ!？」

写真に写っていたのは『春日祭』と書かれた看板の前ではしゃぎあう数人の中学生だった。

ボクはこんな顔して笑う正義君を知らない。見たことない。

【芽衣】

「驚くのもムリねえよ…………オレだってこの頃は知ってたが、入学式の日には4ヶ月振りに再会した時は別人かと思っただくらいだからな」

【航】

「これで嫌でも信じる気になったでしょ?…俺は昔からマサ君の事を良く見てるから、変化にはスグ気づいたよ。…………それから今みたいに壁を作って接する様になっただ」

去年の年末…恋華が正義君から聞いたという『家族構成』の事を両親から告げられた時期だ。…………やっぱり鳴海君が言ってた通り、簡単には割り切れなかつたんだろうなあ。…ボクだったら……………家出したかもしれない。

【恋華】

「こんな顔を見せられたら信じるしかないじゃん。…それにあの時マー君が言ってた『家族構成』の事が原因で、今みたいになつたっていう確信が持てたしね」

恋華も同じ考えみたいだね。でも…………ボク達でなんとかできるのか



な？

【芽衣】

「アイツは自分が変わってしまった事を全く自覚してねえから……  
解決は難しいだろうな」

ボクが怒鳴っても効果無かったみたいだし、鳴海君が考えた方法でしか気付かせる事はできないのかな？……でも、アレを言えば正義君の傷を抉る事になる。深く傷つけてしまふ。

【航】

「本人に自覚させるには、やっぱり核心に触れるしかないと思いま  
す。……例え傷つける事になっても……ね」

【恋華】

「アタシはっ……できるなら言わないでほしい。マー君に確認しな  
いうちに皆に話したからっていうのもあるけど……傷ついた姿を  
見たくないから」

家族構成の話は恋華しか知らされてなかった。ボク達の家庭は普通  
だから……だから親の再婚で悩んでた恋華には話したんだろうな。  
……自分も色々と悩んでいた筈なのに。

確かにこんな重い話を本人以外から聞くのは反則だと思う。ボクは  
この話を聞いて良かったと思ってるけど……恋華と同じ考えだよ。

【亜沙美】

「ボクも言わないでほしいっ……いくら正義君の為とはいえ、他人が  
踏み込んでいい範囲を超えてると思うから……」

【芽衣】

「じゃあ…これからもお前等は『友達ごっこ』がしてえのか？…多分、アイツは言わねえと気づかねえと思うぜ…半年も気づかねえ位だからな」

友達ごっこ…か。確かにそうだね。ボク達は友達以下として見られてるんだから…ツライな。

【航】

「誰だつて友達が傷つく姿なんて見たいと思わないよ。俺や芽衣先輩だつて思ってるさ…そんな事。でも、『言葉で伝えない限り伝わらないし、思ってる事全てが伝わるわけじゃない』んでしょ、亜沙美ちゃん？」

ッ！…そうだつ。あんな偉そうな事を言ったクセに…ボクは正義君の力になるために踏み込んだんじゃないかッ！…例え傷つける事になつても、彼を支えてやればいいだけじゃないかッ！

【亜沙美】

「ボク…覚悟が足りなかったみたいだ。あんな偉そうなこと言つていて…弱気になつてた。でも、鳴海君の言葉で眼が醒めたよ。ボクはもう迷わないッ！…もし正義君に嫌われても、罵られても構わないッ！…それでも傍に居て、支えてやればいいんだよね？」

そう言うのと園田先輩と鳴海君は嬉しそうな顔をして頷いてくれた。

【恋華】

「支えてやればいい…そつか…そうだよねつ。アタシも決意が足りなかったみたい。マー君が傷ついた姿ばかりチラついて…恐くて逃げてた。このままじゃ、今のマー君を見て何もしようとしんない

美咲桜と同じだよな……… だけど、アタシは逃げないっ！」

それは鳴海君にこの話を聞いてからボクも感じてた。… 美咲桜は鳴海君よりも長い時を一緒に過ごした筈なのに、この話に触れることはなかった。

【航】

「美咲桜ちゃんと同じ……… 確かにそうだね。彼女は間違いなく、今のマサ君の状態に気付いてる筈だ。それでも何もしようとしてない。つまり……… 今の状態を歓迎してるんだと思う。あの頃のマサ君は人を惹き付ける魅力があったから……… 元に戻って、自分から離れていくのを恐れてるんじゃないかな？……… 『昔は私だけのヒロ君だったのに』って彼女が言ってたの、恋華も覚えてるでしょ？」

鳴海君がそう言って恋華の方を向くと彼女は頷いた。

美咲桜がそこまで正義君の事を想ってたなんて知らなかった。… あの2人つて一体、どんな絆で結ばれてるんだろう。

【航】

「正直……… 俺は今の美咲桜ちゃんが好きになれない。マサ君は彼女の事であんなにも悩んでるのに、彼女はマサ君が元に戻るのを恐れて……… 見てみぬフリをしてる。多分、彼女は… 元に戻ったマサ君に、他の娘が近づくのが……… 誰かに取られるのが怖いんだ。……… 自分勝手すぎるよっ」

鳴海君の言うことも分かるけど……… でもボクは女だから、美咲桜の気持ちの方が痛い位に伝わってくる。

好きな人と他の娘が話してたらその娘が邪魔だと思っし、自分以外

の娘と付き合ったりしたらショックで寝込むかもしれない。

……今は好きにも嫌いにもなれない……かな。

【航】

「だから……美咲桜ちゃんの件が片づくまで、マサ君の件は保留にしようと思ってるんだ。……マサ君の望んでる関係にたどり着くには、お互いの問題を解決する必要があると思う。でも、あんな状態を許容してる彼女にマサ君を任せられないっ、任せたくないっ！……だから美咲桜ちゃんの問題が片づいたら彼女を試そうと思う。……方法はまだ考えてないんだけど……皆の意見はどう？」

試す……か。美咲桜は自分の問題が解決した時、今の正義君の状態を許容しちゃうのかな？……しちゃったら鳴海君の言う通り、付き合ったりしない方が良いのかもしれない。

【恋華】

「アタシはそれでいいと思うよ。……美咲桜の事は応援してるけど、ソレとコレは別問題だしね？」

美咲桜の件を先に解決した方が良いのは確かだね。……先に正義君の件を解決したら、彼は一人で突っ走りそうな気がするしね。

【芽衣】

「それでいいんじゃないか？……あの二人が付き合っって決まった訳じゃねえし、オレも諦めてねえからな」

は？……今、なんとおっしゃりやがりました？……諦めてない？……ッ！？」

【航・恋華・亜沙美】

「工工絵絵ええー……ツ?!?!?」

【芽衣】

「お前等は何を驚いてんだ?…オレは前から正義の事を気に入ってるって言ってたぞ?」

「いやいやいや、気に入ってるって…話が合うとか歳のわりに落ち着いてるとしか言ってなかった筈じゃ?」

【恋華】

「まさか、マー君狙いだとは思わなかったですよ。…今度じいじい〜つくりと、ねえ〜つとりと詳しい〜く教えてくださいね?」

【航】

「恋華っ!…話を脱線させないようにっ!…じゃあ、美咲桜ちゃんの件を優先するという事で良いよね?…他に気になる事はある?」

ボクはまだ何も言ってないんだけど……まあいつか。まだ問題は山積みだけど、知りたかった事も分かってスッキリしたし。……早く美咲桜の事を解決して、正義君があの写真の様な笑顔を取り戻せるように頑張ろうっ!

VIEW CHANGE

END

【正義】

「ハア〜………また巻物」

【明斗】

「いや〜美味しいなっ！……やっぱり寿司は最高だっ！」

【英理朱】

「本当に美味しいわ〜……まー君も確り食べてる？……あつ大トロだっ！……ん〜美味しいっ！」

【正義】

「……………流れて来ないモノをどうやって食べと？」

帰宅後すぐに母さんと駅前に向かい、回転寿司の店『回り飯』に入った。

カウンターに座っていた父さんの横に母さんが座り、俺はその隣に座った。

しかしそれが間違이었다。寿司は父さんの方から流れて来るので、俺の所にたどり着く前に取られてしまう。俺はさつきから巻物しか食べてない。いや、食べたくても食べられないのだ。

他の席に移動すればいい？…それは無理だ。この店は安くて美味しいで有名なので、今の時間帯に空席などありはしない。

【明斗】

「おっ！……ヒラス頂きっ！……ング……………脂が乗ってて美味しいな〜」

【英理朱】

「馬の鬣も美味しいね？……お酒が欲しくなっちゃうけど。……アレはっ！……あむ……………やっぱりエンガワよね〜」

ブッチン！

【正義】

「うが~~~~~っ！こっちにも寄越せえ~~~~~っ！！！」

亜沙美達が帰宅する頃………多くの客で賑わう店内では、正義の周りの客達をドン引きさせる叫び声が響き渡っていた。

13 5月第4週【見えない傷痕、少女達の決意】（後書き）

13 お楽しみ頂けらしたでしょうか？…今回の話は主語を抜いていたり、色んな伏線が絡み合っているので解り難かったと思います。（ゴメンなさいっ作者の力量不足です）次回新キャラが出せるとスムーズに進行出来ていいのですが………思い通りに書くのって難しいですね。………すみません愚痴りました。次回予告：新キャラ次第とだけ言っておきます。………今回はこの辺で失礼します。

それではまた次回 14でお会いしましょう。



14 1/2 6月第1週【境界線】（前書き）

約2ヶ月ぶりになります。14の投稿です…とは言っても前編のみですけどね。

何時もならココで駄文を書きなぐるトコですが、今回から駄文（愚痴とか投稿が遅れた理由とかお詫びとか前後編に分けた理由とか）は作者ページに書くようにするので興味のある方は自己紹介文をご覧ください。（因みに10月の頭くらいから制作状況も記載しています）

説明だけでも長くなってしまいましたが、それでは14お楽しみ下さい。

此処は……教室？……藍ヶ丘小学校か？……何でこんな場所に居るんだ？

とりあえず目の前にある机に腰掛けて現状を把握しようと思い、腰を降ろすと机をすり抜け床に尻餅をついてしまった。

ハツとして辺りを見回すと、教室内には数人の男女が居たが誰も此方に気づいてなかった。

転けたのに痛みも無い……触れられずに体をすり抜けたって事は。

【正義】

「……………夢、か」

現状を把握して落ち着いたので立ち上がり、更なる情報を収集する為には辺りを見回した。

【正義】

「4年3組の教室か……日時は9月24日の12時半……という事は昼休みか？」

そういえば俺や美咲桜が居ない……これは俺の記憶なのか？……今までの夢なら俺はその場に居た……何かが変だな。

『おゝい、七瀬も早く来いよっ！……一緒にサッカーしようぜ！』

俺を呼んでる？……あり得ない……この頃の俺は美咲桜以外には相手

にされなかった筈だ。……声は外からだったな。

誰が呼んでいたのかが気になったので窓の方へと歩み寄り、壁をすり抜けてベランダに出ると声の主を捜した。

【正義】

「手を振ってるあの男子か……覚えて無いな。……呼ばれた俺は何処に居るんだ？……あっちを向いてるってことは……居た、美咲桜も一緒か」

視線を校庭の奥から手前にずらしていくと、廃タイヤを利用して作られた跳び箱に二人が座り何かを話している様だった。

何を話してるのか気になるな。……とりあえず行ってみるか……よつと！

ベランダから校庭に飛び降り、二人が居る方へと歩を進めた。

しかし不思議な感覚だな。壁は触れないのに地面は触れる。普通に歩ける。飛び降りる時も手すりをすり抜けたし……これが夢だったのは分かってるが、なんだか気持ち悪いな。

【小4・美咲桜】

『それで　　母さん　　君もつ　　いら　　いって！』

【小4・正義】

『　　ストップ！　　……皆が　　でる「行っちゃダメッ！」  
……話の続き　　ちゃん　　から』

“いつもの夢とは何かが違うな”等と考えながら歩いていると、不

意に2人の話し声が聞こえてきたので思考を中断して意識をそちらに向けた。

断片的にしか聞こえないが、美咲桜が行っちゃヤダッ！ って言ったのは聞こえたな。……つまり、向こうに行こうとしてる俺を引き留めようとしてるのかな？

【小4・美咲桜】

『ヒロ君は……アイツ等の所になんか行ったりしないよね？……私を一人にしたりはしないよね？』

震える声で懇願する様に言うと、彼女は座っていたタイヤから立ち上がり今にも泣きそうな顔で当時の俺をジッと見ていた。

なっ！？……人前じゃ完璧なお嬢様を演じきり、俺の前でも言葉遣いだけは崩さなかった美咲桜が“アイツ等”なんて言うなんて……  
…俺は彼女の口から“アイツ等”なんて言葉を聞いた事がない。

この夢はやっぱり何かがおかしい。…いや、夢だからおかしいのか。アイツの言葉遣いもだが、当時は既に両親とも打ち解けあった後で、不安定になる事はなかった筈だ。

それに美咲桜はクラスの人気者で、常に取り巻きの女子達が居たから俺が居なくても一人になる事はない。

いや、そもそも当時の俺がおかしい。この頃の俺は、昼休みは教室で譜面を読むか寝ていた筈だ。

相手にされもしない奴等と遊んでいるなんてあり得ない……この

夢の全てが当時の記憶と矛盾している。

【小4・正義】

『ちよつと呼ばれただけで、そんな泣きそうな顔するなよ?…サツカーの助っ人みたいだし、ゴールを決めたらすぐに戻るから、な?……じゃあな!』

そう言うと当時の俺はコートの方に駆け出し、その場に残された美咲桜は顔を伏せ肩を震わせていた。

【小4・美咲桜】

『グスツ…皆つ…私の前つからっ…ヒック…居なくっ……なっちゃう……ならっ…いらないうっ……うっ…うああああー…ー…ー…』

美咲桜が泣き出した途端に景色が揺れ始め、視界から色が消えた。そして遠くから光の波が人や景色、その全てを飲み込みながら凄スピードで此方に迫って来た。

な!?!…美咲桜の泣き声に共鳴してるのか?…色が…景色が消えていくっ!……ツ!……眩しっ!?

迫ってくる光の波のあまりの眩しさに耐えきれず眼を開けると、急に体が浮いていく感覚を覚えた。

暫く眼を閉じていると体が急に重くなったので不安になり、急いで眼を開けると見覚えのある天井が眼前に広がっていた。

【正義】

「ハアハア…ハア…何だ、あの変な夢は」

幼い頃の記憶を夢に視たことは、今まで数えきれないくらいある。  
……特に先週末からは毎日だ。

今まで視た、幼い頃の記憶に関する夢は『当時の俺』から目線で記憶にもあった。

【正義】

「でもさっきの夢は記憶に無い。しかも当時の俺が『居た』……という事はつまり、俺の記憶とは無関係の平行ワールドってことなのか」

しかし気持ちの悪い夢だったな。昨日までの夢は矛盾も無く、昔を懐かしみながら視れたのに……今日の夢は……いや、悪い方に考えるのはよそう。

【正義】

「これで昔の記憶を夢に視たのは6日連続か……原因はやっぱり、バイトで亜沙美に言われたことが引っかけてるからなんだろうな。……まあ、それが全てとは言わないが」

PLAYBACK

正義SIDE

土曜日の夕方……今日は5時からバイトをする約束をしていたので、自転車に跨がりフロントエアへ向かっていた。

【正義】

「やっと着いたあゝ。やっぱり……車以外で来ると、駅裏は少し遠く

感じるな」

正面入口前のロータリーに着くと近くの駐輪場に自転車を止め、入口に向かって歩きながら亜沙美の姿を捜した。

【正義】

「つかしいな……確か約束は45分に正面入口だった筈だが……今が45分だよな？」

やっぱり居ない……先に行ってしまったのか？……とりあえず電話してみるか。

【亜沙美】

『ゴメンっ！……企画の打ち合わせが長引いちゃって……催し物スペースの場所は解る？』

電話の向こうはヤケに騒がしいな。……忙しいみたいだし、手短に済ませるかな。

【正義】

「ああ、大体は解るよ。そっち忙しいみたいだし、先に行つところか？……『ゴメンね？……すぐに行くからっ……それじゃ……さ……さてと、行くか』

店内に入って直ぐの所で案内板を見つけ、目的地の位置を確認すると催し物スペースに向かった。

催し物スペースにはステージが設営されており、ピアノはステージ上のガラス張りのブース内に設置されていた。

【正義】

「凄いな……たった一日でこんな立派なステージを作れるんだな……亜沙美、頑張「正義君っ！」……ヒールで走ると危ないぞ？」

声のした方に視線を向けると、スーツ姿の彼女がヒールを世話しく鳴らしながら此方に駆けてきた。

へえ……大人っぽい恰好も意外と似合うな。

【亜沙美】

「ハア……ハア……どうかな？……ちよつと狭いけど、立派なステージでしょ？」

彼女は此方に着くと両手を膝について乱れた呼吸を整え、姿勢を正しステージに視線を向けそう言った。

【正義】

「ああ。大したモンだと思うよ。……ちよつと目立ち過ぎな気もするが……な」

【亜沙美】

「あの派手な作りは全てボクの指示……本当はもっとシンプルなん



「だけど…」

そう言った彼女はスツと眼を細め、遠くを見た。

【正義】

「知らない人達の前で弾くと指が動かなくなる”状態を克服させるため…だろ？」

彼女は小さく頷くとステージに上がって此方を振り向いた。

【亜沙美】

「うん。…今まで一人で頑張ってきた正義君の力に為ればいいな  
って……迷惑だったかな？」

そう言って不安そうな顔をした彼女に向けて、首を横に大きく振って見せた。

【亜沙美】

「ボク…正義君に“今は知らない人達の前では弾けない。リハビリを重ねて、また弾ける様になりたい”って話を聞いてから、何か手伝える事は無いかずっと考えてたんだ。…ボクも音楽に携わる者だし、こういったケースで辞めていった人達を沢山見てきた。だから、友人が苦しんでるのを指をくわえて見てるなんてできなかった。お節介だと思われてもいいから力になりたかった。…だから、今回の企画を立ち上げたんだ」

…本当に俺の為だったのか。なんで…亜沙美は知り合ってる1ヶ月ぐらい…大して親しくもないの友人の為にここまでするんだ？  
…俺以外にも救いを求めている友人は居るだろうに。

【亜沙美】

「一応ダメな時の事も考えて、お客さん達の声や姿をシャットアウトできるようにしたんだけど……いけそう？」

彼女はそう言うのと此方に背を向けブースの方に歩み寄り、握り拳でガラスをコンコンと鳴らした。

【正義】

「要するに録音ブースみたいな感じだろ？……でも一体どういう仕組みになってるんだ？」

【亜沙美】

「まずは音。ブース周りのガラスは遮音タイプのモノを使ってるから、お客さん達の声に集中を乱される事は無いと思うよ。次に視界だけど……内側にはブラインドを取り付けてあるから、観られたままじゃ弾けないなら使っても構わない……どう？……完璧だと思わない？」

彼女は腰に両手を添えると胸を張り、自信満々といった感じで説明していた。

確かに完璧だと思うが、ここまでしてもらつと逆に申し訳ない。……こりゃ、頑張らないといけないな。

【亜沙美】

「という訳で……ここまでお膳立てしたボクの為につ、一曲弾いてくれないっ？」

そう言った彼女の顔はイタズラ好きの子供の様だった。



いてあげないと可哀想……彼ならこの子を満足させられると思うから……この子なら彼の力になれると思うから……この子を彼に会わせてやって『だってさ』

まだ話した事もない俺なんかの為にこんな大事なモノを……2人には本当に感謝しないといけないな。

【正義】

「亜沙美、香津美さんに言付けを頼めるか？」

そう言つてピアノに歩み寄り、椅子を手前に引き腰を降ろした。

【亜沙美】

「お姉ちゃん……忙しくてなかなか会えないから伝えるの遅くなる」  
「構わない」……分かった。なんて伝える？」

【正義】

「そうだな……この御恩はいつか必ず、同じステージの上に立った時お返しします」と

言付けてから鍵盤の蓋開き両手を載せた。それから黒鍵、白鍵を指で一つ一つ押さえ込んで音と感触を確かめた。

【亜沙美】

「確かに承ったよ。……しかし正義君って、歳上と話す時は言葉遣いが露骨に変わるよね？」

“この”手に吸い付く様な鍵盤の戻り具合……本当に久しぶりだ。  
……ちゃんと調律もされてるし、気持ち良く弾けそうだ。

【正義】

「いや、歳上じゃなくて『敬意を評する人』限定だ。芽衣さんとか……な。……御堂様、何かリクエストはございますか？」

そう言っただけで彼女の方に視線を向けると、亜沙美は顎に指を添えて苦笑していた。

【亜沙美】

「では……3年前のコンクールで、金賞を授賞なさった演奏をお願い致しますわ」

【正義】

「承りました。……それでは、シヨパン……『大洋』……お聴きください」

眼を瞑り記憶の棚から譜面を引き摺り出し、荒れ狂う大海をイメージしながら鍵盤に指を走らせた。

曲の途中……いつもの癖（完璧に弾ける曲はアレンジしたくなる）で所々にアレンジを散りばめながら、久しぶりに触る名機の感触を楽しみつつ最後まで弾き終えた。

パチパチパチ

何で亜沙美は拍手してるんだ？…最後の方は最早アレンジしすぎて、原曲の欠片も残って無かったと思うんだが。

【亜沙美】

「ハア…あまりの素敵な演奏にウツトリしてしまいましたわ。波のうねりというよりも…もっと大きな…揺るぎない力強さを感じましたわ」

【正義】

「ご静聴、有難う御座いました…と言いたい所だけど、俺も止めるから、いい加減にその、お嬢に成り損なった様な喋り方を止めたらどうだ？…さっきから気持ち悪くて敵わん」

【亜沙美】

「お嬢に成り損なったって何さ？…ボクは、『あの』、御堂の『令嬢だよ？』…正義君は失礼だよっ！」

そう言つて彼女は頬を膨らませて腰に両手を添え、鼻を鳴らして顔を背けた。

お嬢様つて自覚はあったのか…意外だ。…でも、お嬢様言葉には無理がありすぎだ。亜沙美からは、由衣みたいな気品が微塵も感じられないしな。

【正義】

「だって事実だし、しょうがないだろ？…『本物』のお嬢様はキミと違って、立ち居振る舞いに気遣いと気品があるし、しかも自分のことをボクなんて言わないと思うぞ？…いや、『絶対に』言わない

筈だっ」

思っていた事をぶちまけると彼女は此方に背を向け、上着のポケットをゴソゴソと探っていた。

【亜沙美】

「うっ…そこまでっ言わなくっ…てもっ…いいっ…でしょ…こんなにつ…」

嗚咽混じりの声で、そう言った彼女の肩は小刻みに震えていた。

…まさか“あの”亜沙美が、言葉遊び程度で泣いてるのか？…あり得ない。でも芝居にしては重みがあるし……謝ったほうが良いよな。

【正義】

「ゴメンっ！…俺みたいな普通の家庭で育ったヤツが、お嬢の苦労とかも考えないで…言い過ぎだよな、本当にすまなかった」

そう言っ頭を下げてから恐る恐る彼女の様子を窺うと、彼女は此方に向いており、胸に嘘泣き用と書かれたノートをだき抱えていた。

【亜沙美】

「いや…いつ読んでも泣けるっ！…アレ？…どうしたの、頭なんて下げちゃって（ニヤリ）」

コイツは悪魔だ。…きつと、俺の申し訳なさそうな顔を見て楽しんでるに違いない。…だんだん恋華みたいになってきてるような…

…恨むぞ航。

【正義】

「ナンデモナイ…それよりも、亜沙美はいつまでもこんな所に居ていいのか？…後5分ぐらいで5時になるが」

【亜沙美】

「ヤバっ、本当だっ！…とりあえず無理だけはしないように、ブラインドで人目を調整しながら頑張ってみてっ！…じゃあ、ボクは今から会議があるからもう行くねっ？…終了時間前には戻ってくるからぁーっ！っ！」

そう言いながら時計を確認した途端その場で飛び上がり、叫び声を上げながら慌てて外に飛び出した。

【正義】

「……忙しいヤツ」

まだステージの周りにお客さんは集まってないみたいだな。……ブラインドはまだ必要なさそうだし、適当に弾くかな。

【正義】

「シヨパンは一曲を除いて弾けるし……っっていうか、スコアは無いのか？………無いな。亜沙美も忙しいみたいだし、仕方ない…か。最近は喜怒哀楽の『怒』を表現した曲は弾いて無かったし……ベーターベンの『熱情』辺りからいつとくか……思い出せるというが」

眼を瞑り、記憶の棚を探すこと3分……譜面が見つかったので俺が『怒り』を感じる状況を強くイメージして、眼を見開き、軽く息を吐いてから鍵盤に指を走らせた。



【正義】

「ふう…まだ覚えてて良かった。次は何を……………ッ!？」

曲を終えて鍵盤から視線を上げると、100人近いお客さんからブーイングの周りを取り囲まれていた。

全然気づかなかった。……………うつ、くう~~~~っ!…ハアハア……………  
一回ぐらいは試さないか……………ここで止めたらいつまでも……………  
……………クツ…駄目か。

【正義】

「…眼を瞑ってても客の視線を感じる、瞼の裏に姿がハッキリと焼き付いてる。……………手の震えも止まってくれない。……………やっぱりまだ……………」

弱気になるなっ!……………こうなるのは分かりきってた筈だ。……………ここで逃げたら何も好転しないし、二人の気持ちや苦勞はどうなるっ。

思い出せっ!……………子供達の前で初めて弾いた時の事を。……………あの時は吐き気もした。手も震えた。…演奏と呼べる様な立派なものじゃなかった。…けど、最後まで弾ききれた。……………それだけか?…まだなにかあったんじゃないのか?……………今とは違う『何か』が。

考えろっ！！！！……何が俺を縛り付けてる？…あの時と今では何が違う

【声】

「ま し さよし く まさよし 正義君っ！」

鍵盤の蓋を閉じて蓋の上につ伏し考え込んでいると、急に肩を掴まれた様な感じがするとともに視界が揺れ始めた。

【正義】

「あさ……み？…どうして此処に居るんだ？…そんな泣きそうな顔して…」

【亜沙美】

「ボクの事はどうでもいいよ。それよりも正義君酷い顔してる……大丈夫なの？」

【正義】

「大丈夫だ。ちょっと無理して気分が悪くなっただけ。…スグに再開「本当に弾けるの？」………ブラインドを下ろせば多分「本当に？」………分からない」

そう尋ねてきた彼女の顔は、反論も許さないほどの迫力があつた。

その顔に気圧され本当は心配をかけない様に虚勢を張るつもりだったが、思わず本音を語ってしまった。

【亜沙美】

「……今からボクも此処に居るから。…ちょっとブラインド下ろす

ね？」

彼女は“返答は受け付けない”といった感じで素早く扉の傍に歩み寄り、壁に取り付けてあるスイッチを押した。

すると四方全てのブラインドがゆっくりと下がり始め、だんだんと外の様子が分からなくなっていく。

突然の出来事に我を忘れて彼女の様子を眺めていると、傍まで戻ってきて此方を向き椅子を跨ぐ様に座った。

【亜沙美】

「ほらっ！正義君もこっち向くっ！」「何故に？」つべこべ言わないっ！「わっ分かった」……ふう……これで落ち着いてゆっくり話せるね」

相変わらずの反論を許さない口調に従い、まるでシーソーに座る様な体勢で彼女と向き合った。

【亜沙美】

「さっきの様子を見るかぎりじゃ、相当、深刻みたいだね。…早く治したいのは分かるけど、無理だけは絶対にしないで。お願いだから」

そう言って両肩を掴み真剣な顔を向けてきた。

無理するな…か。俺は全然ムリなんてしてない。…指が動かなくて何もできなかつたんだから。

【正義】

「心配しすぎだ。さつき顔色が悪かったのはきつと、あまりの見物人の多さに酔ったからだろ。今はなんともないしな……焦ってる……か」

焦ってる……というよりは、自己嫌悪だな。まだ何もできてないし、対処法一つ考えつかない自分に。

【亜沙美】

「ていつ！「痛っ！？」……ボクが居るのに一人で悩まないっ！……ボクで力になれるか分からないけど、悩みがあるなら聞かせてよ。……ボクも一緒に悩ませてよ……ね？」

彼女は俺の額に手刀を落とすと微笑みを浮かべ、諭す様な口調で言ってきた。

亜沙美は本当に人の表情を読み取るのが巧いな。ボクも一緒に悩ませて……か。そうだな……今は相談できる相手が目の前に居るんだ。自己嫌悪は一人の時にすればいい。

【正義】

「正直に言うと自己嫌悪してた。「自己嫌悪？」……ああ。お客さん達に見られて拒絶反応が出たんだ。「指が動かなくなる？」……そう。それで動かなくなる要因とか考えてただけで、何も思いつかなかつたんだ。そんな自分に嫌気がさして……さ」

【亜沙美】

「うーん、確かに。何で知らない人達の前だと指が動かなくなるんだらうね？……『おそらの庭』だっけ？正義君がいつも行ってる孤児院」

【正義】  
「そうだけど？」

【亜沙美】  
「その子供達の前では普通に弾けるんだよね？」

【正義】  
「ああ。最初のうちは、さっきみたいに手の震えやら吐き気やらで大変だったけど、今では普通に弾けるよ」

【亜沙美】  
「うーん、その時と何が違うのかな。…そうだった！…ボク、“子供達の前では弾ける様になった”って所が気になってたんだ。…それって知らない子供達も含まれるのかなって…」

知らない子供達…つまり、園に入ってきた初見の子供でもいいんだよね？……何度か新しい子が増えた事はあったけど、問題なく弾けた筈だ。

【正義】  
「知らなくても大丈夫だと思う。…何度かそういう状況はあったけど、その時は問題なかった」

【亜沙美】  
「じゃあ、子供と親しい人達の前では弾けるんだね？」

【正義】  
「ああ。そうみたいだ」

【亜沙美】

「…じゃあ、知らない子供と大人の境界線は？…何歳ぐらいの人に観られたら弾けなくなるの？」

境界線…か。考えたこともなかった。何歳ぐらいまで大丈夫なんだろう？

【正義】

「そんなこと、考えたこともなかったよ。…でもさ、それって関係あるのかな？」

【亜沙美】

「それはまだ分からないけど、身体が拒絶反応を示す要因を知るのに役立たないかと思って。…一定年齢以上の知らない人に見られたら、無条件で身体に異常が出るのかとか。他に何か要因があるのかとか。もしかすると大丈夫な人達が居るかもしれないとか。色々な事が見えてくるかもしれないでしょ？」

大丈夫な人達ねえ。今のところ特例は無いんだが。…でも、裏を返せば解らないよな。もしさっきの人達の中に“大丈夫な人”が居たとしても、他の人に反応してたら解らないもんな。境界線…調べてみる価値はありそうだな。

【正義】

「言われてみればそうだよな。…でも、どうやって調べるんだ？…まさか、年齢別に男女一人ずつ此处に入れて確かめるのか？」

疑問に思ったので尋ねると、彼女は得意気な顔をして頷いた。

【亜沙美】

「さっそく明日にでも手配しておくよ。…それと、今日はもうバ

イトはおしまい。そのかわり、ピアノの事について色々と話してくれない?…できるだけ詳しく現状を把握して、策を練っておきたいから」

まだ開始から1時間も経ってない。…まともに弾いたのも『熱情』一曲だけ。…これじゃあ何もしてない様なモノだ。

バイトを請けた時からこうなるのは分かってた筈なのに……やっぱり悔しいっ、何も役に立てなかった自分が

【亜沙美】

「てやつ!」痛いつ!?!」…また自己嫌悪?…バイトの事なら気にしなくてもいいってっ!…今頃クラシックのCDが館内に流れてる筈だから、経験者以外はまず気づかないと思うよ?…だから、お話しよ?」

【正義】

「痛つて〜…分かったよ。何が訊きたいんだ?…全部を語り尽くすには時間が足りないから、訊きたい事だけ言ってくれ」

ピアノについて語ったら、確実に3日は話題が尽きない自信がある。……いや、マジで。

【亜沙美】

「うん……とりあえず、孤児院で初めて弾いた時の事を詳しく教えてくれない?…覚えてる限りで構わないから……」

【正義】

「覚えてる限りねえ……あの時は確か」

それから…当時の記憶を頭の中で反芻しながら、その時の状況を理解しやすいように話した。

初めて行く場所で園内に入ってからずっと不安だった事。

話しかけた子供達に怖がられた挙句、逃げられて凹んだ事。

その後いじけて部屋の隅に体育座りして“の”の字を書いてたら、先生に飴を貰って慰められた事。

いざ子供達の前でピアノを弾く時、拒絶されるのが怖くて子供達の顔を見れなかった事。

恐怖と緊張の板挟みで手が震え吐き気がしたが、何とか耐えきれレベルで最後まで演奏できた事…等を一時間ぐらい掛けて話した。

#### 【正義】

「でさっ！今じゃ玄関に着くなり、その那美ちゃんなみって娘が、『まさにい！』って舌足らずに俺の事呼びながら抱き着いて来るんだ。もうっその姿が可愛いの何のって「ストップっ！」……………なんだよ？…これからがいいところなのに…」

せつかく俺が那美ちゃん（4歳）の素晴らしさを教えてやってるのに。……………あの天使の様な可愛さは反則

#### 【亜沙美】

「破っ！……………ッ!?」…トリップしないっ！ハア…孤児院の事は、もう充……………分にわかったからっ。ご馳走さまだからっ。話ができないからっ。とりあえず正気に戻れっ！……………OK  
「？」



みつ…鳩尾につ…掌底はやバいつて。それにしても…考え事していたとはいえ俺に一撃を加えるとは…亜沙美、恐ろしい娘。

【正義】

「イ、イエス…」

【亜沙美】

「詳しく話すのはいいんだけど、那美ちゃんつて娘は関係無いでしょ？…延々と惚気を聞かされるボクの身にもなつてよ…」

【正義】

「…そうだな、悪かった。知らない人の話なんて聞かされてもつまらないよな。…他に訊きたい事は？」

【亜沙美】

「特に無いなあ。…え〜つと…そうだ！…まだ8時まで30分ぐらいあるし、適当に何か聴かせてくれないかな？」

【正義】

「…（ブチッ！）…人に掌底まで喰らわせといて話す事ないんかいっ！…「てへっ！」……リクエストはっ？」

【亜沙美】

「え〜つと…今日はスコアも無いし…正義君が弾ける曲なら何でもいい…かな」

弾ける曲なら何でもいい…か。亜沙美はピアノも結構詳しいし、何かヒントが得られるかも。まだ人に聴かせる様な段階じゃないけど、アレ…弾いてみるかな。

【正義】

「じゃあ……今から弾く曲を聴いて感想くれないか？……中々じっくり来なくてさ……」

そう言っただけで跨ぐ様に座っていた椅子から立ち上がり、ピアノの方を向いて座ると鍵盤に両手を載せた。

【亜沙美】

「感想？……もしかして、自作？」

彼女の問いに頷いてから眼を瞑り、頭の中で曲のイメージを構築した。

【正義】

「……じゃあ、感想よろしくな？」

曲のイメージが固まったので眼を見開き、鍵盤の上を滑る様に指を走らせた

この『against』は、喧嘩しては仲直りを繰り返して、仲間達との絆を深めていく様子を書いた変調曲だ。

最初の『喧嘩』を表現した部分は、解り合えない事に対する複雑な感情……自分の考えを理解してくれない相手に対する『憤り』や、理解してもらえない自分の考えに対する『疑念』。他にも『寂しさ』『哀しみ』……等の、負の感情を前面に出す事を意識して書いた部分で、速めの曲調に重厚な音が飛び交う感じだ。

この第一楽章『衝突』……若干暗すぎるような気がするけど、悪くないと思うんだよな。…想い描いてる世界と巧く音がリンクするし、その情景にも狂いは無い。……うん。いい感じた。

……そろそろ問題の『仲直り』の部分…か。…また、イメージが壊れて…何も見えなくなるのかな…また…あの暗闇が見えるのかな…誰も…

『仲直り』の部分…お互いに非を認め合い、解り合えた時の様々な感情…仲直りできた『喜び』、仲間で居られる事への『感謝』……等の、先程とは正反対の感情を強調して書いた部分で、ややスローな曲調。音質も柔らかく、飛び跳ねる様な…音の輪が広がる様な光景をイメージした感じ。

……やっぱり…か。イメージが…世界が…音を重ねる度に崩れていく。……最後はやっぱり…零だ。…何も

#### 【亜沙美】

「途中みただけど…ここで終わりなの？」

#### 【正義】

「……………」

…本当は此処で終わりじゃない。第二楽章『和解』は採譜も終わっ

てるし、ブラインドタッチでも通して弾ける。そう……弾けるだけだ。

【亜沙美】

「考え事してるトコ悪いけど……とりあえず、何をイメージして作ったのか教えてくれないと、感じた事を当てはめられないし、比較できないし、答えられないよ?」

【正義】

「ああ……悪い。今の曲は、喧嘩と仲直りを繰り返しながら、仲間達が絆を深めていく様子をイメージして作った。……弾いたのは第一章『衝突』と第二章『和解』の途中まで。……まだ未完成なんだ」

【亜沙美】

「衝突に和解……ね。曲自体は、変調でタッチもガラツと変わるし、面白いと思う……採譜も良いしね。……でも、それだけ。ボクは何も感じなかった……こんな感じでいいの?」

未完成で、なおかつ途中で演奏を止めた曲に感想をくれたのが無茶だったか。

【正義】

「辛辣な意見、感謝。ふう……因みに第一章だけだと、どうだった?」

そう問いかけると、彼女は肩を竦めて大きく息を吐いた。

【亜沙美】

「音楽の事となると食い下がるねえ?……ピアノは知識しか持たないボクから、大した助言は期待できないと思うよ。……それでも

「？」

そうやって眼を細め、此方の真意を探る様な視線を向けてきた。

【正義】

「それでも…だ」

【亜沙美】

「分かった。そこまで言うなら…第一楽章はバロック調でいいデキだと思う。アレだけで曲として成立するぐらい完成度は高いし、音も正義君の言ってた『衝突』のイメージと一致するし、感情の起伏も表現できてた…かな。……………ただ」

彼女はそこで言葉を切ると上を向き、視線を泳がせた。

【正義】

「……………ただ？」

第二楽章の事…か。キツツイこと言われるんだろ…でも、訊かないと。いくら原因が解らないからって、いつまでもあんな『空っぽ』な演奏する訳にもいかないし…な。

話の先を促したが、彼女は腕を組んで眼を閉じ何かを考えている様だった。

【正義】

「『和解』…だろ？…俺も思うところがあって、ダメ出しは覚悟の上で亜沙美に聴いてもらったんだ。だから、さ…わざわざ、俺の事を気遣って言葉を選ぶ必要はないよ？」

そう言うとな彼女は大きく息を吐いて、真っ直ぐ此方を見据えてから口を開いた。

【亜沙美】

「只でさえトラウマ発動して凹んでるのに、更に凹むのが分かって訊きたいなんて……正義君って、もしかしてM?」

そう言った彼女の顔は微塵も笑ってなくて、怖いくらい……真剣そのものだった。

【正義】

「俺はそこまでナイーブじゃない」

そう言っつて『真面目にやれ』という意味を込めて、彼女の顔を睨み付けてやった。

【亜沙美】

「即答でスルーされるとは思わなかったよ。ハア……明日バイトにならないぐらい凹むと思うんだけど……本っ当……につ、訊きたいの?」

【正義】

「しつこいつ……サツさと話……ッ……!」

急に彼女の表情が更に険しくなり、咄嗟に後に続く言葉を呑み込んだ。

何だ?…こんな彼女、初めて見る。感情が読み取れない。視線が冷たい。眼を合わせられない。……訊かない方が良かった。

【亜沙美】

「ボクも音楽に対しては嘘つけない性格だからぶつちやけると、ハッキリ言っただけは自己満足に過ぎないと思うし、ボクに言わせてみれば明るく見せようとする為に、高めのキーが鳴ってるだけだし、そもそも、アレが曲なんて高尚なモノ？アツハハハハッ！笑わせるなって感じ！！イメージなんてちっとも伝わってこないって！！！まだ他にも」

PLAYBACK

END

【正義】

「引つかかかってるといふよりは、突き刺さってるといふべきか。……ナイーブじゃん、俺」

「しかし……あそこまで言われるとは思ってなかった。お陰で本当に次の日はバイトにならなかったし、あんな夢まで見る様に……ハア……まあ、事故だと思って諦めるしかないか。」

【正義】

「でも結局、大丈夫な人達とやらも居なかったし……境界線も大体しか解らなかつたしなあ。ハア……鬱だ」

「明日も進展なくて、また凹まされるのかなあ。大体 来週はもつといい演奏、期待してるからね。……中5日ぐらいで、アドバイスも無しに曲が良くなる訳ねえって……アレ？……窓の外が明るい。そう言えば今何時だ？」

【正義】

「…6時50分。航が来るまでかなりが時間あるな……って、うわ  
っ、これ汗か？…シーツびしょ濡れじゃん。……………シャワー浴び  
」

【航】

「へえ…それで髪が微妙に濡れてんだ？」

【正義】

「コレってさあ、絶っつっつっつ対にっ、トラウマになってると  
思わないか？…タイミングが被りすぎな気がして、何か納得いかね



えと言うか…なあ？」

【航】

「アハハ、“なあ”って言われても…でもまあ、俺もそこまでキツイ言い方されたら3日は寝込むと思う…明日が不安って感じ？」

あれからシャワーを浴びていると、何故かいつもより30分も早くインターホンが鳴った。

疑問に思いながらも確認ボタンを押すと、何か顔の様なモノが見えたと思ったら、一瞬で向こう側が赤一色に染まり何も見えなくなっ

た。  
用意を終えリムジンに乗ると、何故か航は横になっており、顔の上に濡れタオルがかけられていた。（死人？）

……という訳で、今はいつもより『30分も早く』（重要）学園に登校して会話を楽しんで（？）いる最中…だ。

【正義】

「うん。それはそうだよ。……ねえ、鳴海…君？……爽やかに答えるのは…良いんだけど（照れ臭そうに）」

つまり始業まで50分近くもあり、教室には俺と彼の2人きり。

…つまり、ドラマの告白シーンの様な感じだと思ってもらいたい。

【航】

「えっ！？…なっ…何かな？（超赤面）」

目の前の席に座る彼は前を向いたままこっちを見ることも無く、顔を真っ赤にしてブツブツと何かを呟いていた。

【正義】

「こつちも見ずに、携帯ゲーム機でギャルゲーしながら会話するのってどうよ？」

【航】

「いや〜グツとクるわ……ん？……今、何か言ったの？……麻奈巳ちゃんの台詞に夢中………って、どしたの？……顔真っ赤だし、プルプル震えちゃってるし……まるで告白を邪魔された主人公の親友みたい」

【正義】

「い」

【航】

「え？……よく聞こえ」一回っ死んでこいっ！」又グハアーーーーー  
「ーッ!?!」

とりあえず礼儀がなっていないので、椅子ごと蹴り飛ばしておいた。

【正義】

「人が話してる時は相手の顔を見るっ！……まったく！………親しき仲にも「仁義あり」だろ？」………おはようございます、芽衣さん」

ボロ雑巾の様になって床に転がっている航を足で蹴り、安否を確認していると廊下の方から声が聞こえた。

声の方に視線を向けると、教室の扉が勢いよく開き彼女が此方に歩いてきた。

【芽衣】

「おはよう正義。…今日は早いな？（ニコツ）」

彼女はニコニコしながら傍まで来ると、隣に立って俺と同じ様に航を蹴り始めた。

今週に入ってから芽衣さん…やっぱり何かが違うな？…穏やかになったというか。纏ってるオーラが消えたというか。…いつもの凛々さが全く感じられないんだよなあ。…何か女のコしてるっていうか…でも残念。女のコは仁義なんて言わないと思いますよ。

【正義】

「…ええ。コイツがつ、30分も早くつ、迎えに来やがったのでつ、仕方無くつ、こんな時間に来てる訳です」

朝の貴重な時間（まあ色々とな）を削られた事を思い出し、ムカついてきたので航を踏みつけながら答えた。

【芽衣】

「アハハ、そうか。…それで航を蹴ってたんだ？…なあ、正義？（モジモジ）」

ん？何だこの流れ。…今のやり取りのどこにモジモジする要素があったよ？…スゲエ対処に困るんですけど。…一体先週末から月曜までの間に何があったんだ？

【正義】

「何ですか？…急に改まって」

【芽衣】

「あ…あの…な？…ふ…風紀「イタタタタ…俺はいグフツ！？」…  
入ってほしいんだ、正義に」

話している最中に航が復活したが、彼女の爪先が腹にめり込み再び悶絶していた。

風紀…入ってほしい…俺に…『風紀委員会に入ってほしい』…  
…え？

【正義】

「風紀委員」おっはよー七瀬君！…今日は早いなだねえ？」…ああ、  
おはよう……風紀「七瀬君おはよう」……はよっス…」

もう8時過ぎてたのか……そりゃ生徒が登校してくる訳だ。

時間を確認して彼女に視線を戻すと、顔を伏せて握り拳をプルプルと震わせていた。……何故に？

【芽衣】

「どうかな？風紀「あつねえ」…こんな時間にマー君が居る。あつ、  
芽衣先輩もおはようございます」…ハア……昼休みにまた来るわ。  
邪魔したな」

言いたい事を邪魔されたからなのか、彼女は肩を落として大きな溜め息を吐き教室から立ち去った。

【正義】

「結局、なんだったんだ？……まあいいや。昼休みに来るって言うてたし」「キヤーツ！……鳴海君っ、どうしたのっ、面白いことになってるよ？」……心配いらないって、カクカクシカジカ　だよ」「

航の異変に気づいたクラスの女子が駆け寄って来たので、簡単に事情を説明してから席に戻った。

【恋華】

「本当に珍しいね、こんな時間に来てるなんて」「それは　……なるほど。それで航は寝てるんだ？」

【正義】

「うーん……厳密に言つと違うけど……大体はそうだな」

『人の話そつちのけでギャルゲーしてたから制裁を加えた』なんて言えるわけねえよな。……航の命が危ないし。

【恋華】

「そつえばさつき、芽衣先輩とは何を話してたの？」

……っていうか航の心配は？……向こうを見ようともしないし。航……頑張れ。

【正義】

「昼休みにまた来るらしいから、その時に分かるよ。それよりも今日、何時間寝れる？」

言いながら机に突っ伏して窓を開けると、カラッとした気持ちのよい風が入ってきた。

今日は金曜日だよな。5・6の選択……は……サボリ……確定 Z  
ZZ

【恋華】

「マー君なら最初から逝けるよ？……ノート提出する科目もないから安心……って、もう寝てる……おやすみ、マー君」

【航】

「ねえ？……俺のセリフってあれだけなの？……もう少し喋ら」「マー君が起きるでしょ、このバカっ！」「……もしかして降格？」

V I E W C H A N G E            ? ? ? S I D E

正義が寝てしまい二人が夫婦漫才を繰り広げているのと同時刻……  
新京国際空港の入国ゲートから入国審査を終えた、一人の少女が出てくるところだった。

【???】

「此処までくるのに約10年……本当に長かったわ。……でも、辛かった時間も後少しで終わりを告げる。……覚えてるかな？」

私は眼を閉じて、首から下げていたペンダントのトップ部分のロケツトを握り締めた。

【???】

「お祖父様には本当に感謝だわ。本来ならば私達は……わたくし……ううん。後悔なんてしては、お様を説き伏せてくれたお祖父様に申し訳がたたない。これは無理を言っただけで私が望んだ事。……」

うん。もう大丈夫」

私は自分に言い聞かせる様に一人呟くと、手荷物のハンドバッグから携帯を取り出した。

お祖父様は 日本に着いたら、すぐに“この番号”に連絡しなさい。お前が『どうしても逢いたいのだ！』とワシに噛みつき、食い下がった、『彼』が通う学園の関係者が飛んでくる筈じゃから。…それから、学園の買収も終わっておるから、お前の好きにせい。……気がつけて行くんじゃないぞ と言つて、笑顔で送り出してくれた。

全て私の我が儘なのに、ここまでして下さい、お祖父様、本当にありがとうございます。…この番号ね。

【???】

「そちら、鳴響学園の方…で宜しいのかしら？」

お祖父様が前もって登録しておいてくれた番号にかけると、2回目のコールで繋がり“早いわね”と思いながらも問いかけた。

【学園関係者】

『はっ…はいいい！…りっ理事長様で宜しかったですでしょうか？』

理事長？…お祖父様の仕業ね、きっと。つまり彼が緊張してるのは…なるほど、校長辺りに何か言われてるのね。…減給辺りかしら？

【理事長？】

「ええ、そつよ。…そちらは？」

【学園関係者】

『さっ榊と申します!』

【理事長?】

「榊さん…ね。…とりあえず、緊張なさる必要はありませんから、落ち着いてください?…私は気分を害された位で、あなた方を処罰するほど狭量な人間では無いと自負しておりますから」

【榊】

『すすみません。そんな事』はい、深呼吸っ!』すう…はあ…すみません。漸く落ち着きました』

【理事長?】

「榊さんは今どちらに?」

【榊】

『西口のロータリーです。…今そちらに向かいます』

ロータリーという事は車よね。日本の道路事情はどうなのかしら?…空港だと混雑してて、なかなか出られないなんて事は……うん、早く『彼』に会いたいし。

【理事長?】

「結構です。…それよりも、今から、そちらに行きますので、すぐに車を出せるようお願いします」

返答を待たずに通話を打ち切り、携帯をハンドバッグに仕舞った。

【理事長?】

「いま行くからね、お兄様!」



近くの案内板で現在地と西口の位置を確認し、手に持ったハンドバッグを脇に抱え直し、すぐさまその場から駆け出した

VIEW CHANGE

END

【航】

「おい、マサ君っ！……いい加減に起きろっ！……起きないと、美咲桜ちゃん呼んじゃうぞっ……好き放題されちゃうぞっ……良いのっ？」

【正義】

「くっ……すっ……それは航だろ……っ……ムリ」

【航】

「何がムリなのっ？……俺は夢で何をしてんの？」

【正義】

「んっ……近寄るな……すっ……マジでウザイ……からあっ」

【航】

「実は起きてんでしょっ、何がウザイのっ、ねえ？」

【恋華】

「これだけ揺すっても、美咲桜の名前だとしても起きないとなると、っ……ん、裏技使わないと起きないかもねえっ」

【航】

「裏技？……この状態のマサ君を起こす方法があるとしても言うのっ？」

【恋華】

「あるよ。…はい、この紙に書いてるの買ってきて」

【航】

「この紙が？…なにになに… 『チーズの様なケーキ』 って何さ？…  
「一階のコンビニー！…つべこべ言わずに買ってくるっ！」……イッ  
！…イエッサー」

【女王・恋華】

「航の分際でアタシに意見するなんて10年早」ふあゝゝゝ良く寝  
た」……フフツ…漸くお目覚めかしら？」

大きく伸びをしてから目元をゴシゴシと擦り、周囲を見渡すと恋華  
以外は誰も居なかった。

【正義】

「皆は？……何で俺達しか居ないの？」

【女王・恋華】

「クスツ…皆さんなら今頃は視聴覚室に居ると思いますよ？」

ん？……この口調って……久々の女王様モードか？……航が居  
ないのになんで発動してんだろ。

【正義】

「でも、4時限目って「差し替えてLHRだそうですね？」……な  
るほど」

まあ…サボっても出席になるし、問題ないだろ。うーむ……まだ3



【正義】

「ん〜カフェテリアに行ってもいいけど、開店まで少し待たないといけないんだよね〜……………という訳で航、面白い話を頼む」

【航】

「相変わらず無茶振りするね。……………え〜っと、新しい理事長が来るって話は知ってる？」

【正義】

「いや、全く興味ないから知らない。知りたいとも思わない」

【恋華】

「右に同じ。つまり、アンタは処刑されなければならない」

【航】

「何故にっ!?!……………どんなルールよっ？」

【正義・恋華】

「わたるーる」

【航】

「すっごい脱力系な名前のわりに、やることは相当えげつないね？」

……………その理事長が同じ年だと言ったら?」

【恋華】

「嘘つくならもう少し」嘘だと思っなら父さんに訊けば?…はい、電話」……………そんな漫画みたいな展開ってアリなの?」

へえ〜……同い年の理事長か、面白そうだな。

【正義】

「とりあえず聞いてやるから、はよ話せ」

【航】

「いや、話はもう終わりなんだけどね」

【正義・恋華】

「……………え？」

【航】

「や、真面目な話…俺も気になって父さんに色々と尋ねただけど航、私はな…長生きしたいんだよ の一点張りだったんだ。んで気になって学園のHPを調べたら、確かに経営者が代わってた………ほら、コレ見て」

航はそう言って、先程から操作していた携帯の画面を此方に向けた。2人して画面を覗き込むと学園のHPが表示されており、スクロールしていくと関係者への事務的な謝罪や引き継ぎ内容などが延々と書かれていた。

【恋華】

「この神城正道かみしろまきみちって人が新しい経営者なの？」

【正義】

「そうだろうな。ほらココ“学園に関する全ての権利を譲り受けた”って書いてあるだろ？…つまり、学園ごとこの人が買い取ったって訳」

ガラーンガラーンガラーン

【恋華】

「いただきます」

4時限目終了を告げる鐘が鳴ると同時に、恋華は素早く定位置に座り弁当を食べ始めた。

【航】

「早っ！？…せめて皆が来るまで待てな」朝抜いてるから無理っ！

「……あ、そう」

恋華の弁当を眺めていると腹の音が鳴ったので、呆れている航を無視して鞆から弁当を取り出した。

【正義】

「いただき」ちょっと待ったぁーっ！」………亜沙美、何故止める？」

包みを解いて蓋を開けようとしたが、廊下側から聞こえてきた亜沙美の声によって遮られた。

美咲桜と芽衣さんも一緒か………今日も賑やかな昼食になりそうだ。

【亜沙美】

「今日こそは当てるっ！」

なるほど、今日も“文字当てクイズ”をやるつもりだったから止めたのか。…どうせ正解者なしで俺の一人勝ちなのに。

【正義】

「お前も懲りないねえ〜？…そこまでして俺にジューズを貢ぎたいのか？」

解説：『文字当てクイズ』とは！……正義が持参する弁当のキャンバス部分（ご飯の上）に描かれている英理朱の愛情（顔文字もアリ）を当てる単純なゲームだ。

見事正解すると皆からジューズを奢って貰え、外すと正解者に奢る羽目になる。

全員が不正解の場合は、美咲桜が発案した特殊ルール 娯楽を提供してくれてるのはヒロ君なんだから当然だよ 発動で正義の一人勝ちとなる。

因みに：最近は大変バリエーションが多すぎて当てるのが不可能に近いので、ルールの緩和が行われた。（というか、不正解つづきの亜沙美がキレたので仕方なく変更した）

まず曜日を月水金と火木に分けて、前者が文章で後者は顔文字が描かれた弁当を作ってもらおう事にした。

文章は日本語で『まー君○○○』の様に書かれており、○○○の部分の意味が似ているか同じなら正解。

顔文字は数が増える一方で正解が不可能に近い為、英理朱に予め50種類を選んでもらいリストを作成、それを皆に配布して予想する方法をとった。

要するに出題者が圧倒的に有利なのは変わらないという事だ。

【亜沙美】

「今日は直球で『好き好き』に賭ける！」

【恋華】

「馬鹿な亜沙美、2日連続で愛情系は今まで一度もないのに。…という訳でアタシは、うっくん『カッコいい』にしとく」

【航】

「うっくん……そろそろ、名前を後ろに持ってきてそっなんだよねえ。……よしっ『GO!GO!』に決めた」

【芽衣】

「ねえ、正義?…コイツ……皆は一体、何の話をしてるん……してるの?」

芽衣さんは美咲桜の隣に腰を降ろすと、顔を伏せて指を弄びながら問いかけてきた。

ん?…仕草や言葉遣いが朝よりも……いや、意識して変えようとしてる最中…か。何故?

【正義】

「芽衣さんは初めてでしたっけ?…これは」

段々と女のコらしくなってきた彼女の扱いに戸惑いながらゲームの内容を説明すると、彼女はボンツと音を発して耳まで真っ赤になっ  
てしまった。



【芽衣】

「ああ愛してるとか…すすす好きとか書いて……る…の?」

“愛してる”とか“好き”なんて単語に反応して赤くなるなんて中学生みたいだ。ハハツ…可愛いなあ、もう。

【美咲桜】

「あ、ああああーっ！?!」私の『ヒロ君が芽衣先輩にデレデレしてたああーっ！?!』

美咲桜の声は校舎中に響き渡るんじゃないかと思うぐらい大きく、叫び終わるや否や、もの凄い勢いで跳び掛かってきた。

【正義】

「ちょ!?!」ガブツ!』痛い痛い痛いっ!?!噛むのはやめいぎやあああーっ!?!」

【亜沙美】

「…英理朱さん、予知能力でもあるのかな?」

【航】

「…いや、多分そこら辺に潜んでるんじゃない?」

【恋華】

「……………“修羅場注意!”って、まさしく今の状況じゃん」

【正義】

「落ち着け!…俺は『みゃーっ!』痛い居たい遺体!…爪はヤヴァいってマジでえーっ!?!」







とりあえず……いつちゃってる美咲桜を連れて逃げる訳にもいかないし、芽衣さんは……無理か。恋華は……アレ？…居ない。消去法で……って亜沙美も居ないの？

【正義】

「航っ！…2人は「七瀬っ！」…何かいっぱいキターーーーッ！  
！」「大人しく捕まりやがれっ！」…無理っ！「追えっ！逃がすな  
あーっ！」…邪魔だあーっ！」

【航】

「二人とも……いつまで隠れてんの？」

【亜沙美】

「うっん、“愛憎紙一重”で良くない？」

【恋華】

「いやいや、“混沌逃走激！”の方がピッタリだっ！」

【芽衣】

「……………大好彼想私」

【航】

「こら、そこ！…勝手にカメラいじって中国映画みたいなタイトル  
つけないようにっ！」

【男子生徒A】

「クソツ！…見失った！…あつちか？」

【男子生徒B】

「いや、まだこの辺に隠れて居る筈だ！…よく捜せっ！」

【正義】

「……………行つたか」

教室から脱出して15分…いろんな事があつた。

まずは人数…教室を出た頃は20人ぐらいしか居なかつたハンターもいつの間にか増え始め、今では100人近くに追われている。（女子も3人ほど居た）

次に武装…何故かハンター全員が不審者撃退用の刺叉を装備していた。（何故100本もあるんだ？）

更にはトラップ：階段や廊下の数カ所にネットが張られて通行できず、逃げ場が大幅に制限されていた。（どこから持ってきたんだ？）最後に追跡方法：一気に追い詰めるのではなく、一定の距離を保って挟み撃ちや不意打ちを効率よく仕掛けながらトラップに追い込んでいく、実に統率の執れた追跡の仕方だった。（誰が指揮してるんだ？）

トリップしてる美咲桜を抱き抱えたまま、その全てを考察しながら逃げるのは本当にキツかった。（今も追われてるが）

普通に追ってくるハンターどもは楽にあしらえるのだが、問題は明日香ちゃんだ。

今までの状況をフローチャートにすると：教室から逃走 追ってくるハンターどもも トラップにハンターを突っ込ませながら逃げるハンター怒る ハンター（怒）は仲間を呼んだ ハンター増える 保健室前を通過 追ってくるハンターども 美男子ホイホイの餌食になる 明日香ちゃん登場 犠牲者を見る 舌打ち 此方に向く 満面の笑み 俺、後ずさる（滝汗） 距離を詰める 俺、逃げる 追ってくる 俺、本気で逃げる 本気で追ってくる しつこい（泣） 疲れてきた 隠れる 今の状況：という訳だ。

### 【正義】

「なんて人だ……いくら俺が美咲桜を抱えてるからって「うふふ……ふふふふふ」……やっぱり不意打ちが問題だったか」

逃げてる途中まで症状が出なかったのが痛かった。LEVEL3だと気づいていれば絶対、教室に置いてきたのに……失敗したなあ。

【正義】

「これからどうしよう……理事長室に行こうにも部屋の前にはハーターがうじゃうじゃ居るし、明日香ちゃ『ぐううう』……ハラ減った」

逃げるのに必死で気づかなかったけど、昼飯も食ってないんだよなあ。俺。あゝム力つくっ！……そもそも、こうなったのも全て俺を呼び出した理事長のせいだっ！……あんな放送さえ流れなければ今頃……ハラ減った」。

【???】

「マサちゃん？……お姉さんが可愛がってあげるから早く出ておいで」

ヒィ！？……この妙に可愛らしい声は間違いない……明日香ちゃんだっ。

【明日香】

「うん、ここら辺だと思ったんだけど……居ないなあ、おや？……あれって……航っちだ！……おい、航っちいいいっ！っ！」

頼む航：俺が生き残る為に捕まってくれ！……お前が捕まれば明日香ちゃんは諦めて部屋に戻る

【航】

「にゃああああーっ！？！？」

【正義】

「逝ったか……これでアイツは選択に出られまい。ざまーみる、俺



を助けなかった罰だ」

昼休みが終わるまで約10分か。本当はこのまま隠れての方が安全なんだろうけど……美咲桜に選択をサボらせる訳にもいかない。……連れ出したのは俺だし、やっぱり教室までは送り届けよう。

隣のソファで横になっていている美咲桜を抱き抱え、足音をさせないように注意しながら扉の前まで歩み寄った。

ガラガラガラ

周囲に人の気配が無いのを確認して芽衣さんの部屋（風紀委員教室）を出た。

【正義】

「誰も居ない………よな？」「うふ……うふふふ」「ハア……とりあえず、コレを恋華達に預けないとな」

行き先は決まった………うん、此処から教室まで走れば一分と掛からないよなあ。………よしっ、行くっ！

走ってる最中に抱き抱えているお姫様（時々、不気味な笑い声を上げる）を落とさないように、抱き抱えている腕に力を籠め教室に向けて駆け出した。

【正義】

「疲れた、ハラ減った、逃げきった」

教室に戻るまでに10人ぐらいの生徒とすれ違いかなり焦ったが、誰も後を追って来なかった。

疑問に思いながらも席に戻ると、航以外のメンバーが楽しそうに談笑しているところだった。

【恋華】

「おかえり〜…って、この娘、まだ帰ってきてないの？」

【正義】

「ああ。…LEVEL3だった「ふふふ…ふふふふふ」…な？」

そう言つと恋華は顔を引きつらせて苦笑した。

【亜沙美】

「LEVEL3って何のこと？」

【芽衣】

「美咲桜が自分の世界に入ってから、戻ってくるまでの時間を計る目安…と聞いているが」

【恋華】

「大体はそんな感じ。…お〜い、美咲桜〜、起きろ〜…ダメだこりゃ」

【正義】  
「いただきます」

【恋華】

「美咲桜はどうするの？…教室？…それとも「えへへへへ…」…  
…保健室の方が良さそうだね。…亜沙美、運ぶからそっち持って」

【亜沙美】

「はいはい、ん〜しょつと！…それじゃあ行ってくるよ」

保健室なら明日香ちゃんが選択の教師に連絡いれるだろうし、起きなくても問題ないだろ……序でに航も居るしな。

【芽衣】

「正義は、何で理事長室に呼ばれ……てたの？」

八ハツ：まだやってたのか。…これだけ必死になって言葉遣いを変えようとしてるって事は、誰かに“言葉遣いが悪い”って指摘されたのかな？

【正義】

「んぐむぐ……ふう……何ででしょうね？」

【芽衣】

「オ……私に訊かれても困る……よ。じゃあ、まだ行ってないんだ？」

【正義】

「ええ。逃げ回るのに必死で、それどころじゃありませんでしたか  
ら」

【芽衣】

「行かないと後で怒られたり」「七瀬は居るかつ?」……………ね?」

声が出た方に視線を向けると、扉にもたれかかって何故か泣いている松原が居た。

松原は周囲を見渡して俺の所在を確認すると、血相を変えて駆け寄ってきた。

そして目の前に来るなり両手で俺の肩を掴み、額が触れ合うくらい顔を近づけてきた。

恐っ! ……顔恐っ! ……近い近い近いっ! ……この人は何で泣いてんのっ?

【松原】

「頼むからっ、頼むからあゝ…俺の進退問題に関わる様な事しないでくれよ、俺には妻と子供がいるんだよっ、一人者じゃないんだよっ!」

進退問題って……………何を言ってるんだこの人は? ……話が全然見えねえよ。

【正義】

「とりあえず今すぐ離れろっ、そして落ち着けっ!」

クツ…コイツ、何て握力してやがるんだ。この俺が引き剥がせないだど? ……これからは認識を改めよう。“松原は危険”だ…と。

【芽衣】  
「ちょ…ちょっと、2人共落ち着こう？」

【松原】  
「うぐぐ…お前は、俺達家族を、路頭に迷わせたのかつ、だから逆らうんだなつ、そうかつ、そうなんだなつ！」

【正義】  
「えーい離せうつとーしいっ！…さっきから息がかかって気持ちわりーんだよつ、このバカ教師！…離さねえーと来週から松原（泣）先生って呼ぶぞコラ！！」

【芽衣】  
「にしる」

【松原】  
「んぐぐ…俺が、そう、呼ばれることで、住宅ローンの支払いと、安定した暮らしが、守れるのなら、構わんっ！…という訳で、大人しく、連行されるっ！！」

【正義】  
「何が“という訳で”だっ！…全部アンタの都合じゃねーかつ！」

【芽衣】  
「いい加減にしろー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」

言い争いを止めて怒鳴り声が聞こえた方を向くと…

【正義・松原】  
「……………」

竹刀を肩に担ぎ感情の読めない顔で此方を見つめる突撃お嬢が居た。

【芽衣】

「二人共そこに座れ」

芽衣さんは低い声でそう言うと、俺達が立っている辺りの床に竹刀の先を向けた。

【松原】

「俺は教師「す・わ・ね」…ヒッ!」

松原の反論は彼女の低い声によって遮られ、悲鳴に近い声を出してその場に座った。

座りやがった……コイツには教師としてのプライドが無いのか?…まあ、あの顔で言われたら仕方無いか。どうやらマジギレしてるみたいだし……俺も座るかな。

反論しても無駄だと悟ったので、胡座を組んで座っていた松原の隣に姿勢を正して座った。

ガランガランガランガラン

正座するのとはほぼ同時に昼休み終了を告げる鐘が鳴り、俺達を取り囲む様に集まっていた野次馬もバラバラと散っていった。

【芽衣】

「お前等はガキかつ!…あんなくだらねえ事で言い争いしやがって。

…どちらかが折れてやれば済むことだろ」

【松原】

「しかし、七瀬が「あ　？」…スミマセン」

コイツ馬鹿だ。黙ってれば直ぐに終わるってのに。

【芽衣】

「何でオレが怒ったか、お前達に分かるか？」

うっん、教室で騒いだら皆に迷惑がかかるから？…それとも、くだらない理由で言い争いしたから？…後は……………何だろ？

【松原】

「お前（風紀委員長）が居る前で暴れたから…じゃないのか？」

“それがあつたか”等と考えていると…

【芽衣】

「碎け散れ」

即答だった。

【松原】

「それは酷くないか？」

“うっん、他に何かあるかなあ”等と考えていると…

【松原】

「それは酷くないか？」

“それはさっきも言っただろっ！”等と考えていると…

【松原】

「分かったっ！…俺が大人げない態度をとったからだろ？」

と自信ありげに言った。

“それもあつたか”等と考えていると…

【芽衣】

「その窓枠に乗って“鳥みたいに空を翔べたら気持ち良いだろうな”って言いながら足を滑らせる」

また即答だった。

【松原】

「ねえ、それ遠回しに死ねって言ってない？」

“このバカは何がしたいんだ”等と考えていると…

【松原】

「はは〜ん、そういう事か〜」

と、ニヤニヤしながら言った。

“あの顔を見るかぎり期待できそつだな”等と考えていると…

【松原】

「バックログを見て確信したね。俺達が言い争いしてる時、2回ほ



ど空気の様な扱いをされたのが悔しかったからだろ」

馬鹿にする様な口調でそう言つと、芽衣さんの肩がピクツと震えた。

あの反応……もしかして凶星？…もしそうだったら笑えるが………  
バックログって何だ？

【芽衣】

「これが惨轍剣だったら痛みを感じることなく逝けるんだが、生憎とそんな物は持って無いんでなあ」

彼女はそう言つなり竹刀を振り上げ薄ら笑いを浮かべた。

あつちやく…あの顔は組手の際、反則無しの際にする顔じゃん。

【松原】

「脅しは止せ、俺は教師だぞ…手を挙げたらどうなるか…」

はあ…この馬鹿。危なくなったら止めるしかないか……なるだろうけど。

【芽衣】

「どつなるんだ？」

【松原】

「泣いて謝る」

【正義】

「弱っ！………そこ普通“そんな事をすれば退学だぞっ！”って怯えながら言っんじゃないかねえーのかよっ？」

【松原】  
「弱くて結構。俺は手を挙げられた位で大事な生徒達を辞めさせたりしない……………よっぽど酷い状態までボコボコにされないかぎり」

【正義】  
「……………一瞬でもアンタを尊敬した俺が馬鹿だったよ」

【松原】  
「いやいやいや、普通は“弱くて結構”の所でグツと来て“辞めさせたりしない”の所で号泣するだろ？…泣かないのはきつと、お前が軽薄だからだ」

【正義】  
「ふざけんなっ！…それ以上ふざけたこと言ったら、“かなり酷い状態”にするぞっ！」

【芽衣】  
「クツ…アハハハツ…………アハハハハハハ！！！」

【松原】  
「なあ七瀬……………何で園田は笑ってるんだ？」

【正義】  
「先生が“先生らしくない”からじゃないですか？」

噴き出した彼女の方に視線を向けると、腹を押さえて苦しそうに笑っていた。

【松原】

「そういえば、何で俺達は教室に居るんだ？」

えーっと……………何でだろ？…何か忘れてる様な気がする。……………まあいいか。

【芽衣】

「ハアハア…くっ…くるし…かった。ん？…2人共どうしたんだ？  
…天井なんて見上げて」

【正義】

「いや、俺達は何で教室に居るのかなと」

【芽衣】

「そういやそうだな。うーん、何でだろうな？…今は授業中なのに  
変だよな」

【松原】

「誰かに何か頼まれた様な気がするんだよなあ」

【芽衣】

「簡単に忘れる位なら、大した事じゃないんじゃないですか？」

【正義】

「あーイライラする。何か甘いモノでも食いたい気分だ」

【松原】

「それじゃあ、カフェテリアにでも行くか？…ケーキぐらいなら奢  
ってやるぞ？」

【正義】

「マジで？……でも、良いの？……給料日前で小遣いが残り少ないんじゃない……」

【松原】

「心配するな。いざとなったら隠し金を使つまでだ」

【正義】

「ゴチになりますっ！」

【松原】

「切り換え早っ！……園田はどうする？」

【芽衣】

「オレも行くよ。……今更、授業なんて受ける気にもなれねえし」

【松原】

「それじゃ行くとしますか」

そう言つて教室を出た松原の後を追つてカフェテリアに向かった。

V I E W C H A N G E

理事長 S I D E

正義達がカフェテリアに向かっている頃……理事長室では一人の少女が腕を組み、落ち着かない様子で室内をウロウロしていた。

【理事長】

「遅いっ！……一体あの人……松原って言ったかしら？……は、いつにな

「だったらお兄様を連れて来るのっ！」

確か、松原（？）って教師が此処を出たのが1時ちょうど。今は1時半……もう30分も経ってるじゃないのっ！

【理事長】

「ま・つ・ば・らあ〜、私とお兄様のご対面わたくし&甘いひとときを遅らせた罪は重いわよ〜？」

こういう時に法律って邪魔なのよね。法律さえ無ければ私が直々に、速やかにっ、確実にっ、息の根を止めて差し上げますのに。

【理事長】

「教え子の一人もロクに連れて来れないようなダメ教師には、やっぱり、お仕置きが必要よね？」

う〜ん…謹慎、減給、解雇、お茶汲み、犬…辺りが妥当かしら？…まあ、一方的に言い渡されても納得いかないでしょうから、ソレは本人を選んでいただきましょう。

【理事長】

「そうと決めた途端、急にやるのが無くなったわね。…はあ…こんなことになるのが解つてたら、もう少しゆっくりお仕事してましたのに。何か暇をつぶせる方法は………そうだっ！…お兄様のこと調べよっつ」

VEI W C H A N G E

E N D

【松原】

「話は変わるけど、何で七瀬は中間悪かったんだ？……いくら補習が無いからって、ブービーは酷すぎるだろ？」

【芽衣】

「寝てたからな、正義。そりゃもうぐっすり」と

【正義】

「……………だそうです」

あれからカフェテリアに着いて各々が適当に注文を取り、飲み食いしながら他愛ない話をしていた。

【松原】

「呆れたヤツだな。あんまり俺達を心配させるな」

【正義】

「俺達って？」

【松原】

「他の先生方だ。室岡先生なんて、お前の答案用紙を見て卒倒してたんだぞ？」

【正義】

「そりゃ驚いたでしょうね。なんせ答案用紙が白紙で、名前の筆跡すら違うんですから。…ていうか、室岡先生が来てたんだ。俺はてっきり明日香ちゃんかと」

だから教室で目覚めたのか。…それにしても、まさか室岡先生が来てたとはねえ。万が一、俺が起きてたとしても、テストには集中で

きなかっただろうな。あの人は面白いからなあ……色々と。

【芽衣】

「なあ、室岡先生って誰だ？」

えっ、マジで知らないの？…俺の中では“担任になって欲しい人”ランキングで独走状態なんだけどなあ。松原には悪いが。

【松原】

「先月の中頃、S体大から来た教育実習生だ。確か、一学期いっぱいまでだったな」

ここまで言えば思い出すだろ。…あの人の自己紹介はインパクトあったし。

【芽衣】

「ん〜？…体育なら知らない筈ねえんだが」

何故だろうっ、悲しくなってきた。…これは思い出して貰うしかないな、うん。

【正義】

「ヒント1…その人は何も無い所ですぐ転けます」

【松原】

「あゝ転ける転ける。…というか滑る」

【芽衣】

「ん〜？…分かん」

思ってたより手強いな。…え〜つと、後は。

【正義】

「ヒント2…公共機関や乗り物が子供料金で利用できます……………多分」

【松原】

「おまつ、それ彼女の前で絶対に言うなよ?…多分、いや絶対に泣くから。……………そりゃ確かに身長は低いけど」

【芽衣】

「身長が低い?…う〜ん……………あ〜っ!…千花ちゃんなっ!…オレ達は名字で呼ばないから分からなかったぜ」

やっと思い出してくれたか。…なんか嬉しいな。

【松原】

「何をニヤニヤしてるんだ、お前は?」

【正義】

「いやさ、芽衣さんが室岡先生を思い出してくれたのが嬉しくて」

【芽衣】

「正義は、あんなチビ助がタイプなのか?……………ショックだ」

彼女はそう言って溜め息を吐くと、大袈裟に肩を落とした。

はて?…何で芽衣さんは落ち込んだんだ?…それにチビ助って。

【松原】



「教師と恋愛するならバレない様にな？」

そう言うと此方に身を乗り出し、ウンウンと頷きながら肩を叩いてきた。

教師と恋愛？……………はあ？…この馬鹿は何を勘違いしてやがる。

俺と室岡先生が？……………あり得ねえ。一体今までの会話のどこに勘違いするような要素があったよ？

【正義】

「松原（泣）先生？…今すぐに“その”ニヤけた面をどうにかしないと、呼び方が酷くなりますよ？」

【松原】

「どうなるんだ？」

【正義】

「松原（故）…になる」

【芽衣】

「いいな、それ。この学園には教師も含めて580人近い人が居るんだ…1人ぐらいゾンビが居てもおかしくないだろ」

【松原（故）】

「いやいや、おかしいからってギャー！ツ！…こんな扱いはイヤだああー！…！」

松原が喋り始めると、彼女はおもむろに松原の頭上を指差した。

すると松原は怪訝な顔をしながらもそちらを向き、“四角い何か”を確認すると頭を抱えて叫びだした。

【正義】

「アレ?…消えてる?…変だなあ?…さっき、松原の頭の上に…  
…疲れてんのかな、俺?」

確かにさっき…松原の頭上に青っぽい、四角いのが見えたと思っただけだ。しかも…

【松原 松原（故）】

…って文字が見えた様な気が。

【芽衣】

「どうしたんだ、正義?…難しい顔して」

考え込んでいると、隣に座る彼女が顔を覗き込んできた。

…指差したってことは、芽衣さんには見えてたってことだよな?…  
…確認しとくか。

【正義】

「芽衣さん…さっき松原の頭上を指しましたよね?…何か見えた  
りしたんですか?」

そう尋ねると彼女は、呆れたような、哀れむような微妙な顔をした。

【芽衣】

「アハハハ…何を言ってるんだお前は?…そんなの…」

彼女は乾いた笑いを浮かべると、呆れたようにそう言った。

あの声から察するに、後に続くのは“見える訳ねえだろ”だよな？  
…という事は、やっぱり疲れてたんだ。

【正義】

「ですよねー…」

と、苦笑しながら言つと。

【芽衣】

「見えたに決まってるだろ」

即答された。

【正義】

「えーっ！？…さも当然のようにつ！？」

マジかよ……あんなのが俺達の頭の上にあつたんだ。…っていうか、  
もしかして見えてなかったのって俺だけ？

【芽衣】

「さっきのアレが、航や恋華が稀に言つてた『粹』だ。…因みに今  
みたいな“ぬるい”状態の時に出てくる……と航からは聞いている」  
聞いているって……芽衣さんも良く解つてないんじゃない？

【正義】

「なるほど。アレが見えてたから航は」

ピンポンパンポーン

『テレレレッツッテッテーン』

ピンポンパンポーン

【正義】

「……………」

何だ今の放送は…RPGでキャラのレベルが上がった時に流れそうな音だったか

【松原（故）】

「マサヨシはレベルが上がった！…何かもう色々上がった！…『枠』が見える様になった！！！」

【正義】

「うわっビックリしたっ!？」

“どっかで聴いた事あるような”等と考えていると、先程までテールに突っ伏して“の”の字を書いていた松原がいきなり起き上がって大声で言った。

あーぶない危ない。危うく椅子ごと後ろに倒れるところだった。はあ…それにしてもワケがわからん。

【松原（故）】

「まあ軽い冗談だ。大体レベルなんてあるわけ無いだろ?…恋愛ADVなんだから」

【正義】

「冗談だあ？…じゃあ、さっきの放送は何だっ、それに今お前の頭の上にある『梓』はどう説明すんだよっ？」

【芽衣】

「落ち着けてっ！…このゾンビを殺りたい気持ちは分かるっ、だからっ、とりあえずっ、サポーターを、仕舞ってっ、くれっ…」

【松原（故）】

「コレか？…コレは仕様だ。ノベルタイプ以外の、例えば本作みたいな話では常識だぞ？…まあ俺達にはどうする事もできない“世界の謎”だとも思っておけばいい」

【正義】

「何が“思っておけばいい”だっ！…無駄にカツコつけやがってっ、まだ放送の件を答えてねえだろっ！…」

【芽衣】

「ぐう…何て力だっ！…引き摺られていくっ」

【松原（故）】

「ガラーンガラーンガラーン…あっ！…まずい、ろくじげんめはさんねんのじゅぎょうがあるんだった。というわけで…さいならーっ！（棒読み 逃走）」

【正義】

「ハア…ハア…何で今日に限ってこんな…」

疲れることばかりが起こるんだろうな。しかし、一体あの放送は何

だっただんたろうな？

【芽衣】

「ハアハアハアハア…ハア…」…とりあえずコレでも飲んで落ち着け」

ハツとして声がした方に視線を移すと、彼女はテーブルに突っ伏しカップを指差していた。

ん？…芽衣さんは何であんなにバタバタなんだ？…まあいいか。

ガランガランガラン

席に着いて冷めきつたコーヒーを飲んでいると5時限目終了を告げる鐘が鳴り、数人の生徒が店内に入ってきた。

【芽衣】

「6時限目はどうするかなあ…」…と

彼女はそう言う顔で顔を上げ、大きく伸びをした。

【正義】

「出た方が良いんじゃないですか？…まあ俺は選択だから問題ないですけど、2年は違うんですよね？」

【芽衣】

「ああ。2年は水曜だ。確か次は…体育だな」

【正義】

「行かないと、室岡先生が捜しに来るんじゃないですか？…転け

て癒だらけになりながら……」

【芽衣】

「ハハッ……それは無いと思うぞ。1年は千花ちゃんに教えさせてるみたいだが、2・3年は山岸が教えて千花ちゃんは補助だからな」

そう言うのとテーブルに肘を突いて顎を載せ、大きく息を吐いた。

それは関係ないんじゃないか？……まあ俺がどうこう言うことじゃないか。……ん〜テイラミスも美味いっ。

【芽衣】

「マジでどうするかなあ。体育は今のところ皆勤だしなあ〜」

そう言うのとニヤニヤしながら視線を外した。

【正義】

「先に言っておきますが、俺は着いていきませんか？……漸く静かになっただけだし……」

【芽衣】

「そいつは残念だ。せっかくコ・コ、奢ってやるうと思ったのになあ〜……えーっと、どれどれ……13650円か。という事は1人……」

彼女はニヤニヤしながらテーブルを指差し、その手で伝票を掴むとそう言っただけでヒラヒラと振った。

あれ？……何で伝票があるんだ。奢るって言った松原がさっき帰ったんだから、伝票も当然持って………いってないっ！？……あの野郎っ、食い逃げかよっ！

【芽衣】

「さて、割り勘だとあゝ…コ・コ・コの、支払いは幾らかなあゝ?…」  
6825円か…持ち合わせは樋口さんが1人と小銭が330円だから…足りない。こんな事になるならバイト代…見栄を張らずに受け取っておけば

ガランガランガランガラン

【芽衣】

「さてと、んじゃオレは行くとするかあ!…おっと、そういえば割り勘だったなあゝ?」

彼女は伝票を持って席を立つと、そう言って口元をつり上げた。

俺の経済状況を知ってるクセに。…あゝあ、こんな事ならバイト始めた理由を伏せておけば良かった。この人にだけは借りを作りたくなかったのに。

【正義】

「やだな、冗談に決まってるじゃないですか、行くに決まっています」

【芽衣】

「そうなのか?…その割には顔が引きつってるが…」

そう言ってブレザーの内ポケットからブランド物の長財布を取り出すと、財布で頬をペチペチと叩いてきた。



たかが1500円足りないだけでこの仕打ちとは…… お金って大事だよな、うん。

【正義】

「いえいえ、そのようなこと」「こらあゝ!」……………室岡先生」

声が出た方に視線を向けると、緑色のジャージに着られている(間違いではない)小さな女のこ(140cmぐらい)が此方に向かっ  
てきていた。

…あんなに慌ててると転け

【室岡】

「うぎゅわあゝゝゝゝゝゝゝゝ!?!」

いつものように何も無い所で前のめりに倒れると、勢い良く此方に向かって滑ってきた。

【室岡】

「ひゃわ!?…いたたたた………おや?」

俺の足にぶつかって漸く止まると、ゆっくりと体を起こし両手で鼻を押さえて此方を向いた。

あゝあ、鼻の頭が赤くなってる。…転けた時に床で打ったのか。

【室岡】

「こんにちは、七瀬君。…あと園田さんも」

彼女は立ち上がってジャージを叩いて埃を落とすと、そう言って二

ツコリと笑った。

あ ああゝ癒されるうゝゝ…俺って、もしかして幼女趣味でもあるのかなあ？

【正義】

「こんにちは、先生。…とりあえず抱っこしても良いですか？」

【室岡】

「まあダメに決まってるでしょ？…いつも言ってると思うけど、自分の彼女以外にそんなこと言っちゃダメ！…いつかセクハラで訴えられちゃうよ？」

彼女は頬を膨らませてそう言つと、腕を顔の前で交差させ“ダメ”のポーズをとつた。

この人は…自分がその原因を作ってる事に気づいてんのかなあ？

【芽衣】

「チビ助っ！…お前はオレを呼びに来たんじゃねえのかよっ？」

芽衣さんはいきなり怒鳴り声を上げると、俺と先生の間に入って入ってきた。

芽衣さん…怒ってるのか？…話に交ぜなかったのは悪かったと思っけど、あそこまで怒るか、普通？

【室岡】

「そっただけど…なんで怒ってるの？」

【芽衣】

「そっ、そんなのはどうでもいいんだよっ!…ほらっ、早く行こうぜっ!」

芽衣さんはそっぽを向いて矢継ぎ早にそう言つと、カウンターの方向へと歩いていった。

【正義】

「一体どうしたんでしょね、彼女?」

【室岡】

「顔が赤くなつてたし…トイレでも我慢してたんだよ、きつと!」

【正義】

「それでイライラしてたんですね。納得です」

【芽衣】

「2人共っ、早く来ないと置いてくぞっ!」

気がつくとも芽衣さんは会計を終えており、そう言つてカウンターの横をすり抜け出口の方へと姿を消した。

【室岡】

「あっ!…待ちなさ〜い、先生を置いてくなく〜っ!」

彼女はそう言つと出口の方へと駆け出した。

【正義】

「やれやれ、先ほど走つて転けたばかりだというのに…危なっかしい人だ」

“ 転けないといいが ” と思いつつ彼女達の後を追った。

VIEW CHANGE

理事長SIDE

正義達が体育館に向かっていている頃……理事長室では先程の少女が座り心地の良さそうな椅子に座り、目の前の机の上に置かれたパソコンのモニターを険しい顔で見つめていた。

【理事長】

「なんてことなの……財閥の跡取りが2人居るのはお祖父様から聞いてたけど、まさか妹が同じ年で、しかもお兄様と同じ学校に通ってて、ましてや身辺調査の紙の“ 学園内で1番仲の良い生徒は？ ” の欄に、お互いの名前を書き合うほど近づいてるなんて……完全に予想外の展開だわ。……それも最悪の……ね」

何で教えてくれなかったの、お祖父様？……私に何をしろと？……私はまだ、お兄様を傍で見たいだけなのに。……それだけの為に此処まで来たのに。これでは……これではまるで私に、『自分に嘘をつく必要は無い』と言っている様なモノじゃないっ！

【理事長】

「そんな身勝手なことをして良い筈がない。話せる訳がない。赦してくれる訳……ない。……桐原も……私達も……望んじゃ……いけない……っ」

あ……れ……おかしいな？……日本に来る前から分かったことなのに。私……泣いてる。それに……どうしてこんなにも胸が痛いのか？……苦しいの？

【理事長】

「そうよ……そもそも、あの娘が此処に居るのがいけないんだっ、あの娘さえ居なければ普通に学園生活を送れる筈だったのにつ、こんなつ、こんなこと考えずに済んだのにつ！」

……あの娘を恨むのは筋違いだってことは分かつてる。あの娘自身に罪は無い。何も悪い事はしていない。……でもね。

【理事長】

「貴女が此処に居るだけで私の心は掻き乱される。……否応なしに“罪”を突き付けられる。……お兄様の傍に居るといふ事実が……私が10年もの間色々な事に耐えて、死に物狂いで努力して、漸く……漸く叶えようとした願い（お兄様と過ごす平穏な学園生活）を粉々に打ち砕いたの。……だから私は貴女を無条件で憎むし、全力で嫌うわ。……悪く思わないでね、桐原さん」

……しかし、お兄様と友人関係にあるという事は、彼女は桐原の“罪”を知らないのかしら？……それとも、『お兄様』を知らないから？……もしくはどちらも知らないという事も考えられるわね。

【理事長】

「“両方を知らずして今日を生きてる”としたら許せない……許せないけど一番望ましい……かな。それでも嫌うけど」

どちらか……もしくは両方を知ってるなら何か思惑があつてのことだと思つし、そんな人をお兄様の傍に置いてはおけない。

【理事長】

「せめて、彼女が裏表の無い誠実な人であることを祈ろう……私に出来る事は他に無いのだから……臆病な私には」

【正義】

「 という事をウチの担任が言ってたんですが、本当なんですか？ 」

あれから体育館に着くと既に授業は始まっており、芽衣さんと先生はコートの方に駆けて行った。

【室岡】

「 本当だよ。テストの時、私てつきり終わったから寝てたんだと思つたのに……採点したら白紙なんだもん。…見た途端に全身の力が抜けちゃったよ 」

それから隅っこの方に座ってバスケの試合を眺めていると、手持ち無沙汰になったのか室岡先生が隣に座ってきた。

【正義】

「 本当だったんですね。すみません、心配かけて…期末は頑張りますから 」

そして今は視線をコートに向けたまま、隣に座る彼女と他愛ない話をしている最中だ。

【室岡】

「 と、真面目な事を言いつつも手をわきわきさせてるのは何故？ 」

【正義】

「先生が悪いんですよ?…本当は身長1「うわーわーわーっ!」しかないクセに、見栄を張るから苛めたくなんですよ?」

【室岡】

「ハアハア…ハア…乙女の身体的特徴を声に出すのはイケない事だつて前に教えたでしょ?」

【正義】

「それって胸が「てやっ!」ぶふっ!?...頭突きはマジ勘弁」

【室岡】

「全部っ!...胸も腰もお尻も身長も体重も髪型もっ!...ハアハアハア…分かったっ?」

【正義】

「えーっと…6回かな?...後、最後のは別に言っても良いかと」

【室岡】

「頼むからちゃんと聞いてっば。このままじゃ教師としての威厳が、プライドが」

【正義】

「さすが芽衣さん…ダブルクラッチとはね」

ドリブルしながら敵ゴール下へ切り込んだ彼女は、2人のディフェンスを巧く交わしてシュートを決めていた。

【室岡】

「また聞いてないし。はあ…こんないい加減な人に大事な妹のこと頼もつとした私って一体…」

妹？…へえ、先生に妹なんていたんだ。一体どんな娘なんだろ？…  
きつと先生に似て可愛いんだらうな……色々。

【室岡】

「ねえ、今なにか失礼なこと考えなかった？」

【正義】

「いや、妹さんも先生に似て可愛いんだらうな、と。…それよりも  
説明を要求します」

【室岡】

「何で妹の話になった途端、そんな真剣な顔するの？…正座までし  
て」

【正義】

「それはそうですよ。…今から『大事な』妹さんの話をするんです  
よね？…なら当然聞く側も真剣にならないと」

【室岡】

「な、なんか釈然としないけど、真剣に聞くならいつか。…2学期か  
らなんだけど、妹が鳴響に編入してくるらしいの。…あの娘は都会  
に憧れてたから」

【正義】

「らしい？…まだ本決まりじゃないんですか？」

【室岡】

「いや、通うことは確定なんだけど、住居とかで揉めててね…ウチ  
の両親って心配症だから」



そりゃそうだ…何も無い所で転けまくる自分達の子供を何年も見てきたら、嫌でも心配症になるだろ。…妹さんも先生みたいな娘かもしれないしな。…ん？…マズい…めっちゃ見てる…何を考えてるのが見透かされたみたいだな。

【正義】

「じゅ、住居とかで揉めてるって、セキュリティの問題ですか？…なら先生の部屋は？…2人一緒ならご両親も安心するんじゃない？」

【室岡】

「うん。確かにそうなんだけど…あの娘と一緒に暮らすのはちょっと…ね」

ついさっき大事な妹だって言ったクセに、何を躊躇してるんだこの人は？

【正義】

「要領を得ませんね。何か問題でもあるんですか？」

【室岡】

「じゃあ訊くけど…『私よりも』すつつつつつつくドジで、そのクセ潔癖症で、掃除とかさせたら色々な物を壊したり、家具の配置まで勝手に替えちゃうような妹がいたら…一緒に住める？…住もうと思える？」

この人よりドジで潔癖症？…ちょっと見てみたい気もする。完全に怖いもの見たさだけだ。

【正義】

「今までに、壊されて一番困った物って何です？」

そう言っつて隣に視線を移すと彼女は遠い目をしていた。

「何か疲れきってるな。よっぽど大事な物でも壊されたのか？…」  
愁傷様。

【室岡】

「『8月に』……………エアコン」

彼女は“8月”の部分強調して言うと、膝に顔を埋めて大きな溜め息を吐いた。

【正義】

「エアコン！？…どうやったら壊せるんですか、そんな物…」

【室岡】

「分解」

掃除だよなっ、部屋の掃除をしてたんだよなっ？…つまりエアコンの清掃をしようとしたのか？…普通、素人は本体カバーを拭いてフィルターのエを落とす程度だろ。…冒険し過ぎだ。

【正義】

「何でまた分解なんて…」

【室岡】

「『風が弱かったから』だってさ。…もう笑うしかないでしょ？」

【正義】

「あははははは…」

風が弱いつて理由で分解するのかよ。…そりゃ先生も嫌がる訳だ。

【室岡】

「…という訳で部屋探しを手伝って欲しいんだけど、ダメ？」

【正義】

「そんな話を聞かされたら断れませんよ。…で、条件は？」

【室岡】

「此処から徒歩40分以内で、セキュリティ万全で、見晴らしが良くて、近くに本屋かコンビニがあって、病院も近くて、人通りが多い道に面した所なら『父さん、許しちゃう』って言ってた」

をいをい…立地条件だけでこんなにあるのかよ。…うん、徒歩40分以内となると、3地区の北側に絞られるから…いや、2地区だな。ウチの近所に賃貸マンションなんて無い…という事は鳴北か風波で探さないか。

【正義】

「箱の中身は？」

【室岡】

「最低でも2LDKにシステムキッチン完備…だって。…因みにコレは本人の希望ね」

一人暮らしにしては広すぎないか？…俺ならピアノ含めて2DKあれば充分だぞ。…でもまあ女のゴだし、それぐらいの広さはあった方が良くもな…友達とか呼べるし。システムキッチンは…まあ、

何とかなるだろ。

【正義】

「うーん、家賃次第では何とかなるかな。…上限とがあります?」

確か…風波の商店街の近くに、オートロックの高層マンションがあったよな?…あそこなら、近くに個人病院が幾つかあるし、少し歩けば本屋もある、大通りに面してるから人通りも多い。徒歩40分は………どうだろう?」

【室岡】

「15万が上限だって。…どうかな、なんとかかなりそう?」

15万だとあそこは無理っぱいな。…あのセキュリティで新築だし。

【正義】

「とりあえず友達に訊いてみます。…俺よりも詳しいヤツがいます…って先生?…あそこの女子が呼んでますよ?」

視線の先では試合を終えた生徒達が幾つかのグループに別れ談笑しており、女子3人のグループのうち1人が此方に向けて手招きしていた。

【室岡】

「ホントだ。…何だろう?…とりあえず行ってくるね」

彼女はそう言って立ち上がると、手招きしている女子の方へと歩いていった。

部屋探しの件はこっちで進めとくか…先生も色々忙しいだろうし。

【正義】

「試合も何かグダグダだし、教室に戻って寝る……のは無理か」

手持ち無沙汰になり何となく体育館の時計に視線を向けると、時計の針は2時50分を指していた。

【正義】

「先生はもう戻って来ないだろうし、とりあえず教室に戻るとするか」

“きつと皆驚くだろうな。金曜の帰りのHRに俺が居るんだから”  
等と思いつつその場を後にした。

【正義】

「ここもハズレ。ハア〜…予算がもう少しあればな。15万以内だと、徒歩40分以内って条件がクリア出来ないんだよなあ」

教室に戻って携帯で不動産情報を検索していると、選択授業を終えたクラスメートがゾロゾロと教室に戻って来た。

【恋華】

「やっと今週のお勤めも終わった〜ってえええええーっ!?!?!?!マ  
ー君が居るっ!」

恋華は教室に入ってくるなり此方を指差し、大声で言った。

【正義】

「俺は天然記念物か?」

そう返すと恋華は此方に駆け寄ってきた。

【恋華】

「だって一学期初じゃない?!?!金曜日の帰りのHRに出るの!」

恋華は此方にくるなり怪訝な顔をして、そう言いながら身体中を触ってきた。

【正義】

「何してんの?」

【恋華】

「いや、本物かな〜、と」

【正義】

「帰る」

【恋華】

「ウソウソ、冗談だったっ！…でもどうしたの？…いつもならカフェテリアに居る時間なのに」

うっ…何て説明しよう。まさかお金が無いなんて言えないし。もし教室でそんな事を言った日には、皆から大爆笑されるに違いない。  
…何か、何かない

【松原】

「席に着けーっ！…いや、頼むから着いてくれーっ！」

“ ナイス松原！” と思いつつ声のした方に視線を向けると、何故か顔中を引っ掻き傷だらけにした彼が教壇に立っていた。

【クラス全員】

「……………ぷっ」

【松原】

「誰だっ、今俺の心を抉ったヤツはっ！」

右の頬…傷が巧い具合に某百貨店のマークみたいになってる。…あれはウケる…ぷっ。

【恋華】

「マー君でしょ、今の？」

航の席に座っていた恋華は此方を振り向くと、口元を手で押さえ小声で言ってきた。

【正義】

「いやいや、どう考えても俺じゃないでしょ？…寧ろお前じゃね？」

顔を寄せて小声で返すと、恋華はブンブンと首を横に振った。

【松原】

「次に笑ったらソイツ数学1な。…それでもいい」「ぷっ」…だれえどうああああーっ！」

【恋華】

「ねえ、マー君。…今の声って廊下から聞こえなかった？」

【正義】

「ああ。くぐもった様な声だったし、多分そうだよ」

【松原】

「チッ！…影でコソコソと男」「ちよっと待ったーっ！」…お前かあああーっ！」

松原の“男らしく無い”を先読みしたのか、声と同時に扉が勢い良く開き航が飛び込んできた。

【航】

「あつ……………はいるくみをまちがえたみたいだ。…という訳で「ちよっと待とうか？」…………ちくしょーっ、体が勝手にっ！」

【恋華】



「ハア〜…別れようかな〜、何であんなバカを好きになっちゃったんだろ？」

辛うじて聞き取れるぐらい小さな声でそう言つと、彼女は大袈裟に肩を竦めた。

とか言いつつも顔がニヤけてますよ〜、恋華さん？…見せつけてくれちゃって。

【松原】

「とりあえずお前は数学1な。「えーっ！」…よし、全員揃つて…  
…る？…奇跡だ。特に連絡事項は無いから、七瀬以外は帰つていいぞ〜」

は？…何で俺だけ駄目なんだ？…意味が分からん。

【恋華】

「何かしたの、マー君？」

【正義】

「いや、全く心当たり無いな。…どちらかと言えば、された方だし」

食い逃げを…な。あ〜思い出したらムカついてきた。…アイツのせいで芽衣さんに借りができたんだった。

【航】

「あり得ない。…俺の通知表に1なんて数字……あり得ない」

そう言いながら戻つて来た航はガックシと肩を落とす、口からは白い煙の様なモノを吐き出している様に見えた。

【正義】

「自業自得じゃねえか。序でに言わせてもらつと、『お前があり得ない』」

【恋華】

「ホントだよ馬鹿つ。『アタシから』の電話に出ないばかりか、選択授業までサボっちゃってさ。…『マジあり得ない』」

へえ〜珍しいことも…って、今思えばコイツ、昼休み明日香ちゃんに拉致られてたんだよなあ〜…どうでもいいからすっかり忘れてた。

【航】

「俺があり得ないって何さっ?…それとサボったんじゃないっ、拉致されて出られなかったんだっ!」

あゝあ、言っちゃった…何でこの男は自分から殺られる様なコトを言つかね。…ドM?

【恋華】

「拉致されてた?…航…アンタ、もしかして今まで『あの女』と一緒だったの?」

【航】

「うっ…いや、そんなことは「ちょっと面貸せや?」……………ワカリマシタ」

恋華はドスの利いた声でそう言って、震える航を引き摺り教室を出ていった。

【松原】

「漸く終わったか」

背後からの声に振り返ると、ついさっき教室を出ていった筈の松原がいた。

最近こういう事が多いな。…気づけなかったってことは、注意力が散漫になってきてる証拠…気をつけないとな。

【正義】

「先生つて…実は忍者だったりする？」

【松原】

「そういってお前は鳥頭だったりするのか？」

松原は呆れた様にそう言うと、大袈裟に肩を竦め溜め息を吐いた。

【正義】

「そうかそうか、アンタはわざわざ、喧嘩売る為に俺を残させたんだ？…今サポーター着けるから、ちょっと待ってるよ？」

【松原】

「じよ、冗談に決まってるじゃないか…っつて、こんな事してる場合じゃなかった！…ほらっ、行くぞっ！」

そう言うと俺の腕を掴んで立たせ、引き摺る様にして歩き出した。

話が見えない。コイツは何をしてるんだ？…一体どこに連れて行かれるんだ？

【正義】

「なあ、どこに向かっているんだ？…職員室は通り過ぎてるぞ」

あれからお互いに無言のまま一階まで降り、職員室を通り過ぎた所で尋ねた。

【松原】

「もうすぐだ」

松原は此方を振り向かず、前を向いたままそう言った。

【正義】

「もうすぐ？…この先って文化系の部室しか無い「着いたぞ」……  
…へ？」

松原はそう言って立ち止まると、漸く腕を解放した。

【正義】

「ここって…理事長室じゃん。何でまた…」

漸く解放された腕を擦りながら隣に立つと、豪華な装飾が施された真っ黒な扉の前だった。

【松原】  
「お前はやっぱり鳥頭だよ。…2時間前のことを綺麗さっぱり忘れてるんだからな」

松原はそう言って苦笑すると、目の前の扉をコンコンと叩いた。

2時間前?…昼休みぐらいか。昼休みは確か…校内を駆け回って、飯食って…終わりだよな?…別に何も忘れてないじゃん。

【松原】  
「理事長、松原です。…七瀬君をお連れしました」

へえ…結構まともな対応をするな。…いつもこうだったら疲れなくていいんだが。

【理事長?】  
「ご苦労さまでした。…では、彼を中へお通ししたら、貴方は業務に戻られて結構ですよ」

扉の向こうから聞こえてきた理事長と思われる女性の声は、今までに聞いたことの無いぐらい、濁りの無いハッキリとした透明感のある声だった。

綺麗な声だったなあ。いつまでも耳に残る様な…って、今の女の声だったな?…という事は、航が言った後任の理事長…か。一体俺に何の用だろう?…最近は何事もないし、咎められる様な事は

【松原】

「ほらっ、考え事してないで早く入れ。…お前が入ってくれないと俺が戻れないだろ…」

ハツとして声のした方に焦点を合わすと、松原は開いた扉を背に此方を見呆れた様な顔をしていた。

考えてても始まらない…か。ここに本人が居るんだ、話してくれるだろう。

【正義】

「……………失礼します」

ボタン

中に入るとすぐに背後から扉が閉まる音が聞こえてきた。

さてと、同い年の理事長さんはどこかな…と。……………何で部屋の中で帽子なんて被ってるんだ？…それにブレザーの色も赤だし。謎だ。

【理事長】

「どうぞ、お掛けになって下さい」

そう言った彼女は来客用と思われるソファアに座っており、対面にあるソファアを手で指しながら綺麗な笑みを浮かべていた。

【正義】

「では、失礼して」

軽く会釈をしてからそう言い、彼女の対面にあるソファアに腰を降

ろした。

ハア、綺麗な人だなあ。

…皆みたいな子供っぽさが全く感じられないし、スタイルも良い。  
…あの目線の高さだと身長は美咲桜と殆ど変わらないだろうし、胸は芽衣さんより大きく見える。…そして何よりも目を惹くのが、あの透き通った蒼色の瞳。…凄く綺麗なんだけど、どこかで見たような懐かしい感じがする。…俺みたいに遺伝なのかな？…見た感じ外人寄りの顔だけど、どうなんだろう？

【理事長】

「私の顔に何かついてますか、おにっ……七瀬様？」

そう言った彼女の顔は先程までの綺麗な笑顔ではなく、引きつった笑顔に変わっていた。

今なんて言おうとしたんだろう？…おにっとか言ってたけど。  
…それに何で様付けなんだ？…向こうは理事長で俺は生徒なのに…  
…可笑しな人だ。

【正義】

「いえ、あまりにもお綺麗なので、つい見とれてしまって…」

照れ隠しに鼻の頭を指で掻きながらそう返すと、彼女の顔が一瞬で真っ赤になった。

【理事長】

「そそそっ、そんなことはありませんわっ。わっ、私みたいなそこから辺にっじゃっじゃ居るピーポー顔が綺麗などと…」

彼女は両手をわたたと振りながら矢継ぎ早にそう言った。

ピーポー顔って何？…発音から察するに、ピールと言った様に聞こえたが。…だとすると、つまり“平均的な顔”と言いたかった訳か。…それはいくらなんでも謙遜し過ぎでしょ。

【理事長】

「あっ、あのっ！…日本の殿方はその…さっきみたいなことを…ですね、軽々しく、口にするものなのでしょうか？」

【正義】

「他の方々がどうかは存じませんが、少なくとも私は、『軽々しく』口にしたつもりはありませんよ？…」

軽々しくの部分強調して言っていると、彼女は素早い動きでテーブルの上に置かれていたティーカップを手に取った。

【理事長】

「んっんっんっ…ふう…では、どの様なおつもりでおっしゃられたのですか？」

彼女はカップに入っていた琥珀色の紅茶を一気に飲み干すと、カップをテーブルに戻しながらそう言った。

本当のことを言ってもいいのかな？…言っても良いけど、さっきみたくテンパって会話が進まなくなったら困るし……避けるべきだな。

【正義】

「まあ、そんなことはどうでも良いではありませんか？…世間話をする為に、私を呼んだ訳では無いのでしょうか、理事長さん？」



苦笑しながらそう言うと、急に彼女の顔から赤みが引き視線が鋭く  
なった。

ん？…俺、今なにか気に障る様なこと言ったか？…一体なにがいけ  
なかつたんだろう？

【理事長】

「今あゝ…私のことを役職で呼びやがりませんでしたか？」

彼女は肩を小刻みに震わせながら妙に明るい声で問いかけてきた。

何だか知らないけど…お怒りになられてる？…役職？…理事長って  
呼んだのが原因…なのか？…何なんだ一体。

【正義】

「あの、ですね？…役職で呼んだも何も、まだ貴女様のお名前を存  
じ上げ「瑞姫」……え？」

彼女はそう呟いて立ち上がると、帽子に手をかけ…

【理事長】

「神城瑞姫ですわ。七瀬様」

そう言って帽子を後方に放り投げ、ニッコリと笑った。

神城瑞姫 《かみしろみずき》生徒であり理事長 A型 170  
cm Eカップ 長身のグラビア顔負けの体型。髪は腰まである長  
さの金髪をツインテールにしている。眼は切れ長で瞳は薄い蒼色を

しており、鼻も若干高くフランス人形の様な印象を受ける顔だち。鳴響学園の現経営者である神城正道の孫娘。ある条件下以外で話す相手によって態度や言葉遣いを変える【高飛車モード】搭載。( ) ほぼ発動状態なので梓表記無し) 一人称は【私<sup>わたくし</sup> ワタシ】

【正義】

「……………」

この顔立ちであの肌の白さ、しかも金髪かよ…ますます外国人にしか見えないぞ。でも名前が名前だし、ハーフなのか？……………訊きたい事がありすぎて困るな。

【正義】

「あの、幾つか伺っても「ふふふ」……………どうかされましたか？」

彼女はポケットからハンカチを取り出し口元を押さえ、クスクスと笑いながら腰を降ろした。

【瑞姫】

「ふふっ…普段通りの喋り方で結構ですよ？…来週からはクラスメートになるのですから…ね？」

彼女はそう言って片目を瞑った。

は？…クラスメート？…確かに同い年だけど…っていうか、何でウチのクラス？

【正義】

「分かったよ、神城さ」瑞姫っ！「……………いや、理事長でもあるん

だし、やっぱり神城「み・ず・きっ！！」……………神「みいゝ  
ずうゝきいゝっ！！！」……………呼ばないとダメ？」

問いかけた彼女は明らかに不機嫌そうな顔をして、物凄い勢いで首  
を縦に振っていた。

何で彼女はたかが呼び方にこんな拘るんだ？…っというか、ついで  
つき知り合っただばかりでもう呼び捨てかよ。…理事長を呼び捨てに  
するのは気が引けるが…仕方ない…か。

【正義】

「……………瑞姫」

【瑞姫】

「正義様」

諦めて言われた通りにしてやると、彼女は満面の笑みを浮かべて嬉  
しそうに俺の名を呼んだ。

おいおい、何で俺まで名前呼びに変わってるんだ？…しかも様付け  
のまま。

【正義】

「なあ、瑞姫…様付けで呼ぶのは止してくれないか？」

【瑞姫】

「や、ですわ」

彼女はそう言つと両目を瞑り小さく舌を出した。

可愛く言って押し通すつもりなんだろうけど……ここで譲る訳には  
いかないんだよな。もしここで様付けを認めたら……恐ろしい。

【正義】

「まさかとは思っけど……教室でも？」

【瑞姫】

「それが何か？」

彼女は“そんなの当たり前ですわ”と言わんばかりの顔をしてそう  
言った。

マジですか。怒り狂うアイツが容易に想像できるのですが……いや、  
待てよ？…逆にここまで徹底してるってことは、幼い頃からそつい  
う教育を受けてきた可能性が高いな。もしそうだとすれば皆のこと  
も様付けで呼ぶだろうし、気にすること無い…のか？

【正義】

「分かった、好きに呼ぶと良い…」

【瑞姫】

「では、正義様で…」

【正義】

「で、だ…話は変わるけど、俺を此処に呼んだ理由は？」

【瑞姫】

「何だと思います？」

【正義】

「いや、訊いてるのはこっちなんだけど？」

【瑞姫】

「ただ正解を当てるだけじゃヤル気が出ませんか？…むう…  
そうだった！…もし正解できたら、コレを進呈しましょう！」

スカートのポケットからカードケースの様な物を取り出し、中から一枚のカードを抜くとテーブルの上に置いた。

人の話を聞けよ…って、アレはまさかっ！？

【正義】

「（ゴクリ）…マジでっ？…当てたら貰っても良いのっ？…そんな高価な物…」

あの神々しい輝き（実際は白地に緑のラインが入ったカード）は間違いない…提示するだけで毎日一回、ケーキセットがタダで食べられ、激レアちーずけーきの予約までも可能になるという、カフェテリアのプラチナカードだ。ヤバイ…超欲しいんですケド。

【瑞姫】

「ええ、差し上げます」

【正義】

「まず、ゲーム前に確認しときたいことがあるんだけど…」

【瑞姫】

「確認？」

【正義】

「あんな高価な物を賭ける位だから、ルールは当然あるんだろ？…質問や回答する数に制限を設けないといつか正解が出るし、面白くないからな。…まあ、俺は無くても全然OKだけど」

現時点ではまだ、神城瑞姫という人物が全く把握できてないから、確実に当てる為には…10…いや、5回は欲しいところだな。

【瑞姫】

「ええまあ。本当は質問、回答ともに3回…と言うつもりでしたが、それではあまりにもそちらが不利ですし…5回…ということにしましょう。後は…まだ此方に少しアドバンテージがありますので、質問の内容に制限は設けません。『その代わり』、此方はイエスカノーの2択で答えることにします。…こんなところで如何でしょう？」

彼女は髪の毛の先を指で弄びながらそう言って微笑んだ。

瑞姫のヤツ、このゲームの本質がよく解ってやがる…というか、かなり慣れてるな。

内容の制限は敢えて口に出さなかったのに、それをさも当然の様に交換条件で使ってきやがった。

しかも先程の交換条件…表向きは質問の限定を解除してイエス・ノー形式を持ち出すことで、ゲームバランスを調整しているように見える。

しかしその裏…あちらさんは回答を2択にすることで情報を引き出されるのを防ぎつつ、リスクを最小限に抑える事に成功している。

その結果…此方は正解を導き出す為の情報不足してロクな推理も出来ず、正解率が大幅に下がる。

つまり本質的には…イエス・ノー形式に代えてきた時点で“此方が推理して正解を言い当てるゲーム”から“核心をぶつけて相手の変化を見破るゲーム”になっていた訳だ。

瑞姫のヤツ…余程ポーカーフェイスに自信があるのか？…それとも俺が推理する方が得意だと詠んでの判断なのか？…どちらにせよ、雲行きが怪しくなってきたのは確かだな。

さつきはプラチナカードに目が眩んだが、そもそも初対面の人間にあんな高価な物を譲る理由が無い。

それにここまでの話の流れも変だ。…普通なら俺がこの部屋に入った時点で自己紹介、又は呼び出した理由を話す筈。

なのに自己紹介もなし崩しだったし、瑞姫はまだ自分の事を名前しか明かしていない。

それは何故か…このゲームをする際、あまり自分の事をべらべら喋ると不利になるから。

そう考えると全て辻褃が合う。…初めからこのゲームをする気だったと思えない…何故かは知らないが。

以上の観点から考えても…餌を取られて“はい、サヨナラ”とはいかない筈だ。…何か裏がある筈、当てられなかった時のペナルティか何か

【瑞姫】

「先程から、そんな真剣な顔をして、何をお考えになっているのですか？」

ハツとして目の焦点を合わせると、彼女の心配そうな顔が視界を埋め尽くしていた。

真剣な顔して黙ってるだけでこんな顔をする瑞姫が、そんな事を考えてる訳ない…。人をすぐに疑うのは悪い癖だな。

【正義】

「いや、何でもない。…始めようか」

彼女は無言で一分ほど此方をジッと見つめたままだったが、小さく頷くとソファアに戻った。

今…頷く前に口が動いてたけど、なにか言おうとしてたのか？…何でだろう、すごく気になる。……って、こんなこと考えてる場合じゃないなかつた。

【正義】

「では最初の質問。こんな風に呼び出したのは俺だけなのですか？」

さて、瑞姫はどう答えるかな？…イエス・ノー形式の本質はトウル・オーフェイク。ここまでの彼女の言動から推測すると、恐らく本質を知った上でこの形式を選んだ筈だ。…微妙な変化を見逃さない様に気をつけないと。

【瑞姫】

「……………イエス」



彼女は眉一つ動かすことなくキーを均一にした声で答えた。

巧い…な。表情もそうだけど特に声の出し方なんて、まるで“母さんに尋問されている父さん”を見てる気分だ。…全く詠めなかつたけどこれで確信が持てた。瑞姫は間違いなく嘘を混ぜるつもりだ。次からは口元に意識を集中しないと。

【正義】

「次の質問です。…それは俺じゃないと駄目なのですか？」

【瑞姫】

「イエース」

そう問い掛けると、彼女は“その通り”と言わんばかりの顔をして嬉しそうに答えた。

何この展開？…普通あそこまで出来るならポーカーフェイスを崩す必要は無い。何でわざわざ手間のかかる事を…確かに判断は鈍るが、今のはどう見てもバレバレだろ。…意味が分からん。

とりあえず、次の質問を決める為に得られた情報を整理しないと。  
…初めの質問を保留、今のをトゥルーと仮定して考えると、少なくとも対象が俺限定だという事は解る。

解るが…情報不足で何も導き出せない。…プラス新たな疑問発生。  
…何故かは知らないが、以前から俺のことを知ってた可能性が高い。

これは疑問というより確信に近い。…でないと着任してすぐに俺を選ぶ理由が無いし、なにか用事があるとも思えない。

それを踏まえた上で考えると……俺という人間を“どういった経緯で知ったのか”が重要な気がする。

瑞姫と過去に出会っているという可能性：零では無いが、記憶に無いのは確かだ。…つまり、間接的に知った可能性が圧倒的に高い。そうになると、やっぱりメディア関係からと考えるのが妥当だろう…  
…気が重いな。

彼女も俺のピアノ、『神の指先』目当てで近づいて来たのかな？…  
コンクールに出なくなって早3年、漸く関係者達の記憶からも消えつつあるのに何で、何で今更。

【正義】

「第3の質問。貴女は俺に何かさせる為に呼んだのですか？」

【瑞姫】

「ノッ、ノー…ですわ」

今にも消え入りそうな声で答えた彼女は顔面蒼白で、膝の上に載せていた手でスカートのエッジをギュッと握り締めていた。

ん？…瑞姫のヤツ、身体が震えてるな。…それによく見たら瞳も潤んでる…どうしたんだろ？

【正義】

「どうした、具合でも悪いのか…？」

立ち上がり彼女の目の前まで移動すると、床の上に膝立ちして顔を見上げながら尋ねた。

【瑞姫】

「違う、違うのっ、そうじゃない…っ」

彼女がそう言っつて首を横に振ると、瞳から溢れた涙が宙を舞い、俺の顔を点々と濡らした。

違っつて…じゃあ何で泣くんだよ。…これじゃ…俺が泣かせたみたいじゃないか。

【瑞姫】

「先程の質問の時…正義様すごく怖い顔をしてらしたから…何であんな顔してるのかな。私、怒らせる様なコトしちゃったのかな。嫌われ…ちゃったかな…それなら傍にもいられなくなっちゃっつて…そう思ったらっ…わたしっ、わたしいいっ…!!」

嗚咽の交じった声で喋っていた彼女は言葉を切るなり両手を広げ、勢い良く飛びついてきた。

咄嗟に立ち上がって抱き止めようとしたが間に合わず、テーブルの上に押し倒される形になってしまった。

【瑞姫】

「うああっ!!…っ…ゴメン…なさいっ…謝るっ、いくらでも謝るからあっ!!…っ…これからは気をつけるからあ!!…私のコト嫌いになっっちゃだあああーっ!!…!!」

彼女は首に巻き付けた腕を引き寄せて身体を密着させ、胸に額を押し付け叫んだ。

【正義】

「……………」

は？…瑞姫は何を言ってるんだ？…俺はそんな顔をしてたのか？…怒ってた？…無意識にそんな顔をしたのかもしれないが、怒ってたなんてことは無い。

【瑞姫】

「うああっ…つく…ゴメン…なさい…っ」

それに…泣くほどのことか？…さっき知り合ったばかりの俺に嫌われても、別に問題ない…よな？

【瑞姫】

「お願い…っ…だからあ…嫌いにつ…ならないでよお…」

そんな事…泣いてる娘を放って置いてまで考える様なことじゃない…か。

【瑞姫】

「嫌いにい…っ…なっちゃ…やだあっ…」

【正義】

「何を勘違いしてるのか知らないけど、俺は全然怒ってない、だから安心していい。…例え怒ってたとしても、だ…あれぐらいで人を嫌いになるなんてことはないから…」

彼女の顔を胸に押し付ける様に抱き抱え、諭す様にゆっくりと語り掛けながら彼女の頭を撫でてやった。

【瑞姫】

「…つく…本当…ですか？…本当に怒ってませんか？…私…傍に居てもっ…いいんですの…っ」

【正義】

「…嫌いになつてたら今頃、この部屋には瑞姫しか居ない筈だよ。…俺は嫌いな人間に胸を貸してやる程、寛容な心の持ち主じゃないからな。…だから、傍に居なければ好きなだけ居ればいい…」

彼女の後頭部に添えていた手を背中へと移動させ、ポンポンと叩きながら答えた。

【瑞姫】

「ひうつ…私…嫌われてないんだ…っ…傍に居ても…いいんだっ…良かった…つく…本当に良かった…よお…うつ、うあああっ…！」  
やれやれ、さっきまで全く隙のない言動をした瑞姫が…まさかここまでガタガタになるとはな。…やっぱり人を見た目で決めつけるのは善くないな。

【正義】

「瑞姫、いい加減泣き止んでくれ…泣いてるお前を見るのは俺もツライ。…それに、いつまでも泣いてたら、その綺麗な顔が台無しだぞ？」

胸に顔を埋めて嗚咽を洩らしている彼女を両手でギュッと抱きしめ、優しく語り掛けた。

勿論それもあるが……さっきから背中が痛いのと、アレが反応しそつだから早く離れたいってのが本音なのですよ。…ヤバい…むっ、

胸が。

【瑞姫】

「もう少し…っ…だけ…このままっ…で…っ」

【正義】

「分かった。…5分ぐらいなら俺も我慢できそうだし…いいよ」

【瑞姫】

「っ…我慢…ですか？」

【正義】

「しくしく…男には、『色々』耐えねばならぬ事があるのですよ」

【瑞姫】

「????？」

ふう〜危ない危ない、口が勝手に……どうやらかなり危険な状態らしい。…5分も持つかなあ。

しかし…何処をどう間違えたら“初対面の女性に押し倒される”なんてシチュエーションが生まれるんだ？

多分、こんな経験は一生に一度あるか無いかだろ？…まあ、ある意味ラッキーだった…のか？

微妙〜…まあそれはおいといて、結局のところ此処に来てから何も進展しなかったな。

瑞姫は自分の事を全く話さないし、聞き出す為のゲームも途中で降

りてしまったから……呼び寄せた理由はもう教えてくれないのかな？  
今までの言動から考えると、まず話してくれない様な気がする。…  
つまり俺、骨折り損のくたびれ儲け？…それは嫌すぎる。

何か他に聞き出す方法は無いものか……せめて瑞姫の性格さえ完璧  
に把握出来れば、後は言葉巧みに……やめよう、虚しくなってきた。

他にも訊くべき事は山ほどあるし、重要な事なら自分から話すだろ  
うしな。…となると、優先順位が一番高いのはやっぱり

【瑞姫】

「んっ……えへへ……おにい……さまあ……やっと……わたくし…  
の……んう」

【正義】

「マジですか……こっちは貴女の事で頭を痛めてるってのに、人  
の気も知らずに、幸せそうな顔して寝やがって。ふう……余程いい夢  
を視てるんだろうな。…その幸せをちょっとぐらい分けて欲しいモ  
ンだ……」

お兄様……か。…兄妹がいるのってどんな感じなのかな？…さつき、  
室岡先生も妹のコトを口では迷惑そうに言ってたけど、顔は緩みつ  
ぱなしだった。…瑞姫も幸せそうな顔して寝てるし……きつと『い  
いモノ』なんだろうな。

【正義】

「しかし、どうしたもののか。…首に巻き付いてる腕が全然外せない  
し、起きる気配も無い。…という事はもしかして、起きるまで俺、

ベッド？」

首の後ろに手を廻して巻き付いた腕を外そうと試みたが、首の下を潜らせた腕の手首をもう一方の手でガッチリと掴んでおり、ピクリとも動かせなかった。

さすがにそれは勘弁してもらいたいな。…かと言って、どうやって起こせばいいんだよ？…声掛けても駄目、揺すっても駄目……もう選択肢無いじゃん。

まだ“ 航に助けを求める ” という選択肢が残ってるが、あれは諸刃の剣だからな。…電話の内容をもしアイツに聞かれてもしたら…1分も経たないうちに此処に駆けつけて、言い訳する隙もなくジエノサイドされてしまうに違いない。

【正義】

「いっそのこと寝てしまおうか？…そうすれば」

『 』

寝てしまおうかと本気で悩んでいると、定位置に容れてある携帯から聞き慣れたピアノの音が流れ始めた。

携帯、携帯つと……よしっ…なんとか取れたっ……さて、誰から…かな？

【正義】

「珍しいな………もしもし？」

液晶に映った橋の文字に、首をもたげながらも尋ねた。



【恋華】

『マー君、今ドコに居るの？…さっきから美咲桜が心配してるよ？』

お前等は心配してないのかよ…まあ、いつものことか。…問題はそれよりも、如何に俺の居場所を悟らせない様にしつつ、他のメンバーを出し抜いて航のみを此処に呼び出すかな。

【恋華】

『もしもし、どうしたの、聞こえてますか？…？』

【正義】

「ああ、聞こえてる。…俺、今ちょっと野暮用で外にいるんだ。…そっちはカフェテリア？」

【恋華】

『美咲桜っ、マー君、外に居るんだって……代わ「貸してっ！」…美咲桜に代わるね？』

ぶっ！？…いきなりジェノサイドルート解禁かよ。…マズい、これは完璧にイレギュラーだ。…騙しきれるかなあ？

【美咲桜】

『もしもし、ヒロ君？…外に居るってことは、今日は来れないの？…私、ずっと待ってるんだよ？』

【正義】

「ゴメン…俺が前もって誰かに言付けておけば、余計な心配をさせずに済んだのに。…言い訳がましいけど、急いでたからそこまで気が廻らなかつたんだ。…本当に済まなかつた…」

【美咲桜】

『うっんっ、ヒロ君がそこまで落ち込むことないよっ！…そもそも今まで連絡しなかった私も悪いんだし、お互い様だよ。それなのに…さっきは理由も聞かないうちから責める様な言い方して、私こそゴメンね…』

ふう…なんとかなるもんだな。…声を聞く限り本当に反省してるみたいだし、これ以上追及されることはあるまい。

【瑞姫】

「うっふっふ、まさよしさまあ…もっと、もっとあ…」

どうやって航に代わって貰うかを考えていると、いきなり彼女が身体を這い上がってきた。

彼女はそのままグツと顔を近づけると、頬を擦り寄せながらうわ言の様に呟いた。

なっ！？…さっきまで“お兄様”だっただろっ！…何でタイミング良く俺の名前に変わるんだよっ！…クソッ…一体どんな夢を視てやがるっ！…！

【美咲桜】

『ねえ、ヒロく〜ん？…今、同年ぐらいの女の子の声で、“まさよしさまあ…”って聞こえたんだけどあ…どうということなのか説明してくれるかなあ〜』

何故同年ぐらいだと解る…って、こんな事考えてる場合じゃなかった。…あの猫撫で声はヤバいつ、何とかして誤魔化さないとジエ

ノられてしまう。……落ち着け俺、平常心だ。

【正義】

「近くにカップが居てさあ、どうやら彼氏の方が正義って名前の金持ちのボンボンみたいで、さつきキスしてただけど、キスが終わるなり彼氏がぶつきらぼくに顔を逸らしたんだ。多分恥ずかしかったんじゃないかなあ？…それで彼女がからかってただよ。“もつとあ”って感じて…さ」

別におかしな所は無かったよ…な？…声も裏返らなかつたし、内容にも不審な点は無いだろ。…あ、緊張したあ。

【美咲桜】

「へえ、カップ同士がキスしてたんだあ？…フツ…それはコーヒーカップ？…それともグラス？…カップがキスしてたってことは、二人が乾杯でもしてたんだらうねえ？…まあ、それはどうでもいいとして…それにしても良く見てるねえ？…そこまで分かるってことは、よっぽど近くに居たんだらうねえ？…さつきの声も不自然なほどクリアだったしい…まるで抱き着かれてたんじゃないかってくらい…ね？」

彼女は最初の方こそ可笑しそうに喋っていたが次第に声が低くなつていき、最後の方は聞いてて体温の下がる様な、全く感情の籠つてない低く冷たい声に変わっていた。

ギャー！…何故か完璧に状況を言い当てられた！！…ヤバっ！…こうなつたら最後の手段しか

【美咲桜】

「因みに電話を切つても無駄だから。今、鳴海君にGPSで居場所

を調べて貰ってるから…諦めて正直に話せば「理っ、理事…マサ君  
逃げてえええームグツ!?ムウーッ!?!」……やっぱり話さな  
くていいよ。…今からそっち行くから  
』

電話の向こうでは一体なにが?…とりあえずハッキリしてるのは、  
航が殺られてるって事と

【正義】

「間違いなく美咲桜は此処に向かって来てるって事だ。ハア…もし  
もーしっ、おーいっ!…頼むから起きてくれえーっ!…みいーず  
きいーっ!…!」

で、だ…結果は当然の様に起きない…と。…寝てしまうのは多分も  
う間に合わないだろうし、諦めて狸寝入りでも決め込むか?

コン、コン!

最早何をしても無駄な気がして彼女の身体を揺すっていた両手をテ  
ーブルの上に投げ出し、ギョツと目を瞑ると同時に今一番聞きたく  
無い音が聞こえてきた。

【正義】

「早っ!?!…まだ2分ぐらいしか経ってないのにつ…(超小声)」  
今ごろになって気づいたが…このまま返事をしなかったら諦めて戻  
るんじゃないか?…此処って理事長室だし、美咲桜もそれ相応の応  
対をする筈……だよな?

コンコンコン!

心なしか扉を叩く力が強くなつてない？…序でに音の間隔も短くなつてるし。

ドンー！ドンドンー！…

【正義】

「何だよ“ドン！”つて、それ絶対所在を確める時の音じゃねえよつ、取り立て屋が“中に居るのは分かつてんだよつ！”つて時の…（超小声）」

【美咲桜】

「『私の』ヒロく〜んつ…貴方のご主人様（飼い主）が迎えに来ましたよ〜、早く出ておいで〜」

ヒイイイ！？…それ相応どころか、普段よりめっちゃフランクじゃん！

ドンドンドンー！…！

【正義】

「ハア…最早突つ込む気力も「ん〜…すりすりすり〜」「失せたとつて、ちよつと待てや！…今“すりすりすり〜”つて口で言つたらっ！」

瞑っていた目を見開き、上に載っている彼女の肩を掴んで上へと押し上げると、彼女は“悪戯が見つかった子供”の様な顔をして小さく舌を出していた。

コイツは…人の気も知らないで…そりゃ何しても効果無いよなあ、起きてやがったんだから。

【瑞姫】

「……………きゃっ」

【正義】

「いつから起きてた？」

【瑞姫】

「いやですわ、正義様ったら…今、起きたに決まってるじゃありませんか」

ドンドンドンドンドン…!!

【正義】

「じゃあ、さっき“きゃっ”って言うまでにあっ、10秒ぐらいの間は何だ？」

【瑞姫】

「目を覚ましてから状況を把握する迄のタイムラグ…ですわ？」

ドン×3 ドン×3 ドン×7!!…!

【正義】

「何で疑問符が付いてんだよ。…疑問文を疑問文で返してどうする…って、まあそれは置いといて…瑞姫に頼みたい事があるんだ…いや、この場合はできたと云うべきか…」

ドン×3 ドン×3 ドン×3 ドン…!!…!

【瑞姫】

「何なりとお申し付け下さいな」

えらく嬉しそうだな、オイ。しっかし…美咲桜も諦めないな。まあ、だからこそ恐ろしいんだが。

ドン ドンドン ドン ドンドン…!!

ドラマー?…というか、無意識のうちに色々なリズムを刻んでるとしたら、音楽そのものが嫌いになったとは考えづらい。…まあ、断定できるレベルじゃないが、『本人』から得られた貴重な情報には違いない。…一応、皆にも話してみるか。

【正義】

「じゃあ早速で悪いが…さっきから扉を楽器がわりにして遊んでる、一年の娘を追い払って「誰を追い払うって?」……ヒイイイ!?!」  
声が出た方に首をギギギと動かすと、満面の笑みを浮かべて此方を見下すジェノサイダーがいた。

扉が開閉する音は全くしなかった筈だ。一体どうやって……あはは、何か笑ってるな?…もしかして俺、死んだ?

【美咲桜】

「うふっ、うふふっ、人を散々待たせといて自分は女のコとイチャイチャしてたんだ?…いいご身分だねえ、ヒロ君」

【正義】

「いや、これには深い訳が「正義様は悪くありませんわ」…え?」

瑞姫は俺の言葉を遮る様に言ってニッコリ笑うと、体の上から降り

て美咲桜の傍まで歩み寄り、真正面から対峙する様に立った。

瑞姫の予想外の行動に唾然としてその様子を眺めていたが、今自分が置かれている状況を思い出し、起き上がって着衣の乱れを整えた。あっちゃ〜…ここシワになっちゃってる。…はあ…家に帰ったらアイロンかけないといけないな。…って、悠長にそんな事考えてる場合じゃない。

着衣を正して2人の方に視線を移すと美咲桜は無言で瑞姫を睨み付け、瑞姫はそれを笑顔で平然と受け止めていた。

おいおい、何だこの展開…場の空気重すぎだろ。…とてもじゃないが、話し掛けられる雰囲気じゃないぞ。…これから一体どうなるんだ？

【美咲桜】

「貴女つ、『私の』ヒロ君にちよっかい出すなんて、いい度胸してるわねっ！！？」

5分程経った頃、美咲桜は怒鳴り声を上げ瑞姫に食ってかかった。

その顔は先程より険しくなっており、視線で人を殺せそうな気がするぐらい迫力があつた。

【瑞姫】

「ええ、自分でもそう思いますわ。…それがどうかしましたか？」

瑞姫は美咲桜の威嚇に全然動じることなく笑顔で返した。



2人とも超恐いんですけど…背後にどす黒いオーラの様なモノが出てる気がするし。

【美咲桜】

「どうやら貴女とは一度、徹底的に話し合う必要があるそうね。…貴女、名前は？」

【瑞姫】

「人に名前を尋ねる時は、まず自分から名乗るのがセオリーではなくて？…とは言うものの、私は貴女の名前になど興味はありませんが」

瑞姫は一体どうしたんだ？…やたら挑発を繰り返してるし、口調も相手を見下した様な感じだ。…何よりこの状況を楽しんでる風に見える……元々こういう性格なのかな？

【美咲桜】

「ねえ、ヒロ君…この性悪ブロード女の名前は？」

美咲桜は引きつった顔を此方に向け尋ねてきた。

【瑞姫】

「正義様が答える必要ありませんわ。…私は先程から“自分が名乗れば此方も名乗る”と言っているのですから」

美咲桜の問いかけに答える隙もなく、今度は瑞姫が間髪を容れずに言ってきた。

彼方を立てれば此方が立たず…一体俺にどうしろと？

【美咲桜】

「もういいわ。…こんな時間に此処に居るってことは、噂の新理事長なんでしょ、貴女？…父に来週からと伺ってたから始め解らなかつたけど、教師達の噂通りだから間違いないわね…ふふっ」

言わなくてもそりや気づくか。…確かに生徒がこんな時間に一人で理事長室に居るわけない。…それにしても、一樹さんなら知ってても不思議じゃないが、美咲桜も知ってたなら教えてくれれば良かったのに。

【瑞姫】

「貴女、今この私を笑いましたね？…同じ　　の分際で。…全てを背負って尚、此処に居る、この私を……気が変わりました。…やはり、確かめなくてはならない様ね…」

美咲桜が笑った途端、今まで笑顔を崩さなかった瑞姫の顔がみるみる険しくなり、低く冷たい声でそう言った。

何だ？…いきなり表情が険しくなった…それに声のトーンも一気に……何故かは知らないが、相当頭にきてるみたいだな。

全てを背負って此処に居る…一体どういう意味だ？…それにその前…声が小さくて聞き取れなかつたけど、“分際で”って言ったのも気になる。…一体何の事を言ってるんだろっ。

【美咲桜】

「もしかして怒ってるの？…でもね、私はもつと怒ってるんだよ？…私達の前から、今すぐにも消えて欲しいぐらいにねっ！！」

【瑞姫】

「いいから質問に答えなさいっ！！！」

そろそろ、仲裁に入ったほうがよくないか？…2人とも熱くなりすぎだ。特に瑞姫…今すぐにでも手を挙げそうだ。

それに、美咲桜は瑞姫が何の事を言ってるのか解ってないみたいだしな……………俺もだけど。

瑞姫の性格から考えて…万が一、事の真意を素直に話したとしても、キツイ言い方になるのは間違いない。

というより…これ以上続けても、実のある会話が展開されると思えない。…お互いをただ罵り合うだけの口論なんて、滑稽でしかないからな。

【正義】

「二人とも…」

【美咲桜】

「何で私が性悪女の言うことを聞かなきゃならないのっ？…冗談は休み休み言いなさいっ！！！」

【瑞姫】

「貴女っ！…それ以上ナメた口を利いてると退学にしますわよっ！！！」

【正義】

「まあまあ、落ち…」

【美咲桜】

「きゃ〜、こわ〜い……退学ですつてえ。今度の理事長さんは生徒の言動一つで退学になさるんですねえ？…そんな得手勝手な振舞いをする貴女に神城なんて名字は勿体無いですから、これからは暴<sup>ほ</sup>后<sup>ご</sup>さんと名乗られたらどうですかあ〜？…本当は“君”の字の方がピッタリなんですけど、貴女も一応女性だから“后”の字にしておいてあげるからさあ〜？」

【瑞姫】

「何ですつてつ、このまな板娘っ！！…もう一度言ってみなさいよっ！！！」

【正義】

「いや、だからさ…」

【美咲桜】

「お望みなら何度でも言つてあげるわ。暴后さん暴后さん腐れ外道暴后さん暴后さん…つて、あ あ！？…誰がまな板ですつてつ、この性悪女っ！！！」

【瑞姫】

「やれやれ…ですわ。認めたくないのは分かりますが、だからつて人に当るのはお門違いですわよ？…私に、いくら文句を言つたところで、その貧相な胸の大きさは変わりませんことよ、マナちゃん？」

【正義】

「2人とも落ち着けて！！！」

【美咲桜・瑞姫】

「ヒロ君（正義様）は黙つてて（くださいっ）！！！」

こっ、コイツ等っ…こんな時だけ結託しやがって。…一体どうしろっというんだよ。

【美咲桜】

「小さくても機能すれば問題ないし…っっていうかあ、貴女もしかして偏見入ってるんじゃないですかあ…？胸の大きな娘の方が男の人は悦んでくれるって。…それは昔の話で、今は統計採ると半分以下なんですよあ…？…何ならヒロ君に訊いてみますう…？」

美咲桜はそう言って此方に駆け寄ると、左腕に抱き着いてグイグイと胸を押し付けてきた。

その行動につられて視線を移すと、美咲桜は瑞姫の方を向いて大胆不敵に笑っていた。

アホか…胸の大小なんて別にどっちでも良いじゃん…2人とも平均以上の大きさはあるだろうに。…もし今ココに恋華が居たら間違いないでなく暴れてるぞ。

【瑞姫】

「あああああつ、貴女っ、何をしてますのっ！！？…おっ……………正義様から早く離れなさいっ！！！」

瑞姫はそう言って此方に駆け寄って来ると、美咲桜の肩を掴んでガクガクと揺さぶった。

何で瑞姫はこんなに慌てるんだ？…これぐらい日常茶飯事なんだけどな。それに、ついさっき自分の方が大胆な事してたのに。

【美咲桜】

「なにつて…ただのスキンシップだけど？…これ位はいつもしてるし。…大体、何をそんなムキになってるの？…ヒロ君と私が何をしようよと、貴女には関係無いでしょ？」

【瑞姫】

「なっ！？…こっ、こんな、はしたない真似を何時もしてるというの…？」

瑞姫は顔を真っ赤にしながら言うと美咲桜から手を放し、フラフラとその場に座り込んでしまった。

【美咲桜】

「おやおやあゝ、お子ちゃまには刺激が強すぎたみたいでちゅねゝ？…ゴメンねえゝ、お姉ちゃん達はこれが普通なんでちゅよゝ」

普通かどうかはさておき、瑞姫が初で助かった。大人しくなった今なら止められそうだ。

【正義】

「もういいだろ、その辺で止めとけ。…愚痴でも何でも後で聞いてやるから、な？」

そう言つて美咲桜の頭をクシャクシャと撫でてやった。

【美咲桜】

「むうゝゝゝっ！…もとはといえば、あの娘が先に「な、頼むよ？」「…はあ…分かった。ヒロ君がそこまで言つなら」

此方を向いてそう言つてきた美咲桜は“納得いかない”と言いたげな表情をしていた。

漸く終わった。…しっかし、何で俺の周りには好戦的な奴等が集ま  
って来るんだろっな？…喧嘩を止めるのも一苦労だ。

【正義】

「瑞姫…立てるか？」

先程から黙って此方を見上げていた瑞姫に、空いている右手を差し  
出しながら尋ねた。

【瑞姫】

「すみません…」

そう言っておずおずと差し出してきた腕を掴んで、ゆっくりと引き  
上げた。

【瑞姫】

「正義様…本当に普段からこんな事をなさっているのですか？」

言ってもいいけど…またテンパらないかな？…さっきは“綺麗だ”  
って言っただけで真っ赤になったし、ここはスルーしとくか。

【美咲桜】

「だから、して「ないよ」…ちょっとヒロ君っ！…何で「耳貸せ」  
？…「…という事があったんだ」…ふふっ…瑞姫って可愛いね  
え」

【瑞姫】

「？…結局の所どっちなんですの？」

ヒソヒソと小声で会話していると、怪訝な表情の瑞姫が顔を近づけ  
問いかけてきた。

【正義】

「してないよ。…あんな『はしたない真似』をいつもしてる訳ない  
ッ!?……だろ?」

答えている最中腕に痛みが走ったので視線だけそちらに移すと、顔  
をひきつらせた美咲桜が腕をつねっていた。

一体なにがいけなかったんだ…誰か教えてくれ。

【瑞姫】

「ですわよねえ?…所構わず、あんな『はしたな「イツ!?’真似』  
をしていたら、周囲の方々が不快な想いをしてしまいますものねえ。  
良かったですわ…正義様が良識のある殿方で……貴女と違って…  
ねっ!」

瑞姫は美咲桜を指差すと、そう言って不敵に笑った。

おいおい、そんなこと言ったら美咲桜がまた……やっぱりか。は  
あ…ダメ元で釘刺し

【美咲桜】

「ええ、自覚してるわ。…私って一つの物事に集中すると、周りが  
見えなくなってしまうタイプだって。…だから、もし気付かないう  
ちに何か気に障る様な事をしてしまったのなら謝るわ。…ゴメンな  
さいね?」

見るからに機嫌悪そうな美咲桜を宥めようとしたが、彼女はそれよ





私の髪以外は触れちゃ駄目だからね、分かったっ？」

【瑞姫】

「ですからっ、私の話はまだっ……」

【正義】

「ん？……後半はこじつけの様な気もするが……分かった。次からは気をつける……という訳で、この話はおしまい。さっきから、瑞姫が何か言いたいみたいだからさ……」

先程から喋るタイミングが掴めずにいた瑞姫が可哀想になり、そう言っつて美咲桜の頭を掴んで瑞姫の方へと向かせた。

やれやれ……あの様子を見るかぎりじゃ、瑞姫はまっだ怒ってるみたいだな。……何で怒ってるか知らないけど、美咲桜は自分の非を認めて謝ったんだし、頼むから“それらしい”発言をして欲しいもんだ。

【瑞姫】

「貴方が、スグに自分を見失う『お子様』だということは良く解りました。……それで、いつまで抱き着いているつもりです？……此処が『理事長室』だっつてことを分かっているのっ？……それとも、まだ“周りが見えてない”とでも仰るつもりですかっ？」

瑞姫は呆れたとも哀れむともとれる微妙な表情をして畳み掛ける様に言っつと、大袈裟に肩を竦めて大きく息を吐いた。

まあそれらしいっつちゃ、らしいけど……少なくとも今のは違っつだろ。……あれだけ正論並べといて、あの態度は無いよな。……早く自分の方がお子様だということに気付いて欲しいものだ。

【美咲桜】

「ん？…ああ、ゴメンゴメン、すっかり忘れてたよ。……………これで問題ないでしょ？」

美咲桜は寂しそうな表情を此方に向けると、名残惜しそうに絡ませていた腕をゆつくりとほどいて答えた。

っ！？…またやっちゃった。…また気付いてやれなかった。

いくらピアノ関連のことに本腰をいれて忙しくなっただとはいえ、あんな顔させてしまうほど寂しい想いをさせていい筈がない…そんなの言い訳にもならない。

やっぱり引き金になったのは、皆に“美咲桜の事”を話してから接する距離を変えたことだろうな。

皆は気付いてないかもしれないが、微妙に距離を置いたのは事実だからな…色々と考えることが増えたから。

退路を断つことで前に進むしかなくなっただけ、このままでは美咲桜がもたない…本末転倒もいいところだ。

これからは作曲とレッスンの時間を遅らせてでも、一緒に居てやるべき…なんだろうな、やっぱり。

そうなると自由に使える時間は土日以外ほぼ零になる、俺がやれる事はこれまでに上に限られてくる…恐らく、美咲桜の件を調べる余裕も無くなるだろう。

つまり美咲桜の件を調べる為に動いてくれてる皆への負担が、俺一

人が抜ける分だけ増えることになる。

そうなれば俺のピアノと美咲桜のケア、その両方に専念できる。…  
…当初の順序とは逆になるかもしれないが、早い段階でトラウマを  
克服できるかも…“夢”への階段を一気に駆け上がることが……  
…って、そんなの今考えるべき事じゃないか。…どうせ今の表現力じ  
や世界どころか、国内すら怪しいだろうしな。

となると、考えるべき事は美咲桜の件を“どうするか”だな。

やはり皆に任せるのがベターだと思うけど、負担が増えるから簡単  
には頼めない。…皆は俺と違って人脈も広いし、権力もある。

という事は調べようと思えばいくらでも調べられる反面、逆を言え  
ばキリがないし、それだけ動き回る必要があるという事だ。

只でさえ皆の負担は俺の比じゃないのに、殆ど何も出来てない俺が  
抜けることで皆に迷惑をかけたくない。

それに抜けるなら理由を話さなければならぬ…つまり、今の美咲  
桜の状態を話さないといけなくなる。

もし話せば間違いなく、美咲桜を心配するあまり、皆して俺を抜け  
させようとするだろう。

その結果どうなるのかは手に取る様に解る…皆は俺を心配させない  
様に無理をするだろう。そして、それは美咲桜に接する態度にも表  
れる……で、巡り巡って最終的には美咲桜がそんな皆に気付いて、  
逆に皆を心配する訳だ。

それだけならまだ良い…もし心配よりも疑念が勝ってしまったら、何を調べているかバレてしまう恐れが出てくる。…いや、そうなたら十中八九バレルだろう…美咲桜が『桐原』であるかぎり…な。

その時、美咲桜はどういうアクションを起こすかな？…拒絶？…それとも許容？…或いは傍観？…まあどのみち、独りで抱え込んでいるということは、歓迎しないのは確かだろう。

問題は拒絶の仕方だ。…俺はいくら罵られようとも、何をされようとも構わない。譲れないモノ、叶えたい、一緒に見たい景色がある…だから、耐えられる。

けど、皆は？…ただ俺の我が侘に付き合ってるだけで、美咲桜に対して俺みたいに願望がある訳でも無いし、メリットも無い。

そんな皆に怒りの矛先が向いた時…皆は俺を恨まないだろうか？…投げ出さないだろうか？…手を…取ってくれるだろうか？

もし、俺一人になったら…やめよう、悪い癖だ。

俺が頑張ればそんな事になることはないんだ…そこまで悲観的になることはない。

そうと決まれば行動あるのみ。…今やるべき事…ん？…何だ？

腕を引かれる感覚を覚えて思考を中断し、意識してそちらに視線を向けると、怪訝な顔をした美咲桜が上着の袖を引っ張っていた。

【美咲桜】

「ヒ口君、さっきからどうしたの？…ぼーっとしちゃって…」

【正義】  
「何分ぐらい飛んでた？」

【瑞姫】  
「5分程ですわ。…その間に紅茶を淹れましたから、お飲みになりませんか？」

声に反応してそちらを向くと瑞姫はソファーに座り、手慣れた感じで紅茶を注いでいた。

5分…そんなモンなのか。…まあ時間の経過なんてどうでもいいが。

【正義】  
「頂くよ。…美咲桜も飲むだろ？」

【美咲桜】  
「うん、どうしよう。…あまり皆を待たせるのも悪いし…」

美咲桜はそう言って瑞姫に背を向ける様に立ち、舌を小さく出して片目を瞑った。

『ヒロ君も行くよね？』…か。本当はもう少し瑞姫に訊きたい事があつただけど、美咲桜が居心地悪そうだからな。……………それに、決めたから。

『俺と一緒に居る事で、美咲桜が笑ってくれるなら…孤独を感じなくなるなら…消せない傷を…癒してやれるなら…居られる時は、ずっと傍に居よう』…って。

【正義】

「折角だから、一杯だけ頂いてから、お暇しようか？」

後ろで纏めた髪を弄びながら返した。（肯定する時のサイン）

【美咲桜】

「えっ？…ひろくんはまだはなすことがあるんじゃないの？（小学生が作文を読むレベルの棒読み）」

美咲桜は瑞姫にちゃんと聞こえる様に、声を大にして言った。

何でわざわざ切り返してくるんだよ…しかも棒読み。…2人で何かやり取りしてたのがバレバレだって。…そこは『うんっ！』って嬉しそうに返事しとけば良いだけなのに。…まあ、そういうお茶目なトコに弱いんだがな、うん。

【瑞姫】

「カフェテリア…：…そういえば、見取図にそんな場所があったわね。…私も行ってみようかしら」

バレても問題ないのだが、なんとなく瑞姫の方に視線を移すと、此方を向いたまま腕を組み首を傾けそう言っていた。

【美咲桜】

「瑞姫って天然なの？（耳打ち）」

【正義】

「変なトコだけ…：な（耳打ち）」

そう囁き合ってからソファーまで移動すると、瑞姫の対面に二人並

んで腰を降ろした。

まさか、こんな流れになるとは思ってた……理事長って役職は暇なのか？

【正義】

「今日は止めといたほうがいいんじゃないか？……パニックになりそうなのがするし」

まだ悩んでる様子の瑞姫にそう言ってから、まだ湯気が立ち上っている紅茶にゆっくりと口を付けた。

【瑞姫】

「パニック……ですか？」

【美咲桜】

「そうそう！……まだ就任挨拶も済ませてないんだから、自立つ行動は控えないと」

【瑞姫】

「何故ですか？……別に問題ないではありませんか？」

いくら天然だからってこれはヒドイ。何だろう……世俗に疎いのか？

【美咲桜】

「いや、どう考えても問題アリアリだし。はあ……本当に分からないの？」

【瑞姫】

「別に問題など」あるのっ！「……では説明して下さいませんか？」



【美咲桜】

「はあ…ヒロ君、私疲れた。…あとよろしく」

美咲桜は此方を向いてそう言うと、肩を落として大きく息を吐いた。

まあ、その気持ちは分からんでもない。この様子じゃ恐らく、一から説明する羽目になりそうだからな。

【正義】

「では僭越ながらこの私めが、ご説明させていただきます。…まず

」

本当に一から説明した。

“経営者が代わる”という事のイロハから始まり、その結果予想される事態、更には自分の年齢が規格外であるという事、以上を踏まえた上で生徒達がどういった反応をするかという事…等の話を小学生でも理解出来るぐらい、粉々に（ココ重要）噛み砕きながら話した。

【正義】

「…という訳なのです。…ご理解いただけただけでしょうか？」

超疲れた。…ここまで疎いってことは生粋のお嬢様なんだろうな。それも“箱入り娘”なんて言葉では言い表せないぐらい……そう、例えるなら“核シェルター入り娘”ぐらいで丁度良いと思う。

14 1 / 2 6月第1週【境界線】（後書き）

お楽しみいただけましたでしょうか？…14は全体的なスケジュー  
ルを考えた上で、伏線を配置しまくる必要があった為、異常な位長  
くなっています。…後編の方は既に執筆を始めているので近日中にア  
ップできると思います。

以下は補足です。

瑞姫の詳細なプロフィールを記載しなかったのは、色々とネタバレ  
が含まれる為です。ご了承下さい。

…という訳で次回 14の後編でお会いしましょう。

14 2 / 2 6月第1週【境界線】（前書き）

楽しみにしている方もそうでない方もお久しぶりです。 言い訳や愚痴は駄文板に記載しておきますので、興味がある方はどうぞ。

それ

では後編をお楽しみ下さい。

【瑞姫】

「つまり私のような新参者は、此処で一人寂しく書類整理をしているのがお似合いだ…と」

瑞姫は口を尖らせてそう言うと言顔を逸らした。

【正義】

「や、拗ねられても…俺はただ、理事長が率先して騒ぎを起こすのはどうかと思うぞって言っただけ。…誰も瑞姫を仲間外れにしようなんて思っていない。今日のところは止めとけと言ってるんだ…」

はあ…いい加減疲れてきた。…もうどうにでもなれ。

【瑞姫】

「つまり、他の生徒達が居なくなれば行っても構わない…という事ですわよね？…では早速」

瑞姫は掌に握り拳をポンツと打ち付けると、そう言ってブレザーのポケットから携帯を取り出した。

すごい解釈の仕方だな。…まあ、それなら確かにパニックになることはないが。

【美咲桜】

「ねえヒロ君？…私、なんだか嫌な予感がするんだけど（耳打ち）」

【正義】

「とりあえず様子を見よう。…あれでも理事長なんだ。そんなに無茶はしないだろ（耳打ち）」

そう言っただの本人に視線を向けると携帯を耳に当て、もう一方の手で髪を弄んでいた。

【瑞姫】

「理事の神城ですが、今すぐ全校生徒に帰宅を命じてください。…ええ、今すぐに…それと、カフェテリアを時間外使用する許可を…その他諸々は此方で保証すると…ええ、構いませんわ。…後はそちらに任せます。…ええ…ええ、それでは  
ふう…これで問題ありませんわ」

通話を終わると瑞姫は誇らしげに笑った。

【正義】

「俺の苦労って一体…」

肩を落として大きく息を吐いた。

【美咲桜】

「よしよし、辛かったね?…頑張ったね?…ただ今回は相手が悪すぎたんだよ。…でも、ヒロ君の頑張りはちゃんと私がかかっているから。だから元気だそう、ね?」

そう言っただけ頭を撫でられた。

【瑞姫】

「あら、どうかされました?…そんなに肩を落として…」

あれだけ好き勝手なことをしながら未だ平然としている彼女を見て  
いると、何かドス黒いモノが身体の奥底から沸き上がって来るのを  
感じた。

【正義】

「何でもない…が、一つだけ言っておく」

【瑞姫】

「なんですか…？」

【正義】

「俺さあ、自分勝手な奴って、『顔も見たくないぐらい』嫌いなん  
だよ」

【瑞姫】

「っ……………」

軽く睨みを利かせてそう言うと、瑞姫は唇を噛んで顔を伏せた。

先ほど“傍に居られなくなっちゃう”と言って流した涙が本物なら、  
この言葉は届くだろう。…相手の言葉尻を捉えてやり込める様で後  
味悪いが…これも瑞姫の為だから仕方ない。…自覚して貰わないと、  
この先

ピンポンパンポーン

『生徒の皆さんにお知らせします。……本日5時より防犯設備の点  
検が行われます。…点検中、校舎内は立ち入り禁止となりますので、  
この放送をもって最終下校時間とします。…残っている生徒は速や

かに帰宅して下さい。…繰り返します」

ピンポンパンポーン

放送が終わり“よくまあ、この短時間でそんな出任せが思いつくもんだ”…等と考えていると、美咲桜に肩を叩かれた。

【美咲桜】

「恋華達、放送を鵜呑みにして帰っちゃわないかな？」

【正義】

「そうだな。…それに、芽衣さんにも事情を説明しなきゃいけないし…じゃあ、ちよつと外すな？」

そう言って立ち上がり携帯を操作しながら扉へと歩を進めていると、何故か美咲桜も着いてきた。

【正義】

「どうした？…何か伝言でもあるのか？」

扉の前で振り返り尋ねた。

【美咲桜】

「連絡した後、先にカフェテリアへ行つてくれない？…私もすぐに追い掛けるから」

そう言って片目を瞑り、瑞姫の方を振り返って苦笑した。

『放っておけない』…か。…ついさっきまで嫌々謝っていたのが、

今は純粹に瑞姫のことを氣遣っている……なんだか、美咲桜の成長するさまを目の当たりにしている気分だ。…いや、子供の成長を見守る親の気分か?…どちらにせよ、喜ばしいことだ。

【正義】

「俺が居なくなつた途端、瑞姫に噛みついたり（喧嘩したり）するなよ?」

そう言つて美咲桜の頭をクシャクシャと撫でた。

【美咲桜】

「むう~~~~~っ!…私、そこまで子供じゃないもん!」

美咲桜は撫でていた俺の手を払つと、頬を膨らませてそう言った。

訂正…やっぱり成長してないかもしない。…語尾に『もん』なんて付けるのは子供だろ。

【正義】

「わかつたわかつた。…んじゃ、瑞姫へのフォロー、よろしくな?」

【美咲桜】

「うん。…あの娘が落ち着いて話が出来る状態になったら、連れていくね?」

そう言つと美咲桜は扉を開けてくれた。

【正義】

「ああ、頼んだ」



そう言つて再度美咲桜の頭を撫でてから廊下へ出ると、直ぐに扉が閉じられ続けざまにガチャリという鈍い音が聞こえてきた。

【正義】

「鍵掛けてなににするつもりだ?…まあ、とりあえず航に連絡するか」  
液晶に航の番号が表示されると通話ボタンを押し耳に当て、カフェテリアに向けて歩きだした。

VIEW CHANGE

瑞姫SIDE

ガチャリ

『俺さあ、自分勝手な奴つて、顔も見たくないぐらい嫌いなんだよね』

先程、お兄様に言われた言葉が頭の中をグルグルと回っている。

嫌い…かあ。ああいう態度を取れば“正義”お兄様が怒るのは“読み取れてた”けど、いざ面と向かって言われるとさすがに堪えた…  
…はあ…さっきのお兄様、怖かったあ、まだ鳥肌立ってる。

けど、お兄様を怒らせる所までは私のシナリオどおり……あと少しで『記憶の中のお兄様』と『今のお兄様』が私の中で繋がる。

そうすれば、後は適度に距離を保ち、嫌われない人格を演じ、状況に併せてシフトし、接し続けられればいい……それで三年間、お兄様の

傍に居ながらにして“あの事”を隠し徹せる筈。

それが、臆病な私がこの学園で三年間過ごすのに必要な通過点、儀式。……今は誰の前であらうと地を出すつもりは無い……そう、今は、ね。

さて、それは追々考えるとして……次は“桐原美咲桜の扱い”をどうするか……よね。

いつ遭遇してもいいように彼女の人格を想定して幾つか対応パターンを用意しておいたけれど、いざ会ってみれば何てことのない歳相応の娘……何だか拍子抜けよね。

とは言え、まだ、お兄様の前での彼女しか見てないから、楽観視は出来ない。

先程までの二人のやり取りを見ている限り、交際している畏れがある……なるべく早く彼女の考察を終えないと、下手すれば最悪の……って、アレ？……お兄様は何処？

今の状況を思い出して視線を一瞬だけ正面に向けると、先程まで対面のソファ―に座っていた筈の2人が居ない。

しまった、落ち込んでいる状態を引っ張りすぎた……この場合予想されるお兄様のアクションは

【美咲桜】

「反省は終わったかしら？……M・I・Sの神城さん？」

モバイル・インテリジェンス・システム

【瑞姫】

「…っ!？」

何故お父様の会社が解った?…確かにM・I・Sは有名だけど、神城一族は他にも有名な企業を幾つも経営している。…私がM・I・Sの現経営者の娘だと知っているとこのことはまさか…まさか、彼女は“あの事”を知っているの?

恐る恐る声がした方へと顔を向けると、桐原さんは扉に背中を預ける様に立ち、楽しそうに此方を見つめていた。…きつと、今の私はすごい顔をしていることだろう。

【美咲桜】

「違わない、よね?…最初は解らなかつたけど、“く分際で”って言葉を聞いて漸く思い出せたよ。…貴女の口癖だったわよね、アレ?」

そう言いながら此方に歩み寄ると、先程まで座っていた場所に腰を降ろした。

先程から驚くことが多すぎて困る。…私の地まで知っているみたいだし…桐原さん、貴女は一体…。

【美咲桜】

「ふふっ…私が貴女の事を知ってるのがそんなに意外?…それと、顔が凄いいことになってるわよ、貴女?」

桐原さんはそう言うと、ハンカチで口元を隠す様に押さえくすくすと笑った。

【瑞姫】

「ええ、意外ですね。…貴女みたいな方と接点があったとは、本当に驚きです」

この展開は想定外だけど…対処法はある。とりあえず『何を』知っているのか確認するまでは、現状維持で様子を見ながら地に近い状態にシフトしていく…余程洞察力が鋭くない限りはこれで大丈夫…な筈。…落ち着け、私…。

【美咲桜】

「……………ねえ、訊いてもいいかな？」

桐原さんは一頻り笑うと姿勢を正し、真剣な顔をして問い掛けてきた。

【瑞姫】

「答えられる範囲でなら…構わなくてよ？」

何かしら…あんな真剣な顔をして。まさか“あの事”を訊かれるなんてことは

【美咲桜】

「何であんな馬鹿げた真似してたの？…やっぱり、ヒロ君？」

ない…わよね、やっぱり。今一瞬、不覚にも訊かれることを期待してしまった。…共有したいと、理不尽だと、不公平だと思ってしまった。…本当に嫌な女だ、私。

さてと、自己嫌悪はこの位にして…彼女が言ったことを私の現状に当て嵌めて推測すると、『お兄様の前だから地を隠してるの？』といった所かしら…結構鋭いわね、彼女。

【瑞姫】

「はて、何のことかしら？」

とは言うものの、本来の私を知ってるなら当然そう来るわよね。…いや、というよりは、自分も同じだから訊こうと思ったのかしら？…お兄様が居る時と居なくなった今とでは、雰囲気はかなり違う。…少し試してみようかしら？…思ったより頭も切れそうだし。

【美咲桜】

「とぼけても無駄だよ？…私は素の貴女を見たことがあるんだから。…2年前、都心のM・I・S日本支社で行われた、貴女の誕生パーティーでね…」

そういうこと…あの時は確か、媚を売ってくる大人達が煩わしくて接触してくる人全てを説き伏せた（罵倒した）覚えがある。…多分、その一部始終を見たのだろう。…なら、今の状態で少しばかり高飛車な口調を強調すれば、彼女は地だと思い込む筈…なのはおいといて。

桐原財閥にまで招待状を送っていたとは…あれだけ送るなど釘を刺しておいたのに、そんな愚かなことをしたのは一体誰かしら？…解り次第処罰しないと。

【瑞姫】

「解釈はご自由に…私からもいいかしら？」

ふう…対彼女用のスタンスも出来上がったし、後はこのスタンスと、お兄様用のスタンスをバランス良く掛け合わせて学園での人格を形成するだけ。…何とか今日中に終えたいわね、どうせ綻びが出来る

なら早く繕えた方が理想的だし。

【美咲桜】

「一つだけね？…本当は二人きりでゆっくり話したいんだけど、あまり遅くなるとヒロ君が心配するから。…貴女を連れていくって言っちゃったしさ」

一つだけなら訊くことは決まってる。「あの事」を知っているかどうかを確認するだけ。…さて、どう言ったものかしら…直球で訊くと勘づかれる怖れがあるし…やっぱり、遠回しに訊くしかないわね。

彼女自身で“あの事”に辿り着くならまだしも、私の口から言うわけにはいかない。…私には桐原さんを縛り付ける権利なんて無いし、それでは何の意味もないから。…例え、彼女が望んだとしても。

【瑞姫】

「現在：桐原財閥の傘下に、元神城グループの企業が存在しているのはご存知かしら？」

お兄様のことを引き合いに出せば確信は得られるけど…お兄様に接する態度を見ている限り、調べようとすることが高い。…恐らくこれが、此方の真意を悟られずに踏み込める、ギリギリのライン。知らなければ当然“あの事”は知らないということになる。…知ってるなら…ッ。

【美咲桜】

「一応知ってる。…確かIT関連の企業が幾つかあったと思うけど、そんなことを聞いてどうするの？」

桐原さんはそう言って怪訝な顔をした。

ふう…問い掛けてきたということは、此方の真意に気付いていない。  
…桐原さんは知らないのね、“あの事”を。

【瑞姫】

「どうもしないわ」

【美咲桜】

「何その“当たり前じゃない”って顔。…当然の疑問だと思うんだけど？」

【瑞姫】

「貴女を試しただけよ…『お嬢様』なのか、『ご令嬢』なのかを…  
ね」

【美咲桜】

「両方とも同義じゃない。…お嬢様とご令嬢って」

【瑞姫】

「私にとっては違うのよ。…貴女はギリギリ後者。フッフ…良かったわね？」

【美咲桜】

「良かったわねって…勝手に納得しないで説明してよ？」

【瑞姫】

「やっぱり前者かしら？…貴女、解らないからってすぐ人に訊くのはお止めなさい。…物凄く“可哀想な子”に見えるから」

【美咲桜】  
「相変わらず言うことキツツイわね、貴女。…まあ、いいけど。…  
それじゃ行きましようか？」

桐原さんはそう言うとソファから立ち上がった。

まだ行かれちゃ困るのよ。…貴方の心持ちを訊いた後で、罪をその  
身に刻む、戒めの儀式を交わさなければならぬから。

三年間、揺れたりしないように。

三年間、咎人だということを忘れないように。

三年間、赦さないように…ね。

【瑞姫】  
「すぐに終わるから、二つだけ質問に答えてくれないかしら？」

同じ様にソファから立ち上がり、桐原さんの顔を真っ直ぐに見据  
えて言った。

【美咲桜】  
「さっき一つだけって言ったのに。ハア…貴女もその性格どうに  
かしたほうが良いわよ？…で、何？」

【瑞姫】  
「貴女、正義様に対して随分な態度をとっていたけれど、恋人なの  
？」

【美咲桜】  
「……………違っわ」



そう言っつて唇を噛んだ桐原さんの瞳は揺れていた。

変ね？…最悪、交際も覚悟していたのだけれど。…まさか、こんな痛々しい表情で『違っわ』なんて返事が返ってくるなんて……何か訳がありそうね。

【瑞姫】

「そう。ならこの先、そうありたいと願う？…恋人としての関係を求める？」

問いかけると桐原さんは眼を瞑り大きく息を吐いた。

さあ、貴女の想いを見せてもらっわよ。…お兄様の隣に相應しいのか、そうでないのか

【美咲桜】

「……………求めるわ。私にはヒロ君しかいないから…例え全てを失ってでも傍に居たい人だから…私を救いだしてくれ…“光”…だから……………だから、誰にも渡さないっ」

桐原さんは眼を見開くと力強い視線を此方に向け、ハッキリとした口調でそう言った。

【瑞姫】

「っ……………！」

参ったわね……………この娘本当にお兄様のことが大好きなんだわ。それも他の人じゃ代わりに成れない位…羨ましい、同じ位置に立ちたい…けど、私には資格…いえ、恐らくこの娘は“あの事”知っても逃

げないわね……っ、なら、資格なんて言葉で済ませては失礼だ。悔しいなあ……今更こんな気持ちに……届くかなあ？

【瑞姫】

「貴女の想いはよく分かったわ。………歯あ喰い縛りなさいっ！」

そう叫んで右手を振り上げた。

【美咲桜】

「えっ！？……ちよっとっ！？……私が一体「いくわよっ！」……っ！」  
「パァーン……！」

問い掛けて眼を閉じたのを確認すると、彼女の頬を平手で力一杯ひっぱたいた。

【美咲桜】

「~~~~っ！……痛つたいなあ、もうっ！……一体何のつもりよっ！……いきなり叩くなんてっ……！！」

桐原さんはそう言うなり、赤く腫れた頬を擦りながら詰め寄ってきた。

その反応は正しいわ。……こんな理不尽な痛みを負わされたら当然怒るわよね、やり返したくなるわよね。………そうよ、それでいいの。……さあ、来なさいっ。

【美咲桜】

「理由……聞かせてくれるんでしょうねえっ？………さあっ、早くっ！

「！」

桐原さんはそう叫ぶ様に言って、胸ぐらを掴み揺すってきた。

それは無理よ。…話して手加減されては意味が無いもの。…さて、もう一押しかしら？

【瑞姫】

「『叩きたくなつたから』じゃ駄目かしら？…貴女の顔を見ていたら急に」

パシーン！！！！

鼻で笑つてから馬鹿にした様な口調で言っていると、左の頬に平手が飛んできた。

【瑞姫】

「っ…一体どういふつもり？…どうして手加減なんてしたの？」

胸ぐらを掴んでいた手を振りほどき、そう言って彼女の顔を睨み付けた。

左の頬を襲つた痛みは大したものでは無かった…恐らく桐原さんが受けた痛みの半分以下だろう。

【美咲桜】

「さあ？…私は手加減なんてした覚えはないけど？」

桐原さんはそう言うと可笑しそうに笑った。

【瑞姫】

「嘘仰い！…本気で叩いたのならもつと痛いに決まってるわっ！」

どうして貴女は笑っていられるの？…あんな一方的に理不尽な痛みを受けたというのに…貴女は一体、何を考えてるの？

【美咲桜】

「神城さんって面白いねえ？…そんなこと気にするなんて。もしかして…そう…そう…そういう趣味でもあるの？」

なるほど、確かに自分から叩いておいて相手を気遣うのはおかしいわよね。…予測が外れたショックでその読みが抜けてた、私もまだ勉強不足だということね。…とりあえず、此処はスルー…と。

【美咲桜】

「分からないならいいよ。…ともかく、私は手加減なんてしてないから。…痛くなかったのはきつと、ああいう事に慣れてないからよ。……それに」

【瑞姫】

「それに…？」

【美咲桜】

「もし理由があったとしても、私だけ本当のことを話すのはフェアじゃないでしょう？…神城さんだって誤魔化したんだから、おあいこだよ」

桐原さんはそう言って小さく舌を出した。

驚いた…これは“勘”が鋭いなんてレベルじゃない…やはり“洞察力”…か。ここまで見てきた感じでは桐原さん、貴女…完璧だわ。…頭が切れて感情もコントロールできる（まあ、お兄様に接する態度は目に余るものがありますが）、先程の様な場面で相手を気遣える余裕もある……これは認めざるを得ないわね。

私と同じように、貴女にも積み上げて来たモノがあると…日々高みを目指して生きて来た……楽しんでお兄様の傍に居た訳じゃない…と。

【瑞姫】

「おあいこ…ね。ふふっ…それでは行きましようか？…『貴女のヒ口君』が心配するといけないから、ね？」

そう言うと桐原さんは頬を赤く染め、蚊の鳴くような声で 良いの？ と訊いてきた。

【瑞姫】

「…さあ？」

そう短く返して部屋を後にした。

貴女のことは確かに認めたけれど、それは『お兄様の傍に居る』ことを認めただけであって、“まだ”交際まで認めた覚えはない。

本来、第三者の私が『認めない』等と宣ったところで、その言葉は男女交際みたいに当事者間で交わされる約束のようなものに対しては無意味…効力を発揮しないのだが、私のそれは『本件に関しては』例外だし、+ で『言葉に強制力を持たせる』ことも出来る。

前者は『お兄様』に関わる事象』限定だけど、後者に制限は無い

……つまり、私には簡単に二人を引き裂ける力がある、ということだ。

とは言うものの、私とて鬼ではない……なにも、いきなり引き離そうと言うわけでは無く、貴女に機会を与えようと思う……我ながら甘い考えだとは思うけれど、これが私の精一杯。

だって、私も昔からお兄様のことが大好きなのだ……漸く手の届く距離に居る、言葉を交わせる距離に居るその大好きな人が、『よりによって』私と同じ立場の娘に言い寄られ、『拳げ句の果てに』恋仲になっていくのを『こんな近くで』指をくわえて見ているなんて、私には堪えられない……10年越しの想いなのだ、そう易々と諦めきれるものではない。

だから勝負よ、桐原美咲桜っ……私が『お兄様に近寄る悪い虫（貴女）を排除する』のが先か、貴女が『お兄様の“隣”に相応しい女性』と私に認識させるのが先か……お互いに譲れないモノを、想いを賭けて……。

もし貴女が勝てば、私は身を退く、交際を認めてあげる……。

そして、私が三年間、前に進むことが出来なければ、結婚も認めてあげる……遠くない未来、いつか、あなた達二人を祝福してみせる……。

けど、『もし』私がこの学園エデンで過ごす三年の間に……全てを受け入れ、赦し、決意し、自信を手に入れ、胸を張り、前に進めた時は……悪く思わないでね。

その時の私はきつと……今以上に冷徹で、今以上に積極的で、今以上に計算高い……貴女から見れば悪魔のような女になって、貴女からお

兄様を奪い返すから…。

今までの私なら、この夢物語を想像するだけで諦めてた……けど、今日からは違う。　私はもう逃げたりしない。

とは言うものの、それ以前の問題かもね。…私に『お兄様の隣には相応しく無い』と思わせた瞬間、貴女の恋は終わるのだから……一身上の都合で転校というカタチで、ね。

だから、せいぜい頑張りなさい…一秒でも長くお兄様の傍に居られるように、ね

【美咲桜】

「ちよつと！…今の『さあ？』って、どういう意味なのっ？…ねえっ？」

等と長々考えつつ廊下を歩いていると、いつの間にか隣に居た桐原さんが尋ねてきた。

【瑞姫】

「私、嫌いな人には言いたくありませんわ」

ふふっ、可笑しい…神城グループ始まって以来の堅物と言わしめた“あの”お祖父様に、堅物を皮肉って金剛ダイヤと言わせたこの私が、まさか今更こんな気持ちになれるなんてね。…そう思わせたのは桐原さん、他ならぬ貴女なのよ？

【美咲桜】

「訳分かんない。…神城さんって、ホントに変わってるね？」

それも貴女の所為…変わってるんじゃないかと、貴女が変えたの。貴女のことを“無条件で嫌う”と決めていた私を…。

【瑞姫】

「はあ…貴女にだけは言われなくなかったわ。…私も落ちたものね」  
私は貴女を妬んでいた。…私がこの10年、努力に努力を重ねて漸く手に入れたモノ。…それを既に持っていた貴女を…。

【美咲桜】

「あはははは。…そういえば、神城さんとヒロ君ってどういう関係なの？…様付けなんてしてるからどうしても気になっちゃって…」  
それが今では憧れさえ抱いてしまっている。…信じられる？…貴女が存在が、私が10年もの間、悩んで、もがいて、苦しんで、それでも…私が神城である限り、どうしようもない事なんだと、赦される資格すらないんだと…いつも“諦め”で終わっていた結論をあっさりと変えてしまったのよ？

【瑞姫】

「関係…ね。…それは黙秘しておくわ。様付けの理由は…そうね、敬愛…しているからよ」

ねえ、それがどれだけ凄いコトなのか分かってる？…桐原美咲桜という存在に、私がどれだけ救われたか分かる？…諦めていた私に、何を…与えてくれたと思う？

【美咲桜】

「スツキリしないなあ、もう。…どうして貴女は毎回引っ掛かる言い方をするかなあ？」



貴女がくれたモノ。…それは“溶けない翼”…太陽に向かって翔ぶ  
為に必要なモノ。

【瑞姫】

「そう？…私はいつもこんな感じよ？…そう感じるのはきっと…」

貴女に出逢うまで私の翼は、咎人に与えられる蠟を固めて形作られ  
た、戒めの象徴だった…罪の重さを知らぬ愚か者に罰を与える為の、  
ね。

【美咲桜】

「きつと…？」

でも今は違う。貴女が与えてくれた翼…それは私の心次第で強く、  
大きくなる。…今はまだ、弱い私を象徴する様に小さく、羽も生え  
揃ってない様な翼だけど、私は強くなってみせる…そして、立派  
な翼を携え、あの眩しい太陽に向かって翔ぶっ！

【瑞姫】

「自分に…（お兄様の隣を守り抜く）…自信が無いからよ」

だから、頑張りなさい

【美咲桜】

「……………そうかもしれない。私は　　だから」

貴女は暫定とは言え

【瑞姫】

「何か言ったかしら？」

私が認めた

【美咲桜】

「うっ、うっん、何でもない……」

ライバルなんだから

【瑞姫】

「なに立ち止まってるの？…置いていくわよ？」

せめて、傍に居続けなさい

【美咲桜】

「えっ？…ちよっ！？…待ちなさいよっ！」

そして、私と闘いなさい

【瑞姫】

「イヤですわっ！…待てと言われて待つのは只の馬鹿っ！…マナちゃんとは違って、私は天才ですからっ！」

貴女は敵だけど

【美咲桜】

「~~~~っ！…もう怒ったっ！」

感謝してるから

【瑞姫】

「ここで怒るのは肯定を意味してるわよっ？…ハア…それにも気づけないなんてっ、これだから野蛮人はっ…ハアハア…困るっ、わねっ！」

だからこそ、私は

【美咲桜】

「ふふふっ、私から逃げられると思ってるの？…この私からあゝっ…！」

貴方と全力で闘いたい！！！！

V I E W C H A N G E

E N D

【正義】

「　　という事があつたんだ」

あの後芽衣さんとも連絡を取り合いカフェテリアに着くと、何故か皆から生暖かい眼で見られた。

【航】

「ふっん、美咲桜ちゃんとやり合うなんて、その娘も命知らずと言うか、なんと言うか…」

それから一応店の方に事情を説明して頭を下げると“売上げは保証してくれるみたいだから構わないよ”と苦笑していた。

【恋華】

「まあ、大丈夫なんじゃない？…美咲桜は男以外に手を挙げたりしないし……だよ、マー君？」

その後席に着くなりいきなり質問責めが始まったので、多少脚色しつつ理事長室での出来事を話してやった。（瑞姫を泣かせた事や抱き着かれた事を伏せたり）

【正義】

「　　（口笛）」

途中、放送の件を話した時に俺は鬼を見たのだが、鬼は就任挨拶の場で全校生徒に謝罪すれば許すという形で怒りを収めてくれた。（あまりの形相に色んなモノが縮んだよ）

【亜沙美】

「何でそんなに動揺してるの？…理事長室で一体なにがあったの？」

そして今は、先程すっかり口を滑らせてしまった美咲桜の暴れっぷりを誤魔化している最中だ。

【正義】

「さあ？…何故か記憶が曖昧なんだよね。…よってノーコメントで」

【芽衣】

「まあ、そんなのどうでもいいじゃねえか。…で、話は変わるが、正義…風紀委員に入らないか？…いや、入って欲しい」

【正義】

「そういえば今朝、そんな話をしましたね（妙な言葉遣いで）…

とりあえず、理由……聞いてもいいですか？」

【恋華】

「あゝそついや芽衣先輩、教室に来てたねえ。…そつか、そついう話だったんだ」

【亜沙美】

「なに？…なんの話？」

【航】

「アレ？…そうだったっけ？…うゝん、今朝のことを思い出そうとすると、何故か腹に刺さる様な痛みが走るんだよなあゝ？…何でだろ」

蹴られてたからだよ。

【芽衣】

「いや、単純に人手不足でな。…今、ウチ（風紀委員会）にはオレを含めて14人しか居ない。…で、一学期いっぱいでは三年の6人が抜ける。…つまり、今のままだと二学期から、学年ごとに約2人で担当しないといけなくなるんだ。…言いたいことは解るだろ？」

分かるけど…何で俺？…うゝん、協力してやりたいのはやまやまだけど…身体、持つかなあゝ？

【正義】

「ええ、まあ。…でも、去年まではどうしてたんです？…美月先輩達が抜けた後。…やっぱり、同じ様に勧誘して回ったんですか？」

【芽衣】

「いや、言いにくいんだが…今年には新入生の勧誘に失敗してな…去年…つまり二年は6人居るんだが、新入生は2人しか確保出来ないんだ。…まあ、正確には逃げられたんだが」

バツの悪そうな顔を見ると頬を掻きながらそう言い失笑した。

なるほど…つまり去年まで、大体5・6人は確保出来てたから三年が抜けても何とか回ってたのが、今年は2人。少なく見積ってもマイナス3人…そりゃキツイ。

【恋華】

「七瀬教官っ！…質問でありますっ！…」「発言を許可しよう」…サッ！…美月先輩とは誰でありますかっ？」

やたら気合いの入った恋華の質問に答えて良いか芽衣さんに眼で尋ねると、溜め息を吐いてかぶりを振ったのでスルーすることにした。

【正義】

「理由は良く分かりました。…でも、何で俺なんです？…他にも暇人は沢山いるでしょうに」

【恋華】

「ええーっ！…言わせるだけ言わせてスルー！？」

【航・亜沙美】

「セイカク」

【正義】

「いや、何故お前達が答えるよ？…しかも片言」

【芽衣】

「理由か、そうだな…… 『頼りになるから』じゃ駄目か？」

【恋華】

「殿っ！…申し上げたいことがっ！…」申せ「…はっ！…忙しい殿の影武者に航を使われたらどうかと…」

【正義】

「大義である！」

【恋華】

「はっ！…ありがとうございますっ！」

【航】

「ええーっ！…流れるにココはスルーでしょ？…しかも何その小芝居っ？…っていうか、なに勝手なコト言ってくれてんの？…君、僕の彼女だよな？…一緒に過ごせる時間が減ってもいいのっ！？」

【亜沙美】

「疑問文の応酬だね」

【恋華】

「いいよ」

【航】

「肯定っ！？…チクショー！…漸くイジリも一段落したと思ったのにっ！」

【航以外】

「それはない」

【航】  
「しくしく、そろそろ教育委員会に訴えようかと思うんだけどどうよ？…俺だってさあ、今まで…」

【瑞姫】  
「まあ、それは穏やかじゃありませんわね？…話、聞かせて頂けるかしら？」

背後から聞こえた声に振り返ると、ケロツとしている瑞姫とは対照的に、膝に両手を突き肩を大きく上下させている美咲桜の姿があった。

【美咲桜】  
「この娘……………消える」

美咲桜はそう呟くと顔を上げることなく、フラフラと覚束ない足取りで俺の左隣に座るとテーブルに突っ伏した。

【瑞姫】  
「私はどちらに座れば？」

訳も分からずその様子を眺めていると、視界を遮るように立った瑞姫が尋ねてきた。

【正義】  
「あ…ああ、彼処の席と俺の隣が空いてるから、好きな方に座るといい（消える？）」

美咲桜が残した謎の言葉に首をもたげながらも空席二つを順に指差



し、そう言って両手で『どうぞ』と促した。

【瑞姫】

「では、隣、失礼致しますね？」

そう言っ隣空席に移動すると此方に向けて微笑んだ。

【瑞姫】

「……………（ニコニコ）」

【正義】

「……………（何だ？）」

【恋華】

「はよ！」

一向に座る気配を見せない瑞姫に首を傾けその様子を眺めていると、謎の言葉が耳に飛び込んできた。

【芽衣】

「は？…なんなんだ、いきなり」

【亜沙美】

「ボクの推測ですけど…………『早く紹介してよ！』の略語かと」

【正義】

「よく分かるな…っ！か、何故に略語？」

そう問うと亜沙美は恋華の方を向いて目配せし恋華がそれに頷くと此方へと向き直り、人差し指を立てた両手を頭上に移動させ曲げて

は戻しを繰り返した。

【正義】

「?????…なあ、わた…（器用なヤツだな）」

その行動の意味が分からず航に助けを求めようとしたが、航は瑞姫の方を向いたままカップを持った状態で固まっていた。

【芽衣】

「ウサギ…か？」

【恋華】

「ふるふる（首を横に振っている）」

二人のやり取りを眺めていると、ある考えが頭に浮かんだ。

なるほど…さっきの略語は言葉遣いを隠す為だと考えればこの行動も頷ける。

【正義】

「が「わかりましたわっ！」…へ？」

正解が分かったので『頑張るねえ』と言おうとしたが、俺の声は隣の新人さんに掻き消されてしまった。

【瑞姫】

「…けど、日本では何て呼ぶのかしら?...悪魔？」

【恋華】

「ぶんぶんぶん（モノ凄い勢いで首を横に振っている）」

正解を言うよりも瑞姫の的外れな回答を聞いてるほうが面白そうなので、笑いを堪えつつ、このまま様子を見守ることにした……。『日本では』という言葉に引っ掛かるものを感じたが…。

【瑞姫】

「え、これは連想ゲームではありませんの？…そちらの方がウサギと仰ってましたから、私てっきり…」

【亜沙美】

「いや、別にこれはゲームって訳じゃなくて…ねえ？」

亜沙美は苦笑して返すと此方に視線を向け目配せしてきた。

【正義】

「まあ、わかりやすく言えば……さつき略語を使った理由を瑞姫以外に伝えようとしてるんだ。…先に言うておくが、仲間外れにしようとしてるんじゃないからな？」

【瑞姫】

「ふふっ…それは分かってますわ。…先程は私も悪ふざけが過ぎました…ゴメンなさい」

瑞姫は悪戯っぽく笑うとそう言うてグーで自分の頭を小突き、ペコッと頭を下げた。

【正義】

「えっ、いや、分かってるならいい…が（瑞姫？）」

その予想外の態度にそれだけ返すのが精一杯だった。

これは…俺が理事長室を出てから美咲桜と何かあったな。先程までと態度が違いすぎる。それも、物凄く違和感を感じる程……起きたら訊いてみるか。

【芽衣】

「フーことは、だ。…オレだけが分かってねえってことか？…一体なんだってんだ」

【亜沙美】

「あはははは…どうせ一時間持たな「何がです？」いえいえいえ！…ボクは何も！」

説明役に疲れたのか、亜沙美が“正解”をバラし始めたのだが、満面の笑みを浮かべた恋華にそれを遮られ、首をブンブンと横に振りながら椅子ごと後退りはじめた。

【瑞姫】

「ふふっ、面白い方々。………こういうのも、悪くないかもしれませんわね」

あの二人にも上下関係が存在するんだな、等と思いつつその様子を眺めていると、隣で同じ様に二人のやり取りを眺めていた瑞姫が独り言のように呟いた……寂しそうな表情で。

【芽衣】

「ウサギじゃねえなら………何だ？」

【正義】

「芽衣さん…恋華と初めて会った時のこと覚えてます？（箱入り娘

…か」

寂しそうな表情の理由は何となく想像がついたので、早くそれを解消する為ヒントを出してこの話題を終わらせることにした。

【芽衣】

「ああ、覚えてるが……何かあったか？」

【正義】

「『その時だけ』普段しないようなことしてませんでした？…と言つと語弊がありますね、正確には『一時間ぐらい』……ですか」

怪訝な顔をして尋ねてきた芽衣さんにヒント…というか答えを返し、テーブルに突っ伏しいつの間にか寝息を発っていた幼馴染みを起こしにかかった。

【芽衣】

「初めて会った時…一時間ぐらい……あの格好……ああ！…分かった分かった、そういうことな！」

漸くか、等と思いつつ幼馴染みの頬をペシペシと叩いていると反応を示した。

【美咲桜】

「うみゆ？……んう~~~~~っ！…あれ？…私、もしかして寝ていたの？」

美咲桜は此方と目が合つと可愛らしい声を上げてゆっくりと身体を起こし、大きく伸びをすると寝惚け眼を両手でグシグシと擦り訊いてきた。

【正義】

「ああ、瑞姫を連れて（？）ココに来るなりソコに突っ伏して…いつの間にか、な（人前で眠ってしまっなんて…余程疲れが溜まってたんだろっ）」

【美咲桜】

「？………そうだっ！…ヒロ君っ、消えるっ、消えるんだよヒロ君がっ！？」

美咲桜は考えるような仕草をして暫く黙るといきなり席を立ち、興奮冷めやらぬといった感じで此方に詰め寄り言ってきた。

【正義】

「とりあえず落ち着け。…俺は『姿を消す』なんて反則スキルは持ってないし、消えないから」

あつたら便利だろうなあ、等と思いつつ、詰め寄る美咲桜の肩を掴み引き剥がしながら返した。

【美咲桜】

「違っよっ！…神城さんが消えるのっ！…ごっっ、ビュンって感じで！」

消える様子を伝えようとしているのだろうか、手を水平にビュンって感じ（？）で動かしながら言ってきた。

【瑞姫】

「ふふ…ふふふっ…桐原さんって本当に面白いですわね。…人間が消えたりする訳ないじゃありませんか」

で、そんな美咲桜に『可哀想な子』を見るような眼を向け呆れたように返す瑞姫。

【美咲桜】

「いや、貴女は違う！…きっと、加速装置的なモノが体に埋め込まれてる筈！」

結果、こうなるのは目に見えてたワケで……も少し仲良く出来ないもんかな、と思う俺は…。

【正義】

「自己紹介しないか？」

『逃げ』をうった…。

【瑞姫】

「知り合いの教授を紹介しましょうか？」

【美咲桜】

「どつという意味よっ！」

【正義】

「パキッ…ポリポリポリ」

が、スルーされたので、航が注文したであろうパフェに刺さっていたスティック菓子をかじることしかできなかった。

【亜沙美】

「なるほど…正義君も大変だったみたいだね？」

そんな二人に挟まれている俺を気の毒に思ったのか、亜沙美はそう  
言って芽衣さんとの間を開くと手招きしてきた。

【瑞姫】

「ご想像にお任せするわ。…もし、お嫌なら私が診てあげましょ  
うか？」

【正義】

「分かってくれるか。…二人で会話させると何故かすぐにこうなん  
だよ。…人の話なんて聞きやしねえ、もうお手上げ、疲れたよ俺は  
…」

その意味を悟った俺はバレないように（とばっちりを食いたくない  
ので）ゆっくりと椅子ごと後退し、椅子を持ってそのスペースへ  
と離脱した。

【美咲桜】

「だ・れ・がっ！…貴女なんか診てもらってもんですかっ！…そも  
そも、私はどこも悪くないっ！」

【芽衣】

「はははっ……まあ、あれ以上煩くしやがったらオレが止めてやる。  
…だから、元気だせ、な？」

テーブルに顎を載せ二人のやり取りをぼーっと眺めていると、声と  
共に頭を撫でられた。

【正義】

「あれ以上と言わず、今すぐ止めてくれませんか？…見てるだけで何



かこう、『駄目な子を持った親』の気分というか……とにかく疲れがドツと出るんです」

【瑞姫】

「大体、何を根拠に人が消えるなんて妄言を……なるほど、そういうことでしたのね（ニヤニヤ）」

【恋華】

「それにしても彼女、物凄く個性的な性格をしますわね」

この後に及んで自分のスタンスを貫こうとしてる君も、充分個性的だと思うよ。

【美咲桜】

「そこまで言うなら論より証拠！…亜沙美、この娘を捕まえるから力を貸してくれないっ？」

【亜沙美】

「ボクなのっ！？……まあ、手伝うのは構わないけど、気づいてる？」

そう言いながら頭を撫でてきた。

【美咲桜】

「え？…何に？」

顔を此方に向けて返したが、俺の存在には気づいていないようだった…。

【正義】

「そつだそつだー！…喧嘩よくなーい！」

ので、ちよつと投げやりな感じで存在をアピールしてみた。

【美咲桜・瑞姫】

「えっ！？……………この泥棒ネコっ！」

すると二人の声が入った…きつと、その確率を調べたら天文学的な数値を叩き出すだろう。

【芽衣】

「おいおい、そりやねえだろ？…お前達がうるせえから正義は此方に来たんじゃねえか。…その辺ちゃんと分かってんのか？…ああっ！！！」

次に入るのはいつになるのかな、等と馬鹿げたことを考えているうちに、どうやらお説教の時間になったらしい…芽衣さんが眉を上げ怒鳴った。

【美咲桜】

「うっ…すみません。私、また…」

その迫力を前にすると、あれだけ五月蠅かった美咲桜でも一瞬でこつなる……本当なら、俺が叱ってやるのが一番良いんだろうけど、さ。

【瑞姫】

「そつですわね…そんなに大きな声を出していたとは思いませんが、感じ方は人それぞれ…それを忘れてましたわ」

それに対して瑞姫は冷静に自分を分析しつつ、眉一つ動かさずに淡々と返して頭を下げた。

【正義】

「……………」

その理事長らしい落ち着いた物言いが、先ほど頭の隅に追いやった『引掛かるもの』を引き摺り出してきた。

【芽衣】

「お？…なんだ、後任の理事長さんのほうは見所あるじゃねえか。…オレはてつきり、まだ噛み付いてくるもんだと思ってたんだがな」

【恋華】

「そうですね…私も、もう少し聞き分けのない方かと思ってましたわ」

【亜沙美】

「右に同じ。…言い方は悪いけど、もつと傍若無人な人だと思ってた」

【正義】

「……………」

そうなんだよ…あれが下地だと思ったからこそあんなキツイ言葉をぶつけたんだけど、どうやら違うみたいだな。…俺を出迎えた態度が今みたいな感じだったけど、いきなり泣き出して子供っぽくなったり、美咲桜が現れた途端に口調がキツくなったり、その後急にボケボケの天然になったりと…やたらと上積みが厚い。

【瑞姫】

「ふふふっ…私も多少気難しいところがあると自覚していますが、これでも学園を運営していく者…『線引き』もまともに出来ないようでは、預かっている生徒達まで馬鹿にされかねませんからね…多方面から」

【恋華】

「まあ、ご立派ですわ。…同い年だと伺っておりますが、そこまで心構えが出来ていらっしやるなんて。…ふふっ、何だか月曜日が待ち遠しいですわ」

【亜沙美】

「うん、ボクもその気持ち分かるな。…友達が増えるというのもあるけど、やっぱり、理事長としての期待が大きいよね。…何か凄い事をしてくれそうな気がして」

【芽衣】

「おいおい、あんまりプレッシャーになるような事を言ってるな。…お前達にとっては『理事長』である以前に『同級生』で、更には今から『ダチ』になるんだからよ」

【美咲桜】

「はあ…貴女って本当に『イイ性格』してるわね？」

【正義】

「……………」

で、その中で好き勝手な言動をしていたのは『口調がキツくなった時』と『ボケボケの天然になった時』だけ…つまり、あの傍若無人な態度は上積みの一部で下地じゃないってことは間違いない……コ

レが恐らく、さっき感じた『引つ掛かるもの』の正体だろう。

【瑞姫】

「お気遣いありがとうございます。…皆様のご期待に沿うためにも、共に学び、意見を交わし、学生の立場から見て悪いところを改善しつつ、少しでも学園での生活を楽しんでもらえるよう、頑張りますわ（ニコッ）」

【恋華】

「カッコいい…ですわ（ウツトリ）」

【亜沙美】

「就任挨拶の締めに使えそうな台詞がサラッと出てくる辺り、やっぱり本物のお嬢様は違うなあ。…ボクも見習わないと（ぽーっ）」

【芽衣】

「前理事長と比べるのも失礼なぐらい人間が出来てるな。…まあ、肩肘張らずに、適度に頑張れよ、応援してる」

【美咲桜】

「あゝあ、皆騙されてるよ…ねえ、ヒロ…ヒロ君？」

【正義】

「……………」

分からない…今見てる瑞姫が一体どれだけ上積みを重ねた姿なのか、自分を偽ってる姿…って、何だよそれ。

【美咲桜】

「ヒロ君？…あゝい、ヒロくくん？」

誰だって多少は自分を作ってる、それを『偽ってる』なんて考えるのはおかしい、考えちゃいけない。

【美咲桜】

「ヒロ君っ？…ねえっ、ヒロ君ってばっ！？」

それが暗黙の了解だって解ってる筈なのに…今日の俺はホントにどうかしてる。…けど、いつからかな、こんな風に考える様になっちゃったのは…「くくん」…明確には解らないけど、やっぱり嫌な事が立て続けに起こった…「くくんっ」…ん？

【美咲桜】

「くくくくんっ！…！…！」

等と、長々考えていると耳に激痛が走った。

【正義】

「くくくくっ！？…なっ、なんだっ？…今の超音波はっ！？」

未だ耳鳴りが止まない右の耳を手で塞ぎそちらを向くと、至近距離に頬を膨らませた美咲桜の顔があった。

【正義】

「どうした？…そんな顔して（怒ってる？）」

【美咲桜】

「『どうした？』じゃないよっ！…さっきからずっと呼んでたのに上の空っ、そのお陰で見なよっ！…あの仲睦まじい光景をっ！」

で、ご機嫌斜めのオーラを撒き散らしながら矢継ぎ早に言い、スツと顔を離し俺の正面……いや、対面を指した。

【亜沙美】

「へえ……じゃあ、これまでは、ずっとアメリカに？」

【瑞姫】

「ええ、スクールの長期休暇以外はずっと……」

【恋華】

「では、長期休暇はどちらにいらしたんですの？」

【瑞姫】

「ドイツのシュトゥットガルトですわ、音楽を学ぶ為に……厳密に言えば……む……むしゃ……」

【芽衣】

「ハハッ……武者修行……な。日本では解らない言葉を無理して使う必要ないんだぜ？……だから日本語にはニュアンスの近い言葉が沢山あるんだ、その中から自分の知識や状況に併せて使い分ければいい。……要するに、身の丈にあった『自分の言葉で喋れ』ってことだ」

【瑞姫】

「自分の言葉……なるほど。……だから、敢えて日本語と前置きした後で『意味が似ている言葉』では無く、『ニュアンスの近い言葉』と仰られたのですね？……面白いです、日本語は……」

【正義】

「……………へえ」

その動きを目で追った先では、先程までこちら側に座っていた三人が瑞姫の周りを取り囲むようにして座り、楽しそうに談笑していた。

【美咲桜】

「『へえ』なんて言ってる場合じゃないよ!…早くあの娘の魔の手から皆を助けないと、『チーム神城』の一員になって襲いかかってくるんだよ?…性格が歪んじゃうんだよ?!?」

【正義】

「いや、待て、落ち着け、そして座れ」

チーム神城って何だ、と今すぐ突っ込みを入れたいのを堪え、意味不明な言葉を発している幼馴染みの手を引き椅子へと導いた……まあ、無理矢理座らせたとも言っな、この場合。

【正義】

「とりあえず、それは無いとだけ言っておく。…はい、続きをどうぞ」

【美咲桜】

「むう~~~~っ、納得いかないなあ。…あの娘、私の時だけ露骨に態度が違うし…」

膨れていた理由が何となく解ったので美咲桜を椅子ごと引き寄せると、皆からは見えないうちにその手を取った。

【正義】

「いいんじゃないか?」

【美咲桜】



「…ヒロ君？」

その行動の意味が解らないようで、すぐに怪訝な顔を向けてきたが、構わず言葉を続けた。

【正義】

「これで7人…7人も集まれば、そんな人間が一人ぐらい居てもおかしくない…」

【美咲桜】

「十人十色…つまり、慣れろってこと？」

【正義】

「イエス…面白くないかもしれないけどさ」

【美咲桜】

「…これからアレと過ごさないといけないのかと思うと、気が滅入るなあ」

微妙な表情でアレを指差しそう言うと、溜め息を吐いて身体を預けてきた。

【正義】

「そう言うなって…俺の見た感じ、アイツがお前にぶつけてるのは…」

未だ楽しそうに談笑している4人を眺めつつ、その頭を撫でた。

【美咲桜】

「ぶつけてるのは？」

【正義】

「……………さあ？」

【美咲桜】

「いや、ヒロ君『知ってるけど教えないって顔』してるよ、今？…微妙な間もあつたし」

そつだな…確信は無いけど見当はついてる。

けど、それを教えたところでプラスになることは無い。寧ろ、距離を詰める障害にしかならない…なら、変に親近感を持たせるような印象を植え付けるよりも、今の印象で友達付き合いさせた方がいい。それが、お互いの為になる…航なら確信を持って言い切るんだろうが、俺は航ほど器用じゃないからな。

【正義】

「…という訳で、俺達も参戦するぞ？…はい横移動、横移動」

…ずるずるずる。

【美咲桜】

「全つ然、納得してないのに、こうして着いてってしまふ私って甘いのかなあ？」

『引き摺られる』を『着いていく』と言い表してくれる幼馴染みが可愛くて仕方ない俺は…更に引き摺る。

【亜沙美】

「ん？…遅いよ。…こっちはもう、自己紹介終わっちゃったよ？」

瑞姫の傍に到着したのでこちら側に居た亜沙美の背中を指でつつくと、振り返ってそう言い場所を空けてくれた。

【正義】

「それは、ある程度聞こえてたから知ってる。…っーか俺達、簡単な自己紹介はとっくに済ませてるし。…なあ、みсайツ!？」

空けてくれたスペースに移動して返し美咲桜に同意を求めると、繋いでいる手に激痛が走ったので視線を落とすと爪を立てられていた。

【美咲桜】

「ええ〜え、しかも私には素敵な贈り物まで…」

その理由が解らず困惑して視線を送ると、此方には目もくれず瑞姫に引きつった笑顔を向けていた。

【正義】

「…はあ」

その顔を見ていると後の展開が容易に想像できてしまい、溜め息を吐かずにはいられなかった。

【瑞姫】

「贈り物?…私、貴女にそんなものを渡した覚えはないのだけれど?」

【美咲桜】

「あ〜ら可愛そうに、この歳で物忘れ「美咲桜」うつ…ゴメン、ヒロ君」

あまりの予想通りの展開に目眩がしたが、芽衣さんに何度も迷惑を掛ける訳にはいかないと自分を奮い起たせ（？）、瑞姫に噛み付く美咲桜を睨み付けながら咎めると、先ほと言ったことを思い出したようで、申し訳無さそうな顔をして大人しくなった。

【芽衣】

「おっ、今回はヤケに素直じゃねえか。ハハツ…何かあったのか？」

【正義】

「美咲桜は『いつも』素直ないいコですけど？」

可笑しそうに尋ねてきた芽衣さんを見てると何故か腹が立ってきて、気がつくとも怒気をはらんだ声でそう返していた……それと同時に美咲桜が腕に抱き着いてきたが、気にしない方向で。

【亜沙美】

「ちよっ、どうしたの？…何で怒ってるの？」

【正義】

「自分でもよく分からないんだよな。…芽衣さんの言葉を聞いてたらムカついてきて、気がついたら口から出てた…」

慌てた感じで尋ねてきた亜沙美にさっき感じたことを話すと、皆一斉に口を閉ざした…。

【恋華・亜沙美】

「愛…ですわ（だね）」

【芽衣】

「は？…オイ、どっいう意味だっ！」

【瑞姫】

「っ…負けませんわ!」

【美咲桜】

「すりすり〜」

一分ほどして口を開いた二人がハモるとそれに芽衣さんが詰め寄り、瑞姫は美咲桜を睨み付けながら握り拳を震わせ、当の美咲桜は身体を擦り寄せニヤーニヤー言っていた…で、俺はその様子を眺めながら先程の行動について考えていた。

確か、芽衣さんの何気ない言葉に何故かムカついてきて、気づいた時にはムキになって返してたんだよな?…ということは…無意識に美咲桜を庇ったってことか。…なるほど、それなら『愛』って言われたのも頷け…るか?…どちらかと言えば、『娘を馬鹿にされた親の行動』に近い気がするが…。

【正義】

「まあ、それはどうでもいいとして「よくねえよ!」…芽衣さん?」

【美・恋・亜・瑞】

「……………」

突然の大声に皆驚いて口を閉ざすと、一斉に怪訝な顔をそちらに向けた。

【芽衣】

「い、いやっ、何でもねえっ。…突然でけえ声出して悪かった」

皆を閉口させたその人は、バツの悪そうな顔をして頭を下げてきた……頬を真っ赤に染めながら。

【正・美・恋・亜・瑞】

「……………」

【亜沙美】

「……………そう、そういえば正義君、何か言おうとしてなかった？」

先程とは違った意味で黙り込む皆に耐えきれなくなったのか、それとも原因を作った芽衣さんを気の毒に思ったのか、場の空気を取り繕うように亜沙美が訊いてきた。

【正義】

「あ…ああ、航が空気化している件についてなんだが…」

恐らく皆とは違う理由で今まで黙っていた俺は、亜沙美の問いかけに声を出すのがやっとだった……動揺していたから。

【恋華】

「そういえば、航さんは神城さんがいらしてから一言も発していませんわね？…いつもなら、面白い（面白くない）冗談で場を賑わせて（凍らせて）くださっているのに…どうしてしまったのかしら？」

何故動揺しているのかと言うと、彼女の不可解な態度の訳を考えているうちに気づいてしまったからだ……今週に入ってから明らかに変わった彼女の態度…その意味と真っ直ぐ此方を向いた気持ちに。

【亜沙美】

「そういえばそうだねえ。何か物足りないなとは思ってたけど…そうか、鳴海君と正義君の掛け合いが無かったんだ」

確信は持てないが、可能性が高いのは事実だ。…今までもそれらしいケースが何度となくあった。でも、そんなのは自分の自惚れだと思っただけで考えないように…いや、違うか、目を背けてきたんだ…傷つけるのが怖かったから。

【瑞姫】

「あの方…ですわよね？…私はずっと気になっていましたが、皆様が気にしていないようでしたので、あまり言葉を発しない物静かな方なのかと思ってましたわ」

もし告白されるようなことにならば、芽衣さんや他の皆に悲しい想いをさせてしまう…だって、今の俺は美咲桜が一番大事だから、彼女の想いを受け入れることが出来ないから…しかも、芽衣さんはそれを知ってる筈…つまり、本気だったことだ。

【芽衣】

「ハハッ…そうだとオレ達も助かるんだが、残念ながらアイツはそんな落ち着きのあるヤツじゃねえよ」

どうしよう…距離を置くか？…只でさえ一番接する時間が短い芽衣さんと？…いやいやいや、そんなことしたら皆に一発でバレる。…というか、尋問コースだ…とりあえず、航に相談してみるかな。

【美咲桜】

「先輩、いくらなんでもそれは言い過ぎでは…ほら、一応、彼女さんも居る…どうしたの？」

アイツはこういう状況に慣れてるから、アドバイスの一つ位は……  
…何でだろう、気休めすら言ってくれない気がしてきた。…あはは  
はははっ…はあく、最近悩んでばっかだ。

【亜沙美】

「しい〜っ、隣となり（小声）」

大体、何でこう、悩みばっかが沸き出てくるんだっ、俺が何をした  
ってんだっ、誰か教えてくれよっ！…と、愚痴を言ったところで何  
も始まらないし、そろそろ会話に加わるか。

【美咲桜】

「ぷっ…かわいい、子供みたい」

【正義】

「誰が子供みたいだっ？」

皆さつきから何故か此方を向いてくすくす笑っていた…それがなん  
となくムカついたので、お隣さんの額に手刀を落としてやった。

【美咲桜】

「ひゃうっ！？…き…聞いてたんだ？」

それが痛かったのか、此方を見上げて返した美咲桜の瞳は潤んでい  
た………自業自得だ。

【正義】

「で、航のバカはどうする？…切り刻む？…それとも捨てる？」

そう言っって航の方に視線を向けると先程の状態を保ったまま固まっ



ていた……ので、先程スティック菓子を頂戴したパフェを頂くことにした……美味しい。

【瑞姫】

「あら、お腹が空いてらしたのなら言ってお下さればご用意しましたのに……そういえば、もう結構な時間ですものね」

言われてから壁に掛かっていた時計に視線を移すと、6時10分を回ったところ……6時10分っ！？

【正義】

「がっがっがっ（高速でパフェを掻き込んでいる）」

【恋華】

「まあ、大変っ、急いで出ないとお店の方にご迷惑を……」

【瑞姫】

「その心配はいりませんわ。…許可は取っておりますから」

そう言うと慌てて席を立とうとした恋華を手で征すると、瑞姫はそう言ってニッコリと笑った……そして俺は安心してペースを落とすのだった。

【芽衣】

「なあ、瑞姫……理事長って役職はそんなことまで出来るもんなのか？」

芽衣さんが怪訝な顔をして尋ねると、皆も気になっていたのかコクコクと頷いた……因みに俺はパフェに夢中。

【瑞姫】

「他の学園がどうなのかは知りませんが…少なくとも、この学園の理事長に与えられる権限では無理みたいですね」

【亜沙美】

「いや、ニツコリ笑って『無理みたいですね』って…」

【瑞姫】

「ふふっ…矛盾してますでしょう？…その理由は簡単ですわ。…私が理事の肩書きの他に、オーナー経営者代行という肩書きを持っているからです」

【正義】

「なるほど…つまり、運営と経営の両方に行使できる権限を持つてるんだな？…まるで企業だな…」

【瑞姫】

「流石は正義様、仰るとおりです。今の私は学園の全権を掌握します…とは言っても、私も来週からは学生ですし、身に余る運営権の殆どは学園長に譲渡する予定ですけど…すみません、少し席を外しますね」

電話でも鳴ったのか、瑞姫は急に言葉を切って立ち上がると、小さく頭を下げて小走りで入口の方へと駆けていった。

【正義】

「恋華、その剥製を何とかするなら今がチャンスだぞ？…というか何とかして？…俺、航君が居ないと帰れないし…」

母さんが心配するといけないと思い、そう言って携帯メールを打ち

始めた。

【航】

「なに？…俺がどうかしたの？」

【航以外】

「……………」

予想外の声にメールを打つ手を止めて顔を上げると、皆、同じような顔をして剥製モドキの方を見ていた……多分、俺もそんな顔になっているだろう。

【航】

「ねえ、何その『生きてたんだ？』って顔…というか、なんで黙るの？」

航は怪訝な顔をしてそう言うと固定ポーズを崩し、もう味も香りも半減しているであろう紅茶を口に含んだ。

【正義】

「一つだけ訊いてもいいか？」

【航】

「うわマズッ…なにコレ……何？」

【正義】

「今まで何で黙ってたんだ？…まさか見とれてたとか言わないよな？」

顔をしかめている航に気になっていた事をぶつけてみた……とは言

っても、いま気がついたんだけど。

【航】

「半分正解、半分ハズレってところかな。…確かに外見はモロ好み」  
「どの辺が？」む…いやいやいやっ、そもそも俺は恋華一筋だからっ  
！（滝汗）」

その結果、自爆した航に恋華が詰め寄る展開に…そして俺はその  
様子にももくねず、母さんにメールを送るのであった。

【恋華】

「……………」む』から始まる人体の部位で、『胸』以外の部位を3秒  
以内で答えられたら信じてあげる…3」

【航】

「なにに！？…いつの間にか照れなくなってるっ！？」

【亜沙美】

「確信犯？…2」

そりゃ〜付き合ってるんだからいつかは慣れるだろ、等と内心ツツ  
「ミつつ目の前で繰り広げられている微笑ましい光景を見守ってい  
ると、亜沙美が肩に手を置き訊いてきた。

【航】

「ええーっ！？…本人以外のカウントもありなのっ！？」

【正義】

「いや、確かに俺が原因だと言えなくもないかもしれないが、結局  
のところ悪いのは自爆した航では？…1」

【航】  
「ちよっ、間違ひなく話振ったマサ君でしょっ!?!?!えーっど、えーっど、むっ、むっ、むっ、むっ、分かったっ!?!?!向こう脛っ!」

【正・美・芽・亜】  
「おおっっっ!?!?!パチパチパチパチ（拍手喝采）」

皆がどうなのかは知らないが、俺は正解っぽい答えを出した事よりも、残り時間を削ってまで見事なツッコミをいれた事に拍手を贈っていた。

【航】  
「どもども…『む』縛りだったら、胸以外にはコレしかないっしょ!」

【恋華】  
「多数決」

【航】  
「……………は?」

【亜沙美】  
「なんか面白い展開になってきたね?…賛成」

【美咲桜】  
「『イライラが収まらない』に一票…私も賛成」

【芽衣】  
「はあ?…全然意味が解らねえ。…どういうことだ?」

【正義】

「賛成、つーか、不正解、極刑」

いや、貴女さつき俺に対して似たような感情抱いたでしょ、とツッコミたかった……が、彼女の気持ちに気づいてしまった以上、下手なことは言えないので敢えてスルーした。

【航】

「なっ!?! マサ君が裏切ったっ!?!」

【正義】

「先に裏切ったのはこのどいつだっけ?」

【恋華】

「では、多数決を採りたいと思います。…向こう脛が正解だと思う人は拳手をお願いします」

【航】

「はいっ!?! 俺がいつ裏切ったって言うのさ?」

コイツ…昼休みのことを忘れてやがるのか?…謝れば許してやろうと思ったのに…バカなヤツだ。

【芽衣】

「よく分かんねえけど、正解だろ」

【正義】

「はい、2対4で極刑に決まりました。…という訳で、何する?…女装は飽きたし、何か精神的なモノを…」

【航】

「ちよっ!?!?…こんなの納得いか…むっ!?!?んう~~~~っ!?!(なっ、なにすんのさっ!?!)」

諦めて現実を受け入れる、等と思いながら判決を告げると間髪入れずに異議申立ての声が拳がったが、恋華が素早く背後に廻りその口を塞いだので、その声が俺達に届くことはなかった……まあ、世間一般では『見てみぬふり』とも言っな。

【恋華】

「アンタは黙ってなさい」

【航】

「ムウ〜ウウ〜ッ! (無理に決まってるでしょ!)(…:「これ以上騒ぐとアレをバラすわよ?」……………(滝汗)」

【亜沙美】

「ゴメンね鳴海君?…未だ恋華に対して謝罪一つしようとしな残念なキミの味方は出来ないよ。……………そうだっ、女装を少し捻ったらどうか?」

【恋華】

「捻る?…どゆこと?」

【亜沙美】

「確か来週から水泳が「ムウ〜ッ! (それだけはっ!)(…:…始まるよね?」

【美咲桜】

「確かにパレオ着ければ違和感無いとは思っけど」「ムグウ〜ッ！  
(あるってっ!)」「……これだけ鈍いと逆効果なんじゃない?」

【芽衣】

「なあ、正義：航に何かするってのは分かったが、『謝罪』とか『鈍い』って何のことだ?」

【正義】

「まあ簡単に言えば、彼氏が彼女に悪いことをしたのに、それに気づいてないってことです」

核心を話せないのって疲れる……でも、慣れないと。

【芽衣】

「要するに、航が恋華に何か悪いことをした…だから『謝罪』、でも、それに気づいてないから『鈍い』って言ってるのか?」

【正義】

「ええ、そうです。…で、水泳云々って言ってるのは、その罰みたいなものです」

【亜沙美】

「だね…それに、よくよく考えたら水泳だとボク達が見られないってこと忘れてた。…うん、他に何かないかなあ?」

【正義】

「やっぱり謝罪がメインなんだし、辱しめ+ あったほうが良いんじゃないか?…例えば、昼休みに校内放送で懺悔させるとかさあ」

【航】



「むうむうむうっ！！（無理無理無理っ！！）」

【恋華】

「いや、アンタの意見は誰も聞いてないし。…放送かぁ、コレが素直にやるとは思えないけど…」

気だるそうに言って航の頭をバシッと叩いた……その光景は最早恋人のそれと言うより、母親が駄目な子を面倒臭そうに叱る構図にか見えなかった。

【芽衣】

「っーかお前等、オレが風紀委員だったこと忘れてるだろ？…そういう会話はオレの居ない時にしてくれると有難いんだがな…」

【亜沙美】

「大丈夫ですよ、まだ学園内でやるって決めた訳じゃないですから」

【芽衣】

「いや、そういう問題じゃねえだろ？」

【恋華】

「まあまあ、やるとしても、学園（芽衣先輩）に迷惑を掛けるようなことはしませんから、安心して下さい」

【芽衣】

「あ…ああ、それなら構わないが」

【正・恋・美・亜】

「（結局止めないんだ）」

【航】

「むう、むう〜ぐっ!!!(いや、そこは構いませうっ!!?)」

【美咲桜】

「それにしても…あの娘遅いね?…何してるんだろ」

【正義】

「小走りで出てったし、多分、電話だろ。……………むっ?」

【恋華】

「おっ、その顔は何か思いついたって顔だね?…何なに?」

そう言うなり航を解放してその頭をグーで小突き、此方へと駆けてきた……………その痛みで航が転げ回っているが、気にしてはいけない。

【正義】

「アイツは女装を楽しんでる節が「ないからっ!」……………逆の発想を試みたんだ」

【恋華】

「ん?…逆?…それって、つまり…あれ?…どういう意味?」

【正義】

「簡単に言えば、航を『男らしく』す…」

【航】

「ああ〜にい〜きい〜っ!!!!」

『男らしく』に反応したのか、目を輝かせた航が叫びながら両手を

広げ此方に駆けてきた……それに対して俺の身体が迎撃態勢を捕ったのは言うまでもない。

【正義】

「ほっ、よっ！」

航のスマイリー（不気味）タックルを横に移動して避けつつ、その足を払ってやった。

【航】

「うわっ！？…なんのっ！」

すると航はバランスを崩しながらも自分から前に飛び、顔を庇う様にして受け身を捕った……ブラボー！

【美・恋・亜】

「（やり過ぎなんじゃ……）」

【芽衣】

「（アレぐらい半身で受けるよ）」

【航】

「で？…俺を男らしくしてくれるんだよね？」

てつきり抗議してくるものだと思っていたが、航は立ち上がると着衣についた埃を払い、何事も無かったかのように訊いてきた……そして俺は、次から手加減しないことを心に誓うのであった。

【正義】

「ああ、お前には『男の中の男』になってもらう（外見だけな）」

そう言っただけの間に、か定位置に戻されていた席に着くと、同じように席に着いた航がニコニコしながら自分のケーキを此方に差し出してきた……うん、美味い。

【恋華】

「それが罰と関係あるの？…航が得するだけなんじゃ…」

【正義】

「むぐ？…んっ…いや、ちゃんと恋華にもメリットあるよ。……要するに、航が他の女の口に見とれたりしないようにすれば良いんだよな？」

【恋華】

「えっ？…そこまで考えてくれたの？…アタシとしてはストレス発散出来れば何でも良かったんだけど…」

【正義】

「まあな、俺もコイツに噛まれたり引っ掻かれたりする度に、色々と考えさせられるワケですよ……って、俺のことはどうでもいい。…まあ、早い話、航にも恋華にもメリットがあるってこと」

そう言いつつ隣に座る幼馴染みの頭にポンツと手を置くと、素敵な笑顔を向けてきた……因みに、かなり怖いとだけ言っておく。

【亜沙美】

「ねえ、それって正義君一人でやるの？」

【正義】

「いや、ぶっちゃけ俺一人だと難しい内容なんだ。…それで、ネタ

バレしても構わないって人は手伝って欲しいんだけど…いいかな？」  
そう言っただけで顔の前で両手を合わせると、皆笑顔で頷いてくれた……  
…因みに当事者は首を傾け険しい表情をしていたが。

【正義】

「ありがと…内容が固まったら、役割はメールで報せる。…となる  
と、先ずは統計を採らないとな」

【航】

「統計？…そんな本格的なことまでやるの？…って言うか、必要な  
の？」

【正義】

「ああ、お前も偏見入った『男の中の男』には成りたくないだろ？」

【航】

「まさかとは思っけど、その統計どおりに俺を男らしく改造しよう  
って寸法なの？」

【正義】

「そうだけど？…それが何か？」

【航】

「嫌な予感しかしないんだけど……本当に大丈夫なの？」

【正義】

「安心しろ…変なのが混じらないように少数派の意見はバツサリ切  
り捨ててやるから」

面白くない意見を…な。

【航】

「そこまで言うなら……………信じたよ？」

【正義】

「それにしても瑞姫のヤツ遅いな？…もう半回るぞ」

【芽衣】

「オレが見て来よう…不審者でも居たらことだしな」

席を立ち壁に立て掛けていた竹刀を手に取ると、それを肩に担ぎそう言つて足早に出口へと歩いていった……………すれ違い様に意味あり気な視線を残して。

【正義】

「……………」

不審者…か。なんで不安を煽るような言い方したんだろう…なにか気になることでもあるのか。

【航】

「あからさまに話逸らされた…不安だ」

【恋華】

「やれやれ、仕方ないなあ。…そんなアンタにアタシが良いものをあげよう。……………はい、どうぞ」

【美咲桜】

「ソレが良いものなんだ（苦笑）」

【航】

「何これ？…英語の教科書とノート？」

【恋華】

「イエス、今日宿題出たよね？」

【航】

「どうしると？」

【恋華】

「アンタもう終わらせたよね？」

【航】

「イエス、それが？」

【恋華】

「てへっ  
」

【航】

「うっ…可愛く言ったって駄目っ！…英語は自分でやって理解力をつけとかないと、受験で苦労するっていつも言ってる…」

【恋華】

「だめ？（涙目&上目使い）」

【航】

「だから、これは恋華の為に「だめ？」…仕方ないなあ、今回だけだよ？」

【美咲桜】

「ふふっ…あの二人って本当にお似合いだよね？」

何かあったのかな、等と先程席を立った芽衣さんのことを長々考えていると、そう言った美咲桜が身体を寄せてきた…当てられたみたいだな。

【正義】

「ああ、そうだな」

同じようにその様子…恋華と言葉を交わしながらノートを記入している航の様子を眺め、髪を鋤くようにその頭をゆっくりと撫でた。

【航】

「違う違う、そこでそうなっちゃうと、ここがかみ合わなくなるんだ。だから、この場合は…」

面倒臭そうに説明している航…。

【恋華】

「なるほどお…つまり、ここは繋ぎのみを置けばいいんだね？」

その面倒臭そうな説明を嬉しそうに聞きながらニコニコしている恋華…確かにお似合いだと思う。

【亜沙美】

「良いなあ…」

テーブルに頬杖をつき航達の様子を眺めていた亜沙美は憂鬱そうに言うと、力無くテーブルに突っ伏し顔を伏せた。



【正義】

「どうした？…急にへばって…」

【亜沙美】

「ん〜、何でも無い。…ちょっと疲れちゃっただけだから、心配しないです…」

気になったので訊いてみると、亜沙美は余程疲れているのか此方を向こうとはせず突っ伏したまま返してきた…：ダルそうに片手を上げてブラブラと振りながら。

【正義】

「なら、帰ったほうが良いんじゃないか？…週末は暇じゃないんだし」

【亜沙美】

「うーん、精神的なモノだから大丈夫だよ。…暫くしたら良くなると思う」

相変わらず手をブラブラと振りながら返してきた亜沙美の様子に苦笑していると、美咲桜がスツと身体を離れた。

【美咲桜】

「ヒロ君、ちょっと外してくれない？…鳴海君連れて」

視線を送ると美咲桜は此方を向いて目配せすると、そう言って突っ伏している亜沙美を指差した…：その意味を察した俺は席を立ち、航を拐いに向かった。

【航】

「大体、これだけ出来るなら俺が教えなくても少し考えれば解るでしょ?…と言うか、英語ならマサ君に訊いたほうが良いよ?…俺は英語苦手…って、どうしたの?」

【正義】

「恋華、航借りるな?」

【恋華】

「宿題も終わつたし別に良いけど…それより、マー君まだ帰らなくていいの?…英理朱さん心配して警察に電話したりしない?」

航を連れていく許可を貰う為に訊くと、恋華は首を傾げ考えるような仕草をした後でそう返してきた…因みに恋華が言ったことは実例で、過去何度かパトカーで帰宅したことがある。

【正義】

「大丈夫、さつき遅くなるってメールを送ったから…んじゃ、コレは借りてくくな?」

その時の様子を思い出して苦笑すると、そう言って航の首根っこを掴み、カウンターの方へ…。

【航】

「ちよっ、ちよっどつ!?!…何で普通に『行こうぜ?』とか言わないのっ!?!…毎回引き摺られる俺だと思ったら大間違いだよ?」

向かおうとしたのだが、なんと航がその手を外しやがった……の  
で一人で向かうことにした。

【航】

「そのパターンは止めて…泣きたくなるから」

カウンター席に着いてコーヒーを頼もうか悩んでいると、半泣き状態の航が隣の椅子を引きながら言ってきた。

【正義】

「女同士の話があるんだと…そして、コーヒー奢ってくれない？」

【航】

「しくしく…またスルーですよ。どうせ」悪かった、コーヒー奢って？」「…前後に差がありすぎでしょ？」

【正義】

「そつだ…お前に相談があったんだ。部屋探しの件で…」

【航】

「すみません、コーヒーとカフェラテを一つずつ…」「畏まりました」「…マサ君、一人暮らしでもする気なの？」

【正義】

「サンキュ、バイト代入ったら返すわ。…俺じゃない、室岡先生の妹さん…」

【航】

「室岡？…ああ、マサ君と仲良しの…ふーん、妹さんいたんだね。…で、条件は？」

【正義】

「話が早くて助かる…」「コーヒーのお客様は？」あつ、俺です。…

かなり厳しいんだが」

部屋を探す理由、両親と本人の希望、条件が厳しくて難航している……ということ順を追って話した。

【正義】

「……という訳。俺も少し調べてみたけど、予算と条件の兼ね合いが、な……ズズッ」

コーヒーをすすりながら携帯で調べてみるが、やはり予算の関係で行き詰まってしまう……ダメ元で隣に視線を移すと、口笛を吹きながら楽しそうに端末をイジっていた。

【航】

「……（口笛）……おっ、おおっ！？……ねえ、マサ君……これはどうかな？……6階だから景色は微妙だけど」

その様子を眺めていると口笛が止み、そう言って液晶を此方に向けてきた。

【正義】

「ん……おおっ！……どこの不動産？……こんなのあったんだ」

画面に表示されていた物件は、鳴北にある10階建てマンションの6階で、学園までの所要時間と景色以外はクリア出来て……。

【正義】

「家賃165000円（維持費込み）って書いてますが？」

……いなかった。

【航】  
「うん、書いてるね。…でも、大丈夫。…その社長さんには貸しがあるから」

【正義】  
「（貸し？）そ…そうなんだ？…では一応、予約というカタチでお願い出来ますか？」

貸しについて訊きたかったが、訊くと後戻り出来ないような気がしたので本能に従ってスルー！。

【航】  
「揉み手でそう言いつつ横にスライドした理由を説明してくれると助かるんだけど…？」

【正義】  
「誰も人には言えないことってありますよね？…お姉さんもそう思いませんか？」

【航】  
「違っ！？…そうじゃないって！…何か勘違いしてるってっ！」

先程コーヒーを出してから暇そうにテーブルを拭いていた彼女を不憫に思い、話を振ってみた……因みに航が何か言っていた気がするが、空耳だと思う。

【ウェイトレス】  
「わっ、私ですか？…えーっと、は…はい」

すると彼女は此方に背を向け裏返った声を返してきた……その様子を疑問に思い航に目で尋ねると、彼はかぶりを振って肩を竦めるだけだった。

【正義】

「航、芽衣さんに連絡してくれないか？…俺は今の話を室岡先生に報告するから」

航が頷いたのを確認して席を立ち、携帯を耳に当てその場から離れた。

【室岡】

『もしもし、どちらさまですか』

すぐにコールが途切れ聴こえてきた声はえらくハイだった……受話器の向こう側が容易に想像出来る程に。

【正義】

「こんばんは、先生…七瀬ですけど…」

【室岡】

『ん？…ななせ？…ななせななせ七瀬っ！？……………もしかして、鳴響学園1年A組の七瀬正義君？』

前半と後半の喋り方が全く違うことから分かる様に、物凄く動揺しているようだった……相変わらず可愛い人だ。

【正義】

「お楽しみの方ですので、用件だけ手短に言いますね？」

【室岡】

『ゴメンね?…学園の外でまで気を遣わせちゃって…うん、良いよ』

【正義】

「条件にほぼ該当する部屋が見つかった『本当っ!?!』ええ、詳しくは……先生のウチってファックスとかあります?」

【室岡】

『うん、あるよ。…番号は6 1 5 2…分かった?』

こつも簡単に自宅の番号を教える先生が、悪い狼に騙されない心配でたまらなかった……確り登録したが。

【正義】

「はい、明日にでも送りますね?…それではまた来週、学園で」

【室岡】

『うん、ホントにありがとう…それじゃ』

通話が途切れたのを確認すると、カウンター席へと向かった。

【航】

「いやいやいや、落ち着いて下さいっ………はぁ………だからっ! ……今、ちょっと外してて………だ〜か〜ら〜マサ君は今」

すると、航が電話片手に頭を抱えていた……正確には両手で頭を抱え、肘の内側と耳で携帯を挟み込んでいると言ったほうが正しい……器用なヤツだ。

【正義】

「後ろにいるけど？」

【航】

「そうそう、後ろにいる……って、ぎいやあああつ！……怖っ、どんな顔してんのっ！？」

その肩を叩いて面白い顔を作ったつもりなのだが、航の悲鳴からモ判るように面白く無かったらしい……シヨックだ。

【正義】

「で、どうした？……さり気なく毒を吐く少年N」

言っている最中に航の頭上に『梓』が出現し、言い終わると同時に点滅し始め……。

【航 N（暫定）】

「ギャーっ！？……台詞がリアルタイムで反映されてるっ！？」

の状態に更新されていた……俺はと言うと、ぬるい展開の定義について考えたくなっていた。

【N（暫定）】

「はあ〜やっぱり。……あい、電話…芽衣先輩が代わってくれて……」

【正義】

「ああ、わかった。……もしも『正義かつ！！！？』……ええ、耳がキーンってなってる正義です」

何故か肩を落としているN（暫定）から携帯を受け取り問いかける



と、カウンター（大）が俺の耳を貫いた………まだ耳鳴りしてる。

【芽衣】

『わりい、オレとしたことが、つい取り乱しちまって。…で、本題なんだが、アイツは一体なにモンだ？』

【正義】

「ん？……アイツとは？『瑞姫だ、瑞姫っ』…が、どうかしたんですか？」

【芽衣】

『どうしたもこうしたもねえよ…アイツ、人をおちよくる趣味でもあるのか？』

声から察するにイラついているのは分かるが…全然話が見えてこないな。

【正義】

「どづいつことですか？」

【芽衣】

『今、アイツを追って3階に降りて来たんだけどよ……アイツ、4階にいやがるんだ』

相変わらず状況が理解できなかったたのでN（暫定）に目で助けを求めると、首を横に振るだけだった………ミステリー？

【正義】

「“移動する瑞姫を追いかけている”ってのは何となく解りましたけど…なんで追いかける必要があるんです？」

【芽衣】

『そういや、そうだな…なんで追いかけてんだろオレ?…まあ、いや。とりあえず今から4階に戻るから、電話このままにしておらってもいいか?』

時々抜けてるよな、等と思いつつN君(面倒臭いので)の様子を窺うと、聞き耳を立てていたのかウンウンと頷いていた……マナーがなってない、今度じっくり教育しなければ。

【正義】

「ええ、構いませんよ。…俺の携帯じゃありませんし」

【芽衣】

『もうすぐ店の階段の下に着く、呼んだら出てきてくれ。…お前の意見が聞きたい』

【正義】

「よく分かりませんが分かりました」

意見が聞きたい…ねえ、一体なんなんだ?

【N(暫定)】

「ワケわかんなかったでしょ?…ワープするだの消えるだの」

ワープ?消える?…俺はそんなこと聞いてないぞ。…そういや、美咲桜も消えるって言ってたよな……人が消えるなんてことがあり得るのか?

【正義】

「ああ、サツパリだ…で、意見が聞きたいから出てこいって言われた…ズズツ」

【N（暫定）】

「意見って…あり得ない現象について？」

【正義】

「らしいね。…それはそうと、N君コーヒーおかわりしても良いかな？…さっきから脳が糖分寄越せって煩いんだ」

【N（暫定）】

「N君…ね。因みにこの“N”はどこから取ったの？…あっ、すみません、彼にコーヒーを」

【正義】

「A・鳴海のN。B・ニヤアのN。C・ニートのN。…の、どれか」

【航】

「なんでコーヒーまで奢ったのにクイズ形式なの…しかもBとCが明らかにおかしい。Cに至ってはまだ該当しないでしょ？」

【正義】

「心配するな。正解はそこに無い」『い、おい』ん？…着いたかな？…もしもし」

携帯から聴こえてきた声に意外と早かったな、と思いつつ問いかけた。

【芽衣】

『着いたから出てきてくれ。…ああそうそう、航の馬鹿は絶っつっ

対に連れてくるなよ?…んじやな 』

あのダークな声を疑問に思いつつ携帯を耳から離すと、アホ面したN君に肩を叩かれた…君のように生きられたら幸せだろうな。

【N（暫定）】

「行くんでしょ?…暇だから俺も行くよ」

【正義】

「お前…芽衣さんに何言っただ?…めっちゃ怖い声で、絶対に連れてくるなって言われたぞ」

【N（暫定）】

「うん、』立ったまま寝てたんじやないですか』かなあ?…いや、それとも』あははははっ、もし本当に消えたら笑えますね』かな?…はたまた…」

指折り数えどんどん出てくる心当たりに呆れつつ、未だ喋り続けるアホ面の横を通り過ぎ店を後にした。

【芽衣】

「遅かったな?」

4階へ下り立つと、廊下の窓枠に腰掛けた彼女が声を掛けてきた。

【正義】

「すみません、馬鹿に捕まっています。…で、意見とは?」

歩み寄り苦笑して返すと、彼女は身体を捻り窓の外を指差し…。

【芽衣】

「…ほら、あそこ見てみる」

そう言っつて顔を此方に向け手招きしてきた。

【正義】

「では、失礼して……………ん？…あのピョコピョコしてるヤツですか？」

彼女の身体と開いた窓フレームの間に体を滑り込ませ指先を目で追うと、金色の尻尾が委部棟（委員会・部室関連棟の略称）3階廊下の柱の陰に見え隠れしていた。

【芽衣】

「あ…ああ、アレ…だ」

瑞姫は何をしているんだろう、等と疑問に思いつつその様子を眺めていると、背後から蚊の鳴くような声が聞こえてきた。

【正義】

「？…あっ（しまった。余計な刺激を！）…すみません、いま離れますっ！」

先程とはうって変わったその声を疑問に思いつつ首を180°反転させると、彼女の顔は耳まで真っ赤に染まっており、その意味に気づいた俺は思いきり後退した……やっちまった感と動揺がコラボして生まれたムーンウォークで。

【芽衣】

「……………」

その結果、場の空気が微妙な感じになったのは言うまでもない……  
彼女はチラチラと此方を見るものの言葉を発しなくなってしまった。

【正義】

「とっ……とりあえず、俺はどうしたらいいですか？……アレを捕まえて来ればいいなら今すぐ行きますが……」

その様子をヤバいと感じた俺は、この微妙な空気を霧散させる為におどけたように言っただけでその場で走る真似をした……きつと今の俺は、端から見ればとてもイタイ奴に見えてると思う。

【芽衣】

「へ？……お前は何をやってるんだ？」

一分程そのイタイ行動を続けていると、それに気づいた彼女が呆れたように言ってきた……あの状況が打破できて良かったが、彼女の言葉で俺のピュアハートが多大なダメージを負った。

【正義】

「いや、電話で追いかけてたみたいなのを言っただけだから、一応ウォーミングアップを、と」

彼女の赤みが引いた頬に安堵して胸を撫で降ろし、それっぽい言葉を選び返した……当然イタイ行動は止めてから。

【芽衣】

「いや、正義はここから見ていてくれ。……アイツがどう移動してるのかを、な」

つまり…消えるってのはモノの喩えで、本当に消えるとは思ってないってことか……まあ、人が消える訳無いし、そう考えるのは当たり前前か。

【正義】

「分かりました。…じゃあ、頑張ってください…」

そう言って手を振ると彼女は ああ と頷いて踵を返し、委部棟へと歩いていった。

【正義】

「んじゃ、『消える』カラクリを見せてもらおうかな……って、ええーっ!?…消え……てない」

その姿が見えなくなると窓枠に腰掛けて先程の位置に視線を向けると、ついさっきまで見えていた金色の尻尾が消えており、急いで両側の階段を順に目で追っていくと、瑞姫は委部棟2階の踊り場に姿を現した……普通に南側の階段から。

【正義】

「しかも電話してる……走ってもいないし、これと言って何もしてないな。…うーん、なんで“消える”って表現をしたんだろうな？」

それから5分程その様子を眺めていると、ある事に気がついた……芽衣さんが立ち止まるったり移動したりすると、瑞姫はそれが解っているかのような行動をとる…という事だ。

【正義】

「止まれば止まる。歩けば歩く。走れば早足…しかも、未だ二人が同じ階に居た試しがない。…つまり、瑞姫が芽衣さんの位置を完璧

に把握してることは間違いない…何故かは解らないが」

芽衣さんの“消える”って表現…正確には“居ない”じゃないのか？…芽衣さんからは未だ見えない筈……そうかつ！

【正義】

「芽衣さんはフロア移動する前にこっちの棟から位置を確認して移動してる…確かに、確認までして、いざ、その場所にいざ行って瑞姫が居なかつたら、消えた様な感覚を覚える筈だ」

しかし、瑞姫はなんで芽衣さんの声を無視してるんだ？…只電話して……電話？

【正義】

「なるほどねえ…そういうことか。…聞かれたら困るとかそういう類いの内容なら、あの行動も領ける…多少やり過ぎな気もするけど」  
事の全容が理解できたのでメールに『戻って来て下さい』とだけ書いて送ると、2分も経たないうちに芽衣さんが戻ってきた。

【芽衣】

「アイツがどうやってこっちの位置を把握してるか解ったか？」

【正義】

「いえ、分かりません…憶測ならいくつもあります、どれも現実味に欠ける……まあ、結局は憶測で終わるんでしょうけどね」

【芽衣】



「はあ？…どうしてだ？」

【正義】

「だって瑞姫…美咲桜に対して『人間が消えたりする筈が無い』って言ってたじゃないですか。…要するに、話す気が無いんでしょ」

もしかしたら…美咲桜に対してだけなのかもしれないが、な。

【芽衣】

「なら、アイツがどうやって移動してたのか教えてくれ。…どれだけ急いでも背中すら見えなかったのが納得いかねえ」

【正義】

「じゃあ一つ聞かせて下さい…瑞姫の足音は聞こえましたか？」

【芽衣】

「いや、全然…って、まさか…走ってないのか？」

【正義】

「窓際を移動してたからハッキリとは分かりませんが、早足にしては相当速かったです。…そうか、足音をさせずにあのスピードで」

なにかやってるな…身のこなしと言うか、身体の使い方が普通じゃない。

【芽衣】

「どつかしたのか？…眉間に皺が寄ってるぞ」

【正義】

「いえ、格闘技とかやってるのかなって」

【芽衣】

「その可能性は低いだろうな…アイツの肩とか腕を触ったが、殆ど筋肉は付いてなかった。…足も細くて綺麗なモンだったしな」

【正義】

「興味深いな…よしっ、いってみよ。芽衣さん…俺いきますんで、戻るなら戻ってても良いですよ。…じゃ」

そう言っつて踵を反し委部棟へと歩を進めた。

【芽衣】

「いくつて…アイツのどこか？」

背後からの声に頭の上に両手で輪を作り答えると、窓際に寄り瑞姫の位置を確認して階下を目指した。

【芽衣】

「ははっ…意地になってやがるな。…じゃあ、オレは鬼ごっこを観戦させてもらおうとするか。アイツなら、もしかしたら…」

此方の居場所を悟られないよう足音を消して一階へと降りてきた俺

は、廊下側からは死角になっている柱に背中を預けるようにして立っていた。

【正義】

「(いつせーのっ、せっ!)」

これで気づかれてたら漫画の世界だよな、等と思いつつ柱の陰から飛び出した。

【正義】

「……………居ない」

知覚で動いている線は消えたな、等と思いつつ他の察知方法を探る為に廊下を歩いてみた。

【正義】

「太陽が沈んでない今の時間帯じゃ池の水面には映らない…………となると、やっぱり防犯カメラかなあ?…イヤホンか何かで守衛さんに居場所を…………?」

考えつく可能性をひとつひとつ潰しながら昇降口の方へと向かっていると、踊り場の陰から何か黄色いモノが見えたような気がした。

【正義】

「ん〜?…見間違いかな〜?」

立ち止まってそのポイントを凝視してみたが、何も見えなかった。

【正義】

「なんだっただんだろ?…瑞姫の髪?…いやいや、んなバカうおっ!

「？」

見間違いだろうと結論づけてそのまま廊下を進み、踊り場の角を曲がると目の前に瑞姫が立っており、驚いた俺は先程修得したムーンウォークを繰り出すのだった。

【正義】

「~~~~~っ!?!?!?」

その結果、背後の壁に後頭部をしこたま打ち付け、しゃがみこんで頭を抱える羽目になった……ムチャクチャいてえ。

【瑞姫】

「大丈夫ですか正義様っ!?!?!?お怪我はっ!?!?」

すると瑞姫が駆け寄って来て、目の前で膝立ちになり身体中をペタペタと触ってきた……胸や腰まわりを重点的に。

【正義】

「今まで何を？」

これってセクハラにならないのかな、等と思いつつ表情と行動が一致してない目の前の人に尋ねた。

【瑞姫】

「つい先程まで電話してましたわ。……立てますか？」

すると瑞姫は立ち上がったそう返しながら手を差し伸べてきた。

【正義】

「すまないな…っと、店を出てからずっと？」

その手を取り立ち上がった。

【瑞姫】

「はい、色々と急でしたので話が長引いてしまいまして…」心配をおかけしました。私を捜しにいらしたんですよね？」

急…ね、ダメ元で訊いておくか。

【正義】

「ああ、俺で二人目な。…それは人に話せない類いの内容？」

【瑞姫】

「ええ、仰るとおりです。…理事への電話でしたので」

予想通り、内容を聞かれたら困る類いの話だったか…：…しっかし、逃げ回る位ならそれを身振り手振りで伝えれば良いのに…：本当によく解らないヤツ。

【正義】

「そうか、やっぱり理事長ってのは大変なんだな。…こんな時間まで電話が鳴るなんて」

美咲桜が心配するといけないなと思い、そう言うとカフェテリアへ向けて歩きだした。

【瑞姫】

「いえ、大変なのは今だけで、来週からは暇になると思いますわ」

すると瑞姫はパタパタと駆け寄って来て隣に並び、そう言うなり何故かモジモジし始めた。

【正義】

「そういえば身に余る運営権を学園長に譲渡するんだっただな…生徒は生徒らしく。…ホント、瑞姫って大人だよな」

芽衣さんの件で頭を抱えていた俺は当然の如くスルー……………これ以上厄介事が増えるのはゴメンだからな。

【瑞姫】

「そつ、そんなことありませんわ。…私は只、この学園で…」

尻窄みにそう言った瑞姫の様子を気づかれないように見てみると、真っ白な顔を真紅に染めうつ向いていた……………この反応はアウトっばいな。いくら上積みが厚くても、さすがに顔の赤みまでは調節出来ないだろう。

【正義】

「一つ気になることがあるんだけど、いいか？」

まだ出会ってから三時間ぐらしか経ってないのに…よっぽど惚れやすいタイプなのか。いや、そうとも言いきれないか…俺の事を知っていたとすれば、もしくは…。

【瑞姫】

「は、はいっ、なんでしょう?…スリーサイズでも何でも答え…」

俺の問いかけにガバツと顔を上げ、此方を向いて口を開いた瑞姫の瞳はキラキラと輝いていた。

【正義】

「いや違うからっ！そんなこと……微塵も訊こうと思ってないからっ！」

いきなりご乱心してしまった彼女に、なんでこうなるんだ、と内心愚痴りつつ彼女の言葉を遮った……約2秒ほど間が空いている理由はご想像にお任せする。

【瑞姫】

「そうですね……私の貧相な体のスリーサイズになんて興味ありませんわよね。……はあく、ガツカリ……ですわ」

ニコニコしながら落胆したような声でそう言った彼女を見ていた俺が、頭を抱えたのは言うまでもない……バレてる。

【正義】

「俺“達”の居場所がなんでわかるんだ？……俺に至っては足音や気配まで消してたのに……」

その様子から弁解しても無駄だと察した俺は、先程から気になっていた本題を切り出した……ダメ元で。

【瑞姫】

「乙女のヒ・ミ・ツ……ですわ」

おいおい、せめて否定ぐらいしろよ……ホントよく解らねえ。

【正義】

「はあ……んじゃ聞き方を変えるわ……それは物や人を利用して？」

【瑞姫】

「ん〜…私が答えたら、此方の質問にも答えてくださいます?」

何を訊かれるか不安だけど、それで芽衣さんに答えが返せるなら安いもんだよな。

【正義】

「ああ、分かった…答えられる範囲で答えよう」

一応釘を刺すのも忘れない…正直、宇宙人と話している感覚だ。

【瑞姫】

「正義様や園田さんの位置を特定する為に物や人を利用していたか…答えはノーです」

もし言ってることが本当なら、完全にお手上げだな…もう他の方法が思いつかない…マジで宇宙人?

【瑞姫】

「それは…私にしかできないことだと…」

【正義】

「それってどういう」

【瑞姫】

「よく見ていれば、いつか解るかもしれないわね。…それと、今は私の番ですよ?」

瑞姫にしかできないような事で見ていると解る…分からん。



【正義】

「悪い。…何が訊きたい？…スリーサイズ？」

【瑞姫】

「脱いで計測させてくれます？」

目がマジだった…ジョークなのに。

【正義】

「無理っ、俺まだ死にたく無いし。…他で頼むわ」

【瑞姫】

「では、単刀直入に訊きます。…どうして音楽界から姿を消してしまわれたのですか？」

前に回り込んで足を止め、真剣な顔で訊いてきた。

【正義】

「悪いな、昨日今日知り合った人間に話す気は無い。…他のにしてくれ」

その肩を叩いて返し横を通り過ぎた……沸き出てくるドス黒い感情を抑え込みながら。

【瑞姫】

「ゴメンなさいっ…私っ、また…っ」

背後から聞こえてきた嗚咽交じりの声に思わず足を止め、後ろ手にハンカチを差し出した。

【瑞姫】

「すみません…私、なんだか正義様に迷惑ばかり…っ」

その手からハンカチが消えると階段を上り始めた。

【正義】

「そう思ってるなら、早く泣き止んでくれると有難い……お前が泣いたままだったら俺がボコボコにされかねない」

【瑞姫】

「ふえ？…ボコボコですか？」

【正義】

「お前を捜しに来た先輩が居ただろ？…あの人は“こういうこと”に煩くてな」

【瑞姫】

「へ？…しかし、あの方は暴力が嫌いだと仰ってましたが」

【正義】

「いづれ分かる。…まあ、この場合はボコられても致し方ないがな…俺が泣かせたのは事実だし」

等と言っている間に4階に辿り着いていた……芽衣さん、まだ居たのか。

【芽衣】

「一体どうやって捕まえたんだっ？…一階に居たのは辛うじて分かったが、窓際を移動してくれないからサッパリだ」

此方に気づいた芽衣さんが駆け寄り訊いてきた。

【正義】

「色々な可能性を考慮しながら移動してたので、敢えて窓際を歩かなかったんです。…それも全て水の泡でしたけど…なあ?」

そう返して俺の背後に隠れるようにして立っていた瑞姫を引き剥がし、その肩を叩いた。

【瑞姫】

「うっ…ご迷惑おかけして申し訳ありませんでしたっ」

するとバツの悪そうな顔をしてそう言い頭を下げた。

【芽衣】

「なあ、正義…どういうことだ?…なんでコイツは謝ってた?」

【正義】

「とりあえず、順を追って話しますね。まず」

瑞姫から訊いた話を理解しやすいよう、自分が取った行動に織り交ぜつつ説明した。

【正義】

「…という訳です。…納得いかないとは思いますが、とりあえず戻りましょう」

ずっと険しい表情をしている芽衣さんにそう言いカフェテリアへと向かった。

【瑞姫】

「あの～正義様…園田さんはあのままで良いのですか？」

すぐに後を追ってきた瑞姫が訊いてきた。

【正義】

「ああ、すぐに戻って来るよ。…俺と立ち位置が逆だったら、きっと俺も“ああなってる”と思うし」

【瑞姫】

「そうですか……お互いのことを良くわかってらっしゃいますのね」

【正義】

「ま、な…3年近く付き合ってたら、大体のことは解るよ…知りたくないことも含めて」

帰りに相談しないとな、等と思いつつカフェテリアの扉を押した。

【瑞姫】

「……………いいなあ」

【正義】

「？…何か言ったか？」

【瑞姫】

「私、嫌な女だと思いませんか？」

扉を手で押さえたまま振り返り訊ねると、瑞姫は顔を伏せてそう言う横を通り過ぎて行った。

【正義】

「嫌な女…か」

自分の“何を”指して言った言葉なのかは知らない…けど、それを言うなら俺だって嫌な男だ。…自分の都合で、また一人の娘を傷つけようとしてるんだから。

【芽衣】

「どうした正義？…こんな所ではーっとして」

等と考えていると本人から肩を叩かれた……………今の俺は笑えているだろうか。

【正義】

「芽衣さんを待ってたんですよ……………行きましょう」

彼女の顔を見ずに言うと、角を曲がって姿を消した瑞姫の後を追った。

【芽衣】

「正義のヤツ、まだあんな顔を持ってたのか……………なんだ？…この嫌な感じは」

【美咲桜】

「それじゃ…ヒロ君、鳴海君…また来週」

あれから他愛ない話をして時間を潰し、7時半に用事があると言つて席を立った亜沙美に併せて今日はお開きとなった。

【正義】

「ああ、またな」

そして俺と航はいつもの様に校門前で女性陣を見送っていた。

【航】

「うん、バイバイ」

恋華と亜沙美と芽衣さんを見送り、今は桜さんが開いたドアから後部座席に乗り込む美咲桜に手を振っていた。

【桜】

「正義様、鳴海君、それではまた」

美咲桜が乗り込むと桜さんはドアを閉め、此方を向いて会釈すると踵を返し運転席へと姿を消した。

【正・航】

「……………」

テールランプが見えなくなるまで見送った俺達は顔を見合わせて大きく息を吐き、同時に背後に立つ金髪に視線を向けた。

【瑞姫】  
「（ニッコリ）」

校門に辿り着いた俺達はある事に気がついて瑞姫に訊いてみたのだが、先程からずっとこの調子だ……いくら送っていかうかと言われるてもニッコリ笑って手を振るだけだ。

【航】

「どう見る？（耳打ち）」

【正義】

「俺的には、『お気になさらず』…かな？（耳打ち）」

【航】

「一応、訊いてみた方が良いよね？（耳打ち）」

【正義】

「当たり前だ…お前はこんな人気のない場所に、女の子ひとり置いていく気か？…という訳で…ほら、逝けっ！（耳打ち&紅葉アタック）」

【航】

「~~~~~っ！?…はあ…あのさ、神城さんはどうやって帰るの?」

【瑞姫】

「ハイヤーです。…一応8時で予約していたので、もうじき来ると…あっ、アレだと思えますわ」

瑞姫が指差した方へと視線を移すと、藍ヶ丘方面から車のライトが近づいてきた。

【航】

「ん〜？…あれハイヤーじゃなくて、赤いスポーツカーだよ？」

【瑞姫】

「いえ、あれで間違いないですわ。…日本には数台しか無いと仰ってましたし」

【正義】

「今時のハイヤーは車種まで選べるのか。…やっぱりフェラーリとかもあるのか？」

【瑞姫】

「はい、ありましたね…会長さん曰く『いつも同じだと飽きる』と仰る方に対応する為に始めたサービスらしいですよ」

【正義】

「飽きるって…じゃあハイヤーなんて乗るなよ」

呆れたように返していると、赤いスポーツカーが目の前に停まった。

【航】

「はあ〜〜カッコいい〜〜…そうだっ、写真撮っとこっ！」

興奮したようにそう言った航はリムジンの後部座席からデジカメを取り出し、お目当ての車を色んな角度から撮り始めた……そんな航を前に、俺と瑞姫は顔を見合わせて苦笑することしか出来ない。



【運転手】

「神城様、お迎えにあがりました。…これから如何なさいますか？」  
車から降りてきた女性は一度航に視線を向けて微笑むと、此方に会釈して瑞姫に訊ねた。

【瑞姫】

「そうですね…今日はまだメイドが来ていないから…食事に行きましょうか？…それから家までお願いするわ」

【運転手】

「私のような者がご一緒させて戴いても宜しいのですか？」

【瑞姫】

「ええ、是非…私、忙しくてあまり自炊する暇がなくて…美味しいお店を教えてくれると助かるわ」

【運転手】

「ありがとうございます…では、ご一緒させて戴きます。…すぐに出来ますか？」

【瑞姫】

「ええ、すぐに出られるようにしておいて」「畏まりました」……ふう

運転手の女性は会釈してから車に乗り込んだ。

【正義】

「まだ行かないのか？…疲れてるなら早く帰ったほうが…」

【瑞姫】

「ええ、帰る前に渡すものがありました……コレを」

瑞姫は胸ポケットからカードケースを取り出し、中から一枚抜いて裏側に何かを記入すると、そう言って此方に差し出してきた。

【正義】

「名刺？…ああ、携帯番号ね。…それじゃあ今から鳴らすな？」

鳴響学園理事長代行と書かれた名刺を受け取り、携帯を取り出し記載されていた番号をプッシュした。

【瑞姫】

「ありがとうございますっ！…それではお休みなさい正義様っ」

瑞姫は着信音が鳴り始めたそれを大事そうに両手で包むと胸に押し当て、華が咲いたように笑うと嬉しそうにそう言い、ペコリと頭を下げてから小走りで駆けていった。

【航】

「不思議な娘だよね…神城さんって」

遠ざかっていくエキゾーストノートに耳を澄ませていると、一仕事終えた男のような顔をした航が戻ってきた。

【正義】

「不思議ねえ…俺にはアイツが宇宙人に見えるよ」

そう返しながら名刺を財布に仕舞った。

【航】

「その様子だと…カフェテリアを出てから何かあったみたいだね？  
…何があったの？」

【正義】

「他にも相談したいことあるし、長くなるから車の中で話すわ」

【航】

「その顔だと…真面目な話みたいだね？…わかった」

そう言ってリムジンに乗り込んだ航の後に続いた。

ウチの近所にある公園に寄ってもらった俺は、航と隣り合ったブランコに腰掛け、車内で話しかれなかった瑞姫のことを話していた。

【正義】

「現段階では解らない。…まあ、本人が嘘をついてなければいずれ解るだろ」

【航】

「マサ君の言いたいことが漸く分かったよ。…確かに宇宙人って表現がピッタリくるね」

【正義】

「瑞姫の話はこんなとこだ。…で、他に何か聞きたいことはあるか？…無いなら本題にいくが…」

【航】

「無い、俺もマサ君の意見と同じ。…彼女の言動は長期間接しないと見極められないモノだと思った。…フィルターだらけって言うか、本音が全く見えて来なかったから」

「やっぱりか…瑞姫を見ると、自分を作って何かを隠してるような印象を受けるんだよな…何かは見当もつかないが。」

【正義】

「相談ってのは、芽衣さんのことなんだ。…俺の勘違いなら良いんだけど、お前から見て芽衣さんは俺に好意を抱いてると思うか？」

【航】

「まず間違いなくフラグは立ってるね。…で、それが？」

確かフラグは……好意が向いてるって意味だったよな？（独自調査による）あは……あはは……はあ~~~~~当たりかよ。

【正義】

「俺、亜沙美に話した覚えがあるんだけど……亜沙美はなんて言ってたんだ？……俺が美咲桜の件を調べてる理由もちゃんと話したのか？……俺が何を求めているのかを……どうありたいのかを、さ」

知ってたら普通は諦めると思っただよな……俺がどれだけ美咲桜を大事に思ってるのかを。

【航】

「ああ、あのプロポーズまがゴホツゴホツ！！……聞いているけど？」

プロポーズ？……亜沙美は一体どういう風に話をしたんだ？

【正義】

「当然その場に芽衣さんも居たんだろ？……普通、それを知ったら諦めるものなんじゃないのか？」

【航】

「なんで？」

呆れたように返された。

【正義】

「なんでって……だって俺は美咲桜のことを一番大事に思ってるんだぞ？……それも先を願う程に。そんな奴を好きになっても……」

【航】

「好きになるのは本人の自由でしょ？…世の中、報われなくても好きで居続ける人は沢山いる。…そもそも、マサ君の場合はまだ報われないって決まってるんだから、何もおかしいことは無いでしょ？」

そう言うなり立ち上がって公園を出ていった航に首をもたげて待つこと2分、前方から何かが顔をめがけて飛んで来た。

【正義】

「よつとっ！…ん？…缶？」

咄嗟に右手を前に突き出してそれを掴むと、俺が好んで飲むメーカーの缶コーヒーだった。

【航】

「まだ長くなりそうだからね…オゴリ」

続いて暗闇の中から姿を現した航はそう言つと先程の位置に腰掛けた。

【正義】

「サンキュ。…確かにそりゃそうなんだけど、さ……もう、川上さんの時みたいに傷つけないんだ。…あんな顔を見たくないんだよ」

そこで言葉を切つて口をつけたコーヒーは、飲み慣れたブラックなのに苦く感じられた。

【航】

「ははっ…告白される前に相談するあたりがマサ君らしい。…つまり、どう接すれば良いのかってこと?」

【正義】

「ああ…距離を置くころにも、只でさえ接点の少ない芽衣さんだ…絶対に気づかれる。…かと言って急に冷たい態度をとる訳にはいかないし…なあ、どうすればいいと思う?」

【航】

「そうだね…結局は、その場その場で自分が後悔しないように動くしかないんじゃないかな?」

つまり現状維持ってことか…言われてみれば川上さんの時もそうだったしな。…急に告白されて、自己嫌悪して、断って、また友達に戻れた。

【正義】

「川上さんみたいに…」

芽衣さんは変わらず友達で居てくれるだろうか?…それが……恐い。

【航】

「みたいに…?」

【正義】

「なんでも無い。…そっか、そうだよな。…それに、まだ告白されるって決まった訳じゃねえしな。…悪かったな、こんな事に時間取らせちまって」

温くなってきたコーヒを一気に飲み干し、少し離れた所に置かれ

た屑籠に缶を放り投げた。

カンコンガシャ

【航】

「ううん、話してくれて嬉しかったよ。…他には何か無い？…俺で良ければ愚痴でも何でも聞くから、さっ！」

そう言つと航も同じように缶を屑籠へと放り投げた。

ガサッ

【正義】

「き…急に何か話せつて言われてもな。…元々そんなに話題を提供するほうじゃないし…寧ろ、訊きたいことなら山のようにあるんだけど」

茂みに刺さつた缶に笑いを誘われたが、訊きたいことは真面目な話なので何とか堪えた。

【航】

「訊きたいこと？…なに？」

【正義】

「今週に入ってからお前も恋華もよく居眠りしてたけど…疲れの原因つて、やっぱり美咲桜の…」

覚えている限りでも恋華が4回、航に至っては7回も授業中に舟を漕いでいた…昨日は帰りの車中でも寝ていたしな。



【航】

「後悔してる？…俺達に話したこと…」

航はそう言つと空を見上げた。

【正義】

「どうして？」

【航】

「そんな顔してるから…申し訳なさそうな顔を」

【正義】

「そっか…そんな顔してるか…けど、ハズレだ。…俺がしてるのは後悔じゃなくて心配…美咲桜と同じように、お前達も大事だから」

【航】

「心配するのは構わない…けど、後悔だけは絶対にしちゃダメだよ？…本当に俺達のことを大事に思ってるなら、ね」

そう言いながら此方を向いた航の顔は、今にも泣き出しそうに見えるた。

【正義】

「どうし…」

【航】

「そういえばっ、先生との電話はどうだった？…難航してたって言うぐらいだから、喜んでたんじゃない？」

俺の言葉を遮るように言うと、航は立ち上がりブランコを漕ぎ始めた……先程の様子を誤魔化すように。

【正義】

「ああ、声を弾ませて喜んでたよ。…あの声から察するに、部屋がみつかったことよりも、妹さんと一緒に住まなくて済むからだろうけど」

見なかったことにして同じように立ち上がり、ブランコを漕ぎつつおどけて返した。

【航】

「8月にエアコンだっけ？…まさか美咲桜ちゃん超えしてる娘が存在するなんて思わなかったよ。…美咲桜ちゃんでも携帯が最高なんでしょ？」

航が言っていることは事実だ……俺が小3の時に初めて買って貰った携帯は、美咲桜の手によって再起不能になっている……しかも、買った翌日だ。

【正義】

「いや、中学の三年間があるから分からない…アイツのメカ音痴は筋金入りだからな」

因みに、それ以前から美咲桜は科学や家庭科の授業で色々なモノを破壊していた。

【航】

「いやいやいや、いくらメカ音痴でもさすがにエアコンは壊さないっしょ？」

それを目の前で見ていた俺が貸してと言われて素直に貸す筈がない  
…では、何故俺の携帯が死んでしまったのか？

【正義】

「お前はアレを目の前で見たこと無いからそう言えるんだ…アイツ  
の手によって何度PCから俺の息子《作曲データ》が消失したこと  
か」

理由は簡単…俺が寝ている隙にポケットから抜き取りやがったから  
だ。

【航】

「その話聞いたら人事とは思えなくなってきたよ…ウチ《恋華》  
のは違った意味で破壊しそっだし」

ボンツと言う破裂音で目を醒ました時にはもう手遅れ…マイサン  
はプスプスと黒い煙を吐き出し、壊れたバイブ機能によって美咲桜  
の机の上を這いずり回っていた。

【正義】

「あっ、そっいや先生に番号聞いたんだっただ…さっきお前が調べ  
てくれた物件の情報をPCに送ってくれない？…帰ってからで良い  
からさ。…プリントアウトしてファックスで送るから」

美咲桜の個性(?)についてはいずれ触れる機会があると思うから  
この辺で割愛しておく。

【航】

「わかった、今日中に送っておくよ」

【正義】

「助かる…あと、予約のほうも頼むな？…あの様子だと見に行くのは時間の問題だと思うからさ」

【航】

「そっちは明日の朝にでも連絡しておくよ。…ところで、マサ君さつき神城さんから番号教えてもらってなかった？」

【正義】

「ああ、それがどうかしたか？」

【航】

「何この敗北感…俺達がいくら訊いても『もう1台作ったら教えてください』の一点張りだったのに…なんでマサ君だけ？」

【正義】

「さつき話したと思うが、アイツは以前から俺のことを知ってるみたいなんだ…しかもピアノ奏者としての俺を。…だから、その辺のことが関係してるのかもな」

【航】

「マサ君ってそんなに有名だったのっ！？…亜沙美ちゃんがプロと遜色ないって言ってたから相当巧いことは想像ついてたけど、まさか世界レベルとは思わなかったよ」

【正義】

「あの程度の演奏でそれは言い過ぎだ。…大体、世界レベルって何だよ？…俺は海外に招待された覚えはないぞ」

【航】

「だって…アメリカに居た神城さんが知ってる時点で、この小さな島国を飛び出してるのは事実でしょ？」

【正義】

「っ…!？」

そっだ…アメリカに居た筈のアイツが、なんで俺がコンクールに出なくなつた事まで知ってるんだ？…さっきまで日本に居た可能性を考慮して考えてたから気にならなかつたけど、アメリカに居たとなると話は別だ…。

【航】

「…例えメディアから直接情報が配信されずにネットか何かで調べたとしても、それを本人が望んだのであれば、『海外にもマサ君のことを知りたい、演奏を聞きたいと思ってる人が居る』ってことはまず間違いないんだ…」

そのとおりだ…俺は世界に配信されるレベルの取材なんて受けたことがない…一番人目に触れる機会が多かった全国紙の新聞に載った時も、隅のほうに小さく取り上げられただけだった…そう考えると雑誌や新聞の可能性は限りなく零に近い。

【航】

「…ね？…世界レベルの定義にもよるけど、マサ君のピアノは日本を飛び出して…って、どうしたの？…眉間に皺寄せちゃって」

航の声に一度思考を中断してそちらを向くと、漕ぐのをやめて怪訝な顔で此方を見ていた。

【正義】

「いや、お前って人をおだてるのが上手いな」と思って。…その歳で接待スキルを持つてるのはどうなのよ？」

それに対して俺は差し障りの無い内容を返しつつ、再び思考を巡らせる。

【航】

「好きでこうなった訳じゃないさ。…『鳴海』としてパーティーやレセプションに出席するうちに染み付いちゃったんだよ…あの場所は色々と必要だからね」

そうなると航の言うとおりネットで調べていたという線が濃厚だけど、その始まりが解らない…きつかけが無ければまず調べようと思わない筈だ…って、悠長に考えてる場合じゃねえだろっ。

【正義】

「すまないっ、軽率だった…お前達がいつもそういう場で嫌な思いつてるのを知っていた筈なのに…本当にすまないっ」

考え事をしていたとはいえ、あんな軽率な言葉を投げ掛けた自分に自己嫌悪しつつ思いきり頭を下げた。

【航】

「ちよっ、頭まで下げなくても…俺は全然怒ってないから頭を上げてよっ」

頭上から聞こえた穏やかな声にゆっくりと顔を上げると、航は此方と目が合うなり首を横に振った。

【航】

「はあ…いつも思ってたけど、マサ君はすぐ人に頭を下げすぎだつて！…その癖は治した方がいい。俺は慣れてるから何とも思わないけど、慣れてない人にそうやってペコペコ頭を下げてたら印象悪くする一方だよ？」

その意味が解らずに続きを促すと、航は大きく溜め息を吐きそう言つて失笑した。

【正義】

「あははっ…俺も染み付いちゃってるみたいだな。…未だに言われ続けてるもんだから、反射的に頭を下げちまう」

【航】

「どづいづこと？」

【正義】

「ウチの家訓(?)に『悪いことをしたらまず自分を戒めて迷わず頭を下げる、納得するまで頭を上げるな』ってのがあるんだけど…」

【航】

「何なの？…その実体験を基にして作ったような家訓」

【正義】

「聞きたいなら話してやるが…どうする？…因みにあまり笑えない」

【航】

「一応、後学の為に聞いておくよ」

【正義】

「昔、一度だけ父さんと母さんが大喧嘩したことが遇つてさ、父さんが悪いのに謝らなかつたんだ。…で、ギスギスした空気が1週間ぐらい続いたある日、母さんが『実家に帰らせていただきます』を発動させちゃつてさ……………という訳で、さっきの家訓が出来たんだ。…笑えないだろ?」

【航】

「一番重要な部分だけはしよつたら聞く意味ないじゃんっ!…気になるから教えてよっ!」

【正義】

「いや、話したいのは山々なんだが…………父さんの世間体もあるからさ。…言わなくても大体想像つくだろ?」

言えるわけねえよ…………あの威厳ある父さんが、空港で俺の手を引いてゲートを潜り抜けようとした母さんの足にすがりついて泣き喚いでたなんて。

【航】

「世間体…ね。聞かないほうが良いと俺の直感が告げてるから聞かないことにするよ…マサ君の顔見たら、男としてのプライドが崩壊したであろうことは容易に想像できるし」

正解…父さんは未だにその時の事をほじくりかえされたら崩れ落ちてくるよ…………泣きながら。

【正義】

「まあ、今度からは気をつける…ってことでこの話は終わりな?…因みにお前、前髪掻き上げながらカツコ良さに『聞かないことにするよ』とか言ってるけど、『気になって仕方ない』って顔してる



からな？」

【航】

「えっ、嘘っ！？……顔に出てたっ！？」

【正義】

「心配しなくても、続きは恋華の姓が鳴海になった時に話してやるよ」

そう言ってやると、航はボンツと音を発てて真っ赤になった……航のことを知らない人がその姿を見れば『可愛い娘だなあ』と口を揃えて答えるだろう。

【航】

「なっ！？……そそそんなのまだ早いって！……おお俺達まだ16にもなっくなイツ~~~~！！？」

【正義】

「舌を噛むほど動揺するってことはもしかして……ああっ、なるほどっ！……くれぐれも慎重にな？」

【航】

「ひゃっはだっ、まやほつまえひっへにゃいやらっ！（違っからっ、まだそこまでイってないからっ！）」

【正義】

「いち……にい……さん……」

【航】

「どうしたの？……急に指折り数えて」

【正義】

「いや、今日一日でお前が何回ぐらい自爆したのか気になって」

【航】

「なに言ってるのっ!?!?!その原因を作り出してるのはマサ君マサでしょっ!?!?!」

【正義】

「お前…いくら自分の影が薄くなってるからって、話を引き延ばして存在感をアピールしつつ俺に八つ当たりするのやめろよな」

【航】

「酷っ!?!?!それが今まで相談に乗ってくれた親友に対する仕打ちっ!?!?!」

【正義】

「ありがとう…?!?!」

【航】

「いや、なんで疑問文なのさ?!?!しかも、心底解らな…ん?!?!メルだ」

そう言っって液晶を確認した途端、航の表情が急に険しくなった。

【正義】

「どうかした」「ゴメン、用事ができたから帰るね?」「…えっ、おいっ、待てよ!」

その様子が気になったので訊ねようと口を開くと、航は顔の前で両

手を合わせて申し訳なさそうに俺の言葉を遮り、振り返ることなく出口へと駆けていった。

【正義】

「一々気になる行動をとるなっつーの。…気になって眠れなくなったらどうしてくれるだよ、あのバカは」

その姿が見えなくなっってからブランコを降りた俺は一人ぼやくと、茂みに突き刺さっている空き缶を屑籠に投げ入れてから家路についた。

【正義】

「せいっー」

あれから走って帰宅した俺は母さんと一緒に夕食を摂り、組手をする為にリビングで身体をほぐしながら父さんの帰宅を待った。

【明斗】

「クツ……お返し、だっ！」

柔軟を始めてから約30分。漸く帰宅した父さんに組手の相手を頼むと、父さんは滝のように汗を流し、俺が何をした？ と言っなり母さんの背後に隠れてしまった。

【正義】

「なっ!?!…ツツ…!?!…らあっ！」

それから必死に事情を説明して何とか承諾を得た俺は、部屋に戻って制服からジャージに着替え、庭で型の確認をしながら父さんが準備を終えて出てくるのを待った。

【明斗】

「甘いつ!?!…もら…っ!?!…チイイ！」

そして今は準備を終えて出てきた父さんと初心者ルール（貫手での打撃、攻撃時の三点部位《肘・膝・頭》の使用、サミング、投げ、関節、寝技の禁止）で組手をしている最中だ………勿論拳サポ着用のフルコンタクトで。

【正義】

「がっ!?!…ゴホツゴホツ!?!…うゝあゝゝゝ…酷いよ父さん、初心者ルールじゃなかったの?」

何故俺が抗議しているのかと言うと…至近距離での打ち合いの最中父さんは俺の右ハイを膝を落として回避すると、そのまま上体を起こさず懐に潜り込んできた。

そして顔面に右手で回し打ちを放ってきたので、俺は反射的に顎を退き顔の前で両腕を交差して衝撃に備えた……のだが、なんと父さんはガードに当たる寸前に回し打ちを中断すると、そのままの勢いで腹に頭から突っ込んできたのだ。

【英理朱】

「まー君、大丈夫？…痛くなかった？…今日はこの辺でやめといったほうが…」

芝生の上に尻餅をついたまま腹を擦っていると、リビングの縁側に座って組手を見ていた母さんが心配そうな顔で此方へ駆け寄ってきた。

【明斗】

「正義なら大丈夫だよ英理朱。…いつも言ってるけど、俺はこの程度で怪我するような鍛え方はしてない、だから大人しく…」

父さんはそう言って母さんの肩をポンポンと叩くと、戻るよう促した。

【英理朱】

「明斗さん、明日お昼抜き！」

母さんはその手を払い除け、父さんをビシッと指差すとそう言って戻っていった。

【明斗】

「何故っ!？」

それに対して父さんは抗議の声を挙げたが…。

【英理朱】

「当たり前じゃない!…ズルしてまー君に怪我させるところだったんだから。…因みに次ズルしたら1週間、その次は1ヶ月だから」

残念ながらバツサリ切り捨てられた。

【明斗】

「ガーン!…先にズルしたのは正義なのにい」

その場に崩れ落ちた父さんは、何やらブツブツと呟きながら地面に“の”の字を書き始めた。

【英理朱】

「子供がズルしたからって、自分もズルする親がどこにいますかっ!…あっ、そこに居たわ」

そんな父さんを見ながら、呆れたように追加攻撃を加える母さん…  
…普段は優しいんだよ?…ホントだよ?

【明斗】

「ぐふッ…正義…女には…気を…つけ…ろ」

等と母さんのフォローを入れているうちに父さんは尺取り虫状態…つまり、尻を浮かせた状態で地面に突っ伏し、口からは白い煙のようなモノが出て…いるように見えた。

【正義】

「父さんは疲れた体に鞭打ってまで俺の組手に付き合ってくれてるんだ…だから多少のことは眼を瞑ってやってよ？…そうでもしないと今のフラフラな父さんと俺とじゃ、力の差がありすぎて組手にならなくなるし（いや、マジで）」

【英理朱】

「そうなの？…うーん、まー君がそこまで言うなら…」

【明斗】

「偉いぞ正義っ、さすがは俺の子だっ！…動きが鈍っていると自覚してる奴のフォローじゃないが、なっ！」

立ち上がった此方に来た父さんがさしのべてきた手を取ろうとする  
と、父さんはローキックを放ってきた。

【正義】

「うおっと！…その言葉、そっくりそのまま返すよ…」

咄嗟のことに驚いたが、俺は芝生に突いた手足に力を籠めて後方に飛ぶことでそれをかわした…まさか頭突き直後に不意打ちとは、ね。

【明斗】

「それじゃ体も暖まってきたことだし、いつもので行くぞ？」

父さんの言う“いつもの”とは、初心者ルールで禁止されていたサミング以外の攻撃方法を解禁した、七瀬流護身術本来の型を指す。

【正義】

「俺はどこまで引き上げて良いの?…まさかこのまま初心者ルール+腕の使用はガードのみとか言わないよね?」

先程まで俺はハンデを背負って闘っていた…その理由は単純明快、俺のほう为上座だからだ。

【明斗】

「そうだな…お前の鈍り具合から考えると腕での攻撃、貫手に三ポイントぐらいか」

七瀬流護身術には、普通の格闘技では謂わば当たり前となっている『対等な条件で闘う』という概念が存在しない…それは何故か?…これも答えは簡単、強き者が弱き者と対等に闘っても経験値が少ないし、なにより危険だからだ。

【正義】

「打撃のみ…か。分かった、それじゃ始めよつか?…母さん、合図お願いっ!」

ハンデの理由は他にも理念や技等がいくつも関係しているが、組手に集中したのでここでは割愛しておく。

【英理朱】

「それじゃあ二人共いくよ?…Lady……Go!」

【正義・明斗】

「せやっ!(ていつ!)」

母さんの発音の良い合図と同時、互いに距離を詰めた俺と父さんは拳を繰り出した



公園を出た俺はリムジンに乗り込むと家には帰らず、西観風瀬にある御堂家に向かっていた。

【航】

「亜沙美ちゃんの先生は相当な数の生徒を教えてるんだろうな……この1週間、俺達は何も進展しなかったのに」

理由は先程のメールで内容を要約すると……宮園でヴァイオリンの先生と食事をしていて、美咲桜と同時期にルーシェに通っていた娘を見つけた……というものだった。

【航】

「それに比べて俺は……はぁ……悔しいな」

その後亜沙美ちゃんにその娘と時間を貰えるよう交渉してもらうと、OKが貰えたので御堂家で落ち合う約束を取り付けたという訳だ。

【運転手】

「また七瀬君の件ですか、坊っちゃん？……お友達の為に頑張る姿はご立派ですが、それに時間を割きすぎてあまり寝ていないのではありませんか？」

眠い目を擦りながら一人呟いていると、先程まで無言だった運転手の前田さんがミラー越しに此方を見ながら訊いてきた。

【航】

「いや、そんなこと無いよ。…これは夜中にゲームしてる反動…ふわあゝあ、眠い」

そう返して冷蔵庫から缶コーヒーを取り出し、前田さんが自分から話しかけてくるなんて珍しいな、等と思いつつ口に含んだ。

【運転手】

「本当に坊っちゃんは嘘をつくのが下手な方だ…私はもう10年もの間坊っちゃんを見ているんです、隠しても無駄ですよ?」

苦笑しながらそう言っただけで視線を戻した前田さんにムツとした俺は、勝負を挑むことにした。

【航】

「へえゝ前田さんも言うねえゝ?…そこまで言うなら試してみようかな?…ねえ、前田さん?」

【運転手】

「なんでしよう?」

【航】

「俺が今日穿いてるパンツの色を当ててみてよ?…何回答えても良いから」

【運転手】

「何回でも…なるほど、つまり坊っちゃんは全て『違う』と仰る訳ですね?…そして私はその中から嘘を見破る。ふふっ…他に制約は設けなくて良いのですか?」

【航】

「カッチーン！…俄然その鼻っぱしらをへし折りたくなってきたよ。…絶対負けないからねっ！」

【運転手】

「ではいきます…スタンダードに白」

【航】

「違う」

【運転手】

「ならばスティックで男らしい黒」

【航】

「違う」

【運転手】

「ふむ…今日は恋華様の所には？」

【航】

「そう来たか…恋華は今日泊まりには来ないよ」

中々良い質問だけど、無駄だね。…俺が勝算も無しにこんな勝負をする訳ないのに…ふふっ、今日のはまず解るまい…正解を訊かれる前に終わるに決まってる。

【運転手】

「さて、正解も解った事ですし、そろそろ終わりにしましょうか？」

あり得ねえ…まだ原色二つと勝負パンツかどうかしか訊いてないの

に正解が解る筈がない…。

【航】

「は？…ぶつちゃけ、まだ正解すら出てないんですが？」

何故なら今日の俺のパンツの色は…。

【運転手】

「ふふっ…解る筈がないと言いたげな顔ですね？…では、ズバリ言いましたよ。…西瓜模様ですね？」

そうそう、西瓜柄…って。

【航】

「ぶふーっ！？…ゲホッゴホッ…なっ、なんで解ったの？」

あまりの驚きに思わずコーヒを吹き出してしまった俺は、前田さんの仕事を増やしてしまった事を心の中で詫びながら訊ねた。

【運転手】

「昨日の帰りに七瀬君とどんな話をしたか覚えてます？」

昨日？…確か起きた時には家に着いてたような……寝る前…学園を出てから…あっ！

【航】

「今年こそは海に行きたいねって話をした……でも、それと今日のパンツの色は関係無いでしょ？…海に行っても西瓜割りをすると限らないし、俺が西瓜柄のパンツを持っているかどうかも……」

【運転手】

「着きましたよ?」

声に振り返ると、運転席にいた筈の前田さんが外からドアを開け此方を覗き込むようにして立っていた。

【航】

「前田さんなら神城さんと良い勝負ができそうだ。音もなく移動してる辺りが特に……って、なんで中に入らなかったの?」

そう返しながら車を降りると目の前に御堂と書かれた立派な表札があり、此処が敷地の外だと解った。

【運転手】

「坊っちゃん、御堂家の当主とお会いになったことは御座いますか?」

前田さんはそう言って呼び鈴を押すと門の上に設置されていたカメラの前に立ち、鳴海家の家紋が描かれた名刺をかざした。

【航】

「慶治さんけいじとなら何度か顔を合わせてるけど……それが?」

珍しいやり方をするんだな、等と思いつつその様子を見ながら返した。

【運転手】

「社交の場では見せない一面を持っている方だと以前、旦那様が仰られてましたので……もし気になるのでしたら、亜沙美様に訊かれると良いでしょう。……それでは、坊っちゃん、私はこの先で待機

しておりますで」

前田さんは意味深な言葉を残して車に乗り込むと、門の前から離れていき100メートルほど先で車を停めた。

【航】

「社交の場では見せない一面…ね。…見せてもら」オー—ンド  
ツドツドツ』…誰？」

敷地内に視線を移して門の前で一人呟いていると、遙か遠くに見える本宅から1台のバイクが此方に向かってきて動きを停めた。

【航】

「フルフェイスだから分からないな…あつ、こっちに来る」

その人物が何も言わないことを疑問に思った俺は、一步後ろに下がると下半身に力を籠めた…まさか、泥棒？

【???】

「ちょ 待っ ?…すぐ るから」

フルフェイスにラフな恰好をした人物はそう言うと、壁の向こうに姿を消した。

【航】

「ショートパンツ穿いてたから女の人なんだろうけど…バイザーを上げてなかったから声が良く聞き取れなかった。…なんて言ってたんだろっ？」

等と独り言を呟いていると門の横にあった扉が開き、中から姿を現

した人物は此方へ向かって歩いてきた……………マジで誰？

【????】

「待たせてゴメンね?…てっきり中まで入って来るものだと思ってたから、準備に手間取っちゃって」

バイザーの色が濃くて顔は良く判らなかつたが、今度はハッキリと聞き取れた声は学園で別れた亜沙美ちゃんのものだった。

【航】

「うっん、こちらこそゴメン、こんな時間に押しかけて。……………早速で悪いんだけど、例の娘は？」

他にも訊きたい事はあるけど、こっちは時間に制限があるから急がないと。

【亜沙美】

「時間もあまり無いし、それじゃ行こっか?…はい、これ被って  
そう言った亜沙美ちゃんが脱いだヘルメットを被らせられた……………  
嫌な予感がする。」

【航】

「一応確認…」

ガシッと腕を捕（誤字ではない）まれた。

【亜沙美】

「時間でしょ?…大丈夫、アレなら玄関まで1分かからないから」

ずーるずるずる ……と引き摺られる俺。

【亜沙美】

「後ろに乗ったこと無いみたいだね？…シートを持つより、腰に手を廻したほうが怖くないんだよ？」

そしてバイクに跨がらされた俺。

【航】

「皆も強制フラグには気をつけようね？…ちょっと、ほんのちよつと見知らぬ環境に身を置くだけで、こんな簡単に引っ掛かってしまっからさ」

言われたとおり亜沙美ちゃんの細い腰に手を回すと、悪魔の呼び声が辺りに響き渡った。（ただ、エンジンをかけて吹かしたただけとも言つ）

【亜沙美】

「誰に説明してるの？…「画面の向こうの人に」はい？……まあいいや、それじゃ振り落とされないように確り掴まってなよ？」ギョッ…！」（カー杯しがみつく擬音（ん、バツチリ……それじゃあ、しゅっぱ〜っ！）」

【航】

「ぎい、い、いいいいいやああああーっ…！…！…！…！…！」

そして、俺は風になった。



【亜沙美】

「この娘が話してた高橋優さん。：ボクは優ちゃんって呼ばせてもらってる。：で、こちらがボクの友達の鳴海君。：…大丈夫？」

確かに一分とかからず本宅には着いたのだが、それと引き換えに俺は生まれたばかりの子馬状態…つまり、足が震えて立てなくなってしまった。

【航】

「よろしくです。鳴海航です。：さっきから体の震えが止まらないとです」

で、時間も無いし、いつまでも玄関ホールで馬つても仕方がないで、亜沙美ちゃんに肩を借してもらい何とか応接間に辿り着いた俺は、無事に例の娘とご対面を果たし簡単な自己紹介をしている最中だ…：…恥ずかしながら肩を借りたままんだけど、さ。

【高橋】

「こちらこそはじめまして、高橋です。：私のことは好きに呼んで構わないんだけど、こちらはなんて呼べばいいかな？」

そう言ってソファから立ち上がった彼女と握手を交わし、支えられた状態で対面のソファに腰を降ろした。

【航】  
「こちらも好きに……って言いたいところだけど、彼女さんが煩いから名字で呼んでくれるかな？」

神城さんに航君って呼んでもらおうとした時の恋華の顔を、俺は一生忘れないだろう……あれは悪魔だ。

【高橋】

「わかった、じゃあ、鳴海君で。……それで、何から話せば良いのかな？」

【航】

「どこまで話したの？」

隣に座って紅茶を飲んでいる亜沙美ちゃんに訊いた。

【亜沙美】

「ボク達が何の為に動いてて、何を調べてて、何をしようとしてるのか。……要するに、此方の事情は殆ど把握してるから、訊きたいことを訊けば良いよ。……あっ、あと、優ちゃんもピアノ専攻だから」

ピアノ？……先生の知り合いなんだからヴァイオリンじゃないの？……あれ？……ってことはつまり、この娘ってマサ君が訪ねた『由衣』って娘と同じ？……あの頃一緒のスクールに通ってて、美咲桜ちゃんを知ってて、ピアノを弾いてる……うん、同じだな。

【航】

「それじゃ単刀直入に訊くけど、高橋さんは講師に手を挙げられたことってある？……言いにくいことだったら首を横に振ってくれれば

話題を変えるから」

そう言うと彼女は少しだけ考えるような仕草をして小さく頷くと、迷いの無い力強い視線を向けてきた。

【高橋】

「三人ほど手が早い講師がいました。…私も一度だけ頬を打たれた事があります」

手が早い？……マサ君の話だと確か、言うことを利かないからって類いの話だったような……マサ君を連れて来なくて正解だったな。

【亜沙美】

「鳴海君……」

声に振り向くと亜沙美ちゃんも相違点に気がついたようで、理不尽な暴力に怒りで拳を震わせながらも、その表情はどこかホツとしていた。

【航】

「そうだね、ホントにそう思うよ。…亜沙美ちゃんには悪いと思うけど、マサ君だけじゃなくて恋華もこの場に居なくて良かった」

もしかしたら一人ぐらいは……っ…落ち着け、俺が熱くなってどうする……彼女は思い出すだけでも辛い筈なのに、それを抑え込んでまで話してくれてる……なら、俺達がやるべきことは決まってる。

【航】

「じゃあ次は美咲桜ちゃん…桐原美咲桜が同じような目に遇ってるところを見聞きしたことはある？」

彼女の傷口を塞いでいる痂かさぶたが剥がれ落ちてしまう前に、この話題を終わらせるだけだ。

【高橋】

「……………あるよ。…彼女と私、一時期同じ講師陣にレッスンを受けてたんだけど…その時に二度三度」

先を急ぐと訊ねると彼女は目を瞑って大きく息を吐き、膝の上に載せた手でスカートスカートの端をギュツと握ると大きく頷き、目を閉じたまま震える声でそう口にした。

【航・亜】

「!…!!」

なんてことだ……………まさか、美咲桜ちゃんがピアノを辞めてしまった理由って、暴力云々で楽しくなくなつたと言つより、絆ヒタを汚されてしまったのが原因なんじゃ……………いや、決めつけるのまだ早い…それ以前に疑問が残る。

【亜沙美】

「優ちゃんは…どうしてその事を容認してたの?…親とかに話せば……………」

亜沙美ちゃんも同じことが引つ掛かったようで、悲しげな表現で優しく語りかけた。

【高橋】

「それ…は…っ」

すると、彼女の表情が凍り付いた…目からは光が消え、肩を抱いた手はガタガタと震えだし、額には大量の脂汗をかいて、噛み締めた唇は青白く変色し始めていた。

【航】

「亜沙美ちゃんっ！」

叫ぶように言って彼女に駆け寄りブレザーを脱ぐと、それを肩に掛けて背中をゆっくりと擦った…限界だな。

【亜沙美】

「わかってるっ！………もしもしっ、ボクだけどっ、大至急ガウンとタオルっ…あとっ、暖かい飲み物持って来てっ！…急いでっ…！」

亜沙美ちゃんは部屋の隅に備え付けられた受話器を取ると、此方の状況が伝わるように畳み掛けた。

【航】

「ゴメンね？…辛いこと思い出させちゃったね？…大丈夫、ここには嫌な講師連中は居ないから落ち着いて。…大丈夫、大丈夫だから…」

優しく語りかけながらその背中を擦る。

【高橋】

「…っ…あっ…あっっ」

どうしよう、震えが止まらない……何か、何か他に方法

【亜沙美】

「どいてっ、ボクがやるっ！……優ちゃん…ボクを見て？…ボクは亜沙美、優ちゃんの友達の亜沙美だよ？…判る？」

叫ぶように言い此方へ駆け寄って来た亜沙美ちゃんは彼女の前で膝立ちになると、青白くなってしまった彼女の顔を両側から手で挟み込み、自分のほうを向かせると優しく語りかけた。

【高橋】

「うあ…あっ、あさ…み？」

すると、俺にはどうすることもできなかった彼女が反応を示した。

【亜沙美】

「うん、亜沙美だよ？…優ちゃんのこと大好きな亜沙美。…だから、こっやって抱き締めちゃうの。…優ちゃんが大好きだから」

亜沙美ちゃんは少しだけ光が射した彼女の目を見ながら語りかけると、まだ小刻みに震える彼女を正面から抱き締めた。

【高橋】

「あさ…み、亜沙美いっつ！…私っ、私い…っ」

すると彼女は亜沙美ちゃんを抱き締め返し、声を上げて泣き出した………やっぱり、男の俺じゃこっはいかないだろうな………原因が同じ男である限り…クソッ！

バンッ！…！

何も出来ない自分と同じ男の仕業に悪態づいていると、後方にある扉が勢いよく開きそのまま壁にぶつかり大きな音を発てた。

【メイド】

「どうされましたかつ、お嬢様っ！！？」

間髪を入れずカートを押して室内に入って来たのは、三十代半ば位に見えるメイド服を着た女性だった。

【亜沙美】

「うん、この娘…優ちゃんに友達の」

ガウンとタオルを抱き抱え駆け寄って来たメイドさんに亜沙美ちゃんが事情を話すと、メイドさんは真剣な表情で考えるような仕草をした。

【メイド】

「お嬢様、そちらの…「鳴海です」…お嬢様、鳴海様を連れて部屋の外に出ている下さいますか？」

此方を向いて口を開き言葉を詰まらせたメイドさんに答えると、メイドさんはそう言って頭を下げた。

【亜沙美】

「三好さんなら安心だ。…わかった、ボクは車の手配をしておくから、後は頼んだよ？」

【メイド】

「確かに承りました。…お嬢様、後は此方でやっておきますので、

用件が済んだのであれば鳴海様をお送りになられては如何ですか？  
…まだ、お家のほうにお帰りになられていないようですし」

三好さんと呼ばれた女性は彼女に掛けた俺のブレザーを畳みソファ  
ーに置くと、ガウンを羽織らせタオルで額の汗を拭いながら顔だけ  
を此方に向け言った。

【亜沙美】

「そうだね…うん、少ししたら送っていくよ。…それじゃ行こっか  
？」

亜沙美ちゃんはソファーからブレザーを手に取ると彼女の頭を優し  
く撫で、そう言いながら此方に来ると背中を押してきた。

【航】

「それじゃ彼女のこと…頼みます」

バタン！

亜沙美ちゃんに背中を押され部屋から出ると室内を振り返り、そう  
言って頭を下げてから扉を閉めた。

【亜沙美】

「許せないっ…あんな優しい娘をあそこまで追い詰めるなんてっ！」  
隣から聞こえた怒気をはらんだ声に振り向くと、亜沙美ちゃんは握  
り拳を震わせていた。

【航】

「そうだね…俺も家柄の都合上、“ああいう”怯え方をした人間



は沢山見てきたけど……あれは明らかに異質だ、度重なる暴力によるものじゃない。……あの怯えようは」

言えないよ……あれは、あの怯え方は脅しなんてレベルでは無く、洗脳に近い『躰』によるものだってことは。

【亜沙美】

「なにをされたか判るの？…ボクは写真か何かで脅されたんじゃないかって思ってるんだけど」

亜沙美ちゃんは怪訝な顔でそう言うと、ブレザーを肩に掛けてくれた。

【航】

「俺も、それが一番可能性が高いと思う……あれは肉体的なものじゃ無くて、精神的なものなのは間違いないよ……それだけが救いかな」

ブレザーのボタンを留めながら言葉を濁すと、玄関へ向けて歩き出した……本当にそうだと良いな、と願いながら。

【亜沙美】

「美咲桜もあんな感じで辞めちゃったのかな？…先生と話してる時は優ちゃん…『ピアノは続けてる』って言ってたけど、あの様子だと…」

半歩後ろを歩いていた亜沙美ちゃんが呟く。

【航】

「俺も彼女の様子を見て初めはそう思ったんだけど、今は違うよう

な気がしてる…」

さっきは取り乱してたから気づけなかったけど…美咲桜ちゃんの芯の強さを計算にいれてなかった。

【亜沙美】

「どづいづこと？」

少し歩幅を広げた亜沙美ちゃんが隣に並び、顔を覗き込むようにして訊いてきた。

【航】

「先週、ICレコーダーに録った会話ってまだ残ってる？」

【亜沙美】

「うん、正義君に自覚させる時に役に立つかもしれないから、一応PCに保存してあるけど…それがどうしたの？」

【航】

「昔話の部分は？…あの時は聞かなかったけど」

【亜沙美】

「残ってるよ？…聞いてて思わず赤面しちゃうようなのが、ね」

【航】

「そっか…その時、マサ君は美咲桜ちゃんと出会った当時の話をした？」

【亜沙美】

「うん、確か…お昼寝の時間にお遊戯室でピアノを弾いてたら、そ

の音色につられて美咲桜がやって来たんだよね？」

【航】

「したんだ…なら、マサ君と仲良くなった子が、他の子達から相手にしてもらえなくなるって話は？」

【亜沙美】

「あゝ聞いた聞いた、ホントに君は幼稚園児なの？って思いながら」

【航】

「そっか、俺と恋華が聞いた内容と同じことを話したみたいだね。…なら、俺が帰った後でその部分をじっくりと聞いてみなよ？…それを聞いた美咲桜ちゃんがどういう行動をとったのかを、さ。…そうすればきつと、俺と同じ疑問に辿り着く筈だから。…あつ、それと高橋さんに謝罪と感謝を伝えといてくれる？…出来れば連絡先も」

玄関ホールに着いたので来客用のスリッパを揃えて脱ぎ、学園指定の革靴をトントンと床に打ちつけながら言った。

【亜沙美】

「番号はもう交換済みだから、謝罪と感謝だね…後でちゃんと伝えておくよ。…で、結局のところ今は教えてくれないの？」

【航】

「ウチの運転手に似たような逃げ方さ…あつ、最後に一つだけ訊いてもいい？」

時間に追われてたからすっかり忘れてた…慶治さんの事訊くの。

【亜沙美】

「?…何かな?」

【航】

「亜沙美ちゃんのお父さんとはパーティーで何度か顔を合わせたことがあるんだけど、家ではどんな感じなのかなって…」

【亜沙美】

「お父さん?…普通だと思うけど、どうしてそんなことを訊くの?」

【航】

「ぶっちゃけると、ウチの運転手が父さんに、『慶治さんは社交の場では見せない一面を持っている人だ』って聞いてたみたいで、それで中まで入って行かなかつたらしいんだ。…で、気になるなら亜沙美ちゃんに訊けて」

【亜沙美】

「……………そういうこと、ね。…今日はお父さん達がないのを知ってたから、中まで入っても良いって言ったつもりだけど、サ」

亜沙美ちゃんは顔を引きつらせてそう言うつと露骨に視線を逸らした。

【航】

「あれ?…何この展開?…もしかして訊いちゃいけないパターン?」

『社交の場では見せない一面』ってのは一体なんなんだ?…スゲー気になるけど、スゲー訊いちゃいけない気がするんだよね。

【航】

「さあ〜て、お腹が空いてきた俺はそろそろお暇させてもらっかな、また来…」

【亜沙美】

「そう、あれは5年前…今にして思えばあれがボクの初恋だった…」

【航】

「結局話しちゃうのっ!?!」

この約10分後、二度と俺は御堂家の敷居を跨ぐまいと心に誓うのであった。

V I E W C H A N G E

E N D

828

【正義】

「う〜ん、もう少しこは緩やかに」

「うん、悪くない。…これに続くとしたら、更に…ん

?…今、航の悲鳴が聞こえたような…」

あれから本気で組手すること約10分、意外と粘るしぶとい老いぼれ（父さん）を漸く退けた俺は、母さんと一緒にリビングに戻るとそのまま鍵を閉めた…因みに鍵を閉めると言ったのは母さんで、閉め出された父さんは涙目で窓に貼り付いていた。

【正義】

「気のせいか…おっと、あんな奴のことを考えてる場合じゃない、まだ…ペラペラ（作曲ノートを捲る音）…うわぁ、まだこんなに

ある……はあ…何で初めはスラスラ浮かぶのに、手直しを始めた途端思いつかなくなるんだろ？」

それを見なかった事にして風呂場へ直行した俺は、組手でかいた汗をシャワーで洗い流すと部屋に戻って着替えを済ませ、PCのメールチェックをしてから作曲ノートを手に取ると地下室へと向かった。

【正義】

「なんとしても、これだけは仕上げないと…またベコベコにへこまされちまう…」

そして今は地下室に籠り、先週ダメ出しされた *against* 第二章の改修作業に頭を抱えていた。

【正義】

「とは言つものの…なかなか良いイメージなんて浮かばないし、航のバカは気になるし、瑞姫の事も……だあゝゝつ、ダメだつ、気になる事が多すぎて全つつつ然集中できねえ」

マズいなあ…このままじゃ悪循環だ。…かといって気分転換に出掛けようにも、もう10時…母さんが許してくれる筈がない。

【正義】

「明日は朝から子供達にピアノを教えて、遊んで、5時からバイト。…たまには美咲桜と一日ゆっくり…ふあゝあ」

作業を一時中断して閉じた鍵盤の蓋の上に顎を載せ一人呟いていると、強烈な睡魔が襲ってきた。

【正義】

「ここで寝てしまったら明日が大変な……うっ……………すう……  
ZZZZZ」

頭を振って眠気を飛ばそうと試みるも、その時視界に飛び込んできたソファアの不意打ちを食らい、俺の意識は混濁していった。

一方その頃、リビングでは……。

【英理朱】

「ねえ明斗さん……近いうちに姉さんの日記を見せようと思っの」「

【明斗】

「本当にいいのか？…そんな事をすればあの事が…」

【英理朱】

「大丈夫、見せるのは姉さんの筆跡を真似て私が写したモノだから……あの事に関わる文章を除いて編集した、ね」

【明斗】

「そうか。…なら問題ない…が、一体どういう心境の変化だ？…今まで日記の事なんか持ち出したこと無かったのに」

【英理朱】

「だって、もうすぐあの子の誕生日じゃない？…漸く会いに来た自分達の子供が、何の感慨も沸かずに殆ど言葉を掛けてくれなかつたら……姉さん達が可哀想でしょ？」

【明斗】

「そうだったな……俺達の心の弱さに付き合わされたあの二人はもう…16年もの間、遠い地で正義を待ってるんだよな。……見せてやってくれ…そして、16年の空白を埋める言葉を与えてやってくれ…頼む」

【英理朱】

「うん、わかった。…沢山…沢山お喋りが出来るようにしておくよ…っ」

【明斗】

「おいおい、今はまだ泣く時じゃない。…後一月、それを見届ける時に…とっておけ」



【英理朱】

「明斗さん…っ」

【明斗】

「うん、どうした？…また、不安になったか？」

【英理朱】

「うん、私怖い…っ。…もし、まー君が、私達の手を離れたらと思  
うと…っ」

【明斗】

「大丈夫、大丈夫だ。…全ての可能性に備えて念入りに準備を進め  
てきた。警護のほうも抜かりはない…万が一接触してきても、正義  
には指一本触れさせはしない」

【英理朱】

「でも…っ、あの人達は…っ」

【明斗】

「大丈夫っ、疲れてるんだよ。…ほらっ、横になれ。…一晩眠れば、  
明日にはそんなこと気にならなくなるから」

【英理朱】

「んっ……そうかな？」「ああ」「うん、わかった……Thank You  
U M Y D a r l i n n g g

【英理朱】

「すう〜んっ……むにゅ……すう〜ゴメン……ね……姉さん」

【明斗】

「寝たか………神様、どうか俺達家族をお守りください……っ」

正義のアメリカ行きの話が着々と進んでいた。

14 2 / 2 6月第1週【境界線】（後書き）

後編のほう、お楽しみいただけただけでしょうか？ 物語全体を通して考えると、今回の話までが序章にあたります。 まだまだ先は長く、来年のうちにルート一本終わらせる自信すらないので、長い目で見ていて下さると有難いです。

それでは次回 15でお会いしましょう。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6679e/>

---

音×恋 繋がる絆

2010年12月19日02時24分発行